

物語の魔力

—欧米文学を再話して—



橋本賢二編著

はじめに

橋本 賢二

大阪教育大学欧米言語文化講座・英語圏の米文学研究室が出版する論集もこれで7冊目となります。毎回その年を象徴するようなテーマを設定し、学生と教官が一体となり、新しい時代に向けたアメリカ文学・文化研究の手法を模索してきました。文学研究に新たな時流を生み出そうと、悪戦苦闘しながらみんなががんばった成果を、本という形にまとめて広く社会に問いかけてきました。以下がそのシリーズです。

『アメリカエンターテインメントの世界―』(2003年度)

エンターテインメントを考えるという企画で始まった「大阪教育大学米文学研究室」出版シリーズの第一号。「楽しみながら学ぶ」ということを基本理念にすえて、楽しいこととは何か、娯楽とは何かを真剣に討論し合い、各自がたどりついた結論へ向けて、現地取材やフィールドワークを交えながら果敢に迫りました。食、絵本、スポーツ、映画、テーマパーク、ショッピングなど、人の心を捉えるものの根源に目を向ける企画でした。残念な点は予算不足で、紙面のサイズが半分になってしまったことです。

『日本で見つけたアメリカ―戦前日米交流史―』(2004年度)

「日本国内においてアメリカ文化研究の実地調査はできないものか」という思いから始まった企画。周りはすべてアメリカからもたらされたものが多い現代の日本で、アメリカ文化一色になるまえ、つまり第二次大戦以前の日米交流の歴史を、今もどこかに残る建物、事物、風習、言い伝えなどから見つけ出し、今日的光を当てて再検証し、記録し保存しようとするフィールドワーク的試みでした。学生たちも神戸、大阪、のみならず、横浜、九州まで足を運んでくれました。大阪の図書館では地域の研究として永久保存されることになり、複数冊献本しました。また神戸市図書館などからも寄贈の依頼を受けました。

『米文学史のなかのアメリカ文化研究』(2005年度)

論文としての質はもっとも高まり、量的にも充実したもの。「アメリカ文学史」受講生を中心に、開拓時代から現代に至るアメリカの歴史のなかで、あるいは

授業のなかで、もっとも心動かされた対象をひとつ選んで、アメリカ文化を探る気持ちで調査研究し論じてもらいました。[文学研究と文化研究の融合]を図る新たな挑戦です。文学研究の展開の新境地として小説や作家の人生の中に、魅力、文化の違い、起源、今もって有益なるモノなどを見つけ出し、論証するという企画でした。

『ジャパニーズ・ポップ・カルチャー2006—日本の若者・大衆文化のいま—』(2006年度)

アメリカ文学、文化から一旦離れ、日本文化を海外に発信することに挑戦してみました。折しも日本ブームのなか、「英語を使うわれわれ学生や研究者が今できることは何か」を探る意味を込めての企画ともなりました。日本語のみならず、英語、フランス語、中国語などを駆使して執筆しました。今日本の若者、大衆には何が流行っているのかを、現地取材して報告する企画。東京まで足を運んだ者、海外から参加してくれた者、日本人以外の参加者も増えてきました。ドイツの国立図書館から寄贈して欲しい旨の依頼を受けました。また大阪の公立図書館より永久保存用に複数冊の寄贈依頼もありました。「大阪、御堂筋はアジアのファッション・ストリート」をいうイメージも打ち出しました。

『実学としてのアメリカ文学研究—歴史・人物・作品・映画から学んだこと—』(2007年度)

文学研究が下火になりつつある時代に、あえてその領域で人々を惹きつける展開はないものかと模索して、たどり着いた企画。小説、映画、演説、音楽、詩、演劇、ミュージカルなど「言葉」を介してなされた行為すべてを「文学」とみなし、過去から今日まで、米文学の歴史全般から各自の好みに応じてテーマを選び「それが心を捉える理由」、「自分に何を教えてくれたのか」など、各自のなかにフィードバックさせた「世界に二つとない論文を書く」ことを目指しました。誕生したのは、いわゆる新書の実学面にスポットライトを当てた「他人に模倣できない論集」です。この論集も同じく、全国の公立図書館、並びに文学部を併せ持つ大学図書館を中心に寄贈しました。またこの本が色々な地域の若い人々に少なからぬ影響を与えていたことを、後日知ることにもなりました。

『アメリカ映画研究を始めるまえに』（2008年度）

アメリカ研究を専門に行う学生ばかりではなく、一般の英語科目を受講する学生たちにもその門戸を広げた第一弾。時代は紙媒体から、音楽、映像、インターネットなどデジタルな媒体に移ってきている今の時代。あえてここでは、ヴィジュアルな文学的対象である「映画」のみに的を絞ってまとめてみることにしました。100名を越す学生が詳しく論じる紙数はなかったのですが、まずは映画論に至るまでの準備段階として、多くの人々の心を捉えている隠れた名作の紹介を中心にして編集しました。映画論を始めるまえに心得ておくべき区別と認識、準備することと採るべき手法、注意点なども示しながら、各人が思い入れのあるお薦め映画を論じながら紹介してくれました。

そして今年の研究テーマは再び文学そのものに戻ってきました。『物語の魔力—欧米文学を再話して』と題し、各人が気に入った文学作品を魅力がそのまま伝わるように語り直して、文学に触れる機会が少なくなっている現代の青少年層に読書習慣を拡大することを目指しました。英米文学に限定しなかったのは、ヨーロッパの文学にも優れた作品は多く、学生の専攻や感心にも広がりがあったからです。

結果として参加してくれた学生たちから「物語をリトールドすることにより、読む側ではなく、書く側に立って、作者側から文学作品を眺めてみる事ができた」という感想が聞かれ、再話することには文学教育に関して予期せぬ効用があることも発見できました。学生がリトールドしたあと書いてくれた感想のなかに「すでに完成している短篇小说を、さらに重要ポイントを落とさず短くすることがいかに難しいことかがわかった」「推理小説の再話には謎解きのヒントなどの入れ方で苦労した」というコメントなどがあり、はっと息を呑みました。実のところ、わたしの立てた計画にこのような効用があるとは、論集作成作業の終盤になってこれらの学生のコメントを読むまで気づけなかったからです。

アカデミックな舞台における文学の衰退が叫ばれる中、おもにこれまでは文化研究や映画論、比較文化などといった間接的研究手法に取り組んできました。しかし、今回は英米さらにヨーロッパの古典文学作品に直接回帰し、真正面から文学を教育の場で取り上げる方法を取ることにしました。結果として、このことが教育面において思わぬ効用をもたらしてくれたのです。今までどこの文

学部でもあまり教えられてこなかった「作者の側から見た小説」という視点を、教育と研究の場に提供してくれることになりました。これまですべて学生は読者の側に立って本を読み、作品を学んでいました。しかしここで初めて「作品の向こう側」に回り、違う角度から名作を眺めることができたのです。

作品のエッセンスを情感たっぷりに、イメージをわきあがらせながら、ポイントとなる台詞を駆使しつつ感動的に紹介してくれるような本があれば、文学から遠ざかっている学生たちも今から新たに小説や童話に興味を持ち、読書の楽しみを再認識してくれるのではないかと考えたのがきっかけでしたが、最後にはもっと大きなものに出会えました。

自分たちが興味を持った作品をひとつ採り上げ、その作品の愉しさが伝わるように、「あらすじを書くのではなく」セリフを交えながら、重要場面ではその興奮が伝わるように、刺激的でコンパクトな物語に再編集して欲しい」という少々ハードルの高いリクエストでした。さらに対象となる学生の数は今年も100名を越してしまいました。

大学院生を含め、米文学史、米文学研究などを受講する専門課程の学生のみならず、一般英語を履修する、文学以外を専門とする学生たちにも参加を願ったため、あまり難しい要求をだしてかえって文学アレルギーを引き起こしてはいけなと考え、急遽リトールドのない別コースも設けました。読んでみたい、あるいは読んでみてよかったと思う本を一冊簡単に紹介する「わたしの選ぶ一冊」コースも併せて設置し、結果的に多くの参加者を集めることができました。そしてここからもまた収穫がありました。副次的に、小説が苦手な人々の思いを知ることもできたのです。この声を活かせばまだまだ文学の裾野は広がっていくのではないのでしょうか。論集の後半にはこれが置かれています。なかには日本文学もありますが、それもご愛嬌。

副題にある「欧米文学を再話して」という部分は、結果的に「再話して（みて感じたこと）」という意味のAコースと、「再話して（ください）」という意味のBコースになってしまいました。ご了承のほど。

欧米言語文化講座以外では、教員養成課程と教養学科の両方から昨年度と同様に、実にさまざまな専攻の学生たちが幅広く参加してくれました。スポーツから理系、文系、芸術、各種教員、技術・家庭他それぞれ目指す道も関心事も大きく異なる学生たちが、ひとつの目標に向かって集合しました。

これらの学生のなかに、欧米言語文化の専門課程の学生を凌ぐようなすばら

しい着眼点を持った、文学少女や文学青年がいることにはとても驚かされました。そしてまた同時に、それらを楽しく語ってくれる学生たちの姿に、「古典文学作品も捨てたものではない」と再認識させられました。結果、まだまだこの時代にも「文学の砦」はあるし、「小説の逆襲」も起こりうると思うと強く感じる事となりました。

目 次

はじめに	橋本 賢二	i
文学の逆襲—物語る力に秘めた永遠の魅力	橋本 賢二	1
大阪教育大学 米文学研究室紹介【中国語】	郭 華	17

【第一部】

リトールドと解説

ルーシー・モード・モンゴメリ『赤毛のアン』(アンと緑の髪のおはなし) :プリンス・エドワード島の自然と作品	永田 梓	21
コナン・ドイル「ボスコム渓谷の惨劇」:シャーロック・ホームズの世界	井倉由加里	24
オー・ヘンリー「最後の一葉」:オー・ヘンリーの魅力	松原 香織	28
オー・ヘンリー「最後の一葉」:近代のニューヨークと文学	塩谷 彰久	32
オー・ヘンリー「賢者の贈り物」:長く愛される文学から感じる思いやりの心	富田 彩	35
ヘミングウェイ『老人と海』:偉大な作品との再会	大谷 恭子	38
ヘンリージェイムズ「ねじの回転」:得体の知れない恐怖を読み解く	田路 史歩	41
リチャード・バック『かもめのジョナサン』:生きることの真意	道廣 恵理	45
マーク・トウェイン『不思議な少年』:作品の作られた背景	向井 理恵	48
マーク・トウェイン『トム・ソーヤーの冒険』(ごきげんなペンキ塗りのお話) :いきいきとした子どもたち	結城 秀佳	51
『トム・ソーヤーの探検』:少年たちの大冒険にわくわく	卯野 智広	53
マーク・トウェイン『トム・ソーヤーの冒険』:悪童のヒーロー	松尾 泰子	56
「アウル・クリーク鉄橋での出来事」 :南米戦争時代における戦争経験者視点の文学	笠松 准司	59
ジョナサン・スウィフト『ガリバー旅行記』 :スウィフトがこの本から伝えたかったこと	山崎美紀子	62
ヨセフ・ジェイコブス「ジャックと豆の木」 :ヨセフ・ジェイコブスと <i>English Fairy Tales</i>	大塚 麻里	66
ルイス・キャロル『ふしぎの国のアリス』(ウサギの穴に落ちて):作品の魅力	岸田美紗子	69
ルイス・キャロル『ふしぎの国のアリス』:唯一無二のファンタジーの世界へ	山脇 未帆	71
アリス・ジーン・ウェブスター『あしながおじさん』: ウェブスターの伝えたかったこと	福井 佑那	74
ライマン・フランク・ボーム『オズの魔法使い』:愛され続けてきたオズ	小田 梨加	76
バウム『オズの魔法使い』:19世紀末のアメリカ経済	山浦絵梨奈	78
ライマン・フランク・ボーム『オズの魔法使い』:オズワールド	二宮垂哉奈	81
『エルマーのぼうけん』:化学者ルース・スタイルス・ガネットが愛した色と数の世界	松江志穂子	84

アンドレー・ラング『シンデレラーガラスのくつのものがたり』 :シンデレラのストーリーは著者によってどのように違うのか	山口 由華 88
A.A.ミルン『クマのプーさん』(プー横町に、イーヨーの家が、たつおはなし) :愛される「おばかさん」	大沢 麻友 91
C.S.ルイス『ライオンと魔女』:勇気と裏切らない心	藤原 涼子 94
シャルル・ペロー「長靴をはいたねこ」:西洋で生まれた児童文学	坂口 碧 97
ハリス・クリスチャン・アンデルセン『おやゆび姫』:児童文学の魅力	小川 陽香 100
フランツ・カフカ『変身』:不思議な現実を読む	河津美代子 104
ヤーコブ・グリム、ヴィルヘルム・グリム作『ヘンゼルとグレーテル』 :ドイツ児童文学を考察して	槇納 明衣 109
ヘルマン・ヘッセ『車輪の下』【ドイツ】:青年期のシンパシー	勝木 晃平 111
ジェームス・マシュー・バリー『ピーター・パン・とウェンディ』 :ピーター・パン誕生の秘密	米原万紀子 114
マリー・ルイーゼ・ド・ラ・ラメー『フランダースの犬』 :フランダースの犬の魅力	石川 都 116
ヒュー・ロフティング『ドリトル先生』:みんな大好きドリトル先生	平良 紫野 118
エリック・カール『はらぺこあおむし』:みんなに愛されるわけ	乾 彩友美 121

『星の王子さま』/『シャーロットのおくりもの』/…ほか

【第二部】

わたしの選ぶ一冊:再話して欲しい物語り

まだ幼かったあの頃	久留島歌穂 133
オバマ政権になった今、もう一度、読み返してみたい『アンクル＝トムの小屋』	加賀谷茉莉子 134
『モモ』が教えてくれた時間と意識と心	島田 愛 136
いつからか本を読まなくなった自分	山内 映里 138
私にとっての本	石田 麻純 139
今になって改めて読んでみると…	杉本 結衣 140
『先生は魔法使い?』との出会い	桑野 愛美 141
不滅の探偵シャーロック・ホームズにあこがれて	高瀬 千鈴 142

『itと呼ばれた子』/『ヴェニス商人』/『秘密の花園』/

『ハリー・ポッター・シリーズ』/『若草物語』/『バッテリー』/…ほか

あとがき	橋本 賢二 177
------	-----------

文学の逆襲—物語る力に秘めた永遠の魅力

橋本 賢二

大学の教育現場において英米文学作品が教材から駆逐され始めて久しい。社会のなかにおける文学作品への関心も、映画、テレビ、ビデオゲーム、携帯電話、パソコン、デジタル・ツールなどが普及するにつれ、加速的に薄らいできている。文学部が縮小され、英文科が文化を中心とする専門課程へと鞍替えるのは、時代の趨勢として仕方が無い。しかしその先、フィクションである小説や、短篇、詩や戯曲といった文学作品自体にまでその影響が及び、教育や研究の対象としての文学の寿命が尽きる日は訪れるのであろうか。

さらに 100 年の歴史を誇る『英語青年』が実質廃刊になり、英文学会が会員の縮小に歯止めをかけられない現状は、就職先を含めたマーケットの希薄化、縮小化を示している。

だからといって、このまま腕をこまねいて衰退を見届けるだけで、われわれ英米文学者の使命は果たされていくのだろうか。消え行く時代と価値観にノスタルジーで惜別の辞を寄せるだけが、とるべき道のようにも思えない。

そのようなわけで、今年は思い切って、衰退の一途にある『文学』そのものを真正面からとらえ、小説や短篇のなかになにか潜む「永遠の魅力」と「排他的なパワー」を探して、「文学の復権」に王道から挑戦することを思い立った。これまでは文学の擁護として、やや斜めに構え、今日的価値観に見合う文学の特質を控えめに探してきたが、今年は正統的手法を用いて、アカデミックな場所における文学の持つ永続的な可能性にスポットライトを当てることとする。

以下において、このような目標を達成するための手段として教育と研究の両面からその効果を求めて作成を決めた、論集『物語の魔力—欧米文学を再話して』の製作過程を示しながら、「文学のルネサンス」の必要性と可能性を同時に示していくこととする。

文学の砦—論集『物語の魔力』作成における目標と手順

何事始めるにもまず心の準備が必要である。前期の早い時機から話を始め論集の存在を知らせておき、時折昨年度までの完成論集を回覧する。6月頃に第一回の文書を該当の全クラスに配布し、実際の心づもりを始めてもらう。人の心はすぐには動かせない。人が動かないと嘆いているとき、その事態は指導者の要領の悪さに起因していることも多い。早めにアクションを始め、何度も繰り返すことが重要である。

予告： 論集『物語の魔力—英米文学を再話して—』（仮題）作成に関して

概要：

期間は 夏季休暇中。提出は 新学期初回。先ずは プリントアウト原稿で。修正指示、そのあと E メールでデータ添付送信。

内容：

文学も時代とともに厳しい状況を迎えているが、絵本や、童話、児童文学、おもしろいお話、味わい深い小説などは、ただ情報を得る手段としての読書とは違う楽しみを与えてくれる。まだここに「文学の最後の砦」があるのでは。

英米文学作品のなかで「自分が昔少し読んで気になっている」、「映画の原作となって興味を持っている」、「もう一度しっかりと読み直してみたい」と感じるような作品をひとつ見つけ出す。それらをもう一度読み直し、あらすじを述べるというのではなく、自分なりに「ひとに話してあげる」つもりでストーリー・テリングする。話の核を見つけて、おもしろい部分をつなげるなどして、楽しく感情が伝わるように、短く要点を語りながら、おもしろさ伝えてあげるつもりで書き直す。自分が楽しく、読む人がそれを知れてうれしくなることを目指して。ポイントの場面ではセリフなども使う。あまりむつかしく考えず、先ずは一度最小サイズで書いてみて、分量を確認しながら、部分的に膨らませていくカンジで始めてみましょう。短篇でもまだ短くできるものも多い。サンプルなどを参考に。

作品は、米文学が好ましいが、英文学でも、場合によれば、独文学、仏文学などの外国文学でもよい。

ジャンルは、短篇小説、長篇小説、演劇、詩などでもよいが、最近の映画など著作権が切れていないものは、なるべく避ける。好ましいものは、作者の没後 50 年を経ている作品。ネットなどで全文（の和訳）が公開されているようなもの。

形式：

日本語で書く。占有紙面分量は A4 横書きで 2 枚から 4・5 枚程度。最後の 1 ページには自分の感想、選んだ理由、リトールドをやり終えた後の気持ちなどを書く。書き方の、詳細は追って指示する。

参考サイト：

〔青空文庫〕 <http://www.aozora.gr.jp/>

全体の概要と、その目的、ならびに提出者たちにとって最も重要である〔提出物の分量、

内容] さらに〔提出時期〕をここに明記する。ここにおいて与えられた印象はまだ漠然としたものであり、繰り返しコメントすることにより、それらは少しずつ学生たちの心のなかで具現化されていく。この段階において自身の論文について意識を強く持っている学生はまだ少ない。

しばらくして、本格的告知が始まる。

Vol.1 は内容に関する意思統一のためのものとなる。なぜ今年の論集はこのようなテーマになったのか、それを書くことで何を強く訴えていくのか、どのような成果を求めて書くのかということに対する〔基本方針〕をここでははっきりと伝えることが必要になる。これを怠ると論集が方向性散漫となり、結束した力を失ってしまう。

Vol.1 『物語の魔力』（仮題）の書き方について

小説などの文学作品が英語の教材として敬遠され、娯楽の一手段としてもビデオゲームやそのほかの映像メディアに押されている現状の中で、もう一度文学の魅力を見直そうというのが今年度の論集の基本方針です。

「会話を理解するのは面倒」「言いたいことを探るのがむづかしい」「長くて読むのがつらい」「読書とは要点のみの内容を知るだけでいい」「忙しくて読む時間が無い」「人が多くて理解が大変」など、小説が敬遠されるようになった理由は様々です。

しかしまた逆に、こんな時代に新しく注目を浴びて読み始められた『カラマーズフの兄弟』や『蟹工船』などの作品もあります。かつての時代を知らない人々に関心を持たれたということもあるでしょう。また団塊の世代が一息ついて、人生の蒔き直しをしているのかもしれませんが。若い頃あこがれていたスポーツカーや大型バイクに乗ってみたいと夢を膨らませ、日本中を旅するためのキャンピングカーも人気です。そのなかで重厚な長篇小説の黄金時代であった19世紀などの文学作品が、向学心ある人々から再び注目を集め始めているのかもしれませんが。

小説を読むことには、新書や指南書、マニュアル本などを読むこととは異なる魅力もまたあるはずです。

たとえば：「今日希薄になってしまった人間関係を仮想的に味わえる」「人付き合いが苦手な人にとって、背景を知った上で、会話のサンプルを確認できる」「実生活の中で自分が知りえないような世代、階層、職場の人々の暮らしを垣間見ることができる」など、いろいろとメリットも残されているようです。

またそれをひとつにまとめあげている構成のほうに目を向けてみるならば、「人の心をつかんだまま放さず引き付けておき、与えたいと思って目指していた衝撃を最後に狙い通りに読者の心に残して終るテクニック」は、楽しいことをどこまでも求めながら、わかりやすさを同時に求める今日的要求にもぴったりとマッチするものでしょう。そのほかにも「その技巧を会社のプレゼンテーションのなかに利用する」などの実用的利用法が考えられます。

メディア全盛時代に政治までもがショー化している今日にあって、人の心をつかむ話術は「厳しい社会の荒野に行く若者にとって、何者にも変えがたい武器」ともなるでしょう。それを習得することは、他人と違ったひとつの特技として、きっといつか自分を助けてくれることでしょう。

さらにこの時点において、教官が作成したりトールドのサンプルを配布した。これが無いと具体的なイメージはいつまでもつかめないまま時間が過ぎていき、効率は悪くなる。これにより行うべき作業の輪郭が見えてくる。(サンプルは拙著『魔法とユーモアと童心の世界』からの抜粋である。)

次に必要なものは、各人が行う「物語の語り直し」の対象選定のための素材資料である。いくら英語専攻の学生といえども、【自分がもういちど簡単に短く再話してみたい作品】がすぐに浮かぶものではない。そこで手書きではあったが、対象となるような[純文学系米文学作品]と[アメリカなどの児童文学作品]のリスト他をこの間に配布し、それらに簡単な説明を付し、作品選定の一助としてもらった。

そしてひとりに1冊ずつ、これまでの論集を配布した。これは予算的にも厳しいものであるが、これまでに保存していたもののなかから(余裕のあるものに限って)放出して対応した。いくらインターネットで全文が読めるとはいえ、やはり本体を手にとると意気込みはあきらかに違ってくるようである。これによりイメージはさらに具体化し、先輩の論文のなかに参考となるものを探す学生も増えてくる。

今年は新型インフルエンザの影響で授業終了が1週間延びた。結局その影響もあり、最終的な詳細告知、執筆要領と執筆ツール等の提示は7月末の一括提供となった。「文学アレルギー」に対する「ワクチン接種」のような「予告編告知」から始まった指導も実質、ここでほぼ終了となる。現代人は入り口が見つからないとすぐにあきらめてしまう傾向も強い。どこから手をつけていいのかわからない、マニュアル全盛の時代に育った学生たちには、好みに応じて選べる選択肢を設けた、懇切丁寧な案内用の手引きもやはり必要となる。

専門課程以外の学生が取り組むためには、少しハードルを低くする必要も出てきたため、

当初の計画から選択の余地を増やし、「リトールドを含まないコース」も設けることとした。文学嫌いの学生たちには多くの具体的資料を示し、選べる幅を広げ、興味深いサンプルから研究のきっかけが見つかるようにと腐心した。

以下がその最後の指導文書である。

Vol.2 論集『物語の魔力』の執筆要領

『物語の魔力—欧米文学を再話して』（仮題）の執筆に関して。夏季休暇中に、案内を配布したすべての学生を対象に、論集に掲載する原稿の執筆を依頼します。論集は印刷され全国の図書館に配布され、インターネットで公開されます。学生時代の記念にぜひとも参加してください。提出者には（後期）成績に加点します。形式は二つに分かれます。文章が得意な人はAコース、苦手な人はBコースを選ぶことができます（ただし専門クラスの人はAコース）。パソコンのWORD（一太郎は不可）で入力、データも保存しておく。イラスト等を用いる場合は、完全に入れて編集を完成させておくこと。

提出日：新学期各授業初回。まずはプリントアウト原稿に指定の表紙を付け提出。後日指示を受け修正したデータを添付してEメールで提出。詳しくはあとに記載。

Aコース：

Aコースは リトールド + 紹介・小論（A4横書き日本語 2から5，（6）枚）

これまでに気にかかっていた欧米の短篇小説、長篇小説、児童文学、詩、演劇などの文学作品のなかから、1作品を選んで、その作品をコンパクトに、短く書き改め、そのままでも味わえる小さな物語にして生き返らせるというものです。長い作品を読む時間が無い現代人、英米の作品のおもしろさを知ってもらいたい子供たちのために、著作権が切れている作品を中心に（作者の没後50年）、自由に書き直して日本語で短く作品を作ります。これは「あらすじ」のように情報となるようなものではなく、それ自体がおもしろい読み物となっている作品となります。印象深く、自分が受けた感動がまた読む人々にも伝わり広がるように、風景の描写やいきいきとした人物像の提示を心がけながら、重要な場面やクライマックスではセリフを使いながら、その感動を映画のワンシーンを切り出すように表現してみましょう。うまくできなくて当然ですので、あまり堅く考えずに、とりあえず、あらすじに印象的な展開を1箇所加え、そこ

を盛り上げるつもりでやってみましょう。あまり欲張っても紙面は足りません。

長篇作品はもともと一個の物語ではなく、盛り上がる場面が多いためこのような作業には適していませんが、その場合には、「〇〇のエピソード」「〇〇のお話」といったふうに、ひとつの挿話に限定して書いても結構です。

もちろん、作品の全体像をコンパクトにまとめ、輻輳する世界を示して感動を紡ぎだすことにチャレンジしてみてもけっこうです。やり方の基本は決まっていますので、自由に挑戦してみてください。字体、字のサイズ、行、列、範囲内の分量、ふりがななどは自分で判断してけっこうです。イラストも可能。以上が再話（リトールド）の部分です。

その後ろに作品の解説部分が来ます。ここには作家・作品の紹介やそれに関する小論文を書いても結構です。またその時代背景となる社会の状況などについて説明するような文章を置いてかまいません。文体、サイズなどは誰に読んでもらいたいかを考えて使い分けてください。

詳しくはあとにつづく。

Bコース：

Bコースは 読んでみたい作品・リトールドして欲しい物語など「わたしの1冊」+本や物語にまつわる思い出 (A4横書き日本語 1、2枚)。

・まず、日本を含めた世界の文学作品の中から、(ア)一度は読んでみたいと思っている文学作品、(イ)短く再話したり、マンガで復活させたりして欲しいと思っている作品、または(ウ)以前読んで感動した名作など、思い入れのある作品名 (日本語)を作家名 (日本語)、国名 (日本語)とともに挙げます。書き方別掲。

・そしてそのあとから、その作品を選んだ理由を書きます。

：すでに読んだ後の作品ならば、感想や、その作品にまつわる自身のエピソードなどをそのときの思いがよくわかるように、平明に、無理せず書き表してください。

：それがまだ読んでいない作品であった場合には、またその作品以外で、絵本や物語を読んでもらったり、読んで楽しかったりした思い出について、当時の雰囲気や気持ちが浮かび上がってくるように、自由な形で書いてみてください。(さしえ可)

これらの物語にまつわる感想文や思い出には、その全体像がよく伝わるように『風と共に去りぬ』におけるスカーレットの生き方が教えてくれたこと」「小学4年生のボクと愛犬と絵本」「あの時読めなかった『若草ものがたり』」「今読

んでも感動するかな『〇〇の冒険』など簡単なタイトルをつけます。このような思い出もまったくない人は、「自分が本を読めなかった理由」とか「現代の若者の読書離れに関する考察」などとし、本とのかかわりの中で自分にあてはまることを探したり、その原因分析を行ったりしてもけっこうです。

それがあなたのページの先頭に付ける、大見出しの題名となります。その次に氏名。そのあとに、「わたしの選ぶ一冊」、そして題名なしで本文をおきます。執筆作品は感想文などに当たるので、著作権のことを考える必要はありません。最近の作品でもけっこうですが、(映画、マンガなどは除外し)原則文学のジャンルとします。イラストなどの使用に関しては指針に準拠して下さい。

参考文献について

リトルド作品を創作する場合は、拙著『魔法とユーモアと童心の世界—少女に贈るアメリカ短篇小説の系譜』(本学図書館に複数開架)のなかにかくつかの作品が再話されているので、書き方の見本とする。また物語の後ろには、解説もあり、それを書くときの参考にもなる。またそのなかの一部はすでに配布してある。

また先輩の論集を見たい場合は、「大阪教育大学米文学研究室」と入力してインターネットで検索すれば、本学図書館の〔OKUリポジトリ—[Osaka Kyoiku University Repository](#)〕よりこれまで刊行された本のすべての作品ページが閲覧できる。

これまでに配布した資料などから関心を寄せる作品が見つからなかった場合や、さらに詳しく見てから選定したいと思う場合には、次のような本がある。図書館で探してみても、本学に無ければ他大学より取り寄せて閲覧することができる。

拙著『アメリカ短篇小説の伝統と繁栄—二十世紀作品論』(大阪教育図書)

英米文学にみる家族像関係の幻想

イギリス小説のヒロインたち

英米児童文学の宇宙:子どもの本への道しるべ

英米児童文学の黄金時代:子どもの本の万華鏡

アメリカ文学のなかの子どもたち:絵本から小説まで

はじめて学ぶアメリカ文学史

はじめて学ぶフランス文学史

はじめて学ぶドイツ文学史

はじめて学ぶ英米児童文学史

たのしく読める英米児童文学

たのしく読める英米の絵本
たのしく読める英米青春小説 ほか
以上 ミネルヴァ書房

<http://www.minervashobo.co.jp/index.php>

また関心を寄せる作品があっても日本語への翻訳作品をどのように入手するのかわからない場合は、その作品の含まれている短篇集を書店で購入するか、図書館で同様に探してみる。またそれらが著作権の切れている作品の場合は、全文がインターネットなどで公開されている場合もある。

また次のようなサイトには、それらの作品がまさにリトールドされて日本語版と英語版の両方で公開されているので大いに参考になる。ただしこのようなものをそのまま拝借することはできないので注意すること。

アウルクリーク橋の出来事
スリーピー・ホローの伝説
バートルビー

などのアメリカ短篇作品が公開されている。分量的にも近いので、ぜひ見ておくこと。

http://www.eigozai.com/LL/STORY_F.htm

英語版は聞くこともできるすばらしいサイトです。

執筆時の物語の文字のサイズは大きい方が読みやすいが、紙面が増えるので、読める範囲であればよい。最終的にはインターネット公開時に拡大機能が使えるので、どんなサイズも読むことができる。また物語部分の漢字には[ふりがな]をつけてもよいが、フォントとサイズ、ひらがな使用、振り仮名に関しては、読んで欲しいと思う対象者の年齢に合わせて、自分で適宜判断する。イラスト等の使用も著作権に抵触しないものは、許可された紙面の範囲で、自由に使って楽しく構成するとよい。紙面はプリントアウトしたものをそのまま印刷して出版するので、挿絵などは自分で完成して入れたもの以外は掲載できないので注意すること。カラー画などはモノクロ印刷時にかえって見難くなる場合もあるので、事前に確認しておく。白黒の線画などが比較的きれいに出る。

翻訳作品に関して

・作家別作品一覧として『翻訳作家集成』というサイトがあり、ほぼすべての翻訳出版物がリストアップされている。

<http://homepage1.nifty.com/ta/index.html>

・本学図書館に『アメリカ短篇小説集ーロマン主義からリアリズムへー』（東洋出版）その他の翻訳書がある。

フリーイラスト素材に関して

イラストや写真、挿絵、カットなどは著作権のあるものがほとんどで、それらを使用するときには細心の注意が必要です。基本的には、著作権法第 32 条に照らし合わせて「研究のための引用」としてそれらを使用することができますが、自分で描いてみたり、許可されているものを使ったりする方が無難でしょう。以下に自由に使える素材を少し紹介します。あとは自分の作品に合ったものを探してみてください。

1) 「シリコンカフェ」サイト

<http://www.siliconcafe.com/gtool/data/index.html>

ここにいくつか出ています。

G-TOOL 使用許諾

G-TOOL は著作権フリーの Web 素材集と便宜上謳っていますが、正確には使用権フリーです。著作権は存在し、放棄したわけではありません。ですが著作権を持っているからと言って使用される方々の制作物に対して主張をするものではありません。G-TOOL は以下の項目に対して使用を許可しています

- Web サイト内のホームページでの使用
- 商用サイトでの使用
- もちろん個人サイトでの使用
- Web 以外での使用(印刷物、ゲーム、その他のメディア)
- 素材の加工

以上の許諾条件を見れば明らかなように特に規制はありません。唯一禁止している項目は次の二点です

- G-TOOL 内の素材ファイルへの直リンク
- 素材集としての無断転載及び、無断販売

2) またここにもシルエット的なイラストがあります。

イラスト素材

<http://www.siliconcafe.com/gtool2003/index.html>

フリーです。

3) 郵便局のフリーイラスト

<http://www.jp-network.japanpost.jp/amusement/downloads/>

*そのほか色々ありますが、なかなかぴったり来るようなものはまだ見つかりません。「フリー素材 教育」「フリーイラスト 人物」など入れて検索してみてください。

また いっそ海外のサイトを探してみるというのもありますが、なかなかまだ日本には紹介されていないようです。注意しながら探してみてください。自分で絵に自信がある人は描いたほうが早いかもしれません。

他にいいサイトを見つけた人は知らせてください。

基本事項を示しながら口頭でわかりやすく解説していく。全体的説明に加え、論集の意義をはっきりと伝えた。次にコース別の説明、詳細説明となる。ここにも文学復興の目的が明記されている。

Vol.3 Aコース 執筆マール

担当ページのタイトルは、リトールドする作家名「作品名」のあとに：をつけ同じサイズで解説部分の題名を続けたものを記載する（この部分の文字サイズが最大）。そしてあなたの氏名。そのあとに日本語で作家名をフルネームで書き「短篇題名」または『長篇題名』（エピソード名）を書く。そしておよそ1ページから2（～3）ページ以内に短く書き直した物語を置く。その字体やサイズは作品の雰囲気、イメージに合わせて変えて、ひらがなや振り仮名を使ったり、スペース、会話文などをうまく使用したりして、読みやすく工夫する。

そのあとに解説部分のタイトルを中央に置く（全体題名よりやや小さいサイズ）。そして章に分けⅠ、Ⅱ、Ⅲ・・・と振って、各章に題名を付け、センタリングする（サイズはさらに小さく）。参考にした文献があれば最後に題名をつける。配分ページは全体から差し引きして考える。たくさん書きたい者は文字を小さくして全紙数基準を守る。以下はイメージサンプル、サイズなどは別紙参照。

ブレット・ハート「ロアリング・キャンプのラック」

: ゴールドラッシュの頃の西部と文学

美国 英五

フランシス・ブレット・ハート「ロアリング・キャンプのラック」

そのむかし西部の土地で金^{きん}が見つかった後、おおぜいのひとびとが世界中から押し寄せ、金鉱掘りたちの村ができていった……その集落ロアリング・キャンプには……

一見怖そうに見えていたその荒くれ男たちは、じつは優しい心を持った男たちだった。

「しっかりするんだ。そんなことであわてちゃいけねえ。おれたちがきっと見つけ出してやるからな」

思いもかけない男のことばに……

やがて洪水がおさまり……みんながあたりをさがしまわると……

その姿を見た村の人々の目からは涙がとめどなく流れていた。

ゴールドラッシュの頃の西部と文学

I. 作家と作品について

ブレット・ハートは正式にはフランシス・ブレット・ハート (Francis Bret Harte, 1836-1902) といい……「ロアリング・キャンプのラック」 (“The Luck of Roaring Camp”) は……

II. 当時の西部の金鉱村の暮らしとは

西部という言葉の定義は時代とともに変遷してきている……
大変な病気や……

III. 実際は無かったそんな金鉱の集落のくらし

ところがそんな金鉱にいる人々はすぐにまた別の場所へと移動して行き……
……

IV. 作品に込められた味わいが全米に受けた理由

浪花節のような人情話が受けた理由は、東部から離れたこんな泥まみれの場所にもそんな温かな心を持った人々が暮らしているのだという・・・

V.使われている技巧とレトリック

そんな社会が消えてしまったにもかかわらず、この物語を今読んでみてもおもしろいのは・・・

などと作品がおもしろい理由、自分が気に入った理由、愛されている理由などを織り交ぜながら、その時代の社会や地域の構造などに関して幅広く論じてもよい。ただしすべてが作品の味わいの肯定に役立つように。

長篇の題例としては

マーク・トウェイン『トム・ソーヤーの冒険』（ペンキ塗りのおはなし）
などとする。

さらに質問がある人はメールで自由に聞いてください。アドレスはシラバスにあります。

これらの執筆自体がじつは文学の芽を若者の心にめばえさせるきっかけとなっている。それも難しい場合のため、入門用として以下の活動機会も提供する。

Vol.4 Bコース 執筆モデル

・まず頭に全体のタイトルをつける。わたしの選ぶ一冊。小論の順。詳しくは別紙参考。長篇小説は『…の冒険』、短篇は「黒猫」のように、括弧を使い分ける。自分の論文全体の題名には「 」をつけない。改行、段落、誤字脱字など注意。サイズ見本は別に配布。

『赤毛のアン』を素直に読めなかったあの頃の私

柏木 今日子

わたしの選ぶ一冊

『大草原の小さな家』 ローラ・インガルス・ワイルダー (1867-1957) 【アメリカ】

わたしは幼い頃、自然の豊かな瀬戸内海の島でのんびりと育った。年の離れた姉が一

人いたが、早くから東京に出ていたので、遊び相手もあまりなくて…

本を読むことが好きな方だったが、ある日同級生の友達から・・・とういことがあって、・・・そのとき以来モンゴメリーの書いたこの本を読みたいと思っていたが・・・

その後引っ越してしまい・・・ずっとその友人のことが気がかりだったが、・・・なかなか機会が無いまま今に至ってしまった。しかしあの本に出会ったことは、結局大きな思い出になった。

あの時は『赤毛のアン』のストーリーを聞いて・・・

今それを読み終えて次に興味を持っているのが、TVで見たこともある『大草原の小さな家』です。この作品に描かれている家族は・・・

私はそういうわけで当時は物語を心から楽しみ味わうことができませんでしたが、いまではもっと違う感情が生まれてきて・・・と思っています。

などと自分のエピソードを交えながら、文章を展開させてみましょう。

また題名例として

ボクが『ハックルベリー・フィンの冒険』（両家の戦争の話）で気づいた本当の××のように、挿話を特定した題名にしてもけっこうです。

私の選ぶ一冊と小論の本の題名が一致していても、していなくてもかまいません。

それを選んだり、題名に書いたりしている理由が、本文を読めばはっきりすることは絶対に必要な要件です。

読書を肯定できなかつた人は、

- ・・・などでお金がかかって・・・本も買えなくなり・・・も読まなくなつた、携帯やパソコンが時間を奪い・・・などと、それらを分析したり、自分の場合を当てはめながら考えたりして、それでも物語や文学作品を読むことのなかにあるメリットなどに、最後には触れるような、ポジティブな論述も心がけてください。1 ページでもOKです。

これらに加えて、昨年度までの論集のなかから、テーマや作風が比較的良好に似た学生論文の抜粋をコピーして、書き方の更なるヒントとして、また文字サイズやレイアウト、写真の使い方などの参考として数枚配布した。

そして新学期における提出時の表紙も統一し以下のものを全員に配り、必要事項をその時点で記入させ、いよいよという気持ちを伝えた。

プリントアウト原稿表紙 右上とじる 各ページ下に番号鉛筆書き

() 曜日 () 時限 シートNo. ()

専攻 ()

学籍番号 ()

ふりがな (:)

氏名 [:]

コース種類の別： A B 「○つける」

完全題目

[]

枚数： 1 2 3 4 5 6、 または () 枚

「○つける」

挿絵等 有・なし

提出日 (年 月 日)

そして新学期になり先ずプリントアウト原稿を提出させ、大きな間違いやミスなどを専

門課程の学生たちが編集委員となり校正し、当該学生に修正箇所を指示し、いよいよデータの提出となる。提出人数が多くなってきたので校正・修正もなかなか難しくなっている。今後の課題でもある。

以下に示したのが新学期になってから配布した資料である。これを夏までに渡すと、まちがって先にデータを送ってくる者が必ずいる。慎重にそして、紛失に対する備えとして、提出前の配布とする。

データ送付について

- ・プリントアウトした紙の論文を提出した者は、指示を聞いて、必ず10月中に下にあるメールアドレスに、完成版データを添付して送ること。(期限厳守)

※ 注意事項

- 1.メールのタイトルには

金3 「B：ハックルベリー」 山口太郎 2ページ

というふうに授業の曜日、時限、「ABコースの別：タイトル(略可)」、氏名、全ページ数を記入しておくこと。

- 2.メールの本文にはもう一度、曜日、時限、さらに、(シート番号、) 論の

完全タイトル、専攻、学籍番号、氏名(ふりがな付き)、全ページ数、プ

リント提出日、イラスト・写真等の使用有り無しを記入しておくこと。

+そのあと必ず添付する。*添付忘れがよくあるので注意。

- 3.10月中に必ず送ること。

教育用のアドレスなので、ex.が付いている。よく注意して、間違いなく送付するように。

データ提出先メールアドレス

××××@××××××

以上が提出までのすべての行程と指導書である。

作業の流れを示しながら、その文書に書かれた事柄を今回の論集作成の目的として、ここに表明した。時代は刻々と移り変わっていく。やがてブームと時代が過ぎたように見えるジャンルにも新たな価値が見いだされ、また復興の時代が来ないとも限らない。過ぎ去ったものをヤドカリのように脱ぎ捨てて去っていくことも可能だが、それらに新たな灯をともし、新時代に向けた新たな展開を準備しておくことも、また同時に必要なことなのかもしれない。

大阪教育大学 美国文学研究室 研究活动介绍

郭华（大学院国际文化专业·欧美文化研究）

大阪教育大学欧美文化专业的桥本贤二教授长年以来一直致力于美国文学的研究，以桥本教授为中心的大阪教育大学美国文学研究室在教师和学生们的共同努力下，近几年来出版了7册关于美国文学和文化研究的论文集，并受到了广泛的好评。这些论文集被送到了包括中国以及世界各国的大学，国立图书馆以及研究机构。

2003年大阪教育大学美国文化研究室第一次出版了以美国娱乐生活为题材的论文集『美国的娱乐世界』。学生们通过亲身体验，现场取材以及相互讨论，并将自己感兴趣的事情，如美国饮食文化，连环画，体育，电影，游乐园以及购物等扑捉人心的话题写成论文刊登在了这次的论文集上。通过这次尝试性的出版活动，教师和学生们的愉快教学和快乐学习的魅力。

2004年度美国文化研究室尝试了日本国内遗留下来的美国文化研究，主题是『战前日美交流史 - 在日本发现的美国文化』。现代的日本随时随地可以见到从美国传来的文化气息。学生们通过对第二次世界大战前日美交流时遗留下来的建筑物，风土人情以及趣事趣闻的探索研究，记录并保存了大量的相关资料，他们的足迹踏遍了神户，大阪，横滨以及九州大地。这次的出版受到了日本全国各地的图书馆的重视，应他们的要求，这次出版的论文集被收藏并永久保存在许多的国立图书馆内。

2005年度出版的『美国文学史中的美国文化研究』比以往有了质和量的提高。以“美国文学史”的听课生为主的学生们，课堂上通过从发现美洲新大陆到现代美国这段历史的学习，找出最让自己心动的课题，带着对美国文化探索的心情，进行调查研究和讨论。并且通过阅读小说和了解作者的经历，来感受美国文化的起源，魅力和异国文化的差异。

2006年度出版了『日本人，流行，文化 - 日本的年轻人和大众文化的今天』。这次出版的内容和以往不一样，暂时远离了美国文化，以将日本文化传送到海外为目的，进行了挑战。现在的日本年轻人当中都在流行什么，将这些信息传送给国外年轻人，和他们进行交流是这次出版的企划。同时这次出版得到了校内许多外国留学生的支持，他们把在日本生活期间的所见所闻和感受，分别用英语，法语和中文等多国语言写成文章登在了这次的论文集上。这次的论文集也首次得到了德国国立图书馆的青睐，有幸被保存在馆内。通过这次论文集的介绍，大阪最受年轻人喜爱的领导亚洲流行时尚的御堂大道扩大了它的知名度。

2007年度出版的『通过历史，名人，作品，电影来学习美国文学』包括了从过去到现在的全领域的美国文学历史，通过小说，电影，演讲，音乐，诗歌，舞台剧中出现的语言，和这些语言所表现出的行为，进行了文学研究。学生们通过这些学习找出自己喜欢的

亮点，写出了大量的议论性文章。由于这次出版采用了与以往不同的新颖做法，得到了更多的图书馆和研究机构的支持和关注。

2008 年度出版的『美国电影研究』不仅招集了美国文学研究专业的学生，同时也招集了一般英语科目的听讲生。在全校范围内扩大了这本论文集的知名度。这次出版活动利用了影响以及网络等各种多媒体手段，以影像文学为主要对象，对大量的反应美国文学的电影进行了深入研究。超过 100 名的学生们通过观赏世界电影名作，记录下其中捕捉人心的精彩画面，同时进行了文字编辑。在全校众多的师生的共同努力下，这本以研究美国电影为主题的论文集获得了前所未有的成功。

今年即将出版的论文集的题目定为『故事的魔力 - 欧美文学的再叙』。复兴文学和文学教育和让文学在年轻人中复苏是这本论文集的最初企画。我们期待着这次的出版能够得到越来越多的世界各国的大学生和爱好文学文化的各界人士的关注。同时希望更多的中国朋友们能够和我们一起分享探讨文学文化的魅力。

为了让全世界爱好文学的朋友们能够了解大阪教育大学美国文学研究室的工作内容和情况，到目前出版的所有论文集都被刊登在了大阪教育大学图书馆的网络公开系统上。为打算来日本留学，来大阪教育大学留学的外国学生们提供了有利的相关信息。大阪教育大学是一所重视国际文化交流的国立名牌大学，与世界上很多大学结成姐妹学校，进行着频繁的文化交流和研究。曾经在桥本教授研究室学习过的许多美国留学生，即使完成学业归国后，也坚持不断地积极投稿。我是大阪教育大学的中国留学生，曾经写过的一篇介绍大阪的美国村的文章有幸被刊登在了 2006 年的论文集上。大阪的美国村聚集了世界上最新的流行趋势，服饰，音乐，舞蹈，饰品，发式等等。在那里年轻人们常常自发的聚集到一起，进行各种街头表演，让你看得眼花缭乱，目瞪口呆。在那里你可以第一线了解到世界上的最新流行事物，可以和各国的年轻人进行交流。

虽然目前桥本教授的美国文学研究室出版的论文集基本上是用日语编辑的，但是我们希望通过这个简单的中文介绍能够让更多的中国友人来了解我们的研究内容，让一些懂得日文的中国朋友先来读读看。这是我们研究室迈向和中国文学文化爱好者交流的第一步。今后，通过研究教育，和更多的中国朋友进行更亲密友好的交流是大阪教育大学美国文化研究室师生们的共同愿望。

第一部

リトールドと解説

ルーシー・モード・モンゴメリ『赤毛のアン』 (アンと緑色の髪のおはなし)

:プリンス・エドワード島の自然と作品

永田 梓

ルーシー・モード・モンゴメリ『赤毛のアン』(アンと緑色の髪のおはなし)

カナダの美しい島、プリンス・エドワード島にある小さな街アヴォンリーの「^{グリーンアイランド}緑の切妻」には今日もおてんば娘アンの明るい声がひびきます。アンは孤児院からちょっとした手違いをへてこの家にひきとられ、厳しくもやさしいマリラとおとなしいけれどアンのおしゃべりが大好きなマシュウの2人の老兄妹とくらしています。

想像力ゆたかで美しい自然や周りの人々を心から愛し、またみんなからも好かれているアンの悩みはもえるように真っ赤な髪。そんなアンのもとにある日の昼下がり、一人の行商人が訪れます。

その行商人はドイツ人で、必死に働いてお金を貯めて故郷の家族をカナダへ呼びたいと話します。その熱い思いにアンは心を打たれ、自分も何か買って彼に協力したいと思った矢先、彼が広げた大きな箱のすみにあるびんに目が留まりました。それは保証つきの染め粉で、どんな髪も美しい黒髪に染まりけっして洗ってもおちないと書いてあったのです。アンは自分の真っ赤な髪が漆黒に染まり、美しく波打っているのを想像したとたんその染め粉にたまらなく魅力を感じてしまいました。

その染め粉は75セントもするものでしたが、その行商人は親切にもそれを50セントにまけてくれました。行商人がかえるとアンは早速古いヘアブラシに染め粉をつけ、真っ赤な長い髪を染めはじめました。

ところがおそろしいことに、ひとびん全部使ってしまったとき、アンの目にうつったのは思い描いていたぬばたまの夜のような美しい黒髪ではなく、奇妙な、つやのない青銅がかった緑色に少しもとの赤いのがまじった気味の悪い髪だったのです。

マリラは家にかえるとアンが言いつけどおりお茶のしたくをしていなかったの、すっかり腹をたててしまいました。食事の時間になってもアンが居間にあらわれないので、ろうそ

くをとりにアンの部屋に行ったマリラはベッドの中にうずくまるアンを見つけて驚き、心配そうにたずねました。

「アン、眠っていたのかい？気分でもわるいのかね？」

「いいえ、でもどうかマリラ、あたしを見ないでちょうだい。いまあたしは絶望のどん底にいるんだもの。あたしの生涯は終わったわ。どうか、あたしを見ないでちょうだい」

アンは窒息したような声でそう言いました。

「いったいぜんたいどうしたというんだい。さあ、いますぐ起きてわけをはなしてしまいなさい」

ベッドから出たアンの髪を見たマリラは驚いて言いました。

「アン、髪をどうしたの？まあ、緑色じゃないか」

すっかり話を聞いたマリラはあきれて、見た目ばかり気にして見栄を張る心の結果がこういったできごとをまねいたのだと、アンにきびしく言って聞かせました。そしてその日から一週間の間アンはどこにも行かず、ひたすらせっけんで髪を洗いつづけました。しかし残念なことになんの効果もありませんでした。あの染め粉は、洗ってもおちないというところだけは真実だったのです。

そしていよいよアンはどうすることもできなくなり、マリラに髪を切ってもらうことにしました。とても辛いけれど、そうするよりほかになかったのです。マリラは徹底的にアンの髪を短く切りました。その結果はどんなにひいきめに見ても、似合うとはいえないものでした。アンは部屋の鏡を壁のほうに向け、激しく叫びました。

「髪がのびるまでは、二度と自分の姿を見ないわ！」

しかし突然鏡をもとに戻し、「いいえ、見るわ。部屋にくるたび自分のみにくさと向き合って、わるいことをした罪ほろぼしをするわ」と言いはなち、短くなってしまった髪をながめてため息をつきました。

次の日、とても短くなったアンの髪は学級中の話題をさらいましたが、誰もその原因を知ることはできませんでした。なぜなら親友のダイアナ以外、アンの染め粉事件を知る者はおらず、ダイアナはけっしてそのことを誰にも口外しなかったからです。しかしアンのライバルであるジョシー・パイだけは、アンがまるでかかしのような、と言うのを忘れませんでした。

プリンス・エドワード島の自然と作品

I. 作者と作品について

ルーシー・モード・モンゴメリ (Lucy Maud Montgomery) は1874年にカナダのプリンス・エドワード島に生まれた。幼いころに母親と死別し祖父母に育てられ教師になったが、祖父が亡くなってからは愛する祖母を助けて郵便局で事務をとっていた。そして30歳のときにこの『赤毛のアン (原題: Anne of Green Gables)』を書いたが、三軒の出版社へ持ちまわっても相手にされなかったので出版を断念したため、その原稿は屋根裏部屋のトランクに放り込まれていた。

それから三年後、モンゴメリはとあるパーティに招かれたので、その衣装につけるリボンを探しに屋根裏部屋へあがりトランクを開けたとたん、すっかり忘れていた『赤毛のアン』の原稿が目に入ったのである。その数日後、モンゴメリは自分の旧稿にふたたび眼を通すと、おもしろくなって日が暮れてもランプをともし読み続けた。

アンにもう一度日の目を見るチャンスを与えてあげたい—そう思ったモンゴメリは、その原稿をボストンの出版社へと小包にして送った。その出版社は、『赤毛のアン』を500ドルで買い取りにしてくれたのである。するとこの作品はたちまち100万部以上も売れ、やがて無声版とトーキー版と二度も映画化されるにいたった。

以後この愛すべき作品は多くの言語に翻訳され、世界中の大人から子供まで多くの人々に親しまれている。

II. プリンス・エドワード島

プリンス・エドワード島はカナダ東部に位置する島で、この島を中心にカナダ国内でもっとも小さな州を形成している。南岸は農業がさかんで、北岸にはプリンス・エドワード国立公園があり夏季には多数の避暑客や海水浴客でにぎわう。またこの小説に登場する「輝く湖水」や「お化けの森」は実際にこの島に存在し、『赤毛のアン』の愛読者だけでなく毎年多くの観光客が訪れる。

III. モンゴメリとアン

主人公であるアン・シャーリーは幼いころに両親を病で亡くし、親戚の家や孤児院で幼少時代を過ごしている。しかし明朗快活な性格で、楽しいおしゃべりや美しい歌声で周りにいる人々を笑顔にするようなおてんばな女の子である。マシュウとマリラに引き取られてからもたくさんの騒ぎをおこすが、そのたびに少しずつ成長し大人になっていく。生まれ持った負けず嫌いの性格もあってか、学問に関しても特に優れており学校で優秀な成績をおさめ教師の道を選ぶことになる。

このアン・シャーリーは作者のモンゴメリ自身に通ずるところがあるといわれ、したがってこの小説はモンゴメリの自伝的要素が比較的強いものとも考えられる。

またモンゴメリの死後、国立公園の入口に記念碑がつけられたのだがその除幕式においては、小さく交通がとて不便な島ながらも非常に多くの人々が訪れたという。モンゴメリと彼女の作品は今でもなお人々の心に、色褪せることのない乙女の青春をもたらしつつづけている。

(ながた・あずさ：欧米言語文化講座 英語圏)

コナン・ドイル「ボスコム溪谷の惨劇」

:シャーロック・ホームズの世界

井倉 由加里

アーサー・コナン・ドイル「ボスコム溪谷の惨劇」

ある朝、私が朝食を取っていた時、メイドが電報を持ってきた。

【二日空いていないか。ボスコム池の惨劇事件で、西部イングランドより依頼を受けた。同行してもらえるとありがたい。パディントンに11:15分に発つ予定だ。】

旅行の準備を手早く済ませた私は、少し早めに駅に着いた。すでにシャーロック・ホームズがホームを行ったりきたりしていた。

「君が来てくれて本当にありがたいよ、ワトソン君」彼は言った。

切符を買って列車に乗り込むと、ホームズは買い込んだ大量の新聞を読み出した。

「君はこの事件について何か知っているか？」

「いや、何も知らないよ。最近は何も読んでいなかったからな。」

「この事件は非常に難しく簡単な事件だよ、ワトソン君。警察は被害者の息子が犯人だと断定している。」

「それでは、殺人事件なのか？」

「そう推測されているようだ。今分かっている範囲でこの事件の概況を簡単に説明しよう。」

ホームズは事件について語りだした。ジョン・ターナー氏とチャールズ・マッカーシー氏はオーストラリアから帰郷し、近くに居を構えた。ターナーはこの地方で一番の地主で、マッカーシーに農園を貸していた。ターナーには娘が一人、マッカーシーには息子が一人いて、共に妻に先立たれている。家族に関する情報はこれだけだった。

事件は先週の月曜日に起こったらしい。その事件というのは、マッカーシーがボスコム池付近で殺害されたというものだった。マッカーシーは3時に約束があると言って出て行ったきり、帰らぬ人となった。何故息子が容疑をかけられているのかというと、2人の目撃者がボスコム池に向かうマッカーシーの後ろを、息子が猟銃を持ってつけていたと証言したらしい。そしてもう1人の目撃者の14歳の少女が、池のあたりで殴り合いが起りそうな口論をしていたと証言した。息子がマッカーシーに手を上げたのを見て、怖くなって家に逃げ帰り、母にそのことを話していたところ、息子が助けを求めてやってきた。その息子の袖口と手には真新しい血のあとがあった。父の死体は池近くの草の上に横たわっており、頭部は重たい鈍器で殴られたような痕があった。息子の猟銃が近くに転がっていたため、それで殴られたと思われても仕方がない状況だ。息子はすぐに逮捕され、故殺と判断された。息子は父が「クイー！」と叫んだため、父の元に駆けつけたところ口論となった。息子が帰ろうと思

い少し歩いたところで、後ろから恐ろしい悲鳴が聞こえたらしい。

父の元に駆けつけると、父は死ぬ間際にネズミがどうか咬いていたと証言していて、無実を主張している。この事件に関して現在分かっていることはこれだけのようだ。

「被告人はとても不利な状況だな。この事件で君の出る幕はなさそうだよ、ホームズ」

「明確な事実ほど当てにならないものはないんだよ、ワトソン君。この事件で一つ二つ調べてみたいことがある。それは十分調べる価値のある問題だ。」

事件が起こった小さな田舎町に着いたのは午後4時のことだった。プラットホームで我々を待っていたレストレード警部が、被告人である息子と面会させるためにホームズを連れて行った。その夜、ホームズが帰ってきたのは遅かった。マッカーシー青年からは何も聞き出せなかったらしく、その日は事件についてそれ以上何も語ることはなかった。

翌日、我々はレストレードと共に事件現場へ足を運んだ。ホームズは手がかりを追い求めて、時に動き回り時にじっと立ち止まったりしていた。そこにいつもの静かな思考家のイメージは見られないほど、真剣に事件現場の周りを搜索していた。やがてレストレードが正確な死体の位置を示した。そこには確かに、頭を殴られて倒れた男の跡が残されていた。

「ねじれた左の足跡がそこら中についている。そしてそこで葦の中に消えている。これはマッカーシー青年の足跡だな。2度歩き、1度思いきり走っている。彼の証言と一致するな。これはなんだ？四角い爪先だ。非常に珍しい靴だ。」

ぶつぶつと言いながら、しばらくホームズは辺りを搜索した。ブナの木の下で腹ばいになった彼はとがった石を苔の中から見つけた。そして入念に木の近くを調べ、私にはごみにしか見えないものを集めて、封筒にしまった。

「これはとても興味深い事件だ。ちょっと手紙を書こう。そして昼食に戻ろうか」普段の態度に戻ったホームズは言った。

馬車の中でもまだホームズは拾った石を持っていた。

「レストレード、これに興味があるようだ。これが殺人の凶器だよ。この石があった下の草が育っていた。埋まっていた形跡も見当たらなかった。マッカーシー青年の凶器が使われた痕跡もなかった。この石は傷と一致するだろう。」

「で、犯人は？」レストレードは言った。

「背の高い男だな。左利きで左足を引きずっていて、分厚い狩猟用ブーツを履いて、インドの葉巻をホルダーを使って吸う。他にも手がかりはあるが、これで十分だろう。」

私たちがホテルに帰って昼食を取ったあと、一人の男が私たちの部屋を訪れた。その男は引きずるような歩き方と、曲がった背中が印象的な男だった。

「どうぞおかけください。私の手紙は届きましたか？」ホームズは言った。

「ああ、届いたよ。不名誉を避けるため、私とここで会いたいと書いていたな。どうしてだ？」

「私はマッカーシーの事件について、すべて分かっています、ジョン・ターナーさん」

その男は絶望的なまなざしをホームズに向けながら、やがてしばらくして「許してくれ！」と叫んだ。

「私は当局の者ではありませんので、あなたを逮捕するつもりはない。しかし、マッカーシー青年は釈放されなければならない。」

ホームズは事件について語りだした。

「マッカーシー青年の話によると、彼の父親は『クーイー！』と叫んだり、死に際にネズミに関する言葉をつぶやいたそうですね。それを真実だと仮定して、調査を開始しました。まず、『クーイー！』という言葉ですが、父親が会う約束をしていた人物に聞かせるために発した言葉です。これはオーストラリア人に特有のかけ声で、オーストラリア人同士で使われます。そこで、彼が会う約束をしていた人物は、オーストラリア人であることが推測できます。次にネズミに関する言葉ですが、これはマッカーシー青年の聞き間違いです。ア・ラット（ネズミ）ではなく、父親は‘バララット’と聞いたかったのです。つまりこの2つの話を総合すると、バララットから来たオーストラリア人ということになりますね。この近くに住んでいる人々で、その条件にあてはまるのはあなたしかいません。」

ホームズはそう話し終えたあと、ターナーの言葉を待った。

「私はオーストラリアではバララット・ギャングと呼ばれ、とても荒れた生活を送っていた。ある日、バララットからメルボルンに向かう金を積んだ馬車を襲撃した。そこで、私が銃をつきつけた相手がマッカーシーだった。私は金持ちになり、イギリスに戻った。結婚もして、子供も出来た。しかし、リージェント街でマッカーシーに会ってしまった。彼は私を脅し、私は彼に一番いい農場を無料で貸した。マッカーシーは結婚し、息子も生まれた。私は彼がほしがるものは全て与えた。娘のアリスを要求するまではな。奴は息子にアリスと結婚しろとしきりに言っていた。息子の方は、結婚は出来ないといい張っており、よく口論になっていたようだが。私が奴を殺す直前も、そのことで口論していた。奴は私が病気で先が長くないのを知っている。だから息子を、私の遺産を受け継ぐアリスと結婚させたかったんだ。私はそのことで話があると、マッカーシーを呼び出した。私が行ったとき、奴は息子と話していた。葉巻を吸って、彼が一人になるのを待った。そして一人になったことを確認して、私は奴を石で殴って殺した。」

ターナーが自白したあと、ホームズは彼が余命あとわずかなことを知り、このことを我々の心にしまっておくことにした。マッカーシー青年は、ホームズが探し出した証拠により、無事釈放された。

このあと、ターナーは7ヶ月生きながらえたが、今ではもう亡くなっている。マッカーシーの息子と、ターナーの娘は結婚し、幸せに暮らしているそうだ。真実を知っているのは世界でホームズと私だけになった。しかし、我々は今後一生、この事件について口を割ることはなさそうだ。

シャーロック・ホームズの世界

I. アーサー・コナン・ドイルと『シャーロック・ホームズ』

アーサー・コナン・ドイル (Arthur Conan Doyle, 1859-1930) ほかの有名な『シャーロック・ホームズ』シリーズの生みの親である。コナン・ドイルやシャーロック・ホームズといえば、一度は耳にした名前ではないだろうか。現代推理小説の生みの親とも言われる彼は、『シャーロック・ホームズ (Sherlock Holmes)』シリーズで、最高の名探偵を生み出した。そして同時に彼の最高の相方である、ワトソンをも生み出している。ワトソンに関しては、作品中で医者ということが記述されている。これは若い頃に医学を学んだことのある、ドイルだからこそ生み出せたキャラクターであるといえよう。ワトソンは医学的知識でホームズを時に手助けする。それ故に、この作品中では最高のコンビとして、この2人が活躍している。

II. 『シャーロック・ホームズ』シリーズに登場するキャラクター

先ほど述べた、ホームズとワトソン以外にも、もちろんたくさんキャラクターがこの作品には登場する。例えば、悪役で有名なモリアーティ教授。彼は悪役でありながらも、ホームズファンの中では人気がある。それはこのモリアーティ教授がいるからこそ、シャーロック・ホームズが生きてくるように思えるからである。モリアーティ教授といえば、シャーロック・ホームズと肩を並べるほどの頭脳明晰ぶりである。そんな彼がロンドンの犯罪社会のバックにいる状況で、ホームズはそのロンドンの闇と戦うことになる。モリアーティ教授がいなければ、ホームズが頭を抱えるほどの事件は起こりえない。私はそう思っている。この教授との戦いが「最後の事件」(“The Final Problem,” 1893) という短篇小説の中で描かれている。この事件については、私がここで解説するよりも、この小説を实际手に取っていただいて、読んでいただくのが一番だと思う。

III. この作品を選んだ理由

ホームズ・シリーズには、シャーロキアンと呼ばれる、熱狂的なファンが存在する。私もそこまではいかないが、ホームズ・シリーズはとても好きな作品の一つである。推理小説が好きで、中学生のときに始めてホームズ・シリーズを読んだ私は、すぐにこの作品のファンになった。ホームズの鋭い洞察力と観察力。いつも冷静で理知的なホームズが、事件になると普通の人間らしくなること。この「ボスコム渓谷の惨劇」(“The Boscombe Valley Mystery,” 1891) という短篇小説の中で、ホームズは色々な一面を見せてくれる。もちろん、鋭い観察力や洞察力もだが、事件現場を調べているときのホームズはどこか興奮していて、そこに少し親しみがわくファンは、私だけではないように思える。そして、警察にターナーの自白を知らせないなど、優しい一面もこの作品の中でを見せてくれる。ホームズはその冷静さや推理力が魅力だが、それだけでは熱狂的なファンは生まれないと思う。それだけでは少し機械的な人間だと思ってしまうからだ。そこに彼の人間らしさというものが加わって、初めて最高の名探偵シャーロック・ホームズが生まれるのだと、私は思う。

(いくら・ゆかり：欧米言語文化講座 英語圏)

オー・ヘンリー「最後の一葉」

:オー・ヘンリーの魅力

松原香織

オー・ヘンリー「最後の一葉」

ワシントンスクエア西には芸術家たちが集まる小さな地区がありました。入り組んだ道路があり、「プレイス」と呼ばれる区域に小さく分かれていました。芸術家たちは、北向きの窓と18世紀の切妻造、そしてオランダ風の屋根裏部屋を探して、ここに住みつき始めたのです。

レンガ造りの三階建ての最上階にはスーとジョンジーの二人の女流画家のアトリエがありました。ある定食屋で出会った二人は、お互いの趣味が合って意気投合し、共同でアトリエを持つことにしたのです。

11月ごろから、プレイスの通りには、よそ者がうろつくようになりました。医者からは「肺炎」と呼ばれる、そのよそ者は氷のような冷たい指で人々に触れて回るのです。東からやってきたよそ者は、多くの犠牲者を出してきました。彼は騎士道精神なんて持ち合わせていません。だれかれかまわず、たとえ小柄な婦人だとしても、襲いかかります。ジョンジーだって例外ではありませんでした。冷たい指に触れられたジョンジーは倒れ、ベッドに横になったまま動けなくなりました。動けないジョンジーができることはたった一つ、窓ガラス越しに隣の家の煉瓦の壁を見続けることだけでした。

医者がジョンジーを診察に来たある朝、スーは医者に廊下に呼び出されました。

「助かる見込みは・・・そうだな、十に一つ。」体温計を振って水銀を下げながら、医者は言いました。「まあ、それもあの子が『生きたい』って思っていたら、の話だ。それが感じられん。自分でよくなる、と決めつけているんだからな。そりゃ効く薬も効きやせん。あの子が何か気にかけているようなことはあるかい？」

「あの子は・・・いつかナポリ湾を描きたい、って、そう言っていました。」

「絵を描きたい、とな？他にもっと実のあることはないのか？・・・まあ、だったら、それがポイントなんじゃろうな。わしもできる限りのことはする。あの子に、この冬どんなコートの袖が流行るのか、なんて尋ねさせることができれば、助かる見込みも五に一つになるんだがね。」

医者が帰った後、スーは思いっきり泣きました。泣きやんだあとは、口笛を吹きながら、ジョンジーの部屋に入って行きました。

ジョンジーが何か低い声で呟いているのが聞こえました。窓の外を見ながら、「じゅうに・・・

じゅういち、じゅう、く・・・はち、なな・・・」と逆に数を数えていたのです。

スーは何を数えているのだろうと窓の外を見ました。そこにあるのはただの崩れかけた壁だけで、古いツタは煉瓦に這うようにまきついています。

「ろく」

スーは何を数えているのか尋ねました。

「葉っぱよ。三日前は100枚くらいあったのに、今はたった6枚になったわ。あ、また散ったから5枚ね。あれが最後の一枚になって、そして全部散ったとき、私も死ぬのよ。」

「何を言っているの？あなたが元気になるとツタの葉っぱは関係ないわよ。」

「ほら、また一枚散ったわ。」

「やめて、もう窓の外なんて見ないでよ。」

「せめて最後の一枚が散るのを見たいの。もう待つのも考えるのも疲れちゃったから。自分が持っていたもの、すべて放してしまいたいわ。そしてひらひらっと飛んでいくの、あの疲れた木の葉みたいに。」

「もうおやすみなさい。わたしはベアマンさんのところにモデルを頼みに行ってくるわ。すぐに戻るからね。」

ベアマンさんは下の階に住んでいる画家でした。六十は越していますが、彼は芸術家としては失敗した人生でした。ここ数年はときどき広告に使う絵を描くくらいで、あとはプロのモデルを雇えない芸術家のためにモデルをして収入を得ていました。お酒を飲んで、これから描く傑作について語り、軟弱な奴を嘲笑う、気難しい人でした。

スーはジョンジーの妄想をベアマンさんに話しました。

ベアマンさんは赤い眼をうるませつつ、ばかばかしい想像だ、と軽蔑と嘲笑の笑い声をあげました。

「なんだって、けしからん！葉っぱが散るから死ぬなんて！そんなこと聞いたことねえぞ！くだらんこと言ってるようじゃ、モデルなんて頼まれてやらん！」

「ジョンジーも熱で弱ってて、おかしい考えで頭がいっぱいなよ。・・・いいえ、いいわ、ベアマンさん。モデルなんてしてくださらなくて結構。でも！あなたは老いぼれの・・・老いぼれのコンコンチキよ！」

「いんや、モデルもやってやるさ。あんたと一緒に行くんだ。ここはジョンジーさんみたいな素敵な娘さんが病気で寝込んでるようなところじゃねえんだ！いつかわしは傑作を描いて、ここを出てってやるんだからな！」

上の階に戻るとジョンジーは寝ていました。窓の外にははっきりなしにみぞれまじりの雨が降り続いていました。

次の朝、ジョンジーは日よけを上げるようにスーに言いました。

スーはしぶしぶ従いました。

しかし、激しい雨と風が一晩中続いたというのに、煉瓦の壁にツタの葉が一枚残っていま

した。最後の一枚がそこにありました。

「これが最後の一枚なのね。ゆうべのうちに散らと思ってたのに。でも今日あの葉っぱも散って、私も死ぬのね。」

昼になり、黄昏時になっても最後の一枚は壁にしがみついていた。夜がきて北風が吹き、雨は窓を激しく打ちました。

また、朝が来ました。ジョンジーはまた日よけを上げるように言いました。

ツタの葉はまだそこにありました。

ジョンジーは長い間その葉を見ていました。そしてジョンジーを呼びました。「私、悪い子だった。何かがああ最後の葉を散らないようにして、私がどんなに悪いことを考えていたのか教えてくれたんだわ。死にたいと願うのは、罪なのね。」

それからスープを飲んで少し元気になったジョンジーはこう言いました。「スー。わたし、いつか、ナポリ湾を描きたいわ。」

午後に医者がやってきてこう言いました。「五分五分だ」と。「よく看病してやりなさい、そしたら大丈夫だ。これからわしは下の階の患者も診に行かなきゃならん。ベアマンといたな。彼も肺炎なんだ。もう体も弱ってて、年だし、助からんだろうがな。」

次の日医者は言いました。「もう完全に大丈夫だ。あと必要なのは栄養と看病だけだ。」

その午後、スーはベッドのところにきて言いました。「話したいことがあるの、ジョンジー。今日、ベアマンさんが肺炎のためお亡くなりになったの。罹っていたのは二日だけだったみたい。一日目の朝、ずぶぬれになっているのを管理人さんに見つけられたの。ひどい雨と風の晩にどこに行っていたのか、最初は分からなかった。でも、引きずり出されたはしごと、散らばっていた筆、そして緑と黄色が混ぜられたパレットが見つかったの。ねえ、窓の外見てごらんなさいよ。どうして風が吹いてもひらひら動かないのか、不思議じゃない？あれがベアマンさんの傑作なのよ。・・・あの葉は、ベアマンさんが書いたものなの。最後の一枚が散った夜に。」

オー・ヘンリーの魅力

I. オー・ヘンリーの生涯

オー・ヘンリー (O. Henry) は1862年9月11日アメリカのノースカロライナ州に生まれた。オー・ヘンリーというのはペンネームで、本名をウィリアム・シドニー・ポーター (William Sydney Porter) という。医者をして父親に持つが、母親は3歳のときに亡くなった。教育者の叔母により育てられた。読書を好んでいたが、学業は15歳の時にやめた。

1882年に知人の勧めでテキサスに移り住んだ。そこでは薬剤師やジャーナリスト、銀行の出納係など、さまざまな職を転々とした。1887年にはアトエール・エステスと結婚した。1894年に*The Rolling Stones*という風刺週刊誌を発行したが、うまくいかずすぐに廃刊となった。

1866年、以前働いていたオハイオ銀行の金を横領したという疑いで起訴され、懲役5年の有罪判決を受けた。服役中から密かに作品を書き、新聞社や雑誌社に作品を送り続けた。出所後は新聞の経営と編集を行い、そして作家としての活動を始めた。

1910年に、過度の飲酒を原因とする肝硬変にかかり、生涯を閉じた。

II. オー・ヘンリーの作品

彼は、10年間ほどで約280篇もの短篇小説を書いた。それらは、ユーモアとウィットとペーソスに富み、プロットが非常に巧みであった。

2、3ページの短い作品であっても、その中には起承転結がしっかりとあるのがオー・ヘンリーの特徴だという。すぐに読者を物語の中に引き込んでしまう。そして、最後には、思いもよらない「どんでんがえし」が待っている。さりげない話の筋から繰り出されるため、「オチ」が不快なものにならない。また、その展開によって、読者を驚かせるが、それだけではない。温かい気持ちや、切ない気持ち、さまざまな感情を与えてくれる。

ここで紹介した「最後の一葉」(“The Last Leaf”)では、どうだろうか。酒飲みで嫌味なやっかいな老人でしかなかったベアマンさんが、最後に残した「傑作」が、ジョンジーに「生への執着」を与え、再び絵を描こうという気持ちにさせた。人の気持ちを動かすという、まさに「傑作」をレンガに描きだしたベアマンさん、彼に対する気持ちを読者は物語の最後で変えるだろう。読後には、切ないような気持がありながら、それでも、明日への生きる希望というものが湧いてこないだろうか。

短い物語の中でも、天才的なプロットによって、読者を引き込み、「何か」を与えてくれるオー・ヘンリーの作品は、現代の私たちの生活の中で必要なものを思い出させてくれるのだと思う。

III. リトールドを終えて

短篇小説をリトールドするというのは、思ったよりも難しいことであった。上にも書いたように、プロットが素晴らしいオー・ヘンリーの作品のどこを削り、どこを残すのかを決める作業で非常に頭を悩ませた。彼が大切に思っていた「筋」はどこなのか。この一文を削ることによって、最後のどんでん返しでの読者の気持ちに、足りないものが出てくるのではないだろうか。たとえば、ベアマンさんの言葉ひとつひとつにも、それがどのような印象になるのか、それがオチの部分で最も良い効果を与えるにはどうすればいいだろうか。そのようなことを考えながらリトールドを進めていった。

また、ジョンジーの病からの苦しみ、スーの必死に友を思う気持ちを大切にしながらリトールドしたいと思った。若くして「生」をあきらめるような状態になってしまったジョンジーの悲しみに触れて、とても痛々しい気持ちになった。それを必死に看病するスーも、ここまで友のことを大事に思える彼女は素晴らしいと感じた。

あらためてこの作品を読み、深く考えることによって、「ときに挫けることがあっても、周りの人の応援があれば夢を追うことはできる」そのように思われた。私も、だれかにとっての希望となる「葉」になれば、そう思った。

(まつばら・かおり：欧米言語文化講座 英語圏)

オー・ヘンリー「最後の一葉」

:近代のニューヨークと文学

塩谷彰久

オー・ヘンリー「最後の一葉」

ワシントン広場の西の狭い区域では、いくつもの通りが乱雑にのびており、プレースと呼ばれる細長い土地に細かく区切られている。芸術作家のスーとジョンジーはそこにずんぐりした三階建てのれんが造りのてっぺんに、アトリエを持った。八丁目の食堂で出会った二人は、趣味がぴったりと合っていたことから、ふたりの共同のアトリエが生まれたのである。

それは五月のことであった。そして十一月になると肺炎が村に入ってきた。運悪くジョンジーはその肺炎にかかってしまったのである。医者によると、肺炎が治る見込みはほとんどないとのことだった。またジョンジーが自分で治らないものだと決めつけていることも原因の一つであった。それを知ったスーは、なんとかジョンジーを元気づけようと絵を描き、それを売ったお金でワインを買おうとした。ジョンジーの横で絵を描いていると、何かを数える低い声が聞こえた。窓から見えるツタのつるについた葉が落ちていくのを見て、その残りの数を数えていたのである。なぜそんなものを数えているのかをスーはジョンジーに尋ねた。

「最後一枚が落ちる時には、私も行かなくちゃいけないんだわ」とジョンジーは答えた。スーはとても驚いた。ジョンジーの生きたという思いはほとんど無くなってしまっていたのであった。それでも彼女を元気にしたいと思うスーは気丈にふるまい、また絵を描くからと言ってジョンジーに目をつむっておくように頼んだ。

その間にスーは絵のモデルに、同じマンションの下の階に住むベアマンという老人を呼んできた。ベアマンも絵描きである。彼は四十年間傑作を書くと言い続けてきたが、手をつけることもしない絵描きであった。スーはそんなベアマンにジョンジーのことについて相談したのであった。ベアマンは、涙の浮かんだ赤い目をして、大声でジョンジーのばかげた空想をあざけり罵った。そして、モデルになることを了解した。

スーが絵を描いている間、外では、雪交じりのつめたい雨が、ひっきりなしに降っていた。翌朝、ジョンジーは窓の外を見たいといった。スーはしぶしぶ緑色のシェードをあげた。ところがどうだろう！叩きつけるような雨と吹きすさぶ風とが、長い夜じゅう続いていたというのに、煉瓦の上には、やっぱりツタの葉が一枚へばりついているではないか。「最後のひと葉だわ」と、ジョンジーが言った。次の日の夜も北風が吹き、雨は相変わらず窓をたたいて降っていた。しかしツタの葉はまだそこにあった。その葉の姿に勇気づけられたスーの具合はどんどん良くなっていった。そして彼女は危機を脱したのであった。しかし二日前から肺炎にかかっていたベアマンが亡くなってしまったのである。実はツタの最後のひと葉は、雨が降りしきる中、ベアマンが壁に描いたものであった。その最後の葉は、ベアマンの傑作となった。

近代のニューヨークと文学

I. 作家と作品について

オー・ヘンリーは、本名ウィリアム・シドニー・ポーター (William Sydney Porter) である。アメリカ文学史に特異の地位を占めている短篇作家であり、約280編ほどの作品を残している。長編の作品は一つもない。1862年9月11日、アメリカのノースカロライナ州グリーンズボロで、医師アルジャーノン＝シドニーの息子として生まれた。薬剤師、ジャーナリスト、銀行の出納係など様々な職を転々としていた。1986年には、働いていたオハイオ銀行の金を横領した疑いで起訴され、1898年に懲役5年の有罪判決を受けている。服役前から小説を書き始めており、1899年に『マクレアズ』誌に第一作が出された。1910年、過労と主に過度の飲酒を原因とする肝硬変により、病院で四十七年の生涯に幕をとじた。彼の作品の特徴として、南部のニューオーリンズや、西部のテキサスや、遠く中米などを舞台にした作品もかなり多いが、ニューヨーク市を背景にして、そこに住む庶民の生活に材をとったものが圧倒的に多い。

次に今回紹介する作品「最後の葉」(“The Last Leaf”)はヘンリーの代表作である。舞台は先ほど出てきたようにニューヨークであり、成功を夢見る二人の女性とひとりの老人の物語である。この物語は人間の命の尊さ、生きることの喜び、人間のあたたかさを知ることができる作品となっている。

II. 当時のニューヨークとグリニッジ・ヴィレッジ

時代設定はおそらくヘンリーの生きていた時代19世紀後半から20世紀前半であろう。今でこそ人口約830万人を抱える世界有数の大都市となっているニューヨークも、もともとはオランダ人によって交易場として築かれた町であった。近代資本主義の勃興期、ニューヨークにもようやくサラリーマンと呼ばれる人たちの小市民的生活が根をおろしはじめた。そんなわけでニューヨークはまだまだ発展途上の地であったのだ。その中でも作品の舞台となっているグリニッジ・ヴィレッジはニューヨークの中心地に位置しながら、いくつもの通りが乱雑に入り組んでいて、プレースと呼ばれる小路に寸断されている。それゆえにニューヨークの発展の波に乗り遅れてしまった。しかしながら、そうであったために、1910年代に入ってもグリニッジ・ヴィレッジはアメリカの思想的、文化的な拠点となっていくのであった。というのも発展がおくれたゆえに、この地域ではきわめて安くアパートを借りることができ、手ごろな値段のカフェやレストランがいたるところに点在していた。そのために、無名で貧乏ではあるが、才能豊かな芸術家たちや思想家たちが全国から押し寄せてきて住み着くことになったのだ。この物語の主人公、スーとジョンジーも別の州からやってきた。ここに住む多くの人々は売れてここを出ていきたいと思っていた。一方では、グリニッジ・ヴィレッジは夢見る人が夢見ようとしたがために痛い目にあい、それから逃れるためにやってくる避難所でもあったのだ。避難所には、これから頑張ろうとするものと、夢見ることに疲れて一休みしにきたものが混在している。そんな彼らあたたかく受け入れてくれるカフェやレストランがここにはあるのだ。そんな人情味あるこの場所が、芸術家にとって居心地のいいところだったかもしれない。そんな素朴な表情を持つグリニッジ・ヴィレッジと庶民が主人公となっているこの作品がうまくマッチしていたのではないかと思う。そして、庶民の日常生活を題材とすることが多いヘンリーにとっては、まさにうってつけの場所であったに違いない。

III. ヘンリーの作品の特徴

彼の作品を数多く翻訳している大久保康雄氏はこう述べている。「彼の作品の特徴は、ユーモアと

ペーソス（哀感）とウィット（機知、気転）、そしてプロット（筋書き）の巧みさであろう。特にプロットの構成の巧みなことでは、世界の文学史でもちょっと類がないほどで、たいていどの作品にも落語などといういわゆる〈落ち〉がついている。読者を笑いとサスペンスにつつんだまま、巧妙な話術でぐんぐん引きずって行って、最後にあっと言わせるという趣向である」と。

私自身もこの作品を読んで、最後にはそうだったのかという驚きと満足感のようなものを感じることができた。最後のどんでん返しというか意外な結末は、私に嫌な感じを残させるものではなくて、何かすがすがしさのようなものを感じさせてくれた。それは、この作品に出てくる素朴で人情味あふれる登場人物がいきいきと自然な感じで描かれているからだと思う。またこれが多くの人に認められた理由の一つではないだろうか。また、ヘンリー自身が刑務所に入れられていたこの体験は、彼の人間を見る目をやしない、人間について深く考えられるようにしたはずである。その結果、彼の作品に出てくる登場人物は、人間的な部分がよくあらわれているのだと私は思う。

そしてもう一つ、この作品が短篇ということがすばらしいと思った。近頃は、忙しい、本を読むのが面倒だ、インターネットやテレビ、そしてゲームをやっているほうが楽しいという理由で若者の活字離れが進んでいる。ヘンリーは、笑い、悲しみ、どきどき、感動をコンパクトにまとめてくれている。そして、コンパクトであるのに味わい深い作品となっているのは、使われている表現や会話文が非常に巧みであるからである。それは彼が愛情を持って、庶民たちの生活を描き続けた成果であると思う。このような作品は我々にとって非常に読みやすいものであると私は考える。

以上のことから私は、本が苦手な人も短時間で十分楽しめる作品となっているこの作品をきっかけにもっと本に触れてもらいたいと思っている。私がこの本を選んだ理由は、私自身もヘンリーが短篇作家ということを知って、どのようにして短い文章で読者に感動や自分の伝えたいことを書いているのかを知りたくなったからである。そしてどのような作品があるのかを読んでいるときに、昔読んだことのあるものがあつた。それがこの「最後の葉」であつたのだ。そして、この本を読みなおし、ぜひ他の人にも読んでもらいたいと思い、リトールドする本に選んだ。

この本を読みなおして私は、日常に起こる人々の感情を忠実に再現しているように感じた。その感情というのは、ほんの些細な喜び、いきなり自分に突きつけられた不幸に対する悲しみや絶望感である。それを文章で表現していることにとっても驚いた。そしてヘンリーの作品というのは上述しているように「落ち」があるのである。その落ちというのがあつと驚くものであり、我々読者に強い印象を残してくれる。それゆえ、何年もたつてから読みなおしても、次々と内容を思い出すことができたのであろう。

またこの作品は小学生、中学生が読むようなものであるかもしれないが、ぜひ大人の方にも読んでいただきたいと思う。何度も言うようだがこの作品は、非常に短い作品となっている。にもかかわらず、あたたかさや悲しみなど、いろいろな主題をもっている。どこに主眼を置くかで感じることも違ってくる作品であるので、何度も何度も読み返して自分なりに解釈してみるのもいいのではないだろうか。

参考文献 大久保康雄訳『最後の葉：オー＝ヘンリー傑作短編集』

(しおたに・あきひさ：欧米言語文化講座 英語圏)

オー・ヘンリー「賢者の贈り物」

:長く愛される文学から感じる思いやりの心

富田 彩

オー・ヘンリー「賢者の贈り物」

デラとジムは貧しい生活を送っていましたが、お互いのことを本当に愛し合って暮らしていました。

この若い夫婦には誇るべきものが二つありました。一つはジムの先祖代々持っていた金時計。もう一つはデラの美しく長い褐色の髪。

しかし、ジムの金時計にはそれにふさわしい鎖がなく古い皮紐をつけていて、人前で時計を見るときたびたび恥ずかしい思いをしていました。また、デラは以前ブロードウェイで見つけた、純粋な鼈甲でできていて宝石で縁取りがしてある美しい櫛のセットが欲しくてたまらなかったが高価で買えませんでした。

クリスマスの前日。デラは愛する夫のために何かプレゼントをしようとその日までコツコツとお金を貯めてきました。しかし貯まったお金はたったの1ドル87セントだけでした。デラは声を上げて泣きました。長い間大切なジムのためにお金を貯めてきたのにたったこれだけなんて。すてきでめったにないプレゼントをあげようと思っているのにこれではなにも買うことができない！

すると突然デラは何か思いついたように立ち上がり、部屋の全身鏡の前に立って髪を下ろしました。その髪は本当に美しく膝のあたりまであり、まるで長い衣のようでした。デラはそれをしばらくじっと見つめて何かを迷っているようでした。そして再び髪をまとめると、ためらったようにじっとしていました。やがてデラの間からは涙がぼろぼろこぼれてきました。しかししばらくあとには、デラはドアの外に出ていました。目にはまだ涙を浮かべていましたが、何かを決心したようでした。

デラは“マダム・ソフロニー ヘア用品なら何でも”と書いてある看板のところまで来ると階段を駆け上りました。店の中には大柄で冷ややかな女主人がいました。

「髪を買ってくださいますか」

とデラは尋ねました。

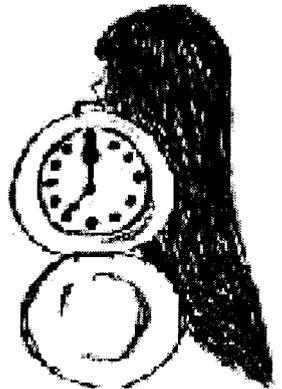
「買うさ」

と女主人が答えました。

デラが帽子を取って髪を下ろして見せると女主人は満足そうな笑みを浮かべて言いました。

「20ドル」

「すぐください」



とデラは言いました。

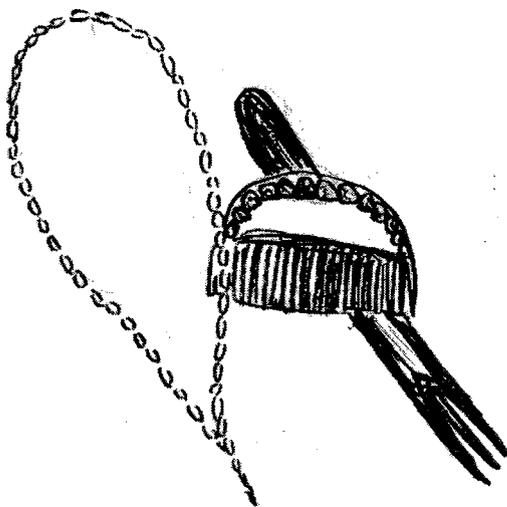
それから2時間後、髪がすっかり短くなったデラは21ドル87セントを持ってジムにぴったりの物を探し歩いていました。そしてとうとう見つけました。一目見てジムにプレゼントするのに最高だと分かりました。それはプラチナの時計鎖で、シンプルで上品なデザインで素材のみがその価値を主張していて、ジムの時計につけるにふさわしい立派なものでした。寡黙だが価値がある—この鎖はジムに似ているところまで感じられました。鎖は21ドルでした。

最高の買い物をして家に帰り興奮が醒めてくると、愛に気前の良さを加えて生じた被害のダメージを感じずにいられませんでした。ヘアアイロンでなんとか修復しようとしたもののやはり不恰好になってしまいます。デラの頭の中は「ジムは今のわたしのこともかわいいと思ってくれるかしら」という心配でいっぱい、神様に祈ったりしていました。

そしてジムが部屋に入ってきました。ジムは最初デラを見たときなんだか奇妙なものでも見たような不思議な表情のままぼうっと立ち尽くしていました。デラが髪を切って売ってジムの素敵なクリスマスプレゼントを買ったことを説明しても、デラがそれでもわたしのことを愛してくれるわよね？と尋ねても、すぐには状況が飲み込めないようでした。しかししばらくして突然ジムはデラのことを抱きしめ、ある物を投げ出しました。「僕が髪型なんかで僕のかわいい女の子を嫌いになったりするもんか」

という愛の言葉とともに投げ出された包みの中身を見て、デラは歓喜の叫びを上げ、次にそれはヒステリックな涙と嘆きに変わっていきました。ジムがデラに用意したプレゼントは、ブロードウェイであがめんばかりに欲しいと思っていたあの櫛でした。手に入ったなんて奇跡です。しかし、その櫛に飾られるべき肝心の長い髪が今はもうないのでした。しかしデラは微笑んでこう言いました。

「私の髪はね、とっても早く伸びるのよ！」そしてデラは思いをこめてジムにとっておきのプレゼントを差し出しました。プラチナの鎖は手のひらでキラキラと輝いていました。ジムはこれを見て椅子に腰を下ろし、微笑みました。「ねえデラ。僕たちのクリスマスプレゼントは、しばらくの間どこかにしまっておくことにしようよ。いますぐ使うには上等すぎるよ。櫛を買うお金を作るために僕は時計を売っちゃったのさ」



東方の賢者はご存知のように賢い人たちでした。この二人は家の最も素晴らしく最も誇れる宝物をお互いのために台無しにしてしまいました。愚かだと言われるかもしれませんが。しかし贈り物をやりとりする全ての人の中で、この二人のような人たちこそ最も賢明なのです。彼らこそ、本当の東方の賢者なのです。

長く愛される文学から感じる思いやりの心

I. 作家と作品について

オー・ヘンリー (O. Henry) は本名をウィリアム・シドニー・ポーター (William Sydney Porter, 1862.9.11~1910.6.5) という。アメリカの小説家で、主に掌編小説、短編小説を得意とし、381編の作品を残した。市民の哀歓を描き出した作品が多く欧米ではサキと並んで短編の名手と呼ばれている。

オー・ヘンリーの名を冠して、英語の優れた短編小説に与えられる賞にオー・ヘンリー賞というものがある。またテキサス州オースティンにオー・ヘンリー博物館がある。

「賢者の贈り物」(原題: The Gift of the Magi) はオー・ヘンリーの代表作といえる短編小説で、新約聖書にある東方の聖者がキリストの誕生を祝うため贈り物を持ってやって来たエピソードを下敷きとして贈り物をめぐる行き違いを描いている。

他の代表作としては、「最後の一片」「都会の敗北」「警官と讚美歌」「赤い酋長の身代金」などがある。

II. この作品が長く愛される理由

この作品が、たくさんの人に長く愛されている理由は、まずひとつに読後感がすごく良いからだ。私は考える。ほほえましい二人の若夫婦に心があたたかくなる。二人は失敗をしたが決して読者は悲観的になることがないのだ。この二人の行き違いは悲しいものではなく、むしろ前向きな、きわめて成功に近い失敗だった。相手を思いやる一途な誠実さに心洗われる思いがする。

そしてふたつめに、いつの時代にも変わらない愛とか信頼、絆をテーマとしているからだと思う。この二人の行動は一見非常に愚かしくも見える。しかしどれだけ互いを愛していたのかがよく分かるし、相手を思う気持ちが贈り物には何よりも大切なものなのだとすることを気づかされるのだ。目的は果たせなかったがきっと二人はますますお互いの愛を深め合うことができたと思う。プレゼントの有益性や金額の大小ではなく、思い入れの強さが喜びをいっそう引き立たせるものだと感じた。

III. この作品で作者が伝えたかったこと

この物語のタイトルに「賢者」とあるが、これはキリストの生誕を祝ってやってきた賢者たちを引き合いに出して、その賢人たちが選んだ贈り物と、この貧しい若い夫婦が選んだ愛のこもった贈り物の価値について作者が語り読者にも考えさせているからだと思う。さらに作者は愛のかたちについても読者に問いかけていると思う。

世の中には貧しくて壊れてしまったり成就しなかったりする愛もある。やはり愛だけでは生きていけない。しかしお金があればそれが解決されて愛のある生活を約束されるのかといえばそうではないはずだ。愛を表現する方法もさまざまで物も豊富な現代だからこそ、何よりも相手を思いやるという愛が必要なのではないだろうか。

参考：

賢者の贈り物 - 青空文庫

オー・ヘンリー - Wikipedia

東方の三博士 - Wikipedia

※イラスト - 自作

(とみた・あや：中学校教員教育養成課程 保健体育)

ヘミングウェイ『老人と海』

:偉大な作品との再会

大谷 恭子

アーネスト・ヘミングウェイ『老人と海』

舞台は南米・キューバ。年老いた漁師・サンチャゴはひとり小舟を浮かべ、魚をとる日々を過ごしていたが、一匹も釣れない日が84日も続いた。老人ははじめの40日のある少年と一緒に過ごしたのだが、少年の両親は老人が「サラオ（スペイン語で最悪の事態を意味する）になってしまったのだ」と言い、少年は両親の言いつけに従い、別の舟に乗り込むことになった。こうして老人は一人で漁に出ることになったのだった。

これまで老人は少年に漁の仕方を教えてきた。少年は老人を慕っていた。

「サンチャゴ、また一緒に行きたいなあ。金もいくらかたまつたもの」

「いけないよ。お前の乗り込んでいる舟には運がついている。仲間と一緒にいるこつたな」
老人は言った。

「でも、覚えているだろう！87日も不漁が続いた後で、僕たち、3週間ずっと毎日、大きなやつを何匹も釣ったことがあったじゃないか」

「覚えている。知ってるよ、お前が離れていったのは、おれの腕を疑ったからじゃない」
老人は言った。

「おとつあんだよ、いけないって言ったのは。僕は子供だ。言うことをきかなくちゃいけないんだ」

「わかってるよ」

少年は老人にビールをおごり、明日の漁のこと、少年の親方のことなどを話したあと、二人で小舟から道具を運んだ。少年は老人のことを本当によく慕っていたから、老人の世話をあれこれしていた。いつものように晩御飯をテラス軒の親父からもらい、老人の小屋に持ってきた。二人で夕食を食べ、野球の話をした。

「一番すばらしい監督は誰なの、ほんとは？ルク？マイク・ゴンザレス？」

「おんなじようなものだろう」

「それで、世界一の漁師はお爺さんだね」

「ちがう。おれはもっとうまいやつをいくらも知っている」

「ケ・バ（スペイン語＝とんでもない）。うまい漁師はたくさんいるよ、えらい漁師だつていくらいるよ、でも、お爺さんだけは特別だ」

「ありがとう。お前はおれをうれしがらせてくれる。まあ、このうちは、えらい魚が現われて、おれたちの考えをひっくりかえしてしまわないように祈るこつたな」

「そんな魚いるものか、お爺さんは昔のように強いんだもの」

「いや、おれは思っているほど強くないかもしれない。でも、いろいろ手は知っているし、それに肚ができていってものさ」

こんな話をしている間に、夜も更け、少年は「おやすみ、お爺さん」と言って、出て行っ

た。老人はすぐ眠りに落ち、夢を見た。アフリカの、砂浜のライオンの夢だ。ライオンは薄暮のなかで子猫のように戯れている。老人はその姿が好きだった、今あの少年を愛しているように。

朝になり、老人は少年を起こしにいった。二人は漁師たちの集まる朝の溜り場でコーヒーを飲んだ。老人がコーヒーを飲み終えたら、二人は小舟のほうへ向かった。それから小舟を持ち上げて水のなかへ押し出した。

「うまくいくように、お爺さん」

「お前もな」老人はそう言って大海目指して漕ぎ出して行った。

こうして85日目の漁が始まった。老人は「今日こそ釣ってやる」という意気込みでいた。遠くに浮かぶ舟や太陽を見ているときだった。軍艦鳥が彼のほのか上空を飛んでいるのが目に入った。

「やつ、なにか見つけやがったな」老人は大声を上げて言った、「あれは、ただ探しているだけの格好じゃない」

鳥のいるあたりに向かって漕ぎ出した。少しも急がない。ただ、獲物は間違いなく手に入れたかった。すると突然、鳥はまっしぐらに舞い降りてきた。

「シイラがいるんだ」老人は大声をあげた、「でかいシイラだ」

しかし逃げられてしまった。そのうちもっと大物が現われるだろうと、老人は思った。魚は餌に食いつくのだがなかなか釣れず、「あの子がいてくれたらなあ」と何度思ったことだろう。

やっとのことで待ちに待った大物がかかった。老人は決して急がず、「死ぬまで付き合ってるぞ」と魚に話しかけながら3日間闘った。しかし、せつかく捕まえた獲物は、鮫に食いちぎられてしまった。

「半分しかない」と老人は声に出して言った、「お前はもう半分になっちまった。遠出したのが悪かったんだ。おれは、おれとお前と、二人とも台無しにしてしまった。けれどな、おれたちは鮫をたくさん殺したじゃないか、お前とおれとでさ。そのほかにもずいぶんひどいめにあわせてやったじゃないか。そうだ、お前、今までに何匹やったね？そのとがったくちばしは、だてにつけてるんじゃないからな」

その後も何度も鮫に襲われながら港にたどり着いた。真っ暗で、みんな寝てしまっていた。疲れきった老人は、小屋に着くまでに5度も腰を下ろして休まなければならなかった。小屋に着いた老人は、ベッドに横になり、眠りに落ちた。

朝、少年がいつものように老人の小屋にやってきた。少年は老人の寝息に耳を傾け、その両手を見、声を立てて泣き始めた。それからコーヒーをとりそと小屋を出て行ったが、少年は泣きつづけた。

漁師たちが小屋に集まって、横にくくりつけられた異様な物体を見ていた。漁師たちはその大きさに驚いた。

少年は暖かいコーヒーを手に、小屋に戻った。しばらくすると、老人が目を覚ました。老人は、話し相手がいる楽しさを痛感した。海を相手におしゃべりするよりはずっといい。「お前がいなくて寂しかったよ」

少年は食べ物と新聞をとりに行った。彼は歩きながら泣いていた。老人はうつぶせのまま再び眠りに落ちていた。小屋に戻ってきた少年は傍らに座って、その寝姿を見守っている。老人はライオンの夢を見ていた。

偉大な作品との再会

I. 作家と作品

この作品の作者、アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway) は1899年、シカゴで生まれる。行動的な父の影響もあり、幼い頃より水泳、釣り、狩猟、乗馬などの手ほどきを受け、自身も行動的であった。そのためか、スペイン内戦や第一次世界大戦にも積極的に関わるなどし、それを元に小説を書いた。そして1954年、『老人と海』 (*The Old Man and the Sea*) でノーベル文学賞

受賞。しかしこの年、2度の航空機事故に遭う。2度とも奇跡的に助かったものの、かつてのように活動的に動くことはできなくなってしまった。さらに数年後にはキューバ革命が勃発し、長年暮らしてきたキューバでの生活が危うくなるのではという不安に駆られ、ノイローゼ気味に。事故による後遺症も加わり、執筆活動が滞りがちになる。そして1961年、ライフルで自らの命を絶ってしまった。実に活動的で、壮絶な人生を送ったヘミングウェイであった。

II. 偉大な作品との出会いと再会

私が最初にこの本を手にしたのは、高校入学が決まった頃であった。私が入学した高校では、入学前に各教科から課題が与えられる。数学や英語は買ったての教科書の中から数ページだけ予習をしておくという、すぐにできる簡単なお決まりのものであった。しかし、国語だけはそうはいかなかった。ただでさえ国語に苦手意識を持っていた私には、本当に憂鬱な課題であった。それははずばり、読書感想文。しかも題材は自分で自由に選べるわけではなく、指定されたものの中から一冊選ぶというものであった。昔から読書が嫌いでお金を避けてきたこともあり、指定図書の一覧表を見てもタイトルは知っていても内容はよく知らない本ばかり。どの本を選べば宿題を早く終わらせることができるか…そんなことばかり考えていた。

そんなある日、高校入学の準備品を買うために母とでかけた先に、大きな本屋があった。これだけ大きい本屋なら、指定図書の一覧表に載っていた本がすべて揃っているだろうと思い、母と一緒に探し始めた。すると母が一冊の本を、憂鬱そうに本を探す私の元に持ってきた。それが『老人と海』だった。母も学生時代に読んだことがあるらしく、有名な作品だから一度くらい真面目によんでみたら？と勧められた。本が意外と薄かったことと、母が勧めてくれたこともあり、私は結局『老人と海』を読むことにした。

早速、家に帰って読み始めたのだが、なかなか物語の世界に入り込むことができず、読むのがだんだん嫌になってきた。結局最後まで嫌々読んで、当たり障りのない感想文を書いて提出した。それから約5年間、本棚の隅のほうからこの本が動くことはなかった。

そして大学生になり、米文学を勉強する機会ができた。この小論文を書くとなった時、題材を何にしようか悩みに悩んだ。ふと教科書に目をやった瞬間、ヘミングウェイという名前が飛び込んできた。本棚の隅に追いやられた本の存在を思い出し、また懐かしくなって、もう一度触れてみようと思い立ち、こうして書くことにしたのであった。

高校生のころは何の面白味もないだらだらしした物語としか思えなかった。しかし今読んでみると全く違った印象を受けた。作者であるヘミングウェイの人生と照らし合わせながら読んだり、行間を読むとだんだん面白くなっていく。この作品には人間の孤独というものが見える。主人公の漁師は思いもよらぬ大きなものを得たが、それもつかの間の夢であった。ヘミングウェイも同じだったのではないだろうか。ヘミングウェイはこの作品で数々の賞を受賞し、名声を得た。もちろん現在でも歴史に名を残す素晴らしい作家として知られているが、彼にとってはそんな名声もつかの間のことであったのだろう。

ヘミングウェイが本当に望んだものは何だったのだろうか。そんなことを考えさせる、とても深い作品である。彼の人生とそれを反映したこの作品を、これからも後世に伝わってほしいと思う。

(おおたに・きょうこ：欧米言語文化講座 英語圏)

ヘンリー・ジェームズ「ねじの回転」

:得体の知れない恐怖を読み解く

田路史歩

ヘンリー・ジェームズ「ねじの回転」

あるクリスマス・イヴの夜、私たちは暖炉にたむろしながら怪談話に聞き入っていた。そんな中、誰かの何気ない発言をきっかけにこれから私がお聞かせする話をダグラスの口から引き出すことになった。ダグラスは話をろくに聞いておらず、何かを話そうとしているようだった。私たちはそれを待ちかまえ、ついに二晩目、みんなが引き上げようとする間に彼は口を開いた。それは、彼の知り合いの美しい家庭教師が体験した「全般にわたって、不気味な醜さと、恐怖と苦しみのお話」。彼はそれを書き綴った原稿を何年もしまい込んでいたのだが、それが彼のもとに届いた次の晩、静まり返った聴衆の前で語り始めた。

彼女は20歳のとき家庭教師になるためにロンドンにやってきた。雇い人は田舎から出てきた彼女にとってはついぞお目にかかったことのないような魅力的な紳士で、二人の子供の家庭教師を任されることになった。しかしこの仕事にはある奇妙な条件が付いていた。「家庭教師は彼には金輪際面倒をかけないこと。彼に苦情を言ったり、手紙を書いたりせず、自身で問題を解決すること。」ここまで話したあとダグラスはいったん席を立った。翌晩、ダグラスは著者の美しい筆跡をそのまま耳に移そうとするかのような明活さで、朗々と読みはじめた。

わたしはあの方のご依頼に応じて以来、ただ興奮と失望の連鎖で落ち着かずにいられなかった。しかし馬車に揺られながら突然眼前に現れた美しい屋敷を見て嬉しい驚きを感じた。しかもこれから世話をすることになる二人の幼い子供は生まれてこのかた見たこともないほど美しい兄妹・マイルズとフローラで、兄のマイルズはわたしが赴任してすぐに退学になったためどんな子供か心配したものだが、一目見た瞬間これほどかわいい清純なものに悪名を着せるなどは実に奇々怪々だと感じるほど神々しい少年だった。最初に感じていた不安は消え去り、私は彼らのお世話をしながらゆったりと美しい日々を過ごしていた。

しかしある日を境にその生活は一変する。それは実に恐ろしい日々の始まりであった。わたしが散歩中にふと塔の上を見ると、見知らぬ男の顔が見えた。彼はあの魅力的な紳士でも、他のどこでもついぞ見たことのない顔であった。その上不思議なことにあたりは一瞬にして静まり返り、物悲しい場所に一変してしまった。彼が向こうむきになるまでの長い間互いににらみ合い、それからあとは何も記憶していない。わたしは激しいショックに呆然とし、彼が一体誰なのか思案し続けた。また別の日にフローラと湖に出かけたときには別の女がこちらを見ていて、その後消え去るという出来事があった。

この事件を昔から屋敷にいる同僚に打ち明けると、それはかつてこの屋敷にいた召使クライアントと家庭教師ジェスルではないかと教えてくれた。彼らは子供たちをあちらの世界に引き込もうとしているのだ。しかも近頃の子供たちの様子を見ると、幽霊たちとグルになって私

を狡猾に騙そうとしているようなのである。“あなたは見てるわ、見てるわ！あなたは、たしかに、自分でもそれを分かっているし、その上私がそれを感知していることも、ちゃんと分かっているでしょう。さあ、なぜ率直にその事をわたしに打ち明けないの？”そう思いつつも口に出せずにいた。これをすぐに口に出していたなら、あんなことにはならなかっただろうに…。

月が煌々とあたりを照らし出すある晩、私は芝生の上に塔の上を見上げて立つ影を見つけた。芝生の上の人物は、小さいマイルズその人だった。わたしがテラスに現れるやいなや、彼は私の方に駆け寄り、二人でその場を後にした。彼は今どれほどおかしくない弁解を探し回っているだろう？もはや彼は無邪気を装うことはできまい。ついに彼らと幽霊の接触を証明できる！わたしは興奮していた。すると、マイルズはこう言った。

「先生に、僕のことを、——気分転換に——“悪い子”だって思われたかったの！」
これで事実は何もかも終わりだった。彼は完璧に釈明してのけたのだった。その後わたしはついに後見人に手紙を書くことを決意した。

その後、幽霊を見ることができないためにその存在を信じ切れていなかった召使がフロアの態度の豹変を見て信じるようになり、彼女を屋敷から遠ざけることにした。それと同時にわたしが書いた手紙が無くなったことが分かり、マイルズを問い詰めた。すると、彼は初め否定していたものの、やがて盗んだことを認めた。そして学校を退学になった理由を問い詰めようとしたその時、彼の告白を遮ろうとするかのように恐ろしいクイントの幽霊が窓に顔を押し付けていたのだ。再び戦いが始まったのだと知り、くらくらした。

「ピーター・クイント——畜生！」

マイルズはついに最後の降伏のしるしであるその名を叫んだ。

あんな男、どうだっていいでしょう？あなたは、わたしのものよ！」

マイルズは目をららんとさせ辺りを睨んだが、目に見えるのはもう静かな真昼の陽光だった。わたしは彼を抱きすくめて正気にかえらせた。奈落に転落する寸前に捕まえたようなものだった。しばらくするとわたしは自分の抱きしめているものが、本当はなんだったか判りはじめた。悪霊を払いのけられた彼のかわいい心臓は、鼓動の音が止んでいた。

得体の知れない恐怖を読み解く

I. 作家と作品について

ヘンリー・ジェームズ (Henry James, 1843-1916) はイギリスで活躍した作家であるが、実はアメリカ出身である。彼はボストン名門の知識階級の出身であり裕福な家庭に育った。しかしアメリカの文明が実利主義であることに強く反発し、イギリスに帰化したのだ。イギリスの他にもヨーロッパ各国を訪問したため、国際的な視点で描いた作品が多く残されている。「登場人物たちの心理に明確な光が一方から当てられ続ける」(川崎 137) というのが彼の技法上の特徴的な点だと言える。また、「意識の流れ」という人間の意識を流れるように捉える心理描写の方法を最初に用いたという点でも有名である。

「ねじの回転」 “The Turn of the Screw” は1898年に発表された小説である。ある男が女家庭教師の手記を読むという形で物語が進行していく。作中にはこの家庭教師以外の心理描写は全くなく、これが物語を読み解く上での大きなポイントになっていると言えるだろう。

II. この作品が書かれた当時のイギリス

彼のようなアメリカ出身者がイギリスで活躍した背景には、「イギリスの衰退」がある。ヴィクトリア女王が死に、南アフリカと闘ってはっきりとした勝利を勝ち得ることができなかったという経験がイギリスの栄光に影を落とした。そしてそれは文学にも影響を与え、彼をはじめポーランド人のコンラッドやアイルランド人のイェイツなど、いわゆるアウトサイダーを受け入れて活性化をもたらすという動きに発展していったのである。

III. 本当に幽霊は存在しているのか

「この作品は幽霊小説である。」これを聞いて私たちが普段読むようなホラー小説、あるいは映画を思い浮かべると肩透かしを食らった気分になる。なぜなら派手な超常現象が一切無く、いつてしまえば「そこに幽霊がいる」ということしか起こらないからだ。だから読んでいて自分の背後が気になる、などといった種類の怖さは全くない。しかしだからといってつまらない小説だということではない。登場人物の奇妙な関係やかけひき、巧みな心理描写によって物語の世界に引き込まれてしまうのだ。女教師の古い価値観や表現に多少違和感を感じるものの、100年以上も前の作品をこれほど面白く読めたことに驚いた。

しかし読んでいく中である疑問点が浮かんだ。それは「本当に幽霊は存在しているのか」ということである。幽霊小説と言われているにもかかわらず幽霊が存在していないというのは奇妙な話である。しかしこの物語は女教師の視点のみで語られていて、幽霊も彼女を通して見たものであり、彼女の他に幽霊を目撃した者がいない。また彼女が子供たちを守ろうとして動けば動くほど彼らは幽霊に怯えて彼女から心が離れてしまっているし、彼女は子供たちは幽霊が言えないふりをしていると言っているがそれは単なる憶測ともとれる。なにより読者から見ると彼女は過剰に興奮してしまうところがあって、少し異常に感じてしまうのである。つまり、子供たちを脅かすものに対する意識が強すぎるが故の妄想の産物であるとも考えられるのだ。

IV. 分かれる解釈

私が考えた以外にも、この作品は多くの解釈がなされている。たとえば作中の幼い兄妹と男女の幽霊が同性愛関係にあるという考えだ。確かにそれをにおわせるような描写も見られるし、子供が「好きな子に言っちゃいけないことを言った」からという不自然な理由での退学も、幽霊の影響で級友にもそれを迫ったせいだと理解できる。あるいは女教師が冒頭で青年貴族に強く魅かれる描写があるのだが、一方で彼に絶対に接触してはいけないという契約のせいで抑圧せざるをえない。そのため幽霊によって子どもたちが危機に陥っているという、彼が助けなければいけないような状況を心の奥底で望んでいて、それが妄想となって表れたという解釈もある。

このように解釈が分かれる大きな理由は、この物語があまりにも多くの謎を残したまま完結してしまっているからである。なぜ最後に子供が幽霊から解き放たれたにもかかわらず死んでしまったのか、なぜ子供は退学になったのか、なぜ幽霊は女教師と子供たちの前にしか現れないのか、本当に幽霊なんて存在しているのだろうか…これらの疑問を残したまま、物語は突然寸断されるかのように終わる。

実はこれこそがジェームズの真の意図だったのではないだろうか。大きな事件も起こらず幽霊の存在すら危ういような小説をあれやこれやと解釈し、登場人物の関連性を頭の中で補完するなどといった読者の想像力を利用しているように感じるのだ。つまり、私たちは自らの妄想で物語を怖くしてしまっているとは考えられないだろうか。

V. 「ねじの回転」の意味するもの

「ねじの回転」というタイトルは、一見物語に何の関係もないように見える。しかし一方方向にぐるぐると回って突き刺さっていく様子は、まるで女教師が幽霊あるいは妄想に取りつかれて後戻りできないまま深みにはまっていくようだ。あるいは親指をねじで締め上げる拷問具を指していて、聞く者が悲鳴を上げるほど怖い話の比喩表現であるという見方もある。いずれにせよ「ねじ」は得体の知れない恐怖を表している。また読者にとっては、序盤は登場人物の心理的な駆け引きにより堂々巡りしてあまり話は進まず、後半気がつけば一気に話が急降下していく様が、ぐるぐる回ってあまり動いていないように見せかけ気づけば深く突き刺さっている、まさに「ねじの回転」のように感じられるだろう。

VI. あとがき

この小説は心理描写が素晴らしいと感じた。私にとっては幽霊よりも、女教師が何としてでも子供たちを守ろうとする狂気じみた感情が恐ろしかった。暗示にかかったかのように子供たちを盲目的に愛し、彼らを外敵から守ろうとする姿勢が過剰すぎるため、幽霊は彼女が作り出した妄想なのではないかとの推測に至った。これほど怖い作品なのにホラー映画のように主人公を追いかけまわしたり、地面を這いずり回ったりすることはせず、極端な言い方をすれば幽霊があまり仕事をしていないというある意味とてもおもしろい小説だった。

参考文献

川崎寿彦『イギリス文学史』成美堂、1988年

(とうじ・しほ：欧米言語文化講座 英語圏)

リチャード・バック『かもめのジョナサン』

:生きることの真意

道 廣 恵 理

リチャード・バック『かもめのジョナサン』

主人公はカモメ。ジョナサン・リヴィングストンは、ほかのカモメたちが餌をとるために飛ぶことに対して、飛ぶという行為自体に価値を見いだしていた。ほとんどのカモメにとって、どうやって岸から食物のあるところまでたどりつき、さらにまた岸に戻ってくるか、それさえできれば充分であり、重要なことは飛ぶことではなく、食べることだった。

しかし、ジョナサンにとって重要なのは、食べることよりも飛ぶことそれ自体だったのだ。仲間たちから妙な目で見られようとも、ジョナサンは食べる時間を惜しんでは低空飛行や高速スピードでの飛行練習に取り組んでいた。

「ぼくは自分が空でやれることはなにか、やれないことはなにかってことを知りたいだけなんだ。ただそれだけのことさ」

そして彼はついに時速342キロのスピードで飛ぶことに成功した。ジョナサンは自分の発見したことを皆に分かち合い、自由になれる希望を示そうと思っていたが・・・

「ジョナサンはカモメ一族の尊厳と伝統を汚した」

といわれ、カモメの社会から追放され、一人暮らしの流刑に処せられた。

それでも飛行練習をやめなかったジョナサンの前に、光り輝く2羽のカモメが現れた。彼らはジョナサンに「もっと高いところへ、本当のふるさとへ連れていく」といって暗黒の空のかなたへとジョナサンを連れていった。

そこには、輝く翼を持ち、流れるように楽々と風に乗って飛行する鳥しかいなかった。毎日、何時間も高等飛行法を練習している鳥しかいなかったのだ。ジョナサンもその中でより高度な飛行法を身に付けた。

ある日、ジョナサンは長老のカモメ、チャンと出会う。チャンはジョナサンに「自分に限界を感じるな」といって瞬間移動の技を教え、ジョナサンはその技を体得するに至る。

そしてジョナサンは、このことを地上にいるほかのカモメたちと分かち合いたいと強く思った。優しさについて学ばば学ぶほど、また、愛の意味を知ろうとすればするほど、彼は一

層地上に帰りたいという思いに駆られた。飛ぶことの本当の意義を知ろうとしているカモメがいるのではないか、昔の自分のように……。ジョナサンは地上に戻り、ここで知りえたことを地上のカモメに教えてあげたい、という気持ちから地上に戻ることに決めた。

地上に戻ったジョナサンは、まずは同じように群れから追放されたカモメたちからジョナサンの思想を広めようとした。

「われわれ1羽1羽が、自由という思想のもと飛行しなければならない」

この思想のもと、ジョナサンを含む追放されたカモメたち8羽は群れに戻ることに決めた。

もちろん最初は歓迎されなかった。しかし群れの皆に素晴らしい飛行法を披露していくうちに、次第に1羽、また1羽とジョナサンたちに興味を持ったり、尊敬したりするカモメが現れた。

ジョナサンたちが群れに合流して1週間後、ジョナサンの教え子であるフレッチャーが間違っ岩にぶつかってしまい生と死の間をさまよった。そんなときジョナサンが「われわれの肉体は思考そのものであって、それ以外のなにものでもない」ということをフレッチャーに語りかけた。するとフレッチャーは目を開けたではないか。この光景をみて周りのカモメたちは、

「生き返らせた！悪魔だ！群れを破滅させるためにやってきた悪魔なんだ！」

といて、ジョナサンとフレッチャーを殺そうとする。2羽は瞬間移動してその場から姿を消してしまう。フレッチャーは聞く。

「群れに戻って他のカモメたちの学習の手助けをすることこそ、群れを愛すること、とジョナサンはおっしゃったが、もう僕は群れを愛せない」

「カモメの本来の姿、つまりそれぞれの中にある良いものを発見するようにつとめなくちゃならん。彼らが自分自身を見いだす手助けをするのだ。わたしのいう愛とはそういうことなんだ」

という言葉を残し、ジョナサンは消え去った。そしてフレッチャーは群れに戻り、自由という無限の思想のもと、完全なるものへの第一歩を踏み出したのだった……

生きることの真意

I. 作家と作品について

著者リチャード・バック (Richard Bach) は1936年イリノイ州、オーク・パークで生まれた。大学に入学したが、退学してアメリカ空軍に入隊、1957年にはパイロットの資格をとった。翌年、彼はフリー・ライターになり、ニューヨークやロサンゼルスで飛行機雑誌の編集にたずさわった。ベルリン危機が訪れ、再び空軍に呼びもどされた彼はフランスで1年を過ごした。彼の妻、ベティもパイロットであり、彼女専用の飛行場で軽飛行をしている。

1963年に彼の処女作である *Stranger to the Ground* が出版された。第二作 *Biplane* は1966年に出版された。この2作は、アメリカ図書館会から若い人のための良書25冊の中に選ばれた。そして、この第三作『かもめのジョナサン』(1970年刊)は、アメリカで、『風と共に去りぬ』をしのぐ超ベストセラーを記録し、現在世界各国で話題の書となっている。

II. 1970年代とは

『かもめのジョナサン』は寓話である。寓話とは、道徳的な教訓を伝えるための短い物語のことである。この『かもめのジョナサン』が流行した1970年代とは一体どんな時代であったのであろうか。

日本では高度経済成長が一段落し、オイルショックにより高度成長は終焉を迎え低成長時代に移行した。「国民生活に関する世論調査」で「物質的にある程度豊かになったので、これからは心の豊かさやゆとりのある生活をするに重きをおきたい」とする人々の割合が「まだまだ物質的な面で生活を豊かにすることに重きをおきたい」とする人々の割合を初めて上回ったそうだ。

世界では新保守主義の台頭が始まった。新保守主義とは経済政策における自由主義、社会政策における保守主義を指し、以前の産業保護、伝統主義などの旧保守主義と対比される。

これらの時代背景を踏まえて再び『かもめのジョナサン』と読んでみると、「重要なのは食べることではなく、飛ぶことだ。自由のもとに飛ぶことだ」とジョナサンが言う言葉が深く心に突き刺さる。

III. ジョナサンが教えてくれること

普通のカモメは生きるために食物を食べ、飛んでいる。そこに生きるものの意味や飛ぶことの意味を追求しようとはしない。なぜならそうしなくても充分生きていくことができるからである。しかしジョナサンは違った。彼は自らの生きる意味を追求し、そこに向けてひたすら行動を起こした。社会の中で、大衆の中で、家族の中で、一般常識を超えた行動に対する、非難と孤独、自分自身と戦いながら挑戦を続けるジョナサン。そして最後まであきらめず、自分の可能性を信じ、仲間の元に戻り、次の世代にカモメの可能性を伝授する愛情。そしてジョナサンの意思を受け継ぎ、ジョナサンがいなくなった後でもこれからの未来に希望を見いだすことができるのである。

いざ自分のことを振り返ってみる。周りの目を気にして、周りの人と合わせて、生きることに食欲になっていない自分がいた。「別に何も考えなくても毎日生活していけるし」「周りになんとか合わせておこう」「自分ではない誰かが世の中を動かしてくれるはず」という気持ちが私にはあった。この「かもめのジョナサン」という、1羽のカモメがカモメの社会を変えていく話を読んで、自分のこれまでの生き方を恥じた。よし、私もジョナサンのように頑張ってみよう、と素直に思えた。

IV. われらすべての心に棲むかもめのジョナサンに

「われらすべての心に棲むかもめのジョナサンに」この本にはこのフレーズが前置きとして書かれている。最初は「一体どうゆう意味なのだろう」と思っていた。しかし、最終的に著者のこのフレーズが、私の心にずっと染み込んだ。そう、誰もがかもめのジョナサンになれるのだ。その可能性を秘めている。私はこの本に出逢ったことによって、意識を高く持ち、ジョナサンのようになりたいと思った。心に棲むかもめのジョナサンに呼び掛けてみたいと思った。生きることの真意を教えた本に出逢えたことに感謝。

マーク・トウェイン『不思議な少年』

:作品の作られた背景

向井理恵

マーク・トウェイン『不思議な少年』

舞台は16世紀のオーストリアにある小さな町。とても平和な町だった。その町に、ある日サタンと名乗るそれはそれは美しい少年が、突然姿を現す。

彼は、不思議な少年だった。その場に居た少年テオドールが持っているパイプにサタンが息を吹きかけると、なんと真っ赤な火がついた。また、彼は欲しいものをなんでも作り出したり、人の心を読んだりすることまでできた。

そう、彼には、不可能なことなどなかった。まるで魔法使いのようなサタンだったが、テオドール少年に「君はいったい誰なのだ？」と尋ねられると・・・

「天使だよ」と答えたのであった。

天使と名乗る彼だったが、彼には全くもって感情というものがなく、人間の気持ちを理解することができなかった。そのため彼は平気な顔をして人を殺してしまったりする。

そんなある日、彼の目の前をピーター老神父が通りかかり、財布を落として行ってしまう。ピーター老神父はとても貧しく、生活にも困っていた。そこでサタンは、その財布の中に大量の金貨を入れてピーターに返した。

ピーターの生活は助けられたのだが、悪徳な星占師が、自分の持っていた金貨がなくなった、ピーターが大量の金貨を手に入れたのは、自分の金貨を盗んだのではないかと言い出した。

こうしてピーターと星占師の間で裁判が行われた。ピーターの有罪が確定しそうなところで、サタンの計らいによって裁判は一転し、ピーターの無罪が証明された。

しかし、裁判の後、サタンは牢屋のピーターの所へ行き、こう告げた。

「裁判は終わりましたよ。判決が下りて、あなたは永久に泥棒の汚名を着ることになりましたからね。」

サタンのこの言葉を聞き、無罪判決が出たことを知らないピーターはショックで正気を失ってしまった。そして、気が狂ったピーターは自らを国王だと思い込んでしまった。そうし

て「皇帝にできないことはないのじゃ。」などと言って堂々と行進までして家に帰って行った。

全てを知るテオドール少年が、「なんという嘘をついてだましたのだ!!」となじると

サタンはこう言った。

「彼はこれからもずっと皇帝のつもりでいるだろうし、皇帝という喜びは、死ぬまでずっと続くよ。国中でただ一人の本当に幸福な人間になったのだ。」

それを聞いたテオドールが「狂人なんかにしなくて、幸福にできたんじゃないか？」と尋ねると、更にサタンはこう答えた。

「ぼくはね、あの神父から、人間が『心』などと称しているまやかしものだけを、そっくり取り除いてしまったんだ。ぼくは彼を永久に幸福にしてやると言ったんだよ。」

ピーターに狂気を与えることで、彼を幸福にしたとサタンは言うのだ。

それから、サタンはテオドールを連れて世界中を旅し、たくさんの不思議をテオドールに見せた。

そして、町の人に様々な影響を与えたサタンであったが、ある日宇宙で仕事があるからと言って、町を去ってしまった。

テオドールに

「何も存在などしちゃいない。すべては夢なんだ。神も、人間も、世界も、太陽も、月も、それからあの無数の星だって、すべては夢にすぎん。ただあるものは空虚な空間、そして君だけなんだよ」

と言い残して・・・

作品の作られた背景

I. Mark Twainについて

Mark Twain (1835～1910) は『トム・ソーヤの冒険』や『ハックルベリー・フィンの冒険』などの作品で有名な作家である。アメリカではもともとユーモア作家としての評価が高く、楽観主義を代表する作家だった。しかし、晩年は人間不信に陥り、悲観主義に彩られた作品を書くようになった。これは、彼が出資していた出版事業が倒産し、娘が他界し、また更には愛妻が病気になるってしまったことが原因だったようだ。この『不思議な少年』(The Chronicle of Young Satan) はそんな彼の最後の作品であり、悲観主義の代表的作品である。

II. 『不思議な少年』について

この作品は、作者の死後、6年目の1916年に出版された。その際に、編集者の手が加わって、作者の残した原稿とは、少し違う内容になってしまった。Mark Twainの死後、その文学遺産管理人となったアルバート・B・ペインによってこの作品はまとめられた。

III. 時代背景

1980年代のアメリカは、従来西へ西へと広がっていた自由な土地が消滅し、辺境が消失した時期である。新興国アメリカにとって、発展が妨げられ、自由への希望が、大きな壁にぶつかった一時期であった。こうした時代背景とも伴って、彼は悲観主義へと導かれていったのではないだろうか。

(むかい・りえ：欧米言語文化講座 英語圏)

マーク・トウェイン『トム・ソーヤーの冒険』 (ごきげんなペンキ塗りのお話)

:いきいきとした子どもたち

結城秀佳

マーク・トウェイン『トム・ソーヤーの冒険』(ごきげんなペンキ塗りのお話)

普段からの度重なる悪事の罰としてトムは、ポリーおばさんから学校が終わったら家の塀のペンキ塗りをするよう命じられてしまいました。しかしトムはそんな事はおかまいなく、放課後、友人のベンが持ってきた野球のボールを使ってみんなで野球に明け暮れ、遊んでいる途中に無くしてしまったボールを捜したりするうちに夜になってしまい、辺りが暗くなってから帰宅する始末です。業を煮やしたポリーおばさんは翌日、土曜日で学校が休みなので、トムがサボらないようにペンキ塗りを見張ると言いだします。トムは嫌々ながらもペンキ塗りを始めますが、塀はたいそう長く、とても今日中に終わりそうにありません。

トムは後に見つけた野球のボールを餌にベンにもペンキ塗りを手伝わせていると、そこに友人が通りかかりました。そこでトムにまた名案が閃いたのです。

トムの友人が

「僕これから泳ぎに行くんだ。君も行きたいだろうな。でも、きみはいけないな。仕事があるんだもの。」と言いました。

「仕事だって？」

「そうさ、ペンキ塗りって言う仕事さ。おばさんに無理やりやらされている、つらい仕事さ。」

「つらい仕事なもんか。子供が塀を塗らしてもらえるなんて、めったに無いことなんだぜ。それにこれは、トム・ソーヤーじゃなくちゃできない仕事なんだ。」

「・・・、なあ、おれにもちよっと塗らせろよ。」

「だめだよ。この塀表通りだろ？上手に塗らないポリーおばさんとてもうるさいんだ。これがうまく塗れる子なんて、さあ千人にひとりいるかな？もしかしたら二千人に一人かもしれないな。ジムもやりたがったんだ。でもおばさんがいけないって。ぼくの弟のシッドもやっぱり断られたよ。なんといってもこの仕事はトムに限るって・・・。」

「ちよっとでいいからさ、トム。」

「うん、ぼくもやらせてやりたいさ。だけど、なにしろおばさんがうるさいんだよ。」

「りんごの芯、やるから、だからいいだろ？」

「うん、でも、ぼく怖いな。やっぱり、おばさんに見つかったら・・・。」

「りんごぜんぶやるから！」

こうしていかにもペンキ塗りを楽しそうにする事で、通りかかる友人たちは次々とペンキ塗りをやりたがるようになり、友人たちはペンキ塗りをさせてもらうお礼として次々にビー玉やリングをトムにあげてペンキ塗りをさせてもらいました。こうしてトムのペンキ塗りを冷やかに来た友人たちは、みんなトムの罠にはまって、持ち物を差し出してペンキ塗りをさせてもらい、塀は一日で見事に塗り終わり、トムは友人たちからたくさんの物をもらい、またポリーおばさんからペンキを塗り終えた事を誉められるのでした。

いきいきとした子どもたち

I. マーク・トゥエインについて

1835年11月30日、アメリカのミズーリ州にあるフロリダに生まれる。本名サミュエル・ラングホーン・クレメンズ。12歳のときに父が死亡、学校を中退、新聞社で植字工見習として働く。やがて、子どもの頃からの夢だった“アマゾン探検”を果たそうと、22歳のとき、蒸気船でアマゾンに向かうが、資金不足のため、そのまま蒸気船の水先案内人として働く。この頃の思い出と数々の体験から『トム・ソーヤーの冒険』や『ハックルベリー・フィンの冒険』が生まれる。トゥエインは27歳の頃から新聞・雑誌等に投稿を始め、1865年、ニューヨークのサタデー・プレス誌に送ったユーモア短編小説『ジム・スマイリーと彼のだじな跳び蛙』が好評を博し、作家としてその第一歩を踏み出した。1870年、35歳の時に、富豪の娘オリピアと結婚。その後約20年にわたり、次々と作品を発表した。トゥエインは晩年、事業の失敗、妻と子どもたちの死などで薄幸の人生を送った。1910年死去。74歳。

II. この物語の読みどころ

やはり一番の読みどころは、トムの人並みはずれた発想力に友人達がみなだまされていく部分である。自分にとってやりたくない、いやな仕事を、どのように乗り切り、さらには自分に利益が舞い込んでくるよう子どもならではの悪知恵を働かせ、まんまと思い通りに困難を乗り切る。あの発想の転換力には誰もが驚かされるし、トムの悪がきつぷりが大きく読者に伝わる場面であろう。その場面をどこかユーモアな部分を持たせて描いている部分にも注目してほしい。

III. 子どもの在り方

この物語で描写されているトムを含めた子どもたちは、どこかおおらかで健気、自由気ままな心を持っているように感じられる。特に私が思うのは、学校での生活や、とりわけ遊びのなかで友人たちとの絆や信頼を深め、仲間を大切にすることを養っているというものが非常に伝わってきた。それは例えば友人をからかっているシーンや、ケンカをしているシーンであっても、やはりそこにはどこか温かさのようなものが含まれており、メディアを通して見える現代の子どもたちとはどこか違うように感じられる。一概にどちらの子どもたちが正しい、間違っているとは言えないが、子どもという存在の根底にある何か大切なものというのがすべて、この『トム・ソーヤーの冒険』には描かれている、そんな気がした。

(ゆうき・ひでよし：欧米言語文化講座 英語圏)

『トム・ソーヤーの探検』

:少年たちの大冒険にわくわく

卯野智広

『トム・ソーヤーの探検』(Tom Sawyer Abroad, 1894)

この物語の主人公トム・ソーヤーは勉強がよくでき、物知りであり、幼いころからおばさんのポーリーに育てられた。しかし、とてもいたずらがすきで、勇気のあるわんぱくな少年である。トムが一番仲の良い友達にハックルベリー、通称ハックがいる。ハックはかつて孤児であり、家もなかった。そして、もう一人仲の良い友達にジムがいる。ジムは富豪の農園などに働きに行き暮している。体が大きく、力持ちだがハックと同じであまりかしこくない。この物語は飛行船に乗って、アメリカを横断し、海を越え、アフリカまで冒険した三人の少年の物語である。

ある朝、トムはハックの家にとんで来て、ハックをたたき起した。見ると、まだ配達されたばかりの新聞を持っている。「おきろ、ハック。ぐずぐずしているときではないぞ。新しい飛行船が飛ぶんだ。しかも、世界一周の旅に飛び立つんだ。」こうしてトムにたたき起されたハックともう一人の親友ジムをつれて、トムはセント・ルイスの町へ出かけた。

町では飛行船を発明した博士と見物人がなにやら口論をしている。「これでも飛行船かね。こんなものじゃ、世界一周どころか、アメリカを飛ぶのだってあやしいものだ。」「どいつもこいつも、あきめくらのとんちきめ。わしはアメリカの名を世界にとどろかす大恩人だぞ。今におまえたちのこどもが、わしの記念碑を建て、感謝する日が来るぞ。その時になって、悪いことをしたと後悔するな。」博士が顔を真っ赤にし、ひげをふるわせながら怒鳴っているなか、三人が飛行船の中を見学していると、ものすごいさけび声が足の下の方から聞こえてきた。なんと、飛行船は三人を乗せて飛び立ってしまった。

飛行船の中で博士は急に大声で話した。「おおばかもめが。やつら、わしの大切な機械の秘密を盗もうとしおったな。だまされんぞ。これは世界で一番新しい発明だ。誰もわしの秘密を知ることにはできんぞ。わしは教えてやらん。わしをばかにした罰だ。わしはこの飛行船で世界を一周したら、秘密を抱いたまま海へ沈んでやるんだ。」おそろしいことを言い出す博士に、三人はがたがたおびえていた。

飛行船はニューヨークの港を通り越し、海におどりでたある日、ウィスキーを一人で飲んでた博士は泥酔し、飛行船の外に飛び出してしまい、海に落下した。三人は死んだ博士

士が気の毒になり、悲しみにくれていた。博士もいなくなってしまう、ここから三人だけの波乱万丈な冒険が始まった。

三人はイギリスを目指して飛んでいたがサハラ砂漠についてしまう。ここでは、野性のライオンやラクダに乗ったキャラバンの人たちなど初めて見るものばかりである。広大な砂漠で三人は盗賊にさらわれた子どもを助ける、ミイラを発見する、オアシスを見つけ、水のありがたさを知る、などと普段経験できない様々な経験をした。

そして、三人はついにエジプトの象徴ピラミッドとスフィンクスを発見する。本でしか見たことのないピラミッドに三人は大はしゃぎである。「本当にあれがピラミッドなの。間違

いないね。」「はやく、はやく行こうよ。」スフィンクスの頭に登り、エジプト人の案内でピラミッドの中を見学し、カイロの町を散策するなど三人はエジプトを満喫していた。カイロの町はとてめかわっている。狭い道があちこちつながっており、両側にはテントをはった店がぎっしり並んでいる。ターバンを頭にまいたエジプト人たちがぞろぞろおり、女性はみんな目だけだしたきれを被っている。エジプトはアメリカとなにもかもが違い三人は目を輝かせていた。エジプトを満喫しているとトムはこんなことを言い出した。「写真を撮ろう。見物したところで僕たちの写真を撮れば、エジプトに来た立派な証拠になるじゃないか。」そこで、ジムに一旦アメリカに戻ってもらい、トムの部屋にあるカメラを持ってきてもらうことにした。トムはついでにポリーおばさん宛の手紙をジムに預けた。手紙にはこんなことが書いてある。「今、木曜日の午後です。トムは、アラビアの山の上で、ポリーおばさんのことを考えています。ハックもおばさんによろしくと言っています。トム・ソーヤー」こうしてジムは飛行船に乗って飛び立った。

ジムは予定の時間にカメラを持って帰って来た。しかし、うかない表情でおどおどしている。「どうしたんだい、ジム。ちゃんとカメラを持ってきたじゃないか。」ジムは静かに口を開いた「ポリーおくさんに見つかってしまった。ポリーおくさんは、トムさんにすぐ帰ってくるように命令した。こりゃ面倒なことになったもんだ。トムさんどうする。」さあ、大変。あの、口うるさいポリーおばさんに見つかったのなら、帰ったら叱られるに違いない。「しかたがない、帰ろうか。」トムは小さな声で言った。三人は落胆した。三人の大冒険はあっけない形で終わりを迎えた。

少年たちの大冒険にわくわく

I. 作者紹介

マーク・トゥエイン (Mark Twain) は1835年、ミズーリ州の寒村フロリダに生まれ、4歳の時、一家でミシシッピ川の港町ハンニバルに移住。47年父の死により印刷工となって各地を転々とした後、ミシシッピ川の蒸気船の水先案内となる。南北戦争を経て、62年新聞記者となり、63年からマーク・トゥエイン(水深2尋という意味の水夫用語)というペンネームで署名入り記事を書き始める。65年、短篇「ジム・スマイリーとその跳び蛙」(改題後「その名も高きキャラベラス郡の跳び蛙」)を発表して人気作家となる。主な作品は、『トム・ソーヤの冒険』(1876)、『王子と乞食』(1882)、『ハックルベリー・フィンの冒険』(1884)、『アーサー王宮廷のコネティカット・ヤンキー』(1889)等。

ヘミングウェイは現代アメリカ文学はマーク・トゥエインに始まったと言っている。また、彼はいつも「私は百万人のために書く」と言っていたが、その言葉通り、彼は百万人の民衆の心琴にふれる作品を書き続け、1910年、七十五歳で永眠した。

II. 背景

著者は序文で、この小説の主たる対象が少年少女であると書いている。たしかに物語の内容は、その通りに他愛無いものに過ぎない。しかし続く文章の中で、著者は大人に対しても童心に帰って楽しむことを呼びかけている。当然のように著者もその大人の一人であり、事実この創作を通じて自身が楽しんでいる様子なども伺えることからして、本来の目的はそこにこそあったのであろうと思われる。

にもかかわらず、まず子供向きと断っているのは、この当時はこうした傾向の作品を世に問う上では隠れ蓑が必要であったからではないかと思う。つまり十九世紀後半という時代は、現在の日本のようにマンガやゲームなど、元々子供向きであった文化を高い年齢の者が楽しむことが許容されているような社会ではなく、大人はすべからず高邁な思想背景を持った価値の高い文化に与るべきであるといった権威主義的な考えが残っていたからではないだろうか。

III. リトールドをやり終えて

この作品は児童文学とされているが、児童だけでなく、大学生である私でも十分に楽しめる作品であった。この作品を読むことで、忘れかけていた童心にかえることができる。

私も含め、現代の子ども達はテレビゲームやパソコンなど、遊びの場は家の中である。しかし、幼いころ、誰もが一度は親の干渉を受けずに自分たちだけで、どこか遠くを冒険してみたいと思ったであろう。その思いから、やんちゃで自由気ままなトム・ソーヤに思いを重ね、自分もトム・ソーヤのようになりたいというあこがれを抱くのであろう。私はトム・ソーヤは少年ながら、多くの人々に注目され、憧れられる一種のカリスマ性を持っていると考える。

実際に、この物語のように冒険をしたいと思っても、そう簡単にできることではない。なんの技術も知識もない少年達だけで、飛行船を操縦し、はるか遠い大陸まで飛んで行くなど、夢のまた夢である。しかし、この物語を読むにあたってそのような現実的な思考は捨てなければならない。この物語は、我々現代の子ども達が忘れかけているものを体現してくれたトム・ソーヤ達三人の大冒険を楽しみながら読むものである。

参考文献

『トム・ソーヤのぼうけん』マーク・トウエン著 白木茂文訳 金の星社 1980

参考web

<http://www.asahi-net.or.jp/~wf3r-sg/nt2twain.html>

http://www.m-net.ne.jp/~h-ochi/Critique/Twain/Twain_Frame.html

(うの・ともひろ：人間科学講座 人間行動学)

マーク・トウェイン『トム・ソーヤーの冒険』

:悪童のヒーロー

松尾 泰子

マーク・トウェイン『トム・ソーヤーの冒険』

「ミシシッピ河沿いの小さな町セント・ピーターズバーグに生まれ育ったトム・ソーヤーは母と死別し、ポーリーおばさんと暮らしていた。彼は好奇心の強い、鋭敏かつ多感な少年で、拘束された学校生活を極度に嫌い、しばしば学校から抜け出すと、自由を求めて森や川へ行った。それは彼がピーターズバーグの規格化した生活に反感を抱いていたからである。

ある日、トムは学校をさぼって泳ぎにいこうとするが、塀にペンキを塗る仕事を言いつけられる。だがあの手この手を使って他の子ども達に仕事をやらせる。またサッチャー判事の家の前を通りかかったとき、その家の娘のベッキーにたちまち惚れこんで、彼女にいいところを見せようとしていつもへまをやらかしていた。あるとき学校へも行かず、学校に通っていない自由人ハックルベリー・フィンと二人で共同墓地に出かけると、その夜死体を掘り出しに来たロビンソン医師、インジャン・ジョウが医師を殺すところを目撃してしまう。しかし、ジョウはマフが殺したと言ってその罪をマフになすりつける。真相を見てしまった二人は自分達が目撃していたことがばれやしまいかと気が気でない。

彼らはそこで海賊になることを決心し、ミシシッピ河のジャクソン島へ行くと、そこで海賊ごっこをして遊んでいた。島から戻ってきてみると教会では自分達が死んだものとみなされ、悲しみにくれているところだった。一方、マフはロビンソン医師殺しの容疑で裁判にかけられる。そこに出席したトムが事の真相を打ち明けると、形勢不利になったジョウは窓から逃げ出した。後日、トムはベッキーとピクニックに出かけるが、その折ベッキーと共に洞窟に迷い込んでしまう。この洞窟には、すでにジョウが逃げてきており、二人に襲いかかるが、彼は岩の下敷きになって死んでしまう。（洞窟の中に閉じ込められて餓死するという説もある。）後日、トムとハックは再び洞窟に行き宝を見つけ、それぞれ6000ドルの金が手に入りお金持ちになる。（トムのユーモア）

悪童のヒーロー

I. 作家の紹介

この作品の作者であるマーク・トウェインはよく「ユーモア作家」などと形容されるが、トウェインの笑いにあえてジャンルを与えるなら、「風刺作家」という呼称があてはまるだろう。トウェインの笑いはいつも、もったいぶった既成概念の転覆を狙ってきた。善を説くより偽善を暴いてみせること、ヴィジョンを構築するより視点をずらしてみせること、それがこの作家の真骨頂であるのだ。その意味で彼はモラリストとは対照的な破壊者であった。しかし、トウェインは、破壊者としての毒を口当たり良く摂取させるスタイルを持っていた。

II. 作品の背景

『トム・ソーヤーの冒険』は1840年代の西部の小さな町セント・ピーターズバーグを舞台にした、作者自身の自伝的要素の強い悪童物語である。中産階級が支配層となった十九世紀のアメリカで、偏屈な道徳主義が盛り上がり盛上がるほど、人々の潜在意識の中にそれに反抗する衝動が蓄積されていった可能性は容易に想像できる。トウェインのような転覆性のある笑いを持った作家がアメリカで一躍文壇のトップになったのは、解放を求める人間の精神のごく自然な発露を反映していたとも考えられるのである。しかし、悪書追放運動や福音主義の黄金時代において、中産階級の心の解放には許容範囲が設けられていた。

作者の紹介でも述べたように、トウェインの独特のスタイルは、この作家の本質的な「危険性」とぼけた笑いの中に覆い隠して、その許容範囲の中に作品を置くことに成功した。『トム・ソーヤーの冒険』は、いわばそういった「許された反抗」の物語である。

III. 主題の分析

この物語の中心は、大自然ミシシッピ河とそこで遊びまわる自然児トムの関係にある。作者が少年時代に過ごした町が田舎町であることを考えれば、規格化し、文明化した社会は当然、トムの反逆の対象となる。この対立関係はポーリーおばさんとトムによっても表され、同時に、トム自身の悪童物語としての位置づけによっても強調されている。

iv. 「日曜学校もの」への反抗

十九世紀半ば、圧倒的に出回ったものに、「日曜学校もの」があった。これはきわめてメッセージ性の強い、道徳教育のための少年少女向け出版物である。「日曜学校もの」には、たいてい典型的な悪い子と良い子が登場し、悪い子はいろいろと悪さをした後、罰が当たって死ぬか、改心するかし、信仰深くて大人の言うことを何でもまじめに聞く模範的な良い子は、あらゆる名誉と幸福を手に入れた。このような「日曜学校もの」をパロディ化して書かれた『トム・ソーヤーの冒険』は、いきなりいたずら小僧トムがポーリーおばさんを出し抜いて遊びに行く場面から始まる。トムに対する最初のナレーション曰く、「彼は村の模範少年ではなかった。だが、彼は模範少年のことはよく知っていて、そいつには我慢ならないと思っていた。」学校をズル休みし、ジャムを盗み食いし、けんかをし、口先で調子よく人をついでしまう……日曜学校もの的基準から言えば、トムは手のつけられない悪童である。しかし、彼は別に死ぬこともなく、大事な人を失うのでもなく、むしろ学校仲間の人気者で、恋人もできるし、最後には宝物を発見して大金持ちにまでなる。大人の言うことを聞かない悪童がヒーローになるのだ。これは、「日曜学校もの」への挑戦だったのである。

V. 悪童物語からの脱出

このトムという悪たれ小僧が魅力的なヒーローになる背景には、この作品において、いわゆる「模範」のもととなる価値があてにならないものとして、またそのような模範的行動を強要が相当にうさん臭いものとして描かれていることがあげられる。風刺の照準はそこにあるのだ。行儀や道徳を口うるさく説きながら、自分では一切飲まない得体の知れない薬をトムに強要するポーリー叔母さん。生徒がおこしたささいな失策さえ、それを罰することに復讐的な快さを感じているように思える体罰教師のドビズ氏。人前で、子ども達に聖句を暗唱させることに喜びを感じ、それを強要する日曜学校の牧師。そして、学校に通わず野宿をして生活しているハックを彼の性格の良さ、人望を知ろうともしないで、毛虫であるかのように嫌う大人達。これらの魅力的でない権威者たちに、トムはことあるごとにゲンコツをくらったり。鞭で滅多打ちにされたりする。無実の体罰も度々である。

しかし、トムは心理的に深い傷を負うまでもなく、決定的にいじけるでもなく、漫画の主人公のようにケロリとしてそれをやり過ごし、イタズラを繰り返す。戯画的に処理することで、批判的な視点を「怒り」として際立たせず、笑いの中でぼかしつつも、トウエインは大人達の人間的な弱さを描き、その大人達が弱者である子どもに一方的な規範を押しつけることの中にある残酷さを確実に描いている。そしてそのような世界で、体罰に屈して「改心」することなく自らの「本当に楽しいこと」を追求する悪童はヒーローになるのである。

VI. トムのユーモア

学校をさぼったトムは、その罰として塀にペンキを塗る仕事を課せられる。少年たちがみな楽しそうに遊んでいる土曜日の朝、憂鬱な顔をしてペンキ塗りをしているトムを見て友達がからかう。そこで、トムは知恵を働かせて、いかにも楽しいことをやっているようなふりをする。そのため友達はその畏にひっかかり、塀のペンキ塗りをさせられてしまう。

それでトムに課せられた仕事は早く終わってしまい、その早さに驚いたポーリーおばさんはトムに褒美としてリンゴをくれる。これはトムのユーモアである。その他にも幼い恋人ベッキーとトムのエピソードなど、多くのユーモアが潜んでいる。この種のユーモアは『トム・ソーヤーの冒険』にみられる、憎むことができない自然児トムの大きな特徴である。

(まつお・やすこ：幼稚園教員養成課程)

「アウル・クリーク鉄橋での出来事」

：南北戦争時代における戦争経験者視点の文学

笠松 准司

アンブローズ・ビアス 「アウル・クリーク鉄橋での出来事」

ペイトン・ファーカー、アラバマ州のある裕福な農園主は今、文字通り死の淵に立たされている。彼は後ろ手に縛られ、首に縄をかけられ、川の急流の6メートルほど上の橋の板に立っているのだ。

この橋の周囲は、橋の両端に「捧げ銃」の構えの歩哨、川の土手には「行進休め」の姿勢の中隊の歩兵らがそれぞれ配置されているが、総じて全く動かず、まるで鉄橋を飾る彫刻のようである。

そう、彼は今まさに陸軍によって絞首刑に処されようとしているのだ。彼の傍らには大尉と軍曹がおり、彼らはシーソーのようになっている渡し板の、ファーカーが立っている方の反対側に立っている。すなわち、彼らの体重だけが今彼を生かしているというわけだ。

板を支える2人のうち、大尉が板を離れた。足の下の川面に目をやると、彼には急流を流木がゆっくり流れていくのが見えた。

「もし両手が自由なら、首の縄を振り捨て、川に飛び込んで森に入り、我が家に帰ることが出来るのに」彼はそう、残してきた妻と子に最後の思いを向けようとした。そこに、極めて鋭い、金床を打ち付けるような音が聞こえてきた。その音は少しずつ間隔を広げ、少しずつ大きくなりながら、規則的に鳴り続けた。

その刹那、軍曹が一步脇に移動した。

さてこの男、ペイトン・ファーカーはいかにしてこのような死の淵におかれているのか。彼はもともとアラバマの奴隷を保有する名高い旧家出身で、一般的な奴隷保有者同様、南北戦争に関しては北部と南部の分離独立を主張し、南側を熱心に支持していた。

しかしながら、彼は都合により、ミシシッピ州コリンズ陥落という大きな作戦に参加できなかった。南側陣営のためならなんでもするという心がありながら何もできずじまいだったわけである。

そんな折に、南軍の軍服を着た兵士が彼の家を訪れた。先の戦闘に参加できなかったファーカーには、現在の戦闘状況を知る絶好の機会だった。

「北軍は現在鉄道を修復しています。やつらはアウル・クリークまでやってきて、鉄橋を修復し、北岸に砦を建設しました。そして司令官はそこらに『鉄道やトンネル、列車に対して妨害をはたらく現場を押さえられた者は、たとえ一般市民であっても即絞首刑に処す』という布告を貼っているんです」

「ここからアウル・クリークまでは、どのくらいありますか？」

「30マイル程でしょう」

「川のこちら側に兵は？」

「川から1キロ程離れた線路沿いに前哨基地があって、鉄橋のこちら側には歩哨が1人います」

「もしですよ、絞首刑に興味のある市民がその前哨基地を迂回して、鉄橋の歩哨を出し抜けたら・・・」ファーカーは笑って続けた、「何が出来るだろう？」・・・

こうしてファーカーはやるせなさのぶつけどころを見つけた・・・かと思われたが、この南軍の軍服を着た兵士は北軍の斥候であったのだ。こうして彼は今絶体絶命の状況にいるのである。

彼は落下した。彼は意識を失い、すでに死んだようなものだった。その状態から、ずいぶん長く感じられる時間の後意識を取り戻したのは、喉に走る鋭い痛みと、それに続く窒息しそうな感覚のせいだった。鋭い、強烈な痛みが、頸から胴体、そして四肢の全細胞を貫いていく。痛みは、その一本一本が具に知覚できる、枝分かれして全身に広がる神経細胞を通して瞬間に伝わり、考えられないほど早い周期でガンガンと脈打ちながら襲ってくるのだった。繰り返し押し寄せる炎の波が、耐えがたい熱さで炙ろうとしているようだ。いっぽう頭は圧迫感、まさに鬱血する感じに襲われていた。思念が入り込む隙などまるでない。持っていたはずの知的な部分は、すでにどこかに行ってしまった。残されたのは、ただ感覚のみ、それも激痛の感覚だけだった。

彼は水中でぼんやりと意識を取り戻し始めた。ロープが切れて生きながらえたのだ！そこから彼は言うことを聞かない体に鞭をうち、逃走する死刑囚を射殺せんとする銃弾の雨を避け、森に入り、家路を急いだ。北軍の追っ手から逃げることで疲れ果て、足は痛み、耐え難い空腹に襲われ、首はロープのあざが付き、酷く腫れ上がっていた。

やがて彼は家にたどり着いた。もう朝になっていた。門を開け、庭を歩いていくと妻が迎えてくれた。

最愛の妻の下へついに帰ってきた。だが彼女を抱きしめようとした瞬間、彼の首筋をすさまじい衝撃が襲った。大砲が放たれたような音がし、辺り一面を燃え立たせたのち、完全なる闇と静寂が訪れた。

ペイトン・ファーカーは死んだ。首の折れたその死体は、アウル・クリーク鉄橋の下で左右にゆっくりと揺さぶられていた。

南北戦争時代における戦争経験者視点の文学

I. 作家と作品について

アンブローズ・ビアス (Ambrose Bierce, 1842-1914?) は、激辛の評論で知られた評論家である。南北戦争には志願兵として参戦しており、戦後からサンフランシスコで夜警の仕事の傍ら文筆家となった。

この作品 (原題: *An Occurrence at Owl Creek Bridge*) では、ビアス本人が南北戦争で見たり聞いたことが活かされているとされている。原文では兵器や軍の命令など (ブドウ弾、捧げ銃など) が極めて細かく、よりリアルになるように要所要所に使用されている。

II. 異常なほど細かい描写、そしてツイスト・エンディング

この作品は、ペイトン・ファーカーという男は生きていくという体で進められるが、最後の最後でその全てがファーカーの死ぬ間際の刹那の妄想であったことがわかるようになっていく。これは「ツイスト・エンディング」と呼ばれ、最後の驚くべきクライマックスにより、読み手はもう一度別角度から作品を見直させられる、というものである。しかし、一般的にはツイスト・エンディングを用いた作品は一度最後まで読んでしまうと、もう特に読み直そうとは思わないものだが、この“*An Occurrence at Owl Creek Bridge*”はそうは思われないのである。

これは原文を見るとわかりやすいが、ファーカーが落とされるシーンの前後では、情景や物体の描写が明らかに細くなっているのである。これは死の間際に走馬灯が見えるように、死刑になる瞬間でも脳が超高速で稼働して、ここまで細かい妄想をめぐらせることができたということ表現しているのであろうが、私はここがこの作品の上手いところなのではないかと考える。

また、私もさも当たり前のように走馬灯を例に出したが、ほとんどの人間はそういった死の淵に立ったことはないのである。人間は知っていることより知らないことの方に意識や知識欲が向きがちであるので、この作品は長い間読まれ続けているのではないかと考える。

もちろん、私はこの作品を人に勧めるときは絶対に結末を教えたり、それどころかどんでん返しであることも教えたりはしない。皆に是非一度、ビアスに驚かされて欲しいからである。

(かさまつ・じゅんじ: 欧米言語文化講座 英語圏)

ジョナサン・スウィフト『ガリバー旅行記』

:スウィフトがこの本から伝えたかったこと

山崎美紀子

ジョナサン・スウィフト『ガリバー旅行記』

この話は主に4つの話から成り立っている。主人公はイギリス生まれのレミュエル・ガリバー。ガリバーは子供のころから、「船に乗って外国に行ってみたい!」と思っていたので、航海術や医学などを勉強し、船医となった。

そこでまずは1つ目、小人国（リリパット）の話について。ガリバーはある日南洋へ行くこととなった。航海は順調だったが、途中で暴風雨に遭い、流されてしまう。そして流れ着いた島は小人の国（リリパット）。ガリバーは宮殿へと連行されてしまう。そこで、ガリバーはこの国にとって敵ではないことを証明するために王様の願いを叶えることに。王様の願いとは、長い間続いている隣国（ブレフスキュ）との戦争の終結であった。すぐさまガリバーは「陛下とこの国を守るために命がけで戦いましょう。」と言って隣国へ赴き、軍隊を撃破、そしてついに小人国の信頼を勝ち取った。しかし、ガリバーが大手柄をたてたことにより、ある提督は自分の人気が減ったように考え、ガリバーを恨んでいた。提督はガリバーに様々な難癖をつけて彼を死刑にしようとした。しかし、「彼はこれまで立派な手柄をたててくれたのだから、大目に見て罪は軽くしてやれ。」と王に反対され、結局餓死させることが決まった。そのことを知ったガリバーは、沖に浮いていたボートでイギリスに帰国することとなった。

次の話は大人国（ブロブディンナグ）について。ガリバーはイギリスに戻って2ヵ月もすると、またすぐに旅に出た。航海の途中、水がなくなり、陸が見えたので、ガリバー達船員はボートでその船に向かった。しかし1人でその島を散策していたガリバーは置いてけぼりにされた。そしてその島は小人国とは正反対の大人国だった。ガリバーは身長約18メートルの農夫に捕まえられ、サーカスの見世物のように見せて回らされた後、この国の王妃に売り飛ばされる。王妃はガリバーに大いに愛着を寄せ、住居として人形の家のように家具を備えた木箱を与えるなどして、非常によく待遇してくれた。しかしガリバーは「いつかは自由の身になりたいなあ…」といつも思っていた。そんなある日、ガリバーが王妃や国王たちと南の海岸へ行った時、1匹の鷲がガリバーの住む木箱をくわえ、そのまま飛び去ってしまった。そして木箱は大海原に落とされ、ガリバーは偶然通りかかったイギリスの船に発見され、無事祖国へ帰還することとなる。

3つ目の話は飛島（ラピュタ）について。ガリバーは今まで苦しい目にたくさん遭ってきたが、それでもまだ外国を見たいという気持ちが強く、再び船で旅をすることにした。しかし、途中で海賊船に襲われ、ガリバーは1人小さな船に乗せられ、海に放り出された。近くの無人島にたどり着いたガリバーは隣の島、そのまた隣の島へ渡って行き、4つ目の島で空

飛ぶ島（ラピユタ）に遭遇する。その光景に少し驚いたが、無人島から脱出したかったので、「おーい、おーい」と大きな声で叫んで見つけてもらい、ガリバーはその島に乗せてもらう。ラピユタの人々は、数学や天文学、音楽にしか興味がなく、「太陽の工合はどうでしょう。日の入り、日の出に変わりはありませんか。」「今度彗星がやって来たら、どうしたものでしょうか。なんとか助かりたいものですねあ」というようなことをいつも言い合っており、何か外から刺激を与えなければ物も言えなければ、他人の話を書くこともできない。数学や音楽以外の才能がいくらあっても無意味なこの国では、ガリバーは知能が低い人間だと思われる。そんなある日ガリバーは、ほとんど相手にしてもらえないような国にいたが、たまたまなくなったので、唯一仲良くなった高官に頼んでラピユタから降りる許可をもらい、国王の支配する陸地「バルニバービ」に降り立った。しかしそこはラピユタの影響を受けて荒廃しており、それにみかねたガリバーはイギリスに帰ることにした。その帰り、ガリバーは死人を呼び出すことができる、魔法使いの種族のいるグラブダブドリブという島や、死なない人間「ストラルドブラグ」がいるラグナグ国、そして最後に日本に立ち寄った。この頃日本では鎖国中だったのでガリバーはオランダ人を装い、長崎からオランダ船に乗り、イギリスに帰国することが出来た。

最後は馬の国（フウイヌム）について。イギリスに戻って5ヵ月後、ガリバーはある船の船長になって欲しいと頼まれたので、また旅に出ることにした。しかし、途中で海賊に船を奪われ、無理矢理ボートに乗せられ、ある島に1人置いて行かれた。その島が馬の国だった。ガリバーが島を散策していると、そこには言葉を話す馬がいた。そしてその奇妙な馬に誘われるまま、その後をついて行くと、その馬が住む家に着いた。また、家から少し離れた所に小屋があり、その中にはサルのような全身毛むくじゃらの「ヤーフ」という獣がいた。しかしよく見ると、その獣は人間にそっくりだった。馬たちはガリバーを見て「ヤーフ、ヤーフ」と言ってくるので、ガリバーを彼らの仲間だと思っているようだったが、ガリバーの話を知りたいようだったので、一緒に暮らすことにした。そこで暮らしているうちにガリバーは、馬はととても優しく高貴な生き物で、それに比べて人間はなんて卑しい生き物なのか、と思うようになる。ガリバーは帰国するのはやめて、ずっと馬たちと暮らしたいと思った。しかしそんな思いとは裏腹に、「世の中にヤーフほど不潔で、いやらしいものはない。彼らはこっそり牛の乳を吸うやら、畑を荒らすやら、ろくなことはしない。我々はあのいやらしいヤーフを殺すべきだ。」と議会で馬たちが主張しだした。だが、ガリバーと一緒に暮らしている馬が「こんな大人しいヤーフもいるのだから、ヤーフを皆殺しにするのはかわいそうだ。」と主張してくれたおかげで殺されることは免れ、結局ガリバーを追放せよという議案が可決された。そしてガリバーは仕方なく自分で船を作り、イギリスへと帰国することとなった。

スウィフトがこの本から伝えたかったこと

I. 作者と作品について

ジョナサン・スウィフト（1667-1745）はイギリス人系アイルランド人の司祭であり、風刺作家、随筆家、政治パンフレット作者、詩人、という様々な顔を持ち、数多くの作品を残している。その中でも一番有名なのが『ガリバー旅行記』であろう。この作品は1726年に出版され、正式な題名は『船医から始まり後に複数の船の船長となったレミュエル・ガリバーによる、世界の諸僻地への旅行記4編』

(Travels into Several Remote Nations of the World, in Four Parts. By Lemuel Gulliver, First a Surgeon, and then a Captain of several Ships) である。今では子供向けの本とされているが、実際は、これまでに書かれてきた道徳や品行に対する風刺作品の中でも、最も痛烈な作品といっても過言ではない。

II. 「小人国(リリパット)」から理解すべきこと

リリパット国の社会と政治体制は18世紀のイギリスを表している。またリリパットは隣国のブレフスキュ国と交戦下にあり、これはブレフスキュ国をフランスに見立て、当時のイギリスとフランスの国際上の関係を示しているといえる。この交戦の原因は、「卵をむく時に、大きい方の端を割ってからむくか、小さい方の端を割ってからむくか」という意見の違いである。またこの戦争は、ヘンリー8世の行った処刑や追放刑により始まった※イングランド国教会とカトリック教徒の争いに基づいている。卵はカトリック最高の祝日である復活祭のシンボルとして、キリスト教やその信仰を表しており、卵の大きい方から割ってむく方をカトリック教徒、小さい方から割ってむく方をイングランド国教会としていた。スウィフトは争いの原因を嘲笑し、些細な出来事が大きな闘争に発展する状況を風刺している。

※イングランド国教会：16世紀のイングランドで成立したキリスト教会。もともとカトリック教会の一部だったが、後に独立。通常プロテスタントに分類されるが、典礼的にはカトリックとの共通点が多い。

III. 「大人国(プロブディンナグ)」から読み取れること

プロブディンナグ国の国王も、彼から見たらとても小さくて奇妙な生き物のガリバーに関心を抱き、イギリスの社会や戦争、司法などあらゆる事柄をガリバーから聞き出す。国王にそのような質問をさせることによって、スウィフトはイギリスの諸問題を露わにし、イギリスで施行されていた政策を批判している。また軍隊を全滅させたり、鉄壁を破ることが出来る、火薬の製法を教えようというガリバーの提案はプロブディンナグ国の国王を特に怒らせ、「そのような機械の発明は人類の敵か悪魔のすることに違いない」という言葉から、人類は地球上で最も哀れな種族であるという思慮を国王から導き出すことが出来る。

IV. 「飛島(ラピュタ)」で述べたかったこと

この話では、数学や科学についていつも考えているため上の空であるラピュタ人を描くことによって、理性による思考の普遍性を主張する、科学における啓蒙主義運動を批判している。直接人類に貢献しない仮説的な科学知識は、スウィフトにとって無用の学問であり、その追究に時間や資金を浪費すべきではないと考えていた。またラピュタの国王の支配する陸地「バルニバービ」は、本来豊かな土地であったが、今ではラピュタに搾取され荒れ果ててしまった。バルニバービ各地で人々は反乱を起こしたりするが、その度に国王はラピュタを反乱地の上空に持ってきて、太陽や雨を遮り、場合によっては大石を落として町や人を押しつぶして鎮圧する。このことはロンドンに搾取されるアイルラ

ンドを、また当時実際にアイルランドで起こった反乱を反映しているとされている。

そしてラグナグ王国にいた、死なない人間「ストラルドブラグ」に関して、ガリバーは最初、「自分が不死人間だったら死の恐怖におびえることもなく、どれほど輝かしい人生を送れるだろうか」と思った。しかし不死人間は死なないが、年をとるため老衰から逃れることは出来ず、平均寿命の80歳で法的に死者とされてしまい、以後は世間から厄介者扱いされる、という悲惨な境遇を聞かされ、むしろ死とは人間に与えられた救済なのだと考えるようになった。このことから、スウィフトの「死」に対する考えも知ることが出来る。

V. 「馬の国(フウイヌム)」からわかる人間の愚かさ

馬の種族「フウイヌム」は、仲間の死をそれほど悲しまないなど、大きな悲嘆や戦争、疫病を持たず、エリート主義的かつ官僚的で、厳密な種族的カースト制度を保持している。この制度は話法や風習、外見においてイギリスの貴族性を風刺している。フウイヌムは彼らを悩ませる「ヤーフ」という邪悪で汚らしい生物と対比される。ヤーフは野蛮種族であり、絶え間なく争い、無益な輝く石を切に求めている。この輝く石とは人間社会のお金を意味しているのだろう。またガリバーとフウイヌムは、人間とヤーフを比較し、「特に理由もないのに同種族で争いあうヤーフの習性」と「戦争」のような、この2種族の類似点を発見した。戦争のないこの国で、フウイヌムは大砲や火薬、「攻撃」「破壊」というような言葉をガリバーから説明を受け、人間をもっと嫌いになった。それに対してガリバーは、生まれつき徳の高い性質を持ち、友情や厚意を美德とするフウイヌムを尊敬するようになり、ヤーフと似ている自分が恥ずかしくなった。このことから、スウィフトは人間社会全体を批判していることがわかる。

VI. スウィフトが伝えたかったこと

私がこの本を選んだ理由は、『ガリバー旅行記』は童話だと思っていたが、風刺作品であると聞いたので、そのことについて少し調べたいと思ったからだ。また、『ガリバー旅行記』は小人国の話だけだと思っていたので、他の3つの話もこの機会に知ることが出来て良かった。宮崎駿の映画『天空の城ラピュタ』の「ラピュタ」という言葉が、3つ目の話「飛島(ラピュタ)」から来ているということや、検索エンジンの『Yahoo!』も、4つ目の話「馬の国(フウイヌム)」に出てくる「ヤーフ」から来ているということを知った。

スウィフトは、当時問題の多かった宗教対立や植民地主義、奴隷制度を批判し、人間とはくだらないことで争いあう愚かな生き物であり、動物のほうがずっと良いと考えていたのだろうと思う。科学技術に関しても、確かに技術が進歩することは良いことだが、たくさんの人を簡単に殺せるような兵器を開発するなど、人類に貢献しないような使い方は見直すべきだ。現在でも、人種の違う者同士がこのような兵器を使って争っている。スウィフトは将来、人間を誇らしく思えるようなもっと素晴らしい社会になることを望んでいたのかもしれないが、この作品が書かれた時代から何も変わっていないどころか、悪くなっていることを考えると、やはり人間は愚かだということがよくわかった。

リトールドすることは初めてだったので、最初はどのような風に行けば良いのかわからなかったが、実際に話を全部軽く読んだ後に色々調べていき、作者がこういうことを考えて書いていたのか、ということなどがわかって来ると面白くなってきて書きやすくなった。私自身も普段こういう課題が出された時にしか本は読まないが、これを機に色々本を読んでみようと思った。

(やまさき・みきこ：欧米言語文化講座 仏語圏)

ヨセフ・ジェイコブス「ジャックと豆の木」

:ヨセフ・ジェイコブスと*English Fairy Tales*

大塚麻里

ヨセフ・ジェイコブス「ジャックと豆の木」

むかし、イングランドのアルフレッド時代にロンドンの都から離れた田舎の小屋に夫を亡くした女の人が、小さな男の子の子供とともにわびしく暮らしていた。その子は、のんきでずぼらな子であったが、一人息子なのでとても可愛がっていた。そんな息子を抱えた女の人であったがどういうわけか年々ものが足らなくなり運も悪くなって、牝牛以外の家にあるすべての物を売ってしまった。母親はある日ジャックを呼んで牝牛を売ってくるように言った。なるべく高く売ってこいと言われたにも関わらずジャックは、道で話しかけられた肉屋のおじさんが持っていた袋に入った奇妙な形の豆と交換して家に帰ってきた。母親は呆れて起こってしまいその豆を窓から投げ捨ててしまった。

あくる朝ジャックが目を覚ました時、なんだか外が暗いと思うと、庭に昨日すてた豆の種から芽が生え一晩で丈夫で見上げるほど大きく高く伸びている豆の木が庭いっぱい生い茂っていた。

「あれをつたって、てっぺんまでのぼって行ったら、ぜんたいどこまで行けるかしら。」

ジャックはそう思い、すぐに登り始めた。何とかいちばん上まで辿りつくると、静かな森や美しい花がたくさんあるとてもきれいな国が広がっていた。どこからともなく赤ずきんをかぶったおばさんが出てきて、自分たちはジャック一家を守っている妖女でここ何年か魔法にかけられているジャックたちを守ることができなかったという。というのも恐ろしい鬼の大男がすみかにしている、お城のような家があり、じつはその鬼がそのお城に住んでいたジャックのお父さんを殺して城やそのお宝ごと持って行ってしまったからすっかり貧乏になってしまったからだ、と言った。

「だから、もういちど、そのたからをとりかえして、わるいその鬼を、ひどいめにあわしてやるのが、お前の役目なのだよ。」

こう言われるとジャックは気持ちがピンと張り、知らないお父さんが懐かしくなってきたかすめ取られたお宝を取り返さなくては、と思った。

ジャックは早速そのお城に行き、出てきた鬼のおかみさんに泊めてもらうようお願いし入れてもらった。すぐに鬼の足音がして暖炉にジャックは隠れた。

「フンフン、イギリス人の香がするぞ。生きてよが死んでよが骨ごと引いてパンにしよぞ。」

鬼の男がご飯の最中におかみさんに持ってこさせた鶏は、生め、というといくらでも金の卵を産むにわとりだった。ジャックはこれはおとうさんのおたからに違いない、と思って鬼が寝てしまった内に鶏を盗み出すことに成功した。それを家に持って帰ると親子はお金持ちになった。

またしばらくしてあのお城に行きたくなり尋ねてみるとあのおかみさんが出てきたがジャックのことは覚えていない様子だったのでまたお願いして泊めてもらった。今度も前と同じ用に鬼が食後に寝ている間に、金や銀のおたからの入った袋を持って帰った。

しばらくの間はジャックは家でおとなしくしていた。でも体がむずむずしてきてまたあのお城へ行き、今度はすっかり別人になって行ったのでおかみさんは騙されて入れてくれた。大男が帰ってくるとあわててお釜のなかに隠れて、大男が匂いをかぎつけて部屋中探しまわり、お釜に手をかけようジャックはだめだと思ったが、それこそ妖女が守ってくれているかのように、鬼はお釜を開けるのをやめ、おかみさんにご飯を出せと言った。

「にわとりは盗まれる、金銀の袋も盗まれる、しかたない、こんやはハーブでも鳴らすかな。」

ハーブはひとりでになりだし、どんな楽器もこの音色にはかなわないほどきれいな音色を奏でた。ジャックは今まで持ってきたものよりこのハーブがほしくなり、ハーブの子守歌で大男が眠っているうちにジャックは盗みだそうとした。だが今度は簡単にはいかなかった。そのハーブには魔法が仕掛けられていて、持ち出そうとすると、

「おきろよだんなさん、おきろよだんなさん」と言い出して、大男は起きだしてしまった。

「待て小僧、きさま、にわとりをぬすんで、金の袋、銀の袋をぬすんで、こんどはハーブまでぬすむのかあ。」と、大男はわめきながら、あとを追いかけた。

「つかまえるものならつかまえてみろ。」

ジャックはハーブがからんからん鳴り続ける中一生懸命逃げた。豆の木のはしごの所までたどりつきハーブをかかえて、豆の木のはしごをおり始めた。はるか目の下に、おかあさんが小屋の前で泣きはらした目で空をみつめていた。そうこうするうち、大男が追っついてきてジャックは母親に斧を持ってくるように言った。身軽なジャックは途中ではしごを飛びおり斧ではしごの根元をぷつぷつ折ってしまうと、そのまま鬼は目を回して死んでしまった。

そのときあの時の妖女がきらびやかな雰囲気のととてもきれいな女性になって現れ、あの時の豆がジャックの手に入るようにしたのは、自分がジャックを試したかったからと言った。

「あのとき、豆のはしごをみて、すぐとそのまま、どこまでものぼって行こうという気をおこしたのが、そもそもジャックの運のひらけるはじめだったのです。あれを、ただぼんやり、ふしぎだなあとおもってながめたり、すぎてしまえば、とりかえっこした牝牛は、もし手にもどることがあるにしても、あなたたちは、あいかわらず貧乏でくらさなければならぬ。だから、豆の木のはしごをのぼったのが、とりもなおさず、幸運のはしごをのぼったわけなのだよ。」

ヨセフ・ジェイコブスと*English Fairy Tales*

I. 作者と作品について

「ジャックと豆の木」(“Jack and the Beanstalk”)はイングランドの民話集*English Fairy Tales*に収録されている話のうちの一つである。この民話集は大英博物館にあったアングロサクソンの話を再話したものである。イギリスに伝わる40のおとぎ話を集めたもので、他の国に伝わる「3びきの子豚(The Three Pigs)」「赤ずきんちゃん(Little Red Riding Hood)」等

有名な話もいくつか収録されている。

ヨセフ・ジェイコブス(Joseph Jacobs, 1854-1916)は文学研究者でありユダヤ人歴史研究者であった。ユダヤに関する事典を作成し、また民話集も作った民族学者である。

オーストラリア・シドニーでジョン・ジェイコブスの6番目の息子として生まれ、シドニーグラマール学校とシドニー大学に通い18歳の時イングランドへ発ちケンブリッジのセントジョン大学へ入る。ロシアでのユダヤ人の迫害に関する一連の記事の作家として有名になり、後にユダヤ人の人種に関する文化人類学の研究に多くの時間を費やしこの分野で権威となった。

1890年から5つの民話集を編集し始め、ドイツ文学やフランス文学を主に読んでいたイギリスの子供たちにそれを読んでほしいと思っていた。また彼はグリム兄弟にも影響を受け、そしておとぎ話という名目で多くの珍しい種の民話を集めた。イギリス民話が今日多くの人々に親しまれる形で保存された事については、ジェイコブスの功績がきわめて大きいといわれている。

II. 時代背景、イギリスとドイツ

ジェイコブスはグリム兄弟に影響を受けたと同時に、ドイツという国に対抗意識を持っていたため彼の作品はグリム童話集を意識しているといわれている。イギリスにおいては、民話集や童話集に対し国家的に動く人物が、ジェイコブス以前にいなかったため、イギリス童話集の出版事業としての成立が、ドイツより遅かった。そのためイギリスの子供はドイツ文学を主に読んでいて、このことはドイツを意識しているジェイコブスにとって民話集を編纂しようとした1つの理由なのではないだろうか。ジェイコブスがドイツを意識していた理由としては、イギリスが産業革命で波に乗っており、ドイツは国をあげて追いつこうとしていた。そしてジェイコブスがこの民話集を出版した1890年は、ドイツが、鉄鋼生産力で、イギリスを抜き、逆に産業において抜かされたイギリスはドイツに対抗していた、というところだろうか。

III. この作品が伝えたいこと

イソップ寓話では教訓が強くこめられているが、この作品は民話で、民間で伝わっている話をもとにしているので教訓というよりは話の面白さを重視している。だが私の主観では、ジャックが思い立った時に行動に移している点が、お宝を盗み出すことに成功した鍵なのではないかと考える。妖女の発言にもあるように、豆の木を見てすぐに登っていき結果的に家を救ったジャックのように、ためらったり考えすぎたりすることなくすぐ行動に移すことが悪い状況から抜け出す鍵なのではないかと感じた。

(おおつか・まり：欧米言語文化講座 英語圏)

ルイス・キャロル『ふしぎの国のアリス』 (ウサギの穴に落ちて)

:作品の魅力

岸田美沙子

ルイス・キャロル『ふしぎの国のアリス』(ウサギの穴に落ちて)

「あーあっ、つまんない」 アリスはおねえさんと一緒に土手に座っています。だけど、おねえさんは文字づくしの本を読んでいるだけ。すると突然、ピンクの目をした白いウサギがアリスの横を駆けていくのです。「大変だ！大変だ！遅れちゃうー」とポケットから時計を出し時間を確かめて慌てて駆けてくウサギ。アリスはとってもおもしろくなってウサギの後をつけていきます。ちょうど生垣の下の大きな穴へウサギがひょいっと飛び込みました。もちろんアリスも飛び込みます。いったいどこに出られるのか、なんて考えずにね。アリスは深い井戸のような空間をゆっくりゆっくり下へと落ちていき、やっと着地しました。どうやらウサギを見失ってしまったようです。そこにはたくさんの扉が並んでいます。だけど、どれもカギがかかっていて開きません。あれ？気がつくともアリスの目の前にテーブルがありました。そしてその上には金色の小さなカギがありました。アリスは1つ1つの扉にカギを試してみます。しかしどれも合いません。すると最初にはなかった、とっても小さな扉を見つけます。高さ40センチの小さな扉。カギを差し込んでみると、やったー！開きました。そこから外の世界をのぞいてみるとアリスが今までに見たこともないキレイなお庭が広がっていました。かわいいお花が咲き誇っている花壇に、キレイな噴水。アリスはその庭へ行きたくてたまらなくなりました。でも高さ40センチの扉はアリスにはとても小さいものでした。気を取り直してもう1度部屋のなかを見回すと、さっきのテーブルの上にピンが置いてあります。ピンには「わたしを飲んでね」という文字がありました。アリスは少し不安に思いましたが、ピンのどこにも「毒薬です」という文字がなかったので飲んでみることにしました。「あれー？へんだなあ。この感じ」そうです。アリスの身体はスモールライトで小さくなったように縮んでしまったのです。身長は25センチ。これならあの扉をくぐってキレイな庭へと行くことができます。しかし、あーあ、かわいそうなアリスちゃん。庭へと続く扉のカギをテーブルの上に置いたままでした。身長25センチのアリスには到底手が届きません。アリスはかなしくなって涙を流していましたが、ふとテーブルの下に小さなガラスの箱が見えたのです。ふたを開けるとケーキが入っていました。中にはまた「わたしを食べてね」の文字があります。よし、食べてやろう！アリスはそう決意してケーキをむしゃむしゃ食べました。

作品の魅力

I. 物語の成り立ち

『ふしぎの国のアリス』(原題)という作品は、作者がイングランドでの旅路に即興で語った物語がもとになっている。ボートでの旅の道程で、一緒に旅をしていた少女たちにせがまれて語り始めたのが“アリス”という主人公を中心に展開するふしぎの国の物語である。本の冒頭にはこの物語を少女たちに語り始める前のやりとりや経過が書かれている。最後に、「アリス(少女の中の1人の名前)この子供の話を君にあげよう。やさしい手で、これを置いておくれ。子ども時代の夢が、思い出の神秘のリボンの編まれているところに。遠い土地でつまれ、しおれてしまった巡礼の花冠のようにね。」と記されている。現在も世界各地で愛されている物語として『ふしぎの国のアリス』が現存していることから、作者の願いは叶ったように思われる。

II. ふしぎの国のアリスに影響を受けた現代の作品

狂っているけど新しい、ふしぎの国(文中から引用)のストーリーは、アリスがおかしなウサギを見つけ興味を抱き、あとを追いかけて穴へ落ちるところから始まる。本作の原題の直訳が『ふしぎの国のアリスの冒険』とあるように、落ちた穴の中の世界で冒険が始まるのだ。『マトリックス』というアメリカ映画の監督であるウォシャウスキー兄弟は、映画マトリックスシリーズは『ふしぎの国のアリス』がテーマであると述べている。この映画には仮想現実と現実世界という2つの世界が存在している。アリスの世界では《穴》が2つの世界の境界になっているが、映画では《現代的な装置》が世界間を行き来する道具となっている。また、映画の中で主人公が「follow the white rabbit (白ウサギに付いて行け)」というメッセージを受け取るという明らかにアリスの世界を連想させるシーンもある。

III. ふしぎの国の中での出来事

だれもが知っているアリスの物語。チシャネコやランプの兵隊、おかしなクリケットのゲーム…。こんなはちゃめちゃな世界を考えだせるのは子どものような遊び心も持った人なのだろうなと思う。誰だって子どもの頃は、空想していたはず。私の将来の夢はセーラームーンだった。大人になっていくにつれて、忘れ去られてしまうかもしれない夢かもしれない。けれどアリスがウサギの穴に落ちこちてふしぎの国を体験したかのように、私の目の前で大慌てでウサギが通るかもしれない。そっちの世界では動物もみんなお喋りするかもしれない。そんな可能性は誰にも否定できないと思う。もしそんなことが起こったらアリスみたいにワクワクしながら冒険してみたい。けれどこっちに戻ってきて誰かに話しても信じてもらえないのだろう…。夢だったと自分でも思うようになるかもしれないけれど、子どもの頃みたいに限界を知らずにいろんなことを楽しめるような気がする。そんな気持ちにさせてくれる本だ。平凡な毎日が退屈な人には是非読んで欲しい物語である。

(きしだ・みさこ：欧米言語文化講座 仏語圏)

ルイス・キャロル『ふしぎの国のアリス』

:唯一無二のファンタジーの世界へ

山脇未帆

ルイス・キャロル『ふしぎの国のアリス』

アリスはお姉さんと一緒に、土手の上に座っていました。本を読んでいるお姉さんの隣で何もすることがないアリスは、退屈で堪らなくなりました。あれこれ考えていると、ピンクの目をした白ウサギが「ああ、困ったな。遅刻しちゃうぞ！」とポケットから時計を取り出し、慌てて飛んでいきました。好奇心でいっぱいになったアリスはウサギを追って大きなウサギ穴に飛び込みました。ウサギ穴はしばらく続きました。周りの壁には戸棚や本棚がびっしりと並んでいます。下に落ちていく中、自分はいま地球のどのあたりにいるのか、ネコのダイナについてなど、一人でおしゃべりしていました。そのうちこっくりこっくりしていると、アリスは小枝と枯れ葉の山の上に墜落していました。相変わらず急いでいる先ほどのうさぎを追いつけると、天井の低い細長い広間に出ました。どうしたら外に出られるか考えていると、小さなテーブルの上に小さな金の鍵を見つけました。多くの戸の中から低いカーテンの吊り下げた40センチくらいのドアを開け、外に出ようとしたのですが、頭さえ出ません。テーブルまで引き返すと、今度は小さなびんを一本見つけました。それを飲むと、アリスは25センチくらいの背丈になっていました。ドアからでようとしたのですが、テーブルの上から金の鍵を取ることを忘れてしまったのです。泣き、自分を叱りながらも、テーブルの下に小さな箱に入ったケーキを見つけました。そのケーキをあっという間に平らげると、アリスの背丈は3メートル近くになりました。かわいそうに、また外に出ることができなくなったアリスは泣き出してしまいました。あまりにも泣いたので、おしまいには深さ10センチ、広間の半分くらいもある、大きな涙の池ができました。

しばらくすると、さっきの白ウサギが白い手袋と大きな扇を持って大急ぎで走ってきました。アリスが声をかけるとウサギは驚いて扇と手袋を落とし、暗闇の中に逃げこみました。アリスは部屋が暑かったので扇で扇ぎながらひとりおしゃべりしていると、扇の力で背丈は60センチくらいになりました。そういつているうちにアリスは足を滑らせ、先ほどできた涙の池にあごまで浸かっていました。他にも落ちてきた鳥や獣たちと一緒に、アリスは岸まで泳いで向かいました。岸にたどり着くと、動物たちとアリスは体を乾かす為に「わいわい競争」を始めました。「わいわい競争」とは、好きなときにスタートし、好きなときにやめるレースのことです。30分ばかり走って、ドーデー鳥の合図とともにレースは終わりました。誰が優勝者かわかりませんから、全員が商品をもらい、アリスも指貫をもらいました。その後はネズミの身の上話を聞きました。しかし、アリスが飼い猫のダイナはネズミや小鳥を捕るのが得意だ、と話してしまったものですから、動物たちは逃げ、アリスは独りぼっちになってしまいました。アリスがまた泣いていると、遠くの方でかける足音が聞こえました。足音の主は例の白ウサギでした。白ウサギはアリスを「メアリー・アン」というお手伝いさんと間違えたらしく、家から扇と手袋を持ってくるよう命令しました。走りながら独り言を呟いているうちに、アリスは白ウサギの家にとどり着きました。大急ぎで2階に上がると、扇と手袋、小さなびんを見つけました。そのびんの中身を飲むと、アリスは大きくなり、部屋の中いっぱいになってしまいました。部屋に入れない白ウサギとトカゲのビルは、手押し

車いっぱいの小石をアリスに向かって降らせました。驚いたことに、床に散らばった小石はお菓子に変わっていきました。お菓子を食べると体は縮み、家から出られるようになりました。家の外にいた動物たちから逃げるように森の中へ進むと、大きなキノコを見つけました。森に住むイモムシによると、キノコの一方を食べると大きくなり、一方を食べると小さくなるらしいのです。キノコの右側を食べてみると、なんとアリスの首が伸びてしまいました。何度もキノコを食べているうちに元の背丈に戻りましたが、高さ1メートルほどの家を見つけたのでもう一度縮み、家に近づきました。

カエルの召使いに邪魔されながらも家に入ると、公爵夫人と赤ん坊、料理女、チェシャー・ネコがいました。女王様とクローケー遊びをする準備を始めた公爵夫人から赤ん坊を預かったアリスでしたが、あやしているうちに赤ん坊は豚に変わってしまいました。豚を逃がしてやると、2,3メートル先の木の枝にチェシャー・ネコが座っていました。チェシャー・ネコに三日月ウサギの家を教えてもらおうと、アリスは三日月ウサギの家を目指しました。ウサギの家の前の木の下で、三日月ウサギと帽子屋、ネムリネズミがお茶会をしていました。帽子屋が言うことには、〈時〉の機嫌を損ねてしまったので、いつでもお茶の時間になってしまったということでした。次にネムリネズミの話を知りましたが、あまりにも頭がこんがらがったので、アリスはすっかり愛想を尽かし、お茶会から離れていきました。

気が付いてみると、ちょっと前にいた、あの細長い広間にいました。金の鍵を使って小さな扉を開けると、そこには美しい庭が広がっていました。すると大行列が見えました。ハートの王と女王がしんがりです。ハートの女王は気に入らないことがあると、すぐにそいつの首をはねてしまう恐ろしい女王です。その女王にクローケーに誘われたアリスは行列に加わりました。クローケー場に着くと、アリスは驚きました。一面畝だらけ、クローケーのボールは生きたハリネズミ、ボールを打つクラブは生きたフラミンゴなのです。ゲームにならないので、アリスは突如空中に現れたチェシャー・ネコと話をしていました。女王を上手く言いくるめて、女王に捕まっていた格言好きの公爵夫人と話した後、アリスはカメモドキに身の上話を聞くため女王と歩いていきました。そこにはグリフォンがいました。女王はグリフォンにアリスをカメモドキの元へ連れて行くよう命令し、去っていきました。少し歩くと、カメモドキが小さな岩棚の上にしょんぼり座っているのが見えました。アリスはカメモドキから、カメモドキが最高の教育を受けた話、エビダンスの話を知りました。グリフォンとカメモドキが実際にエビダンスを披露してくれたりもしました。カメモドキの歌を聴いていると、遠くから「裁判が始まるぞ！」という声が聞こえてきました。

アリスとグリフォンはすぐに法廷に行きました。裁判の内容は「ハートの女王が作ったパイをハートのジャックが盗んだ」というものでした。法廷には裁判官の王、陪審席には12匹もの生き物がいました。裁判が始まると第1の証人として帽子屋が呼ばれました。第2の証人として、公爵夫人の料理女が呼ばれました。しかし、裁判の決着はつきませんでした。最後に第3の証人として、進行役の白ウサギがキーキー声をふりしぼってこう読み上げたのです。「アリス！」アリスはとても驚きましたが、王からの質問に、この件について何も知らないと答えました。アリスの証言が重要かそうでないかを陪審員が考える中、白ウサギが「ジャックが犯人だ」という証拠の手紙を持ってきました。その手紙の筆跡はジャックのものではなく、内容も不審な点がいっぱいです。しかし、どうしてもジャックを犯人としようとする女王と、アリスは対立しました。女王はアリスの首をはねよと兵士に命令しました。しかし、アリスも反論しました。このとき、アリスの背丈は元に戻っていました。「あんたたちって、みんなただのトランプじゃないの。」

気がついてみると、アリスはいつもの土手で、お姉さんのひざを枕に寝ていました。アリスは夢を見ていたのです。アリスはこの〈ふしぎの国〉の話をお姉さんに聞かせました。アリスが家のほうに走っていくと、お姉さんはアリスに聞いた話を思い返し、自分も夢の中にいる気持ちになりました。やがてアリスが大人になったときのことを思いました。アリスは大人になっても、子どもの無邪気な心、優しい心を失わないでしょう。

唯一無二のファンタジーの世界へ

I. 作者と作品について

ルイス・キャロル (Lewis Carroll) は、本名をチャールズ・ラトウィッジ・ドジソン (Charles Lutwidge Dodgson) といい、1832年1月27日、イギリス西部のチェシャー州デアズベリー牧師の家に、11人兄弟の長男として生まれました。名門のラグビー校で学んだ後、名門オックスフォード大学を数学は首席で卒業しました。卒業後は、母校のオックスフォード大学のクライスト・チャーチ学寮で数学を教え始めました。このように、キャロルの専門は数学でしたが、文学にも強い関心を持っていました。

キャロルは内向的な性格の上、片方の耳が遠かったせいもあり、普段は無口だったと言われていました。しかし、小さな女の子たちを相手に楽しいお話を聞かせてやったり、折り紙をすることは好きでした。『ふしぎの国のアリス』は、そうした少女たちとのふれ合いから生まれた物語です。

学寮長の3人娘、ロリーナ (13歳)、アリス (10歳)、イーディス (8歳) にせがまれて始めたお話が、2番目の娘を主人公にした『地下にもぐったアリスの冒険』というお話でした。このお話が『ふしぎの国のアリス』の元になったお話です。やがてキャロルの友人であるジョージ・マクドナルドの強いすすめによって〈ブタとコショウ〉、〈調子の狂ったお茶の会〉、〈だれがパイをぬすんだか〉、〈アリスの証言〉を書き加え、題名も『ふしぎの国のアリス』に変え、出版されました。

II. 作品が愛される理由

『ふしぎの国のアリス』が不朽の名作として愛されるのには、いくつかの理由があると思います。

まず、登場人物が個性豊かに、生き生きと表現されている点です。独り言のアリス、いつもにやにや笑っているチェシャー・ネコ、すぐに「首をはねよ」とわめいているハートの女王…実際には存在しないはずなのになぜか親しみやすく、身近に感じられます。

次に、この物語には童話にありがちな道徳や教育、感傷のにおいが全くないことです。そのため、誰にでも読みやすく、描かれているエピソードをそのまま純粋に楽しむことができます。

最後に、ことばがまるでパズルのようになっていておもしろい点です。アリスとその他の登場人物の対話はとても愉快で、おもわず笑ってしまったりします。急にとんちんかんなことを言い出したりもしますが、それこそがこの物語の魅力でもあるのです。

このように、他の作品と違い理屈抜きに楽しめるからこそ、出版から120年以上経った今日でも愛されるのではないのでしょうか。読んでいるうちに自分もふしぎの国へいるような気持ちになります。

(やまわき・みき：幼稚園教員養成課程)

アリス・ジーン・ウェブスター『あしながおじさん』

:ウェブスターの伝えたかったこと

福井 佑那

アリス・ジーン・ウェブスター『あしながおじさん』

—あしながおじさま、あなたはどこにいらっしゃるのですか？わたくしはとても寂しくなりません。ああ、おじさまにお会いしたいわ！そうすればおたがいにかなししいときにはなぐさめあえますのに！—

物語の主人公、ジルーチャー・アボット、ジュディは物心がついたころから、高校卒業の時までずっと、孤児院におりました。「孤児ですって？それはかわいそうに！」あなたはきっとそう思うでしょうね。でもだからといって、あなたが『かわいそうな、孤児のジュディちゃん』を理解してあげるのは少々骨が折れるところではないでしょう。ジュディはこれまでの孤児院での18年間の暮らしを、ものすごく退屈かつ単調に感じていました。

誰だってそうでしょう？好奇心旺盛な思春期の時期に、自由も与えられない、窮屈な牢屋のような場所に閉じ込められたならば、絶望的になるはずです。しかし、ある日そんな彼女に嬉しい出来事が起こるのです。孤児院評議員の中の一人の、金持ちのある男が「彼女を大学に行かせたい」と、孤児院に申し出たのです。一体誰が…？という疑問はひとまずおいておきましょう。その男のいうことときたらこうです。ジュディを作家にする。彼女の食費と月謝は、直接大学へ払い込む。在学中の四年間、月に35ドルのおこづかいをあげる。その代わりに、彼はジュディに、お礼として、お金ではなくてあいさつの手紙を月に一回、自分に郵送するように要求しました。それも、もし彼女の両親が生きていたら、両親にむけて書くような手紙を。

彼女は夏季の休暇が終わると、『お金持ちで親切な評議員さん』のお陰で、大学に通い始めます。そこが彼女にとってどのような場所に見えたか、私たちはただ想像するしかありません。きっと、毎日が光り輝いていて、驚きの繰り返しだったに違いありません。この様子を伝えるには、ジュディの『あしながおじさん』への手紙を読めば話がはやいでしょう。

—わたくしは大学が大好きです。そしてわたくしをここへ入学させてくださったおじさまが大好きです。わたくしはとても幸福で、眠る暇もないほど一刻一刻を楽しんでいます。世の中にこんなところがあるなんて夢にも思いませんでした。—

そうそう。『あしながおじさん』の説明がまだでした。この人は当然、ジュディを学校に入れてくれた評議員さんのことです。この人は少し風変わりなのでしょうか。自分のことを話したがる人なのです。ですから、ジュディにはこの男の人の名前、顔、好きな食べ物…なにも知りません。背が高くて、お金持ちで親切であるということ以外は。そこでジュディはこの評議員さんのこのあだ名を決めたのです。

ジュディが愛称でつけたこのあだ名。名前はものがたりの最後までずっと変わらないのですが、ジュディが『あしながおじさん』に対して抱く感情の変化に注目してください。ジュディが手紙を書けば書くほど、彼女は彼を身近に感じ、さらには唯一の自分の理解者である

という、自分の家族のような感情を抱いていくのです。

さて、『あしながおじさん』の名前についてのエピソードはこれくらいにして、ジュディの大学での新しい生活の話に戻しましょう。

とはいっても、彼女の大学での一コマ一コマを事細かに説明している時間は残念ながらありません。(できることなら、原作同様、彼女の毎日を一から書いてしまいたいのですが！)

ですから、彼女の大切な友達を紹介したいと思います。

一人目は、サリー・マクブライド。彼女は、ジュディと同じ寮に住んでいて、ジュディが大学に入学しておそらくは初めての友達です。赤毛で鼻が少し上を向いていて、とても親切なサリー。後にジュディとかなり親密になり、彼女を実家へ招待したりもします。彼女の家族もまた皆親切で、とても温かい家庭なので、ジュディはそれは居心地が良かったのです。もう一人の友達、ジュリア・ペンドルトンもジュディの友達です。彼女は少しプライドが高く、初めは固く怒った態度をジュディに出しますが、後には、ジュディと次第に打ち解けます。彼女はニューヨークの一流の家柄の人です。そして、ジュディには、この、ジュリアを通しての出会いもありました。彼女の叔父さん、ジャービス・ペンドルトン(ジャービーぼっちゃん)です。なぜ『ぼっちゃん』なのかは、後で原作を読めばわかりますよ。ジュディのジャービーぼっちゃんの初めの印象は、「背が高く、ほっそりしていて、内に不思議な微笑みをひそませる、ずっと以前から知っているように感じさせる、とても人付き合いの良い人」であると言っています。とにかく、この『ぼっちゃん』とジュディは縁あって、共に長い時間を一緒に過ごします。その中でももちろんジュディは、ぼっちゃんの頑固で、変わり者な面にも気付きますが、二人が離れ離れになって初めて、彼女はぼっちゃんの存在の大きさに気付いたのです。ああ！ジュディが14歳も年上の男の人に恋するなんて！この恋の結末は…？皆さんから沸き起こる疑問に「ご想像にお任せします。」と答えたいところですが、「気になって眠れない！」という人のために、こっそり教えることにします。

『この恋の行方』＝『この物語の結末』。

つまり、「あしながおじさん」＝「ジャービーぼっちゃん」。

ジュディは「あしながおじさん」その人に恋をしていたのです！

ウェブスターの伝えたかったこと

この物語の作者、アリス・ジーン・ウェブスター(Alice Jean Webster)は、社会施設の改善家としても活躍していたようです。少年教護院や、刑務所を改善する特別委員にも選ばれ、彼らに経済的な援助までしていたとも言われています。このような経験をつんだ作者であるからこそ書ける、この物語のはじめの部分。ここには、彼が実地に見聞した当時の孤児院の生活がリアルに描かれています。でも彼が伝えたかったのはそこだけではないのです。

—主人公のジュディが、孤児院にいながらも、朗らかさ、素直さ、愛らしさを傷つけられることなく持ちながら、今まで知らなかった世界に足を踏み入れ、そして様々な経験をして、立派な女性に成長するという楽しいこの物語。—

そこからは、作品全体を通して、ある一つの“愛のかたち”が表現されているように思います。平和で、温かい作品であることこそ、約一世紀たった今でも愛されるその理由なのではないでしょうか。

(ふくい・ゆうな：欧米言語文化講座 独語圏)

ライマン・フランク・ボーム『オズの魔法使い』

:愛され続けてきたオズ

小田 梨加

ライマン・フランク・ボーム『オズの魔法使い』

ドロシーはお百姓のおじさんとそのおかみさん、そして愛犬トトと一緒にカンザスの大草原の小さな家に住んでいました。

そんなある日、突然たつまきがやってきて家ごと巻き込まれ空中に浮いてしまいました。家が動かなくなったと思うと家は美しい緑の芝生が広がる素晴らしい風景のなかにありました。

ドロシーが外に出てみると、奇妙な服装をした4人の魔女がやってきてドロシーに何か魔法の力がそなわった銀の靴を渡しました。

ドロシーはカンザスから遠くはなれたところに来てしまったとわかるとその魔女に帰る方法をたずねました。すると魔女はエメラルドの都に行って大魔法使いのオズさまに助けをもらうよう言いました。ドロシーはもらった靴を履いて都を目指して歩き始めました。

何マイルも進んだところにトウモロコシ畑があり、そこにはぼろぼろのかかしが立っていました。オズさまに会いに行くと伝えると、わらでできた自分は脳みそをオズさまに分けてほしいと言い、かかしとの旅が始まりました。

2人が木々の茂った道を歩いて行くとブリキのきこりに会いました。自分は心臓がほしいと言い、きこりも旅についていくことになりました。

ドロシーとその仲間たちが深い森のなかを進んでいくと臆病なライオンに出会いました。自分は勇気がほしいと言い、ライオンも旅に加わりました。

たくさんの危険を乗り越えて、ドロシーたちはついにエメラルドの都にやってきました。門番につれられてオズの住む宮殿につれてこられ、オズさまに会うことができました。オズさまの姿を直接見ることはできませんでしたが、オズさまは悪い西の魔女を殺したら願いをかなえてやろうと言いました。

西の魔女を退治するためにウィンキーの国をめざしてふたたび旅が始まりました。

西の魔女は望遠鏡のように目がよかったのでドロシーたちが自分の国にむかっているのにすぐ気づきました。そしてオオカミやカラス、ハチの大群にドロシーたちを攻撃させました。しかしドロシーたちは力を合わせてこの敵をなんとかやっつけました。魔女の城にたどり着くとドロシーは魔女に水をぶっかけました。すると魔女は溶けていき、みるみるうちに小さくなってしまいました。ついに魔女を退治したのです。

ドロシーたちはオズに会うためにまたエメラルドの都に帰ってきました。オズの玉座に行くと、そこにはしわだらけで小柄な老人が立っていました。みんなはこの人がオズさまであることに驚きました。願いを叶えてもらおうとすると、その老人は、自分は魔法使いではないと言いました。都の者は魔法使いと信じているが自分はオマハで生まれたふつうの人間だと。ドロシーたちは騙されていたことに腹が立ちました。

みんなの望みを叶えるから2・3日時間がほしいと言いました。そして数日後、魔法使いはまずかかしを自分の部屋に呼びました。そして頭の中のわらを取り出し、代わりにもみがらをつめこみました。かかしは1番の望みが叶えられて大喜びです。次にきこりが呼ばれました。魔法使いはきこりの左側の胸に四角い穴をあけて、おがくずの入った小さな絹の心臓をいれました。きこりは喜びいさんでみんなの元に戻って行きました。次にライオンが呼ばれました。魔法使いは戸棚から緑色のびんをとってきて中に入った液体を美しい皿につぎました。それを飲んだライオンは体中が勇気でいっぱいになったと大喜びです。数日経ってドロシーが呼ばれました。すると魔法使いは、気球に乗って一緒に帰ろうと言いました。魔法使いも自分がだまし続けてきた都から逃げようというのです。

気球の準備をして飛び立ち始めたときドロシーはトトがいないことに気づきました。トトを連れてくるためにドロシーは気球を降りましたが、しかし気球は止まりません。老人だけが1人旅立って行きました。ドロシーは家に帰る方法がなくなって絶望しました。

そこで都の兵隊に相談してみました。すると南の国の魔女なら叶えてくれるかもと教えてくれました。ドロシーたちは南の国に向けてふたたび出発しました。仲間に助けられながらドロシーは南の国に着き、魔女に会うことができました。魔女はかかしをエメラルドの都へ、きこりをウィンキーの国へ、ライオンをけものたちの住む大きな森へ、それぞれ行きたいところに連れていく約束をしました。そしてドロシーには、靴のかかとを3回打ち合わせて3歩歩くだけでその銀の靴が行きたいところどこへでも連れて行ってくれると教えました。

3人に別れの挨拶をするとドロシーは早速教えられたとおりにしました。するとものすごい勢いで空中を運ばれて行きました。きづくどドロシーはカンザスの草原にいました。ドロシーに気づいたおばさんは「まあ、ドロシー！」と叫んでドロシーを強く抱きしめました。

「いったい、どこから帰ってきたの?」「オズの国からよ。あたし、家に帰ってこられてほんとうに嬉しいの!」

愛され続けてきたオズ

1888年、ライマン・フランク・ボーム(Lyman Frank Baum,1856-1919)と妻はサウスダコタ州のアーバーディーンに移った。そこで彼は地方新聞の編集者になり、コラムも寄稿した。『オズの魔法使い』(The Wonderful Wizard of Oz)におけるカンザス州の描写は乾燥しきったサウスダコタでの経験に基づいている。

1899年、ボームはイラストレーターのデンスロウと組んで詩集を発表した。この本は児童書としてその年のベストセラーになった。

1900年、2人は『オズの素晴らしい魔法使い』(日本語タイトル『オズの魔法使い』)を刊行し批評家から絶賛を浴びた。この話はボーム自らが子供たちに語って聞かせた物語がもとになっている。2年間にわたり児童書のベストセラーになり、その後ボームはオズの国や住人を扱った続編を13作も書いている。ボームによるオズシリーズの最終巻「オズのグリンド」は彼の死後である1920年に刊行されたが、シリーズは別の作家たちによって書き続けられてきた。

私はいままでこの物語を一度も読んだことがありませんでした。でもこの歳で読んでもとてもおもしろく、これが長年世界中の人々に愛されている理由なのだなと思いました。ドロシーとその仲間たちの友情にとっても感動させられました。

(おだ・りか：欧米言語文化講座 仏語圏)

バウム『オズの魔法使い』

:19世紀末のアメリカ経済

山浦絵梨奈

ライマン・フランク・バウム『オズの魔法使い』

ドロシーは、アメリカにあるカンザス州の大草原の真ん中で、ヘンリーおじさんとエムおばさん、小さな黒い犬のトトと一緒に小さな家に住んでいました。トトと明るく暮らしていましたが、ある日、灰色をした空のむこうから、突然たつまきが近づいてきました。ドロシーとトトは家から逃げおくれでしまい、家ごと空にふきとばされてしまいました。

家の動きがとまり外に出てみると、信じられない光景がドロシーの目にとびこんできました。まわりには美しい緑のしばふが広がり、大きな木々には実がたくさんぶらさがり、花がさきみだれ、鳥がとび回り、小川がきらめき流れ、それはもうすばらしい風景でした。そのときドロシーに、かわった格好をした人たちが近づいてきました。そのうちの女性が、「すばらしい魔法使いさま、マンチキンの国においで下さり、東の魔女を殺していただき、本当にありがとうございます。」といいました。彼女は北の魔女らしく、なんでも、ドロシーの家が落ちたおかげで東の魔女が死んだというのです。「このオズの国には4人の魔女がいて、北と南がいい魔女で西と東は悪い魔女なのです。」と続けました。ドロシーは、どうすればカンザスに帰ることができるのか、北の魔女にたずねました。すると、オズの国のまわりには砂漠が広がっていて、国を出ることができない、そう答えました。しかし、「オズの国の真ん中にある、エメラルドの都にいきなさい。たぶん、オズさまが助けてくれるでしょう。」といいました。大魔法使いオズが支配するエメラルドの都へは、黄色いレンガをしいた長い道をずっと歩いていかなければなりません。こうして、オズの魔法使いにあうため、ドロシーのエメラルドの都への旅が始まりました。

出発してまもなく、棒で背中をまっすぐにささえられたまま、トウモロコシ畑を見下ろすかかしに会いました。かかしは生きていて、ドロシーは棒をとってやりました。このかかしは中身がわらなので、脳みそを持っておらず悲しんでいました。「じゃあ一緒にエメラルドの都へいきましょう。オズさまに脳みそをわけてくれるようおねがいしましょう。」かかしはとてもよろこんで、一緒に出発しました。

また歩いていくと、太くて低いうめき声がきこえてきました。すると、ブリキでできた人間が斧をふりあげたまま、じっと身動きせずに立っていたのです。ドロシーは油をさしてやりました。ブリキのきこりは、体が全部ブリキになってしまい心臓がなくなってしまったので、心臓をほしがっていました。「じゃあ一緒にエメラルドの都へいきましょう。オズさまに心臓をいただけるようおねがいしましょう。」こうして、ブリキのきこりも一緒に出発しました。

ドロシーとその仲間たちが深い森をすすむと、ものすごいうなり声が聞こえてきました。突然大きなライオンがみんなをおそってきたのです。ドロシーは体の大きなライオンが弱いものいじめすることにおこり、おくびょうものといいました。するとライオンは、おくびよ

うものだと自分でもわかっている、だから勇気がほしいんだ、といいました。「じゃあ一緒にエメラルドの都へいきましょう。オズさまに勇気をいただけるようおねがいしましょう。」こうして、ドロシー、かかし、ブリキのきこり、ライオン、トトはまた、エメラルドの都に向かって出発しました。

たくさんの危険におそわれながらもみんなで乗りこえ、ついにエメラルドの都に到着しました。すると頭のとっぺんからつまさきまで肌も服も全部緑色の門番が立っていて、その男は、エメラルドの都のきらめきで目を痛めないよう、緑のめがねをかけるよういいました。おかげで目に映るものは全て緑色でしたが、とてもすばらしい景色でした。そしてとうとう、オズの魔法使いに会えることになりました。オズは、ある時は大きなはげ頭、ある時は美しい貴婦人、ある時はおそろしい獣、またある時は火の玉となって現れました。そのさまざまな姿にみんなはとてもおどろきました。そしてみんなの望みを聞いたオズは、ドロシーたちが西の悪い魔女を殺すことができればそれぞれの望みをかなえてやる、と約束しました。

西の魔女をたおすため、ドロシーたちの旅が始まりました。旅の途中で、西の魔女の命令をうけた飢えたオオカミ、カラス、黒いハチの群れにおそわれましたが、みんなやっつけました。そして1度はつかまってしまいました。ついに、西の魔女を水でとかして殺すことができたのです。

エメラルドの都にもどり、ドロシーたちはオズに、約束した望みをかなえるようたのみました。しかしオズはなかなかかなえてくれません。おこったみんながつめより、ライオンがおどろかすと、部屋のすみに置いてあったついたてがひっくり返り、はげ頭で、しわだらけの顔をした、小柄な老人が立っていました。「おまえは、いったいだれなんだ？」と聞くと、老人は「わしがオズの大魔法使いだ。」といいました。そう、この老人がオズの正体であり、今まで国中の人々をだましてきた、ただのサギ師だったのです。それを知りドロシーたちはがっかりしました。望みがかなわないからです。

でも本当は、旅をしている間に、すでにかかしにはすぐれた脳みそが、ブリキのきこりには立派な心臓が、ライオンには勇気がそなわっていました。みんなはそれに気づいていなかったのですが、翌日、オズの小さな魔法によって、望みがかなったと思いきよこびました。でもドロシーだけはちがいました。「カンザスに帰りたい。」そう悲しみ泣いていたところへ、エメラルドの都の兵士から、南の魔女をたずねてみるといい、といわれました。

ドロシーたちは南の国に向かい、南の魔女に会うことができました。南の魔女は、若くてうつくしくみえました。ドロシーの話を知ると南の魔女は、「あなたの銀のくつがあなたをはこんでくれるでしょう。かかとを3回打ちあわせ、自分の行きたいところをいえばそれでいいのです。」といいました。実は、東の魔女からとった銀のくつには、いろんな、すばらしい魔法の力がそなわっていたのです。

カンザスに帰ることを決めたドロシーは、かかしやブリキのきこりやライオンにそれぞれ別れのあいさつをしました。長いあいだ一緒に苦労したので、別れるのはとてもつらいことでした。南の魔女にも別れをつけると、トトをだいたままくつのかかとを3回打ちあわせて、「エムおばさんのところにつれて行って！」といいました。ドロシーはものすごいスピードで空中をはこばれ、銀のくつで3歩あるいただけで突然止まりました。あたりをみまわしてみると、なんとそこは広々としたカンザスの草原の上だったのです。

ドロシーは家の中から出てきたエムおばさんのもとへ走っていき、気づいたエムおばさんはドロシーを強く抱きしめ、「まあドロシー！いったいどこから帰ってきたの？」というと、「オズの国からよ。あたし、うちに帰ってこられて本当にうれしいの！」そう、ドロシーはいいました。

19世紀末のアメリカ経済

I. 作家と作品について

「マザー・グースの物語」の大ヒットで童話作家として成功していたライマン・フランク・バウム (Lyman Frank Baum 1856-1919) が、自ら子供たちに語ってきかせた物語を元に置き、1900年5月に出版した。凝った構成によるカラー図版の児童書は当時としては革新的であり、本はたちまち子供たちの心をとらえ、増刷の追いつかない空前の人気作品となった。

II. 金銀複本位制

「オズの魔法使い」は、金銀複本位制への移行が焦点となったアメリカの1896年の選挙を背景としている。金本位制というのは、通貨を一定の量の金と常に替えることができる制度である。金銀複本位制なら金銀の両方である。

1880年から1896年にかけて、アメリカの物価水準は23%下落していた。これは金本位制を採っていたアメリカ経済の拡大に対して、金貨の供給量が追いつかなかったためである。当時の農民のほとんどが東部の銀行からの借金で開拓を行っていたが、デフレーションの発生は借金の実質的価値を増大させ、西部の農民は苦しみ、東部の銀行が何もせずに潤うという事態が発生した。

故郷のカンザス州から遠く離れた不思議な土地に迷い込んでしまったドロシー (=アメリカの伝統的価値観) は、かかし (=農夫)、ブリキのきこり (=工業労働者)、臆病だが雄叫びがすごいライオン (=民主党候補) と友達になる。そして迷ってしまった自分を家に帰することができる魔法使いがいるエメラルドの都を目指す。

一行はエメラルドの都 (=ワシントン) に到着するが、そこでは皆が緑色の眼鏡 (=緑色のドル紙幣) をかけて世の中をみている。魔法使い (共和党候補者) は皆の願いをかなえられるようにみせかけているが、偽者であることがばれる。

最後にドロシーは、自分の銀のくつの魔力 (=銀も本位通貨にすること→金銀複本位制) を知って、その力によりついに家に帰ることができた。

…金と銀、金本位制をめぐるの共和党と民主党の論争は1896年の大統領選挙において最も重要な論点となったが、これに関して、「オズの魔法使い」が寓話とも解釈されるようになった理由である。

(やまうら・えりな：欧米文化言語講座 英語圏)

ライマン・フランク・ボーム『オズの魔法使い』

:オズワールド

二宮 亜哉奈

ライマン・フランク・ボーム『オズの魔法使い』

ドロシーは農夫のヘンリーおじさんとその奥さんのエムおばさんとアメリカのカンザス州にある大草原に住んでいました。ある日、ドロシーと飼い犬トトは、竜巻に巻き込まれ家ごと吹き飛ばされてマンチキンという小人の国についた。

マンチキンは東西南北にひとりずつ魔法使いがいて、東と西には悪い魔法使い、南と北は良い魔法使いがいた。そして、中央にエメラルドの都があり、オズという魔法使いがいるという。東の魔法使いは、ドロシーの家が飛んできたとき、下敷きになって死んでしまった。ドロシーはオズが、カンザスの家へ帰る道を教えてくれるかもしれないという情報をもとに、エメラルドの都へ旅をすることになった。その途中、頭のからっぽなかかし、心のないブリキのきこり、臆病なライオンにあい、いっしょに都をめざすことになった。かかしは脳みそを、ブリキには心を、ライオンには勇気をもらうために。

エメラルドの都につくと、門番はみんなに緑色のめがねをかけさせた。だから何でも緑色に見えた。オズは、ある時ははげ頭、ある時は貴婦人、ある時は火の玉になって現れ、ドロシーたちが西の悪い魔法使いを殺したら、それぞれの望みをかなえてやると約束した。

旅の途中、ドロシーたちは西の魔法使いの命令をうけた飢えたオオカミ、カラス、黒い蜂の群れに襲われたが、これを迎えうちにしたばかりか、ついに西の魔法使いを水でとかして退治する。エメラルドの都にもどり、オズにのぞみをかなえるように頼んだところ、オズはただの小さな奇術師にすぎないことがわかった。

みんながっかりしたところ、旅をしている間に、すでにかかしは優れた頭脳が、きこりは立派な心が、ライオンには勇気がそなわっていた。そして、「おうちのエムおばさんのところに連れて帰って！」

南の魔法使いに、両方のかかとを3度打ちつけ、行きたいところを告げるようにいわれると、あっという間にドロシーはカンザスの家へ……。

(大日本絵画 出版)

オズワールド

I. 作者について

ライマン・フランク・ボーム。ニューヨーク州チッテナンゴ村でメソジスト派の家庭に9人兄弟の7番目として生まれた。父ベンジャミンはドイツ系、母シンシアはスコットランド系であった。「ライマン」の名は父方のおじに因むが、ボームはこのファーストネームを嫌っておりミドルネームの「フランク」を常用した。俳優、戯曲家、自主映画制作者としての活動歴もある。

II. 作品について

「マザー・グースの物語」のヒットで童話作家として成功していたライマン・フランク・ボーム（1856年 ニューヨーク生まれ）が、自らが子どもたちに語ってきた物語を元にして書き、1900年5月に出版した。W・W・デンスローが挿絵を担当した。凝った構成によるカラー図版の児童書は当時としては革新的であり、本はたちまち子どもたちの心をとらえ、増刷の追いつかない空前の人気作品となった。初版の1万部は数週間で売り切り、翌年1月までにほぼ10万部が売れた。

オズはシリーズもので、ボームが書いたものは「オズの魔法使い」をはじめとし14冊までである。ボームの死後ほかの作家によって40冊まで続編が出されている。

III. 作品の背景と別の解釈

この「オズの魔法使い」、金本位制の金銀複本位制への移行が焦点となったアメリカの1896年の選挙を背景としています。金本位制というのは、通貨を一定の量の金と常に替えることが出来る制度です。金銀複本位ならば、金銀両方です。

1880年から1896年にかけて、アメリカの物価水準は23%下落していました。これは、北東部の銀行に代表される貸し手には好都合でしたが、南部や西部の農家に代表される借り手には不都合でした。デフレ対策として考えられていたのが、金銀複本位制の実施でした。実施すると国家内の貨幣量が増えると考えられ、結果、デフレが抑制されるためです。

当時共和党候補だったウィリアム・マッキンリーは金本位制維持を公約に掲げ、民主党候補のウィリアム・ジェニングズ・ブライアンは複本位制を支持しました。ブライアンは、「労働者の頭に茨の冠をかぶせるべきではない。人民を金の十字架にかけない（→金本位制の維持によるデフレで人民が苦しむこと）。」と選挙演説時に述べています。

この論争は、1896年の選挙直後に出版されたオズの魔法使いによって見事に寓話化されました。

なぜオズかと言うと、金の単位であるオンスはOzと表現されるからです。

故郷のカンザス州から遠く離れた不思議な土地に迷い込んでしまったドロシー（＝アメリカの伝統的価値観）は、かかし（＝農夫）、ブリキの木こり（＝工業労働者）、臆病だが雄叫びだけはすごいライオン（ブライアン候補）と友達になります。そして、迷ってしまった自分を家に帰することができる魔法使いがいる、オズを目指します。

一行はオズ（＝ワシントン）に到着しますが、そこでは皆が緑色の眼鏡（＝緑色のドル紙幣）をかけて世の中を見えています。魔法使い（＝ウィリアム・マッキンリー）はみんなの願いをかなえられるように見せかけているが、偽者であることがばれてしまいます。

最後にドロシーは、自分の銀のスリッパの魔力（銀も本位通貨にすること→金銀複本位制）を知って、その力によりついに家に帰ることになりました。

選挙は共和党が勝利し、金本位制が維持されましたが、選挙の前後にアラスカ、オーストラリア、

南アフリカで金が発見され、さらに金鉱石からの金抽出を容易にするシアン処理法が考案されたため、インフレは結果的に達成されることになりました。1896年から1910年までの間に、物価水準は35%上昇したのです。

IV. みんなに愛される理由

私は小さいころ「オズの魔法使い」をビデオで何回も見ていました。小さな子にとって次々に登場するキャラクターの個性いっぱいの外見や性格の面白さ、可愛さがとっても面白く人気なのではないかと思います。しかし、「オズの魔法使い」は、子どもにだけでなく、大人たちにも愛されています。それは何故か？私が思うに登場するキャラクターがどこか私たち人間に似ているから共感するからではないでしょうか？

かかしやブリキのきこり、ライオンたちは、それぞれの悩み、こころ、勇気を探して旅に出ます。けれど実際それらは、自分たちがないと思っているだけで、本当は誰もが持っているはずのものだと思います。誰だって考える力、優しさ、思いやり、勇気を自分の中に持っています。彼らはその使い方を忘れてしまっただけ。それを、ドロシーと旅をすることによって思いだしていったのです。それって私たち人間が現実世界で悩んでいるものと一緒じゃないでしょうか？オズも私たちと一緒にだと思います。オズはただのドロシーと一緒にの世界から来た人間だったのに、周りが「大魔法使い」だと勝手に思い込み、オズを恐れてなんでも願いを叶えてくれると言ったためオズは誤解を解きませんでした。長いこと暮らしてうちに正体を明かすに明かせなくなってきてしまいました。こんなことよくありませんか？最初はちょっとしたことだったから黙っていた、誤解を解かなかった。しかし後々どうしようもなくなってしまった。そんなとっても私たちに似ているキャラクターたちだから、読んでいてとても共感できるし、応援できるから多くの人に愛されているのではないかと思います。

V. 物語を読んで

私たち人間は、1人1人がみんな良いところを持っていて、誰もが輝く所を持っています。その輝きをお互いに認め合うことが出来れば、きっとみんな素敵な友達になれます。人間、自分がうまくいかなくてイライラしたり、友達のせいにしたりすることは、しょっちゅう、誰にだってあります。しかし、そんな時こそ、ドロシーたちのように、相手を思いやって、誰かの為に動くことを忘れないでほしいです。私たちは一生、人と助け合っていかなければなりません。そのためには、まず1番に相手を思いやる気持ち、大切に思う気持ちを決して忘れないでください。私はこのようなどとても大切なことを「オズの魔法使い」から、学んだ気がします。みなさん!!もし忘れそうになった時は「オズの魔法使い」を読んでください。そうすれば、きっと大切な何かが見えてくるはずです。

参考文献

○オズの魔法使い (ライマン・フランク・ボーム著) 訳 武田正代 山形浩生

○オズの魔法使い Wikipedia

(にのみや・あやな：中学校教員養成課程 保体)

『エルマーのぼうけん』

:化学者ルース・スタイルス・ガネットが愛した色と数の世界

松江志穂子

<作品について>

○アメリカ児童文学『MY FATHER'S DRAGON』は1951年にアメリカで発行され、1963年に『エルマーのぼうけん』として日本で発行される。

○その後、1964年に『エルマーとりゅう』、1965年に『エルマーと16びきのりゅう』が発行され3部作品として広く読まれる。

○また『エルマーの冒険』というタイトルでアニメ映画として1997年7月5日に公開されている。

<作者について>

作：ルース・スタイルス・ガネット (Ruth Stiles Gannet)

1923年ニューヨーク市で生まれる。バツサー大学卒業。化学者として医学研究所や電波探知機の研究所で勤務。児童図書協議会の職員として働く。

絵：ルース・クリスマン・ガネット(Ruth Chrisman Gannet) (作者の義理の母)

1896年アメリカ・サンタアナ市生まれ。現代アメリカの挿絵画家の中で最も有名な画家の一人。1979年没。

訳：渡辺茂男

1928年静岡県生まれ。慶應義塾大学卒業。ウェスタンリザーブ大学院卒業。ニューヨーク公立図書館児童部にて勤務。慶應義塾大学図書館化学教授。2006年没。

ガネット『エルマーのぼうけん』

9才のエルマーはある日、町で出会った猫からジャングルで輸送機としてひどい扱いをされているりゅうの子どもの存在を知らされる。飛行機乗りになるという夢を持っているエルマーは飛ぶことに関して人一倍敏感であり、その空を飛びりゅうの話を知りて大変興味を持ち興奮した。そして、勇敢で好奇心旺盛なエルマーは「飛びたいさ。飛べるなら、何でもするよ」というような意気込みですぐさまりゅうを助ける任務を引き受けてしまったのである。旅へ出る前に、猫からジャングルまでの道のりやそこに住む動物たちのこと、必要な持ち物などを詳しく教えてもらい、こっそりと夜の港の船に侵入し、いよいよ危険な大冒険へと出発した。

ジャングルにはたくさんの猛獣が住んでおり、エルマーはもちろんりゅうの所にたどり着くまでに何度も猛獣の餌食になりかける。しかし、猫から指示された道具を上手く使い、狡猾かつちょっと笑ってしまいそうな方法で普段怠け者の動物たちをだましていく。最後は、ジャングル中の動物を巻き込み、間一髪のところできゅうを助けだすことに成功した。

その後エルマーとりゅうは空を飛んでそれぞれの故郷へと帰るのであるが、りゅうの故郷ではりゅうの15匹の家族が人間によって洞穴の中に閉じ込められていた。そこで動物園に売り飛ばすという人間の計画を耳にしたりゅうは、何としてでも家族を助けなければならないと思い、エルマーに助けを求めに行った。途中何度か町の人々に目撃されながらもエルマーの所までたどり着き、さっそく猫も入れた3人で家族を助ける計画を立てた。全て音色の違う笛とラッパが16ずつ・ピストル1丁・ピストルの弾・丈夫なひもを1束・板チョコ6枚・干しいちじく6箱を持って、さあ出発だ！

化学者ルース・スタイルス・ガネットが愛した色と数の世界

I. 赤色×空色×黄色

赤色・青色・黄色と言えは色の三原色であり、りゅうの体色もほぼこの3色で構成されている。空色については、エルマーの「将来飛行機を持つ」という夢・空を飛ぶことへの憧憬を満たしてくれた「掛け替えのない存在としてのりゅう」、そして何よりも2人で空間と時間を共にし絆を強めてきた「空」を強調して表現したのであろう。また、りゅうの家族は彼を含めて16匹で成り立っているのであるが、その一匹一匹の色や模様の違いには私たちの想像を一層楽しませてくれるような面白い個性（違い）があり、それと同時に全体的には家族としての一体感を強めているような統一感も感じられる。

<りゅうの16匹の家族>

○共通点：金色の羽・赤色の足先と爪と角

○父：空色一色/母：黄色一色

○女兄弟6匹：みな緑色ではあるが、厳密に言うとは黄緑色から青緑色まで様々な緑色のりゅうがいる。

○男兄弟8匹：みな空色と黄色が基調ではあるが、縞模様の間隔が違っていかつ、縦縞や横縞があったり、水玉模様やぼち・ぶちがあったり、パンダのように黄色と空色が配置（しかし頭と体と足一本が黄色で、他の足3本としっぽが空色という面白い配置である）されていたりする。

上記で述べた色の三原色（つまり赤・青・黄）を多様に組み合わせて混ぜ合わせると、白と黒以外の単色ができるが、まさにこのりゅうの家族も父・母の色を基礎とした様々な色が個性豊かに表れている。特に、女兄弟の黄緑色から青緑色のグラデーションはまさに父・母の2色の色の割合を少しずつ変えたものであり、6匹の色を順番に並べて想像した読者はその美しさと、またそれぞれの微妙な違いの中にも色の魅力を感じ取ることができるであろう。混色の素晴らしさを見事に体現したものとと言える。

さらに、作者はこのりゅうの家族のカラフルな色の光景が「イースターのお祭りの行列みたいだ」と記述している。イースターのお祭りとは復活祭とも呼ばれ、十字架にかけられて死んだイエス・キリストが3日目によみがえったことを記念する日である。祭りの行列は、太い鎖をイエス役の人につけて引きずり回すというとても危険なものであるが、参加したい人は誰でもグループをつくって申請することができる。また、その他の習俗にはイースターエッグとイースターバニーというものがあり、前者は殻に鮮やかな色彩を施した美しい包装をしたゆで卵を出す習慣であり、現在ではチョコレートで作られた卵やお菓子を詰めたプラスチックの卵で代用されている。両者とも古来から豊穡のシンボル（卵とうさぎ）としてお祭りの際に用いられてきた。本書には記述されていないが、このイースターエッグもエルマーの世界の色の鮮やかさを感じさせるものがある。

イースター祭りの行列

<<http://www.ima-earth.com/contents/entry.php?id=2009422155749>>

このように、この作品では様々な色彩の主張がされており、読む者を視覚的に楽しませる実力と魅力が確実に存在する。私自身もその魅力の虜となった一人であり、今なお記憶に刻まれた色彩の残像が、本レポートを書くにあたってこの作品を選ばせた所以でもあることは事実と言えよう。また、私が児童としてこの作品を読んでいた頃の影響力は多大なものであり、夏休みの工作で紙粘土を使用しエルマーとりゅうの造形物を作ったり、授業の一環としてグループで「エルマーのぼうけん」の紙芝居を作ったりした経験がある。つまり、私にとってこの作品は単に心に残る米文学作品というものではなく、幼少時代の多大な可能性を秘めた芸術的創造力を高めてくれた掛け替えのない存在なのである。ちょうどエルマーとりゅうのように。

Ⅱ. 化学者ルース・スタイルス・ガネット

この作品の作者、ルース・スタイルス・ガネットはニューヨーク市で生まれ、パッサー・カレッジを卒業した後、しばらく化学者として医学研究所、及び電波探知機の研究所で働いていたが、自分の本当の興味は児童文学にあると悟り、児童図書協議会の職員として働くようになったとある。化学者から児童文学作者への移り変わりは稀のように思えるが、この作品の中にはやはり化学者を思わせるような特徴が多く見受けられ、読んでいる人が一層物語を楽しめるような役割を果たしている。

まず、エルマーとりゅうがみかん島から自宅へ帰る途中嵐に見舞われカナリアの島に漂着する場面であるが、そこで流行している病気が「しりたがり病」なのである。島の王様が宝箱の中身を知りたくて病気になる、さらに島のカナリアたちも王様が何を知りたがっているか秘密にされているためそれが知りたくて病気になるという少し込み入った展開である。ともかく、知りたくて仕方がない気持ちが病にまで発展するという内容は研究を職としてきた化学者としての経験が反映されているようにも感じられる。

さらに、この作品ではどの部分を読んでも読者が始終気になって仕様がなくなるような要素が含まれている。それは、どんなものにも数字をつける作者の記述法であり、時には無意味とさえ思えるような綿密かつ徹底したこだわり様が感じられる。例えば、「エルマーの持って行ったものは、チューインガム・桃色の棒付きキャンディー2ダース・輪ゴム1箱・黒いゴム長靴・磁石が1つ・歯ブラシとチューブ入り歯磨き・虫眼鏡6つ・先の尖ったよく切れるナイフ1つ・くしとヘアブラシ・違った色のリボン7本・・・ピーナッツバターとゼリーを挟んだサンドウィッチを25と、リンゴを6つ持ちました。」や「あんまりお腹が空いていたので、トマトスープを3杯と、ライ麦のパンを5切れと、ミルクをコップに4杯と、たまごの目玉焼きを6つと、大きくきったカステラを2つ食べました。」等の記述である。確かに、前者のエルマーの所持品に関しては後々ジャングルで出くわす動物たちの数に一致しており十分前触れの役割を果たし、作品の完成度を高める要素として効果的であるかもしれないが、後者の記述のように結局最後までその数字の意味を見いだせないものも多々あるのだ。特に異常なのがみかんの数である。この作品のストーリーではみかん島を経由してジャングルや自宅へと移動をするため、みかんを食べる場面が相当な回数あるのだが、その数の足し引きにはどのような意味が込められているのか解説することができなかった。

ということなどがわかって来ると面白くなってきて書きやすくなった。私自身も普段こういう課題が出された時にしか本は読まないが、これを機に色々本を読んでみようと思った。

<みかんの数の変異>

(※「-」マイナスマークは食べたという意味であり、「=」イコールマークはいくつ残ったかを示すものである)

- ① みかん島からジャングルへ行き、またみかん島へ帰ってくる間
31リュックにつめる-7+7つめる-8-3-3-4=13
- ② みかん島へ帰ってきてリュックからではなく木からそのまま取った分木から直接とって19食べる。
- ③ みかん島から自宅まで69リュックにつめる-11-15-4-8-12-9-10=0

さらに、①のみかんの最終的な残存量についてであるが、最後にみかんを4つ食べた場面において「あと13コしか残りません」という記述があるにもかかわらず、その後リュックサックから13のみかんを取り出して食べたという記述がなく、②・③とまた新しいみかんの採取に取り掛かっているのだ。数字にこだわる化学者ならば、結果をぼやかしたり適当な記述をすることはないと予想されるが、やはりその行方は特定できず、それならば逆に数字にこだわったのではないかと考えるようにもなった。つまり、キリスト教が主な国教となっているアメリカでは13という数字はキリストが死んだ日として不吉な数字とされているため、何かの暗示のために読者を惑わすよう仕向けたのではないかと考えたのである。もちろん、このような推測は勝手な判断であり、それを裏付ける理由も提示することは出来ないのだが、気づけばこのような思索をする私は少なくとも作者の数字による妙技、もしくは数字の世界への誘惑に完全にのめり込んでしまっていたことは確かである。多くの読者がこの本を読み進める際、意識するでもなくペンを片手に取り数字を記録してしまっていたことであろう。そう、エルマーの作者ガネットは、豊かなユーモアと現実味あふれる細部描写をナンセンスと融合させることのできる作者であると高い評価を受けている人物なのである。

(まつえ・しほこ：欧米言語文化講座 英語圏)

<参考資料>

URL

作者について

<http://www.fukuinkan.co.jp/ninkimono/elmar/writer.html>

復活祭について

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BE%A9%E6%B4%BB%E7%A5%AD#.E3.82.A4.E3.83.BC.E3.82.B9.E3.82.BF.E3.83.BC.E3.83.BB.E3.82.A8.E3.83.83.E3.82.B0>

アンドルー・ラング 『シンデレラーガラスのくつのものがたりー』

：シンデレラのストーリーは著者によってどのように違うのか

山口由華

アンドルー・ラング『シンデレラーガラスのくつのものがたりー』

むかしむかし、一人の男の人がいました。男の人はある女の人と二回目の結婚をしたのですが、その女の人は、いつもえらそうにして、お高くとまっている人でした。女の人にして二回目の結婚で、二人の娘がいました。その娘たちときたら気まぐれで、本当に何から何まで、その女の人にそっくりでした。同じように男の人も、幼い娘がいました。誰よりも思いやりがあって、優しい心をもった少女でした。

結婚式がとり行われてまもなく、継母はその本性をあらわしはじめました。かわいらしくて、人がよい、この少女がいると、自分の娘がなんともみじめにおもわれるので、ひどく邪魔に思えました。そこで少女を、とびきりみじめな仕事につかせようと思いたちました。お皿を洗わせ、テーブルをふかせ、自分や娘たちの部屋をめいっぱい掃除させました。部屋までみじめにしようと、せまくて暗い、屋根裏部屋においやってしまいました。

少女は仕事がおわると、いつもかまどのある小部屋へ行きました。そこは灰でいっぱい、いつもの中で座っていました。そのためみんな少女を『灰かぶりひめ』という意味の、『シンデレラ』と呼びました。

あるとき、王子様がダンス・パーティを開くことになりました。シンデレラの家の二人の姉にも声がかかりました。二人は大よろこびで、さっそくドレスはどれにしようとか、あれこれなやみはじめました。けれども、シンデレラにしてみれば、面倒なことが一つ増えただけでした。というのも、姉たちの服をアイロンがけしなくちゃならないし、フリルをつけなくちゃいけない、全部シンデレラの仕事なのですから。

ついに、楽しいその日がやってきました。二人はお城へ出かけていきました。二人の姿が見えなくなってしまったとき、シンデレラは突然悲しくなって、泣き崩れてしまいました。その時、シンデレラの乳母が、泣いているシンデレラを見つけて、どうしたの、とききました。シンデレラは涙が次から次へと出てくるばかりで、ことばが出てきませんでした。そんなシンデレラを見ていた乳母は、じつは、妖精の国生まれの、魔法使いだったのです。「おまえは、ダンス・パーティに行きたいと思っている。違うかい？」シンデレラは、「はい。」とためいきまじりに答えました。乳母はシンデレラにむかって、言いました。「なんとかしてやろうじゃないの。」

それから乳母は、シンデレラを部屋に連れて行き、言いました。「庭に出て、カボチャをもってきておくれ。」シンデレラはすぐに、畑の中で一番大きなカボチャを持ってきました。でもシンデレラは、このカボチャのどこをどうして、ダンス・パーティに行けるようになるのか、まったく思いもつきませんでした。ところが、乳母がカボチャをステッキでちよんとたたくと、カボチャはたちまち、大きくて立派な馬車に変わってしまいました。それから乳母はあつというまに、ネズミをステッキでたたき六頭のウマに、ドブネズミを御者に、六匹のトカゲを六人のめしつかいに変えてしまいました。乳母は、シンデレラにいいました。「ほおら、もうここには、ダンス・パーティに行くには十分な、馬車もお供も、そろったよ。」シンデレラはぼかんとしていましたが、あることに気がつきました。「あの、でも、わたし、こんな汚いボロでは、行けない。」そこで、乳母はステッキでシンデレラの服をたたきました。するとどうでしょう、みるみるうちに、シンデレラの服は金や銀、宝石などをちりばめた、立派なドレスに変わってしまいました。そして、乳母は、一足の小さなガラスのくつをシンデレラにあたえました。世界のどんなものよりかわいらしい、素敵なくつでした。こう

して、シンデレラはすっかりおめかしして、馬車に乗り込みました。けれども、乳母は最後に、シンデレラにある注意をしました。ダンス・パーティを楽しむのはいいけれど、夜中の12時を超えてはいけませんよ。もしちょっとでも過ぎたら、みんなもとにもどってしまうよ、と。シンデレラは乳母に、12時までにはダンス・パーティから帰ってきます、と約束しました。それから、すぐさま、馬車は走りだしました。

王子様は、素敵なお姫さまがやって来たときいて、お迎えしようと、さっと出てきました。シンデレラが馬車からおりると、王子様が手を取って、ダンス・パーティの会場へ、案内してくれました。すると、会場はしいんとしずまりかえって、しばらくすると、ざわざわとみんなは騒ぎだしました。

「おい、あの人、たいへんな美人だぞ。」

「ねえ、あの人、たいへんな美人じゃないかしら。」

王様は、もうお年でしたが、それでもシンデレラの美しさには、びっくりしてしまいました。王子様は、一緒にダンスをしましょう、と手をひいてシンデレラをフロアに連れていきました。

シンデレラがこうして、パーティを楽しんでいるうちに、11時45分の鐘がなりました。シンデレラは慌てて、会場をあとにしました。

家にかえると、シンデレラは急いで、乳母を探しました。そして、お礼をいいました。あともう一つ、シンデレラには言わなければならないことがありました。明日も、ダンス・パーティに行きたい、ということです。というのも、王子様が、明日もぜひきてください、といってくれたからです。

翌日、シンデレラは昨日のパーティのときより、もっとおめかししていきました。王子様はずっとシンデレラのそばにいて、いつも優しい言葉をささやいてくれました。あまりにも楽しかったものですから、シンデレラは時間のことなんて、すっかり忘れていました。するとどうでしょう、12時の鐘がなっているではありませんか。シンデレラはびっくりしてとびあがり、急いで会場をあとにしました。王子様は一生懸命追いかけてきましたが、シンデレラはもう行ってしまった後でした。けれど、シンデレラのガラスのくつが、片方残っていました。王子様はそっとくつをひろいあげました。シンデレラは息をきらしながら、なんとか家へかえりました。服はすっかりもとのボロにもどっていて、きれいだった馬車や服などはないありません。ただ、お城で落としたガラスのくつのもう一方だけが、残っていました。

何日かたった日のこと、トランペットがなって、王子様のことで、おふれがありました。なんと、ひろったガラスのくつが、ぴったり足に入る女性を、王子様の花嫁にするというではありませんか。王子様にいわれたお役人は、いろいろなお姫さまに、そのくつをはいてもらいましたが、ぴったり入る人は、だれもいませんでした。

くつはまわりまわって、シンデレラの家にもやってきました。姉たちはなんとかしてくつに足をおしこもうとしましたが、どうにもこうにもなりません。シンデレラはいいました。「わたしにも、あわないかどうかだけ、やらせてもらえませんか？」姉たちはぶつとふきだして、シンデレラをからかいました。でも、くつの持主を探しているお役人は、シンデレラをじっと見つめました。お役人は、シンデレラがとても美しい顔をしていると、気づいたのです。そこでお役人は、こういいました。はいてごらんささい、誰にも試してみよ、といわれておりますので、と。

お役人が、シンデレラをイスに座らせ、足にくつをあてがうと、シンデレラの足に、ぴったり入ったのです。二人の姉は、びっくりして、何も言葉が出てきませんでした。でも、次の瞬間、もっとびっくりしました。シンデレラが、ポケットからもう片方のガラスのくつをとりだして、自分の足にはめたからです。そこへ乳母がやってきて、シンデレラのボロをステッキでちゃんとたたきました。シンデレラの服は、みるみるうちに、前よりもっときれいな服に変わってしまいました。さすがに二人も、ダンス・パーティで見たきれいなお姫さまが、シンデレラだったことに気がつきました。二人はシンデレラに、今までひどいことをたくさんしましたが、どうか許してください、とお願いしました。シンデレラは二人の顔をあげさせて、ぎゅっとだきしめ、こういいました。「いいんです、ほんとうに、いいんです。ただ、わたしをいつも好きでいてくれたら、それだけでいいんです。」

シンデレラはその姿のまま、王子様の前へ案内されました。王子様は、今日のシンデレラが、今までの中で一番美しい、と思いました。

数日後、シンデレラと王子様は結婚式をあげましたとき。

シンデレラのストーリーは著者によってどのように違うのか

I. 作品について

『シンデレラ』(Cinderella)は、童話の一つで、その主人公である。『灰かぶり姫』・『灰かぶり』・『サンドリヨン』ともいう。グリム兄弟によるもの、シャルル・ペロー(Charles Perrault,1628-1703)によるものが知られているが、より古い形態を残していると考えられている作品としてジャンパティスタ・バジレの『ペンタメローネ』に採録された「灰かぶり猫」が挙げられる。中国にも楊貴妃がモデルと言われる「掃灰娘」という類話があるなど、古くから広い地域に伝わる民間伝承である。日本ではペロー版が有名である。児童向け作品として絵本・アニメなど様々な形で公表されている。なお、英語: cinder、フランス語: cendre、ドイツ語: Asche、イタリア語: cenere などはいずれも「燃え殻」「灰」を意味し、各作品名はこれらの派生形である。和訳名の『灰かぶり姫』もこれらを汲んだものである。

II. ペローの描くシンデレラ

ガラスの靴を履かせ、カボチャの馬車に乗せるというモチーフを付け加えたのが、フランスの文学者シャルル・ペローであるといわれている。

III. グリム童話の中のシンデレラ

グリム童話はペローの影響を強く受けているといわれるが、この物語に関してはペローのものよりも原話により近いのではないかとされている。ペローとの違いとして主に1、魔法使いが登場しない(当然カボチャの馬車も登場せず、代わりに白鳩が主人公を助ける)。2、美しいドレスと靴を持ってくるのは、母親の墓のそばに生えたハシバミの木にくる白い小鳥。3、ガラスの靴ではなく、一晩目は銀、二晩目は金の靴である。4、シンデレラが靴を階段に残したのは偶然脱げたのではなく、王子があらかじめピッチを塗って靴が絡め取られたから。5、王子が靴を手がかりにシンデレラを捜す際、連れ子の姉たちは靴に合わせる為にナイフで足(長女が爪先、次女は踵)を切り落とす。しかしストッキングに血が滲んで見抜かれる。6、物語の終わり、シンデレラの結婚式で姉二人はへつらって両脇に座るが、シンデレラの両肩に止まった白鳩に復讐としてチェスト(目潰し)されたところで物語が終わる。などが挙げられる。

IV. バジレの描くシンデレラ

ペローやグリムよりも以前の17世紀の南イタリアで書かれた『灰かぶり猫』は、ペローやグリムよりも古い形と考えられ、両者と異なる部分がある。主人公のゼゾッラ(シンデレラにあたる)と継母(当初は裁縫の先生)は実は同志で、ゼゾッラと不仲であった最初の継母を殺害して、継母と父の大公を再婚させるが、後に継母が6人の実娘を迎えるとゼゾッラを裏切って冷遇する。その後、父の大公が旅行中に継母の娘には豪華なお土産の約束をするが、ゼゾッラはただ妖精の鳩がくれる物が欲しいとだけ答え、その後大公が妖精から授かったナツメの木の苗を土産として与えられたゼゾッラはその木を大切に育てる。ナツメの木は実は魔法の木で彼女は木の魔法によって綺麗に着飾ってお祭りに参加して国王の注目を集める。国王の従者に追いかけられたゼゾッラは履いていたピアネッレ(17世紀のイタリアで履かれていた木靴)を落としてしまう。斎日に国王が国中全ての娘を召しだして靴を履かせた結果、ゼゾッラだけが靴に合致して王妃に迎えられる。継母の6人の娘はその時の屈辱を母親に伝えたところで幕が閉じる。バジレの作品の最大の特徴は最初にゼゾッラ(シンデレラ)が最初の継母を衣装箱に挟んで首を折って殺害する場面があることである。このシーンはグリム童話の1つである「ねずの木」と共通する側面を有している。

このように、著者によってシンデレラのストーリーは大きく違っている。さまざまなシンデレラストーリーを読み比べてみるのもよいだろう。

(やまぐち・ゆか：欧米言語文化講座 英語圏)

A.A.ミルン『クマのプーさん』(プー横町に、イーヨーの家が、たつおはなし)

:愛される「お婆かさん」

大沢麻友

A.A.ミルン『クマのプーさん』(プー横町に、イーヨーの家が、たつおはなし)

ある日、クマのプーは、ほかに、なにもすることがないので、なにかしようと思いました。コブタは、なにをしているか、みてこようとおもって、コブタの家に出かけました。しかし、コブタは家にいませんでした。それでも、まず、プーは、ねんのために、どんどんと、戸をたたいてみることにし……そうやって、コブタのへんじのないのをまつあいだ、からだか、あたたかくなるように、とんだりはねたりしました。すると、きゅうに、うたがひとつ、あたまにうかんだのです、「げんきにひとにきかすうた」とでもいいたいような、いいうたが。

ゆきやこんこん ぽこぽん
あられやこんこん ぽこぽん
ふればふるほど ぽこぽん
ゆきやふりつもる ぽこぽん
それでもぼくの ぽこぽん
それでもぼくの ぽこぽん
つめたい このあし ぽこぽん
ああ だれがしろ ぽこぽん

「ぼくは、こうするんだ。まず家にかえって、いま、なん時だかみる。それから、くびまきでもひっかけて、イーヨーのところへ出かけて、このうたうたってやるんだ。」

あまりむちゅうで、かんがえながらいったものですから、とつぜん、目のまえに、じぶんのいちばんじょうとうのいすに、こしかけこんでいるコブタをはっけんしたときには、とてもびっくりしました。そして、あたまをかきながら、いったい、ここは、だれの家なんだろうか、とかんがえこんでしまったのです。

「きみ、出かけてるのかとおもったよ。」

「ちがうよ、プー。出かけてたのは、きみさ。」

それから、プーは、何週間かまえから、十一時五分まえでとまっているとけいのみあげました。

「プー。ぼく、ちょっと、こうしたら、どうかとおもったんだ。つまりね、いまは、家にかえって、きみのうたをれんしゅうして、それから、イーヨーにあったとき、それ、うたってやっちゃ、どんなもんだろ？」

「だけど、れんしゅうしに家にかえるなんて、つまらないよ。だって、これは、とくに、ゆきのなかでうたう『そとあるきのうた』なんだもの。」

ふたりは、イーヨーのすんでいる「イーヨーのしめっ地」にやってきました。

「ぼく、かんがえたんだけど、だって、ほら、かわいそうに、イーヨーは、すむとこがないじゃないか。コブタ、きみには、家があるだろ？ぼくだって、家はもってる。だからさ、

ぼく、イーヨーに家をたててやろうじゃないかって、かんがえたんだ。」

「すばらしいかんがえだ。このまつ林のむこうがわに、ぼうが、山もりあるよ。ぼく、みたんだ。うんとこさと、あるんだ、つみあげて。」

いっぽう、クリストファー・ロビンは、そのあさ、家で、アフリカまで行って、かえってくるあそびをしていました。そこへ、やってきたのが、イーヨーでした。

「わしは、わしのちいさな森のわきに、家をたてましたのさ。ところが、わしが、けさ、出かけるときには、あった家が、かえったら、なかったんですわい。」

そこで、ふたりは、まつ林のわきの原っぱのすみの、イーヨーの家が、もうなくなっている場所までやってきました。

「そうれね。ぼうきれ一本のこらず！」

「ほら、きこえるだろ？プーだ！それから、コブタと！」

「家ができたよ！」と、ふとい声が、うたいました。

「ぽこぽん！」と、きいろい声が、うたいました。

クリストファー・ロビンが、イーヨーの家がなくなったという、かなしいできごとについて、はなしました。

「その家どこにあったんです？」

「ここに。」

「ぼうで、できてたんですか？」

「そうじゃ。」

「あれ！」

「ずっとあったかいんです。まつ林のあっちがわの、イーヨーの家のあるほうが。」

そして、みんなで、かどを、ぐるっとまわっていってみると、そこに、とてもすみやすそうな、イーヨーの家があったのです。

「ふしぎはんぜん。わしの家じゃ。わしは、わしが、たてたといったところにたてたんじやから、ここまで、かぜにふきとばされたにちがいない。」

イーヨーをそこへのこして、三人はかえりました。

そして、クリストファー・ロビンが、さんざんわらってしまうと、三人は声をそろえて「そとあるきのうた」を、うたいました。

愛される「おばかさん」

I. 作家と作品について

A.A.ミルンとは、正式にはアラン・アレクサンダー・ミルン (Alan Alexander Milne, 1882-1956) というイギリスの作家である。代表作は、『クマのプーさん』であるが、児童文学作品のほかにも推理小説など多くの作品を著している。また、『クマのプーさん』の英語名は"Winnie-the-Pooh"であり、その題は、彼の息子のテディベアのWinnipegと、ミルン親子が見た白鳥のPoohからヒントを得て名づけられた。また、登場人物のクリストファー・ロビンは、彼の息子であるクリストファー・ロビン・ミルンがモデルとなっており、その他のキャラクターも、クリストファーのテディベアがモデルとなっているものが多い。

II. 挿絵について

『クマのプーさん』の挿絵はE.H.シェパードによるものである。『クマのプーさん』を原作として作られたディズニーアニメの『くまのプーさん』の方が私たちには見慣れているため、原作の方が目新しい感じがしてしまうが、素朴でほのぼのとした様子が非常にかわいらしい。また、主な違いとしては、原作では服を着ていないプーがディズニーでは着ていたり、緑の服を着ているコブタ (ピグレット) がディズニーではピンクの服をきていたり…というようなものである。

III. 作品が愛される理由

今や、この作品を知らない人はほとんどいないだろう。これほどまでに広く、長く愛される理由は、キャラクターたちのやりとりがおもしろく、また、その微笑ましい様子に読者の心が和むからだろう。ディズニーアニメでクリストファー・ロビンがプーに対して「プーのおばかさん」と言うシーンをよく見るが、プーは本当に「おばかさん」なのである。今回紹介した「プー横町に、イーヨーの家が、たつおはなし」でも、プーは他のことを考えすぎて自分の家をコブタの家と勘違いしてしまったのである。今回は登場していないものもいるが、他のキャラクターも基本的にはプーのように「おばかさん」な性格のものが多く、やりとりにズレが生じていることもしばしばある。しかし、それでもキャラクターたちはいつも一生懸命で、何事も本気で考え、行動している。そこに愛らしさを感じる。

IV. 『クマのプーさん』のススメ

『クマのプーさん』は大人でも子どもでも楽しめる作品であるが、私は、むしろ心にゆとりのない大人に読んでもらいたいと思う。この作品を読めば、きっと緊張感もほぐれ、穏やかな気持ちになることができるだろう。誰もが知る作品であるからこそ、一度原作を読んでおくのもよいのでは。

参考文献

『絵本 クマのプーさん』ぶんA.A.ミルン えE.H.シェパード やく石井桃子 岩波書店

(おおさわ・まゆ：幼稚園教員養成課程)

C. S. ルイス 『ライオンと魔女』

: 勇気と裏切らない心

藤原涼子

C. S. ルイス 『ライオンと魔女』

時は第二次世界大戦。ピーター、スーザン、エドモンド、ルーシィの4人兄弟は、空襲を避けてロンドンから片田舎にあるお屋敷に疎開しました。

そしてある雨の日、末っ子のルーシィがあるがらんとした部屋にあるタンスの奥へと進んでいくと、雪の降る真夜中の森に出てしまいました。そして目の前には腰から上は人間で、体はやぎのフォーンがいました。フォーンはタムナスと名乗りここがナルニアという国だと教えてくれました。そしてルーシィは、ナルニアを支配するとんでもなく恐ろしい“白い魔女”の話の話を聞きました。

元の空き部屋に戻ったルーシィは、他の3人に今見てきたことを興奮しながら話しました。しかし誰にも信じてもらえない上に、さっきまでナルニアに通じていたはずの所はただのたんすの板になっていました。

数日後、エドモンドがなんの気なしに例のたんすの中にかくれどンドン奥に進むと、その内雪の降る森の中に出てしまいました。「ルーの言っていたことは本当だったんだ！」そう思ったとき、鈴の音と共に、美しくもつめたい表情をした女の人の乗ったそりがエドモンドの前で止まりました。

その女の人は、自らを“女王”だと名乗りました。そしてエドモンドがアダムの息子だと分かると急に声色を変え、エドモンドに好物のプリンをたくさん与えました。女王によって、魔法をかけられたプリンを食べたエドモンドは、いつの間にか兄と姉と妹がいること、妹はすでにナルニアにきたことがあり、その時フォーンに会ったことなどを全て話してしまいました。プリンをもっともっとと欲しがるとエドモンドに魔女は、「次は兄弟を連れてあの二つの山の間に我が館にきなさい。そうすれば、プリンをもっとやるだけでなくそちを王子にしてやろう。ただし、今のことは兄弟には絶対言ってはならないからね。」と、エドモンドをうまく言いくるめたのでした。

そしてまた数日後、子どもたちはたまたまたんすの中に入りました。次第に4人はたんすの中が寒いことや自分たちが木にもたれていたことに気が付きました。そうしていつの間にかナルニアにたどり着いた4人は、ルーシィの案内でタムナスさんの家へと向かいました。ところが驚くことにタムナスさんの家は、めちゃめちゃに壊れていたのです。どうやら、魔女によって連行されたようです。「タムナスさんを助けたいけどどうしたらいいのかしら…」と困っている時に、タムナスさんの知り合いのビーバーと出会いました。そして4人にこう言いました。「アスランが動き始めた噂です。もうこのナルニアに上陸した頃でしょう。」アスランがどういう人か子どもたちは知りませんでした。みんなその言葉に不思議な感じを受けたのでした。

素敵な食事が終わり、子どもたちはビーバーにアスランのことを尋ねました。アスランは

ナルニアの王で、古い言い伝えでアスランが来れば悪い時代は終わると言われており、とうとうナルニアに戻ってきたとのことなものでした。また、悪い時代がおわるには4人の人間がケア・パラベル王座に就くことが必要だという古い言い伝えも教えてくれました。そして、そのアスランと子どもたちが会えるよう自分が石舞台に案内するとピーターは言いました。そこでピーターが魔女と自分たちの関係を尋ねると、2人のアダムの息子と2人のイヴの娘がケア・パラベルの王座に就くと、白い魔女の時代が終わるだけでは魔女の命までもが終わるということを教えてくれました。その時ルーシィが、エドモンドがいないことに気づきました。実はエドモンドは、アスランと自分たちが石舞台で会うところまで聞いてそっと家から出て行き、ふりしきる雪の中、女王の城へと歩いていったのでした。女王に今さっき聞いた話を順にしていきましたが、アスランと石舞台で会う話のところまで女王は表情を変え、急いで石舞台に向かう準備をするよう小人に命じました。

ここで今度はピーター夫婦と3人の子どもたちの方に話を戻します、一同は石舞台に向けて出発しました。何時間か歩き、仮眠をとっていた時、突然鈴の音が聞こえました。全員が魔女のそりの鈴の音だと思いましたが、その鈴の音はなんと、サンタのそりの音だったのです！魔女の魔法でクリスマスが来なくなっていたナルニアにクリスマスがやってきたのです！サンタはピーターに1個の盾と1振りの剣を与えました。スーザンには1張りの弓、矢でいっぱい矢筒、小さな象牙の笛を与えました。ルーシィには、どんなけがでも治る薬の入った瓶と、1振りの短剣を与えました。そしてサンタはたちまちどこかにいってしまいました。一同も再び立ち上がり、出発しました。そして一同は、魔女の魔法のどこかに狂いが来たと感じていました。日が落ち花々は閉じようとし始めた頃、ようやく石舞台へとたどり着いたのでした。石舞台は原の真ん中にあり、奇妙な線や形が至る所に刻まれた大きく頑丈な一枚岩でした。そしてその原の片隅には素敵なテントが張られていました。一同がふと右手を見ると、そこにはたくさんの動物に囲まれたライオン——。アスランが立っていました。子どもたちはアスランの顔を見ようとしましたが、その威厳のある王者の目をちらりと仰ぎ見るだけで精一杯でした。怖じ気づきながらも、ピーター、スーザン、ルーシィの順に挨拶をし、エドモンドが魔女の味方についてしまったことを話しました。アスランとピーターが2人で話をしていると、だしぬけにスーザンの角笛がなったのでした。急いでテントに駆けつけると、魔女の手下のオオカミがスーザンに襲いかかろうとしているではありませんか！ピーターは死に物狂いでオオカミに剣をふるい、なんとかその獣を倒しました。

今度はエドモンドの方に話を変えなければなりません。エドモンドは歩いて歩いてこれ以上歩けないほど歩かされました。するとどこからか蹄のとどろきなどが聞こえてき、あっという間にエドモンドの周りは恐ろしい騒ぎになりました。そのうちにエドモンドはアスランの送った救助隊に助けられ、共に石舞台に戻ることになりました。しかし残念なことに魔女はまだ捕まっていないのでした。次の朝、エドモンドは3人の兄弟と仲直りしました。その後魔女がやってきて、一同に古くナルニアが出来た頃に下された"もとの魔法"の話をし出し、それに則りエドモンドをよこせと言いました。するとアスランが「皆の者、下がってくれ。」と言い、魔女と2人でひそひそ話し始めました。しばらくたってアスランが「話が着き、エドモンドをよこせというのをやめてくれた。」と言い、話し合いの結末を待っていた全ての者が息を吹き出し安堵した。そして魔女はそそくさと帰って行きました。

魔女が逃げていくとすぐに一同は、ベルナの渡り場へと移動しました。夜になり、スーザンとルーシィはテントの外へと出ました。するとちょうどアスランが森の中に入っていく所でした。何も言わず、2人は後をつけましたが、広い草原を歩いているとき、2人はアスランに見つかってしまいました。アスランは途中までならとついてくることを許してくれました。そして石舞台の少し前の所に来たとき、「何が起ころうとも決して姿を見せてはいけな

いよ。」と言って、行ってしまいました。それからの2人が見たことはこうだったのです。鬼やオオカミ、たくさんの妖怪といった魔女の味方がアスランを取り囲み、手足をくくり、アスランの美しいたてがみを切ってしまいました。そして魔女が石で出来たナイフを持って、アスランに近づいてきました。そして震える声でこう言いました。「では約束通りあの子の代わりに貴様を殺してやろう。死ね。」子どもたちは見るに堪えず、殺されるところは見ませんでした。

魔女たちがどこかへ行き、2人が声を立てて泣いていたその時。ガラガラバーン！！と言う大きな音がしました。見ると、そこにアスランが立っているではありませんか！その復活は、なんの裏切りもない者が進んでいけにえになるとその死は振り出しに戻るという掟によるものでした。驚きながら喜び、3人は女王の城へと向かいました。女王の城には女王によって石にされた人々でいっぱいでした。アスランがその人たちを順に元に戻していきました。そしてアスラン、スーザン、ルーシィ、助けられた人々は戦いに向かいました。

戦いはアスランたちが着いてすぐに終わりました。エドモンドが魔女の杖を勇気を持って壊したことが大きな勝因でした。そして4人はケア・パラベルの4つの王座に就き、ナルニアは「ピーター王、スーザン女王、エドモンド王、ルーシィ女王ばんざい！！」ばんざいの声の嵐でした。こうして4人は長い時をナルニアで過ごし、王として真っ当な仕事をこなしていきました。そんなある日、白しかをおっていた4人はある茂みの中へと吸い込まれるように足を進めて行ったのでした。そして次の瞬間！なんと衣装ダンスの中からからっぽの部屋に躍り出ていたのでした。しかも、一同が衣装ダンスに隠れた同じ日同じ時間なのでした――。

さてこれで衣装ダンスの冒険のお話はおしまいです。けれどもこのナルニアの冒険は、ようやく始まったばかりなのです。

勇気と裏切らない心

I. 作者について

作者C.S.ルイスは、1898年に生まれ、1963年に亡くなりました。彼は大学教授、文学研究家、批評家、詩人、作家、キリスト教弁証家、といった色々な能力を持った人でした。また、彼が書いた本も単行本になっているものだけで60冊を超えているのです。彼は小さい頃から3才年上のお兄さんであるウォレンと一緒に「ボクセン」(Boxen)という仮想の国を作って遊んでおり、父親の勧めで家の至る所にあった本を読み、読書の習慣がついたことが結果的に彼に物語を書かせることになったようです。

II. 作品について

『ナルニア国物語』は、C.S.ルイスが子ども向けに書いた最初で最後のおはなしです。出版の順序と物語内の年代との順序は関係なく、全部で7作品に及びました。

III. 勇気と裏切らない心

この話を読んでもっとも強く感じたことは、勇気の持つ力の大きさです。そもそも4人がナルニアに入り込んでしまった時、そのまま元の世界に帰ることも可能でした。しかし4人がそのまま進んでいくことを決めたため、ナルニアは救われ、4人もたくさんのことを学ぶことが出来ました。また、裏切られた時、もう一度その人のことを信じるのはたやすいことではありません。そのため、一度は魔女の味方についてしまったエドモンドを許すことも、勇気のいることだったのではないかと感じました。

勇気と共に深く感じたことは、裏切らない心です。アスランが多くの人々に慕われているのは、周りの人を裏切らないからだだと思います。その証拠にエドモンドをすくいだすことが出来ました。

どんなに卑劣な人がいても立ち向かい、裏切らずに生きていく、そんな人生を過ごしていきたいと思いました。

(ふじわら・りょうこ：幼稚園教員養成課程)

シャルル・ペロー「長靴をはいたねこ」

：西洋で生まれた児童文学

坂口 碧

シャルル・ペロー「長靴をはいたねこ」

昔、あるところに、粉ひきが三人の息子と暮らしていた。この親子は貧乏だった。粉ひきが死んだ後に残されたものといえば、粉ひき小屋と、ろばと、ねこだけだった。一番上の息子は粉ひき小屋を、その次の息子はろばをもらった。末の息子がもらったものは最後に残ったねこだけだった。

「兄さんたちはいいなあ。粉ひき小屋とろばさえあれば、二人で働いて暮らしていける。でも僕がもらったのはこのねこ一匹。どうやって暮らしていけばいいんだろう…」
すると、ねこは主人の話を聞いてこう言った。

「なあに、がっかりすることなんかありませんよ。ご主人さま、ぼくに袋とやぶの中を歩き回る長靴をください。そうしたら今にきっと、ぼくをもらってよかったと思う日がくるでしょう。」

さて、主人から頼んだものをもらうと、ねこはさっそく長靴をはき、袋を首にかけ、原っぱへと出かけていった。原っぱにはうさぎがたくさん遊んでいた。ねこは、袋の中にうさぎの好きなえさを入れ、そのすぐ傍でじっと死んだふりをし、袋に飛び込んできたうさぎをさっと絞め殺した。ねこは、さっそく王様の御殿へ出向き、王様にお会いしたいと頼みにいった。部屋へ通されると、ねこは丁寧にお辞儀をして言った。

「王さま、わたしの主人のカラバ公爵さまが捕まえたうさぎです。どうぞお受け取りください。」

ねこは主人に、カラバ公爵なんていう立派な名前をつけてしまっていた。それからというもの、ねこはうさぎだけでなく、しゃこなどの獲物を捕まえては王様の所へ届けた。王様は喜んで受け取り、ねこにはお駄賃まで与えた。

ある日、ねこはこんなことを聞いた。なんでも王様が美しい王女と馬車に乗って、近くの川べりへ遊びに出かけるのだという。

「ご主人さま、ご主人さま！今からぼくの言う通りにするんですよ。すぐにあの川へ行って、水浴びをしてみてください。あとは、ぼくが上手くやりますから。」

突然のことにカラバ公爵は訳が分からなかったが、ねこの言う通り、川へ行って水浴びをすることにした。そこへ、王様の馬車がやってきた。ねこは主人の服を見えないところへやると、大声で叫んだ。

「助けて、助けて！カラバ公爵さまがおぼれちゃう！」

叫び声を聞いて、馬車の窓から顔を出した王様の目に映ったのは、何度も獲物を届けに来た、あのねこだった。すぐさま王様は、家来を呼んで、カラバ公爵を助けるよう指示した。

ねこは、馬車のそばへ近寄ると、王様にこう言った。

「王さま、王さま！大変です！公爵さまがここで水浴びをしていると、何者かが服をみんな盗んでいってしまったんです！」

王様はすぐさま家来に服を持ってこさせた。王様からもらった服を着ると、公爵は見違えるほど立派に見えた。そんな公爵を一目見て、王女は公爵を気に入ってしまった。

「公爵、そなたも一緒に馬車に乗って、一回りしてみないか。」

王様に誘われ、馬車に乗る公爵。その様子になこは大喜び。ねこは、馬車の先回りをして、どんどん走っていった。その先には、百姓たちが牧場で草刈りをしていた。ねこは、世にも恐ろしい声でこう言った。

「おい、王さまに聞かれたら、この牧場はカラバ公爵さまのものだと言うんだぞ。そう言わないと八つ裂きにしまおうぞ！」

まもなく、王様が牧場を通りかかった。

「この牧場は、いったい誰のものなのだ。」

「カラバ公爵様のものでございます。」

ねこに脅された百姓たちは、声を揃えて答えた。ねこはどんどん先回りし、行く先々で広い土地を見つけては同じように人々を脅していった。走っていくうちに、ねこは立派な城に辿り着いた。その城には、人食いの大男が住んでいた。なんと、今まで通ってきた土地はみんな、この大男のものだったのだ。

「ごめんください。通りがかりの者ですが、殿さまにぜひご挨拶がしたいと思います。お目にかかせていただくと、嬉しいのですが。」

人食いの大男は、ねこを迎え入れ、一休みしていくように、と言った。この大男がどんなやつで、どんな魔法が使えるのかねこは調べていた。

「殿さま、あなたはどんな動物にでも化けられるという噂がありますが、本当になれるのでしょうか。あなたのような大きな方が、まさか、ねずみのような小さな動物なんかにはなれないでしょうね。」

「何、なれないだって？この俺が出来ないことなどこの世にない。よし、見ていろ。」

そう言ったかと思うと、大男は小さな子ねずみに変身して床の上をちよろちよろと走っていた。一瞬のうちに、ねこはねずみに飛びかかり、パクッと食べてしまった。

しばらくして、王様の馬車が城に到着した。

「王さま、ようこそいらっしゃいました。ここがカラバ公爵さまのお城でございます。」

王様は、公爵が大変な金持ちであることが分かり、王女も公爵のことを大変気に入っている様子なのを見て、立派な婿を見つけたものだ、すっかりご機嫌になっていた。そして、その日のうちに公爵と王女は素晴らしい結婚式を挙げ、幸せに暮らした。

さて、頭のいい、あのねこはそれからどうなったのかということ、偉い貴族になり、遊びでしかねずみを追い回すことがなくなったという…

西洋で生まれた児童文学

I. 作者について

シャルル・ペロー (Charles Perrault 1628~1703) は、フランス童話の生みの親として、世界中の人々からよく知られている作家である。一方で、オルレアン大学で法学を学び、弁護として活躍する傍ら、17世紀後半のフランスの政治や文学の分野において、非常に重要な役割を果たした人物でもあった。17世紀のフランスは、ルイ14世が国を治めるようになってから国力が増大し、宮廷文化や文芸が発展した時代だった。ペローは、当時の権力者コルベールから目をかけられ、アカデミー・フランセーズの会員に選ばれ、王室建築総監に任命された。ペローがこのように出世していったのには、生まれつき活動家で、機敏だったことが高く評価された要因ではないかと言われている。退官してからも、ペローは「新旧論争」という文学史の上で非常に有名な事件で大活躍をした。これは、古代と近代とどちらが優れているかについての論争であるが、ペローは「近代の方が優れている」ということを主張するために、昔話の中でわざとルイ14世の宮廷の描写を近代の象徴として織り交ぜ、その優位性を誇張したのではないかとされている。

II. 児童文学の誕生

1697年、ペローは『寓意のある昔話』(Histoires ou contes du temps passe)という本を出版した。これは、民間伝承を詩の形にまとめ、教訓を加えたものだが、当時の風俗を反映させるなど子どもにも親しみやすく書かれており、子どもを意識して書かれた初めての児童文学であると言われている。「長靴をはいたねこ」はその中の1つとして収められている。そのほかにも、ディズニーで長編アニメーション化された「眠れる森の美女」や「シンデレラ」などもこの本に収められており、ペローの物語は、今も世界中の子どもたちに愛され続けている。

III. 靴と人との関係

日本人と欧米人とでは、「足」事情が異なっている。家の玄関で靴を脱ぐというのが日本の習慣であるのに対し、欧米ではみなベッドに入るまで靴を履いている。それは、欧米人にとって、靴を脱ぐという行為は裸になるということと同じようなことだと考えられているからである。それほど足元が重要視されていることが分かる。このような靴に対する考え方、生活習慣の違いを背景に、この物語を読んでいくことを勧める。きっと、たった一足の長靴をねこにあげた末の息子と、それをもらったねこことの信頼関係の深さが見えてくるのではないだろうか。

(さかぐち・みどり：欧米言語文化講座 英語圏)

ハンス・クリスチャン・アンデルセン『おやゆび姫』

: 児童文学の魅力

小川 陽 香

アンデルセン『おやゆび姫』

昔々あるところに、子どもが欲しくて欲しくてたまらない女の人がありました。どれだけ願っても願いが叶わなかったので、魔法使いのおばあさんに相談しました。するとおばあさんは「これを大事にお育て。」と言って特別な大麦の一粒を女の人に渡しました。

女の人それが家にもって帰って植えてみると、みるみるうちに大きくなって、真っ赤なチューリップが咲きました。よく見るとそこにはなんと小さな小さな女の子が座っていました。女の方はその子を「おやゆび姫」と名付け、大事に育てることにしました。

おやゆび姫は本当に小さいので、クルミのからの上に、すみれの花びらをシート、バラの花びらを敷き布団にして寝ることにしました。女の方は、おやゆび姫がいつでも遊べるようにとお皿に水を入れ、チューリップの花びらをボートにして置いておきました。お日様が大好きなおやゆび姫は、そのボートに乗って太陽の下で歌いながら遊ぶのがお気に入りでした。

ある日おやゆび姫が眠っていると、みにくいヒキガエルが一匹やってきました。ヒキガエルはかわいらしいおやゆび姫を自分の息子のお嫁さんにしようと、くるみのからごと連れ去ってしまいました。

ヒキガエルはおやゆび姫が寝ているクルミをハスの葉の上に置いて、息子とおやゆび姫の新しいおうちを作り始めました。そうしているとおやゆび姫が目を覚まして、見知らぬところに連れてこられていたので泣き出してしまいました。

近くにいたメダカたちがかわいそうなおやゆび姫を見て、みんなで力を合わせて助けることにしました。おやゆび姫が乗せられているハスの根元をガリガリとかじり始めたのです。ずっとかじっているとついにハスの葉が根元から切れて、おやゆび姫はハスの葉に乗ったまま川を流れていきました。

初めおやゆび姫は移り変わる景色を楽しんでいました。しかしそこに大きなコガネムシが飛んできて、おやゆび姫を連れ去ってしまいました。おやゆび姫はおびえて震えました。

コガネムシは

「かわいいな。コガネムシには見えないけどかわいいな。」

と言っておやゆび姫に花の蜜をとってきて食べさせました。しばらくすると他のコガネムシがたくさんやってきて

「この子変だ。触角がない。」

「体が細すぎるなあ。足が二本しかないし。」

と次々に言いました。今までかわいいと言っていた大きなコガネムシも、周りの意見を聞いているうちに、だんだんおやゆび姫のことをかわいいとは思わなくなってしまいました。そしておやゆび姫をヒナギクの上に置き去りにしてしまいました。おやゆび姫はコガネムシとお友達にもなれず置き去りにされてしまったことがとても悲しくて泣いてしまいました。

夏が終わり、秋が過ぎ、とうとう冬になってしまいました。おやゆび姫はいろんな葉っぱを使って雨や風をしのいでいましたが、冬の冷たい雪にはもう限界でした。

ある日どうしようもなくなっていて一人とぼとぼと麦畑を歩いていると、野ネズミのおうちにたどり着きました。そこに住んでいた野ネズミのおばあさんはおやゆび姫を見ると

「まあ、なんてかわいそうに。」

と言ってご飯を食べさせてくれました。

「この冬が終わるまでここにお住まいなさい。ただしおうちの仕事をちよいと手伝っておくれ。」

と野ネズミのおばあさんが言うてくれたので、おやゆび姫はおばあさんの家に泊まることにしました。

ある日おやゆび姫が言われた仕事をきちんとやっていると、近所に住むお金持ちのモグラがやってきました。野ネズミのおばあさんは、おやゆび姫にはぴったりのお婿さんだというのですが、おやゆび姫には全くそんな気はありません。

モグラはつやつやのコートを着てめかしこんでやってきました。お家も大きくてとてもお金持ちなのです。でもおやゆび姫はモグラのことが好きではありませんでした。なぜならモグラはおやゆび姫が大好きな太陽やお花のよさを分かってくれないからです。

ところがモグラはというと、おやゆび姫の甘い歌声を聴いてからずっとおやゆび姫のことが好きでした。そこで、野ネズミの家から自分の家まで通路を作って、いつでもおやゆび姫が自分の家に来られるようにしました。

モグラと一緒に初めてその通路を通った時、途中でツバメが倒れていることに気づきました。前を歩いていたモグラは死んだ鳥を足で蹴ってよけました。でもおやゆび姫はツバメがかわいそうでならなかったので、モグラが帰ってからツバメの所に行ってなでてやりました。

その晩、おやゆび姫は眠れませんでした。ベッドから飛び出して干し草で毛布を作って、それをツバメの所に行って体にかけてやりました。「さようなら、かわいい小鳥さん。どんな日も楽しく歌ってくれてありがとう。」そう言っておやゆび姫が帰ろうとした時、ツバメの体からドクンという音が聞こえました。ツバメの心臓の音でした。ツバメは死んでなどいなかったのです。おやゆび姫はペパーミントの葉を取ってきてツバメの頭にかけてやりました。

翌朝、おやゆび姫がツバメの様子を見に行くと、生きてはいるものの目を開けるのがやっとのようでした。おやゆび姫は冬の間中ツバメの世話をすることにしました。精一杯ツバメの世話をするうちに、おやゆび姫はツバメのことが好きになってしまいました。

あっという間に春が来て、ツバメもすっかり元気になり、おやゆび姫にお別れをすることになりました。

「僕と一緒にいきませんか？」

とツバメがおやゆび姫に聞きました。おやゆび姫はツバメのことが大好きでしたが、野ネズミを一人きりにすればとても悲しむにちがいないと思って、ツバメの誘いを断りました。

おやゆび姫はとても悲しみました。ツバメと一緒に緑の森に行けなただけではなく、これからずっと暖かいお日様の下に出ることがもうできません。モグラと本当に結婚することになったのです。おやゆび姫はモグラとは結婚したくないということを野ネズミに言いましたが、全く耳を貸してくれませんでした。

しばらくして結婚式の日取りも決まって、おやゆび姫がもう青空とはお別れだと思って空を見上げていると、あのツバメがやってきました。おやゆび姫はツバメにこれまでのいきつを全て話しました。

「それなら、僕と一緒に南の国へいきましょう。背中に乗ってください。」

ツバメがそう言うと、おやゆび姫は喜んでツバメの背中に乗りました。

ツバメはおやゆび姫を乗せて飛び立ちました。海を越え、山を越え、緑の国に着きました。空は青く澄んで、太陽の下でお花畑が輝いていました。

「僕の家じゃ君はくつろげないだろうから、好きなお花を選んで。その上におろしてあげるよ。」

とツバメは言いました。おやゆび姫は

「とってもうれしいわ。」

と言って大きな白いお花を選びました。ツバメがそのお花のところにおやゆび姫をおろすと、おやゆび姫はとてもびっくりしました。水晶のように透き通った、おやゆび姫と同じくらい小さい人達がお花の上に住んでいたのです。

彼らは花の妖精でした。その中の王子様がおやゆび姫を見つけて言いました。

「なんてお美しい方だ。私のお嫁さんになってくれませんか。全ての花のお妃様となってくれませんか。」

おやゆび姫にはその言葉が重みのあるものに思えました。ヒキガエルやモグラの言葉とは比べ物にならないものでした。おやゆび姫は

「はい。」

と返事をしました。

ツバメはお祝いの歌を一生懸命歌いました。でも本当は悲しかったのです。本当はおやゆび姫のことを愛していたので、決して別れたくはなかったのです。しかしツバメはまた南の国からデンマークへ戻らなければなりませんでした。「さようなら、さようなら。」ツバメはそう言いながら南の国を去りました。

ツバメはデンマークにある自分の巣へ戻りました。そこは童話を書くおじさんの住む家の屋根でした。ツバメは巣の中で歌を歌いました。それはおやゆび姫が生まれて幸せになるまでのお話の歌でした。

児童文学の魅力

I. 作家について

『おやゆび姫』の作者であるハンス・クリスチャン・アンデルセンは1805年、デンマークのオーデンセで生まれ、貧しい家庭に育った。1816年に父親が亡くなると、オペラ歌手になることを決め学校を中退し、コペンハーゲンに移った。幾度もの挫折を経験した後バレエ学校にも在籍した。デンマーク王や政治家のコリンの助力で大学まで行くことができた。

アンデルセンの童話作品はグリム兄弟の作品とは違って創作童話が多い。初期の作品では主人公が死ぬ結末を迎える物も少なくなく、若き日のアンデルセンが死ぬ以外に幸せになる術を持たない貧困層への嘆きと、それに対して無関心を装い続ける社会への嘆きを童話という媒体を通して訴え続けていた事が推察できる。

代表作品としては『おやゆび姫』の他に、『裸の王様』、『みにくいアヒルの子』、『人魚姫』、『マッチ売りの少女』などがある。

II. 児童文学という名の文学作品

アンデルセン童話もグリム童話も子どもの頃に親に読んでもらって、ものによっては明確に思い出せないのがあるものの、やはり深く印象に残っているものが多い。ただ小さい頃は聞いた話を素直に解釈するため、話の矛盾点に気づいたり現実的に考えて不可能だという判断を下したりはしない。ただ大人になって懐かしい童話を読み返してみるとおかしな点が多々見つかるものである。そしてまた不可解な点だけではなく、裏に隠された意味や登場人物の心情などを感じ取ることができるようになっていたので、改めて読んでみるというのは非常におもしろいものである。

おやゆび姫を読み直してみると、意外にも一番印象に残った部分は子どもの頃の記憶として思い出せなかったラストシーンだった。おそらく子どもの頃は、おやゆび姫が花の妖精の王子様と結婚したという時点でハッピーエンドとして解釈していたのだろう。しかしこの話では、ツバメがおやゆび姫のことを愛していたのに結ばれることができなかったというツバメの悲しみにも焦点をあてる必要があると思う。また、ヒキガエルのシーンも小さい頃は何も気に留めなかったが、集団心理の批判ともとることができるだろう。

このように「子ども向けのお話」の中にも大人が読むと新たな発見があって楽しめるものがたくさんある。児童文学とあなどらずに是非いろいろな作品を読んでもらいたいと思う。

(おがわ・はるか：欧米言語文化講座 英語圏)

フランツ・カフカ『変身』

:不思議な現実を読む

河津美代子

フランツ・カフカ『変身』

グレゴール・ザムザという青年は、両親がこしらえた借金を返済するため、セールスマンとして毎日休まず働いている、立派な青年でした。両親のためにお金を稼ぐだけでなく、可愛い妹が憧れの音楽学校に行けるようにと貯金もしている、優しい兄でもありました。

ある朝、グレゴールは胸騒ぎのする夢からさめると、ベッドの中にいる自分がとても大きな虫になってしまっていることに気がつきました。一体おれはどうなってしまったんだ、と彼は思いました。いま自分がいるのは確かに自分の部屋なのに、視界にうつる自分の体は褐色で、足もたくさんあります。硬い甲羅のせいでなかなか起き上がれない彼は、やがてベッドの中で自分の苦勞を振り返り始めました。こんな状況でも、思うのは仕事のことです。旅や出張が重なるうえに不規則な生活。．．しかし彼は いつか会社の社長を見返してやろう、親の借金返済を必ず成し遂げてみせよう、と強く思っていたのでした。

毎朝グレゴールが通勤に使う汽車は5時発です。しかし、時計を見ると、もう6時半ではありませんか。次の汽車に間に合ったとしても、社長の雷が落ちるのは当然、しかし彼は起き上がることが出来ません。5年の勤めの間に1度として休んだことはなかったのに、こんなことになってしまったら、社長は両親に向かって怠け者の息子のことを責めるのだらう。そう考えていると、部屋の外から母親の声がしました。「グレゴールや、出かけないのかい？」彼はきちんと説明したいけれども、声を出そうとするとひいひい言っとうまく話せません。なんとか「はい、はい、もう起きてますよ。」とだけ言えたけれども、その一寸の問答のおかげで父や妹まで彼の心配をし始めました。「グレゴール、一体どうした？」「兄さん、どこか悪いの？」彼は毎日部屋に鍵をかけて眠っているので、誰も部屋に入ることが出来ません。その自分の習慣を今更ながらに有難いと思いながら、なんとか自分の体を起こそうと、小さな足どもを動かしては試行錯誤していました。

その時、玄関口から物音がし、誰か来訪者があったかと思うと、それは、グレゴールの会社の支配人でした。仕事場に来ないグレゴールを愛に思っってわざわざ家まで訪ねてきたのでした。支配人はグレゴールの家族の前で彼の無断欠勤を非難し始めました。それを耳にしたグレゴールは我を忘れて、必死に、自分は今からでも仕事場に出向くことが出来るということを早口に訴えました。そうして彼は筆筒にもたれ掛かりながらなんとか立ち上がったのでした。

「たった一言でも分かりましたかね？我々をからかっとするわけじゃないでしょうな？」支配人はこう言いました。グレゴールは、やはり俺の言うことは皆には分からなくなってしまったのか？と思いながらドアのところまで行き、今頃密議が行われているであろう隣室の方に聞き耳を立てました。どうやら錠前屋を呼ぼうとしているのを聞きながら、彼は夢中になって鍵に噛り付き、そうしてようやく、鍵を開けることに成功したのでした。

扉の取っ手に頭を乗せて、倒れてしまわないようにそっと、グレゴールは自分の部屋の扉を開けました。部屋の扉の向こうから現れた者の姿を見て、まずは支配人が「おおっ！」と声をあげました。母親はその場にへたへたと崩れ、父親は両手で目を覆って泣き出しました。

いつもどおりの景色をしている家のなか、自分の軍隊時代の写真がかかっている壁のちょうど向かいに立っているグレゴールは、自分はたって平静を保っているといわんばかりに語り始めます。「すぐに着替えて、出かけます。」仕事への意欲も説得の言葉も、二言三言聞かないうちに、支配人はグレゴールから目を離さないまま玄関の方へ後退し始めました。このままではまずいと思ったグレゴールは四つんばいになって一事実これが立つよりも楽な姿勢であったのですが一小さな足を動かしながら、逃げるように走り去る支配人の後を追いましたが、父親によってそれは祖まれました。父親はステッキを手にして「しっ、しっ」と言いながらグレゴールを部屋の中へ追いやりました。父親のステッキから逃れようと必死に動いたためにドア付近で怪我をして血まみれになりながらも、彼は最終的に自分の元いた部屋に逃げ帰りました。

重苦しい眠りから覚めて、グレゴールは自分の部屋の中を這い出しました。優しい妹が彼の大好きなミルクを壺いっぱいに入れて置いておいてくれましたが、それを飲んでもちっともおいしいと感じないので、彼はたいそうがっかりしました。彼の部屋の扉は閉ざされていて、誰も入って来ようとしません。それどころか、今は外から鍵もかかっています。

長い夜をソファの下で過ごして朝がやってくると、妹が恐る恐るグレゴールの部屋の扉を開けました。ソファの下にいる彼を発見すると彼女は恐れている様子でしたが、置いておいたミルクがちっとも減っていないのを見て、彼女は部屋の外からグレゴールが食べられそうなものをごっそり部屋の中に運んできました。新鮮な食物よりも、古い、腐りかけた様な食物の方が彼を惹きつけたことは、がっかりしたけれども、彼はそれらを涙さえ浮かべて食べ尽くしました。食事の後はグレゴールが急いでソファの下に戻り、その間に妹が食物の残骸を一緒に片付けます。このようにして彼は毎日食事をもらえるようになりました。

この生活が始まって1ヶ月が経とうとしても、扉にぴったり体を寄せて外の様子に耳を傾けると、家族の会話は殆どありませんでした。グレゴールがこのようなことになってしまったからすぐに、父親は家族に一家の財産とこれからの見通しについて話して聞かせました。以外に蓄えがあったことを知って彼は少し安堵しましたが、この財産は1年2年ほどで尽きってしまうだろうと思えました。一家が貧しくなってから、セールスマンとして必死に働き、家にお金をもたらしていたのは、グレゴールでした。そして彼は可愛い妹が音楽学校へ行けるようにお金を貯め、クリスマス頃にはその計画を発表してやろうかと密かに考えていたのです。そうした理念も、今の彼には何の役にも立ちません。グレゴールが働くようになってから父親はすっかり肥ってしまっていて働けず、母親は喘息病みで2日に1度は呼吸困難になります。そこで、次に働かなくてはならないのは、まだ17の小娘である妹ということになっています。それを考えると彼は悲しみで体が、火照ってくるのです。

グレゴールは革のソファの上で横になり、張革を何時間も掻きむしりながら過ごすことがしばしばでした。さもなければ椅子を窓際まで運んで行って窓の外を眺めているのですが、もう以前のように鮮明な景色は見えなくなって視界はぼやけてしまっています。ある時彼がいつもと同じく窓の外を眺めているとき、いつもより早い時間に部屋に入ってきた妹が、初めてグレゴールの今の姿を目の当たりにしたのです。その瞬間、彼女は後ろに飛び退いて扉をピシャンと閉めてしまったので、彼はすぐさまソファの下に身を隠しました。自分のこの姿を少しでも妹に見せまいとするには大変な我慢が必要なのだろうと思えました。

優しい妹と違い、両親はなかなかグレゴールの部屋に入ってこれませんでした。妹にグレ

ゴールのその日の様子を根掘り葉掘り聞くだけ聞いて、自分たちは部屋に入る勇気が出ません。特に父親と妹は母親をグレゴールの部屋に入れたがらず、引き止めていましたが、グレゴールはついに部屋の外で「どうしても行かせてください。可愛そうな私の息子なのだから。」と母親が父親と妹に向かって叫んでいるのを聞き、やはり妹よりも母が部屋に来てくれたほうが良いのでは、と感じたのでした。

1日中横になっているのも退屈であるし、とうとう食事も楽しみと言えなくなってきた頃、グレゴールは床だけでなく、壁も天井も這い回る、というのを新たな習慣にし始めました。彼が壁を這うとその跡が残るので、妹もすぐにそのことに気づき、彼が自由に這いまわれるようにと部屋の家具を全て外へ出す計画を立てました。妹一人ではとても家具を運び出せない所以她は母親に手伝ってもらうことにし、とうとう、母親がグレゴールの部屋の中へ入ってくるようになりました。母親は恐る恐る部屋に入ってきて、妹と共に家具を持ち出そうとしましたが、手を止めてこう言いました。「グレゴールが、家具を片付けちまって喜ぶものやら。それにこういうことをすると、あの子に関してすっかり諦めてしまったようじゃないか。あの子が元に戻った時、何も変わってないのが分かって、その分この期間のことだっただけですぐに忘れられるもんだよ。」これを聞いて、グレゴールは気づきました。俺は果たしてこの暖かい、親譲りの家具が並ぶこの部屋をあっさりと地獄へ変えてしまう気だったのか。家具というものが、たとえ這い回ることを妨げになろうと、それらを全て取り除くことはかえってマイナスなのだ！

ところが、妹の意見は母親とは反対でした。今まで2ヶ月ものあいだ兄の部屋に出入りし、世話をしてきたのは自分である、兄を一番わかっているのは自分である、と思っている様子です。グレゴールが自由に動き回るのには家具は邪魔であると主張するのでした。母親はそんな妹に反抗することはなく、女たちはまた、作業を始めました。作業が進んでいくにつれてグレゴールはいてもたってもいられず、彼女たちが隣室で休憩している間に、とっさにソファの下からまかり出ました。せめて部屋にかかった一枚の絵だけは、と思ってその絵のかかった壁にびったりへばりつきました。部屋に帰ってきた母親はその姿を見て叫び声をあげて倒れ、気を失ってしまいました。薬を探しに言って妹のあとを追って居間に出たグレゴールは妹まで驚かしてしまいました。妹は手に持っていた薬の瓶を落として割ってしまい、急いで居間を出て扉を閉めてしまいました。彼は自責の念に駆られ、壁や天井を這い回り始めました。全てがぐるぐる回り始め、とうとう彼は目を回してしまって、大きなテーブルの上にドスンと背中から墜落しました。

目が覚めると、ちょうど父親が帰ってくる頃でした。妹から事情を聞いた父親はグレゴールが何か悪いことをしでかしたように思った様子だったので、彼は急いで自分の部屋に戻ろうとしました。部屋の扉にもたれかかっていると、父親が近づいてきて、以前の父親からは想像も出来ない、しゃんとした様子でグレゴールの方へ向かってきます。父親が近づけば彼は逃げ出し、また立ち止まれば彼も立ち止まる、そんな堂々巡りで二人は部屋の中を動き回りました。たくさんの足を動かして走り回っているうちにグレゴールは息切れし始め、頭も鈍感になって何も考えられなくなってきた頃、彼目掛けて何かが飛んできました。

林檎です。父親が彼目掛けて次から次へと林檎を投げ始めたのでした。その攻撃に彼は逃げ惑いましたが、ひとつの林檎が彼の背中に直撃し、めり込みました。彼は全身の力が抜けてしまって、その場に伸びてしまいました。その時、目が覚めた母親が何事かと思って部屋に入ってきました。母親は慌てふためいた様子で父親の方へ駆け寄り、グレゴールの命を助けてやって、と嘆願し、父親の攻撃は収まりました。

誰も林檎を取り除こうとはしてくれなかったため、グレゴールはその重症を1ヶ月以上も

患うことになってしまいました。そのせいで彼はおそらく永久的に行動の自由を失ってしまいましたが、家族が居間の扉を開くようになったので、わざわざ覗くようなことをしなくても彼は家族の姿を見ていることを許されたのです。居間では、母親が内職に謹み、店員として働き始めた妹は速記とフランス語の勉強をしています。父親は安楽椅子で居眠りをしていて、夜寝る時刻になってもなかなか寝室に行こうとしないので、いつも女二人の手を煩わせています。働き疲れてへとへとなこの家族の、一体誰がグレゴールの世話をしてくれると言うのでしょうか。今の状態でこの一家はぎりぎりなのでした。父親をやっと寝室へ移動させたあと、グレゴールの部屋の扉は再び閉じられます。暗闇の中で彼の背中への傷はまた疼き始めるのでした。

仕事の疲れからか、グレゴールのために食べ物を用意してくれたり部屋掃除をしてくれていた妹も、以前のようにしっかりと彼の世話をしなくなりました。しかし、グレゴールに嫌な顔ひとつしない手伝いのお婆さんが来てくれたので、世話がされなくなる心配はありませんでした。

この頃からグレゴールの部屋にはいらなくなったものが運び込まれるようになりました。というのも、住居の一室を3人の下宿人に貸したからなのでした。それからというもの、家族がこの下宿人に気を使いながら生活しているのを部屋から見つめることになりました。

ある日、いつものように下宿人達が食事を済ませ、ゆったり新聞を読んでいたとき、妹がヴァイオリンを弾いているのが聴こえてきました。下宿人達が居間で弾いてくれと頼んだので、グレゴールにも聴きやすくなりました。彼は久々に聴く妹のヴァイオリンの音色に弾かれ、気づけば部屋から出てしまっていました。妹はとても美しい演奏をしていましたが、下宿人達は飽き飽きといった雰囲気、煙草までふかし始めていました。グレゴールは段々と妹に近づいていき、そしてひとつの決心をしました。ここで弾いたって張り合いがない、妹のスカートの裾を引っ張って自分の部屋へ誘おう。そうしたらもう妹を部屋から出しはしない。

近づいてきたグレゴールに気づいた下宿人たちは皆即座に父親に説明を求めました。父親はなんとか下宿人の機嫌を損なわないよう試みていましたが、下宿人たちは部屋を解約することを宣言し、居間を出て行ったのでした。

妹の手からヴァイオリンがすると抜け、ばらんと音を立てて床に落ちました。グレゴールはその場にうずくまっていた。「私たち、こいつと手を切らなければだめ。」妹は言いました。「あれが兄さんだなんていう考えは捨てなくてはだめ。あれがいなくならなくちゃ。」家族は皆その言葉に同意している様子でした。グレゴールが回れ右をしてゆっくりと自分の部屋へ帰っていくと、妹によって扉はすぐさま閉じられました。

暗い部屋の中、今更になって、グレゴールは家族に対する愛情を思い起こしていました。自分が消えなければならない、という決意はもしかすると、妹の言っていたそれよりも揺るがぬ決意だったのかもしれませんが。体の痛みは徐々に薄らいで、やがて首がひとりでにがくと落ちて、鼻腔から最後の息が弱くかすかに流れ出ました。

翌朝、手伝いのお婆さんによってグレゴールの死は家族に伝えられました。家族は安心した様子で、彼の屍体を見つめていました。家族は仕事を休んでその日を休養に使おうと決めました。3人そろって郊外へ向かう電車に乗りながら、これからの生活について口々に語り合いました。この先、一家はまんざら悪くもなさそうだ、と思えました。そして3人の新しい生活が始まりました。

不思議な現実を読む

なにか物語を読んで、その感想文を書いた経験はあったが、物語を自分の文で語りなおす、というのは今までしたことがなく、とても新鮮だった。どう短くまとめてしまおうか、ここは多少長くなったとしても絶対に語らなければならない場面ではないか、どうすればスムーズに物語を伝えることが出来るか...そんなことを常に考えながら書いていたように思える。

特に私の選んだ、『変身』(原題: *Die Verwandlung*, Frantz Kafka [1883-1924 ドイツ]) という小説の持ち味は、不思議な物語を、特に不思議に感じさせずに語っていることだ。自分がこの小説を読んだときに感じたそのおかしな感覚を取り除いてしまったら、この物語は一気に面白みがなくなってしまうと感じた。不思議なことが起きているのにその原因がまったく分からない。解決方法も全くない。登場人物の心情が読み取れたりもしたので、全く同じように書くのではなく、少し短くしたり言葉を変えたりしてその雰囲気を変えないように心がけた。

ひとつの物語を、自分の言葉で語りなおすのは、また、新しい発見も与えてくれる。この人はこんな台詞を言っているが、本当はまったく反対のことを思っていたのではないかとか、この行動の裏にはこうした感情があったのではないかとといった具合で最初に読んだ時には思わなかったこと、気づかなかったことを考え直させてくれる。グレゴールはどうして虫になっても仕事のことばかり考え続けたのか? 彼の家族の気持ちはどうなっていたのか? そもそもカフカはなぜこのような物語を書いたのか? 捉え方は本当に様々であると思った。だが、自分が語りなおしただけでは、それを読んだ人々に私と同じ疑問はなかなか生まれ得ないだろうと思う。物語を、その印象のままに語る、というのは難しいことであると感じた。

また、そもそも自分がこの小説を選んだ理由についても考えてみた。昔の物語のなかには、冒険超大作や、推理小説もあるのに、どうしてこの短い、不可思議な内容の小説を選んだのか。それはやはり、初めて読んだときに受けた言いようのない不思議な印象が今でもずっと心に残っていたからではないだろうか。印象が大きかった物語ほど、他の人にも教えたいくなるものなのだ。

(かわづ・みよこ：欧米言語文化講座 英語圏)

ヤーコブ・グリム、ヴィルヘルム・グリム作『ヘンゼルとグレーテル』

:ドイツ児童文学を考察して

楨納明衣

グリム兄弟『ヘンゼルとグレーテル』

ある深い森の奥に小さな小屋があった。しかし、その小屋は普通の小屋とは大きく違う事があった。そしてその小屋の中には何人もの少年と1人のおばあさんがいた。少年たちはみんな、顔は色白で体は丸々と太っており、とても健康そうに見えた。それはおばあさんが毎日少年たちに豪華でおいしい料理を食べさせてあげているからだ。一見その光景は幸せそうに見えるが、少年たちがこうしていられるのは少しの間だけで、いつかはおばあさんに外に連れて行かれて、その少年が帰ってくることは二度となかった。

ヘンゼルとグレーテルは2つ違いの兄妹で、父母と貧しいながらも幸せに暮らしていた。ところがある日実母が亡くなって、継母を迎えてから状況は一変した。継母は我が強く意地が悪く、ヘンゼルとグレーテルを邪険に扱った。もともと貧乏暮らしで食べ物に不自由していたが、村が大きな飢饉に襲われてからヘンゼルとグレーテルたちはより一層貧しくなった。そして食べ物に困った継母は父にこんな提案をした。

「翌朝4人で森に行きましょう。そして夜が更ける頃私たちだけ家に戻りましょう。すると2人は森をさまようことになって猛獣たちの餌食になるわ。」

父親は最初は反対したが、継母が父の元に嫁ぐとき何不自由させない、というのが約束だったため最後には継母の言うことに賛成した。このときヘンゼルはこのことを聞いていた。そして翌日4人は森に出かけた。出発の際ヘンゼルとグレーテルはわずかなパンを1かけらずつもらった。森の奥に進む間ヘンゼルはもらったパンを来た道に小さくちぎって落としていった。こうして帰り道をたどることができる、とヘンゼルは思った。しかし朝になりグレーテルと帰ろうとしたら、パン屑は全て小鳥たちが食べてしまっていた。2人はただひたすら森を歩いた。が、どれだけ歩いても家に帰れるどころかどんどん森の奥深くに歩いているような気がした。泣いているグレーテルを慰めながらヘンゼルはただ歩いた。

2人が空腹などにより体力の限界を感じて諦めかけたが、突然小さな小屋が現れた。そして2人はその小屋がお菓子出でできたものであると気付いた。グレーテルが夢中になってたくさんのお菓子を食べていると1人のおばあさんが出てき2人を家の中に招いてくれた。

最初は2人も大喜びだったがあとで牢獄に閉じ込められ、そこの少年たちと恐怖の日々をすごした。少年たちの間では、とてもいい感じに太ってきた少年から外の世界に連れ出され、おばあさんの手によって調理され食べられると噂されていた。

ある日大柄の男が牢獄にやってきて、全員をじっくりながめて1人のふくよかな少年を選んで、連れて行ってしまった。それ以来彼が帰ってくることはなかった。

グレーテルはほかの少年たちと違って牢獄の外でおばあさんの手伝いをしていた。その日もいつものように晩御飯の用意をしていたら、おばあさんと大男の会話が聞こえてきた。その内容は明日大男は町まで遣いに出るというものだった。それを聞いたグレーテルはみんな

の元に行き今聞いたことを話した。すると少年たちは、大男が留守ならおばあさん一人ぐらいなんとかなる、と言い出した。そしてその日がやってきた。計画通り牢獄内におばあさんを誘い、みんなで殴る蹴るを繰り返しおばあさんを捕らえることができた。ヘンゼルとグレーテルたちは外に出てたどり着いた修道院でおばあさん、大男の話をした。

おばあさんや大男は一体何をしていたのだろうか。実は連れて行かれた少年はおばあさんに食べられるのではなく、領主、ジル・ド・レのいるお城に連れて行かれ、ジルに犯された後むごく殺されるのであった。

修道院でこの話をしたためまもなく3人を含む城の者たちは逮捕に至った。逮捕され拷問にかけられ最後には3人とも処刑された。

こうして少年たちはみんなそれぞれの家族のもとに帰っていき、ヘンゼルとグレーテルも父と継母のもとへ帰った。継母は最初、帰ってきた2人に対し、とても温かく迎えた。その頃ヘンゼルとグレーテルは町の英雄として、毎日何人もの人がお土産を持って話を聞きに来た。最初は優しかった継母はみんなが持ってくるお金やもので自分だけ贅沢をいただいたのである。ところがある日数人の兵士がやってきて、わが子売り飛ばしとして継母を連れて行ってしまった。グレーテルは不思議に思っていたが、ヘンゼルは少し笑いながら

「さあ。最近では密告が流行ってるから継母さんもそれなんじゃない。」
と言っただけだった。

こうしてまた3人での平和な生活が始まった。

ドイツ児童文学を考察して

まず、ジルというひとについてだが、何故少女ではなく少年に対して愛情を抱いていたのだろうか。領主という仕事柄、周りは男性ばかりだっただろう。また当時領主の城というのは決して居心地のいいものではなかった。そんな環境の中でジルは癒しを、自分たち大人とは違う少年に求めたのかもしれない。よって貧相な感じのする細身の少年よりふくよかな少年を好んだのだろう。何故少年なのかは、正直よく分からないが、かつての自分の姿である少年というのに、歪んだ愛情を向けたのかも考える。しかしいとおしく思っていたはずが、今の自分とのあまりにも違いに憎しみを覚え殺害にいたってしまうのではと思う。またルーマニアに実在した封建領主ヴラド公は、周辺地域の絶えない小抗争からドイツ民族やトルコ人を迫害したり虐殺したりした。このことからドラキュラの由来はヴラド公といわれている。しかし彼の場合国の力の維持のためであった。

次に継母についてだが、今回私が読んだヘンゼルとグレーテルは、初期から一度改定されたものだが、初期では継母でなく実母だったそうだ。口減らし自体は病気が流行ったり、ひどい飢饉に襲われたり、封建制により農民が苦しい生活をしてきた中世ヨーロッパでは割りとあることだったとはいえ、実母というのはあまりにショックなものなので改定されたのである。物語を読んだとき継母でも私はショックだった。それもショックだったが、継母の提案に父親が賛同したのがショックだった。しかしそれほど当時の生活が苦しいものだったとうかがえる。

また子供たちは、おばあさんのことを魔女と呼ぶが、彼らはどこで魔女というものを覚えたのだろうか。それはおそらく家庭だろう。15世紀にはジャンヌ＝ダルクが魔女として火刑される。この頃ヨーロッパにおいて魔女という言葉は、かなり偏見を持った言葉として出回っていたことが分かる。

私はこの話を最初読んだとき、言葉が悪いが正直ただの気持ち悪い話としか思わなかったが、世界史と一緒に見てみるとつながっていたりして、最初読んだときとは違った読み方ができたように思う。

ヘルマン・ヘッセ『車輪の下』【ドイツ】

:青年期のシンパシー

勝木晃平

ヘルマン・ヘッセ『車輪の下』

車輪の下という作品を読むにあたり、私はまずヘッセという人物について知る必要があると感じた。なぜなら、ヘッセの作品は私が考える「難解な小説」の中に含まれるからだ。この感想を、なぜ持ち得たのかというと、私は中学生の時ヘッセの車輪の下を既に読了しているからなのだ。そのころは、硬い文章だという印象しかなく、決して二度読もうなどと考えることができるような深い対面ではなかった。

そして今、私が読むべき作品を探すとき、なぜか頭をよぎるのがヘッセの車輪の下なのである。今一度その作品に触れ、文章の奥をひも解いていきたいと思う。

物語のあらすじ

主人公であるハンス・ギーベンラート少年は並はずれた才能に恵まれた子供であった。エリートとして周囲に期待され、また彼もそれに応え、家が敬虔なキリスト教徒という背景を持つ彼はエリート養成学校である神学校に2位の成績で合格した。

「とにかく、がんばりなさい！みんなきみに期待しているんだからね。」

「よろしい、それでいいのだよ、きみ。とにかく、歩みをのろくしないように。そうでないと、車輪の下にしかれてしまうよ」

※「車輪の下にしかれる (unters Rad kommen)」=落ちぶれる、墮落する。ひたすら前進していないと、後からの車輪にしかれてしまうように人生の敗北者になるという意味

しかし転機が訪れる。神学校での生活を送る間にエリートであり続けること、周囲の期待に応え続けることに必死な自分自身の生き方に疑問を感じ始めるのである。それに加え、同級生たちから大きな影響を受ける。ハンスに最も深くかかわったのは、ハイルナーという少年だった。

「なんて美しい雲だろう！」と、ハンスが気もちよさそうに見つめながらいった。

「ほんとだ、ギーベンラート」とハイルナーがため息をついた。「あんな雲になれたら！」

「なれたら」？

「あの空を、帆を上げて走る。森も、村も、郡も、州もこえていく。美しい船のように。きみは、まだ、船を見たことがないのか？」

そのうち、ハンスは期待に応えるために自分自身を押し殺すことに疲れ果て、神学校を退学してしまう。

退学後は機械工のもとで見習い修業を始める。しかし今まで味わってきた挫折感や劣等感から自暴自棄になってしまう。その挙句、酒に酔って川に落ちて溺死する。

ああ、ぼくは、ひどくつかれた、

ああ、ぼくは、ひどくまいった、

さいふのなかは、からっぽで、

ふところまでも、からっぽさ。

ハンスは古いメロディーにあわせて口ずさんだ。二十回目になろうとしても、何も考えていなかった。

もう、おしまいだ。

青年期のシンパシー

I. 作者について

ヘルマン・ヘッセ(Hermann Hesse)は1877年のドイツに生まれた。家系はエストニア系であり、父は宣教師であった。14歳で難関である神学校に入学するが半年で脱走。他の学校に入るも続かず、本屋の見習店員となるが、また3日で脱走する。このころの経験が車輪の下の基となっていると言われている。

そのほか、彼は人生において自殺未遂をして精神科病院に入院するなど、若いときにさまざまな苦労をしている。

II. 主人公と作者の共通点

- ・信仰に厚い家庭に生まれた
- ・厳格な父親により、勉強を強いられた
- ・エリートと呼ばれる学校に入学した
- ・自らの生き方に疑問を感じた
- ・退学など挫折を味わった

III. 考 察

ヘッセの若いころの経験が「車輪の下」の基となったと先に述べた。この小説は、ヘッセの自分自身の人生が振り返られていて、また自分自身への評価ともとれる点が含まれていると思う。主人公ハンスと作者ヘッセの共通点を挙げたが、酷似していることに気づくだろう。きっと幼少期の周囲のヘッセへの期待や、神学校時代の思い出をハンスとして描くことで、単なる自伝小説ではなく何か社会や周囲の人間に対して感じたことを私たちに伝えようとしたのだと思う。

文中にカワウソなど小さい生き物が時々、風景描写などの中に登場している。それらに対してヘッセは「臆病」や「ずるそう」など、マイナスな印象を与えて形容している。彼はもしかしたら、自分の周りに存在する自然や生き物に、自分にはない自由や広さを感じ、憧れを抱きつつも、それらを貶めることで自らの優位性を守ろうとしていたのではないだろうか。

彼は入学した神学校で、ハイルナーという空想家の友人を得る。ハイルナーは詩人のような感覚を持った人間であり、ハンスは彼に強く惹かれていたようだ。ハイルナーはハンスが見たことのない、ライン川での船の話聞かせた。ハイルナーはハンスと違い、周囲の風景のことをよく「美しい」と表現した。

ハイルナーにとって抽象的なものはひとつもなく、想像できないものや、空想で鮮やかに描けないものなどはなかった。彼はまさしく、ハンスの持っていないものを持った人間だったのだ。

また、作中で同級生がひとり、池で溺死するという事件があった。生徒たちはみな蒼白になり、死の恐怖にとらわれている様子だった。

この事件が、なぜこの作品に必要だったのだろうか。

これは憶測にしか過ぎないが、ヘッセが自殺をはかったことと何か関係があるように思われる。彼が死を身近なところで感じたならば、彼を投影したハンスにも同じく死の残酷さを目にする必要があったのではないだろうか。加えて、この「溺死」は、作品内において「既視感」と「運命」をほのめかす役割を担っているようだ。青年たちに訪れる逃れ難い絶望を表すため、この死は作られたと考える。

その後、ハイルナーは学校を脱走した。彼の失踪は情熱的で伝説的なものとなり、ハンスの心にも大きな衝撃を与えたに違いない。友を失ったハンスは、学校でその後孤立していくことになる。

そして彼もまた、退学という道を選ぶのだ。彼は、友を得ることでいい意味でも悪い意味でも、世界を広げたのだと思える。青年期においての人との関わりはともすると危険性ははらんだものなのかもしれないという感想を持った。

ハンスは死んだ。冷たい水の中で誰にも看取られることのない非業の死を遂げた。父は泣かなかった。ただ黙って、ハンスの穏やかな死に顔を見つめていた。私はそのシーンが一番心に残っている。父は何を考えていたのだろうか。いや、ヘッセは、この「父」に何を考えさせたのだろうか。私は、このシーンにヘッセの、「父」に対する復讐のようなものを感じずにはいられないのだ。

一見すると、「車輪の下」は人に容易な読書を許すような作品ではない。冒険小説のような躍動感や高揚感もない。しかし、なぜこの作品が、私を含め今も多くの人を惹き付けるのだろうか。

理由の一つとして、この主人公・ハンスは人間の中に少なからず存在するからなのではないか、ということが考えられる。人間といっても、私は特に現代人と「車輪の下」との関係性について言及したい。

車輪は動きだし、加速する。車輪を動かすのは、ハンスの父親か、ヘッセの父親か、あるいは車輪自体が社会そのものの比喩だったのかもしれない。

車輪は動きを止めず、ハンスは翻弄され、疲弊した。そして最終的にはその車輪に轢かれたかのように命を落とした。この、絶望的な結末から私たちが得られるものは何か？

現代社会に生きる私たちにとって、社会を車輪に例えるのは不自然なこととは思わない。青年期の私たちは、「疾風怒濤の時代」と表わされることもあるように、いつも何かに追われ、急ぎ立てられて生きている感は否めない。

私も、義務教育を経験し、受験もした。猛勉強をしたこともある。今思えば、何をそんなに焦っていたのか、と思うほど心に余裕がなかったこともあった。やりたいことと、やらなければならないことの狭間で苦しんでいたのだ、と冷静な分析をすることも今ではできるが、そのころの自分には、言葉では表現できない何かがあったように思う。

私の場合、ヘッセやハンスと違い、両親に過剰な期待をされることはなかったし、無理な勉強を要求されることもなかった。それでも感じた、私を取り囲むあの大きな力は何だったのかと、「車輪の下」を読んで考えた。

青年期はあらゆる欲求と義務を経験する。

親の期待に応えることで、認められたいという欲求は果たせるかもしれない。しかし、青年期の心が求めるのはさらなる自己の確立である。その、自己の確立にとって重要な役割を果たすのが友人なのだ。学校という共同生活に身を置いたとき、私たちは狭かった世界を広げることになる。主観が主だった心が、他者の存在や、その感情を知ることで客観を手に入れる。友人の言葉は自分のものとは全く違う世界を見せてくれるものだ。そうやって別の視点から自分を見ることをはじめる。時に、自分の誤りを見つけ、時に優越感を得る。そんな他者の介入を許しながら、私たちは自己を探し、研磨する。

青年期の人間にとって、それらの活動は自由に、自然と行われていくべきだ。行き過ぎる圧力は、時に心身の自由を奪ってしまう。そうして動きを止めたとき、私たちは自分を確立する前に、自分の力の敵わない力に辟易するのだ。いつの時代もそうかもしれないが、私たちの周囲は、常に私たちの手が到底及ばない距離でまわっているように見えがちだ。それに気づいた時、私たちが「車輪」を見てしまった時、ハンスの苦悩は私たちの傍にあるような気がする。

時代を超えて、ハンスとヘッセの苦しみを垣間見ること、共有することは現代の境遇を客観視しているようなトランスを覚える人も少なくないだろう。しかしハンスのように絶望する必要はない。彼の生き方を見ることで思考は開かれたと気づくべきだ。

人生を共有し、客観視し、考察し、自らの生き方を模索することこそが、今も多く教育現場でこの「車輪の下」が推薦図書とされる所以なのだろう。

(かつき・こうへい：欧米言語文化講座 英語圏)

ジェームス・マシュー・バリー『ピーター・パンとウェンディ』

:ピーター・パン誕生の秘密

米原万紀子

ジェームス・マシュー・バリー『ピーター・パンとウェンディ』

ある晩、ダーリング家の少女ウェンディ、弟のジョンとマイケルの寝室に、少年ピーター・パンが、空を飛んで窓から入ってくる。以前この部屋で失くした影法師を取り返しに来たのだ。

ピーター・パンは、「ネバーランド」に住む、大人にならない奇妙な少年である。彼は、大人になりたくなかったために、生まれた日に家から逃げ出し、ケンジントン公園の池の中にある島へ飛んで行った。人間の子どもは、もとはみんな小鳥だったので、飛ぶことができるのだ。ピーターはその島で、人間の子どもでもなければ、小鳥でもない男の子として楽しく遊び暮らしていた。ある時ピーターは家へ帰り、悲しそうな顔をして眠るお母さんの寝顔を見て、戻ることを決意する。しかし、楽しい島の暮らしも名残惜しかったため、一度島へ帰り、何年も遊んだ後、小鳥や妖精たちに別れを告げて、再びお母さんのところへ飛んで行った。すると、開いているはずの窓はぴたりと閉まっており、中ではかわいい赤ちゃんを抱いたお母さんが、幸せそうに眠っていた。

「おかあさん、ぼくだよ。ピーターだよ」

と大声で叫んでみても、お母さんには聞こえなかった。しかたなく泣きながら島に帰ったピーターは、それから、このネバーランドという島で、成長することなく、迷子の子どもたちを従えて暮らしていた。

影法師がうまくくっつけられないピーターの泣き声で目を醒ましたウェンディは、裁縫箱を持ってきて、影法師をピーターの足に縫い付けてあげた。そしてピーターは、ウェンディを、夢の島の子どもたちのお母さんとしてネバーランドに招待することにした。ピーターは、ウェンディと、ウェンディがどうしても連れて行きたいという弟2人に妖精の粉をふりかけ、飛び方を教え、3人をネバーランドに連れて行く。そこで彼らは、インディアンと仲良くなったり、海賊と闘ったりと、さまざまな冒険を体験する。

しかし、やがてウェンディたちは両親の家に帰りたいと言い出し、迷子の子どもたちもウェンディの家の子どもになることになるが、大人の世界を拒絶するピーターは、ウェンディの家で暮らすことを拒み、代わりにダーリング夫人の提案を受け入れて、年に一度、春の大掃除のときだけ、ウェンディをネバーランドに連れて行くという約束が成立する。ウェンディは毎年ピーターを待っていたが、ピーターは来たり来なかったり。月日が流れ、再び彼がやってきたときには、ウェンディはすでに大人になり、ジェインという娘がいた。するとピーターは、ジェインを連れてネバーランドに飛び立つのだった。こうして、同じことがいつまでも繰り返されていくのだろう…。

ピーター・パン誕生の秘密

I. 作家と作品について

ジェームス・マシュー・バリー (James Matthew Barrie 1860 - 1937) は、イギリス・スコットランドのキリミューア生まれの劇作家、童話作家、ファンタジー作家であり、「ピーター・パン」の作者として有名である。

1902年、ピーター・パンが初めて登場した「小さな白い鳥」を出版。しかしこの作品でピーター・パンは、第13章から第18章にかけてのみ出演している。1904年に戯曲「ピーター・パン 大人になりたがらない少年」(3幕)を執筆。1906年、「小さな白い鳥」から抜粋した「ケンジントン公園のピーター・パン」を出版。そして1911年、さまざまな版の最終版として小説「ピーター・パンとウェンディ」を執筆、刊行した。さらに1928年には、戯曲「ピーター・パン」5幕版を出版。

また、ウェンディの家庭すなわちダーリング家は、バリーが散歩を欠かさなかった「ケンジントン公園」で出会ったデイヴィス家をモデルにしているとも言われている。

II. ピーター・パンは子どもの象徴

ピーター・パン (Peter Pan) は、ジェームス・マシュー・バリーの戯曲「ケンジントン公園のピーター・パン」、小説「ピーター・パンとウェンディ」などの主人公である。海賊のフック船長やインディアンタイガーリリーが住む異世界・ネヴァー・ネヴァー・ランド (ネバーランド) に移り住み、妖精・ティンカーベルと共に冒険の日々を送る永遠の少年である。

ピーターは子供の長所と短所をデフォルメしたキャラクターとして描かれており、純粋で一途な反面、善悪やけじめの見境がなく身勝手な性格描写が顕著である。そのようなピーターの態度に対して皮肉ったりたしなめたりする文章がみられることから、ピーターはヒーローとして描かれているのではなく、あくまでも子供の象徴として登場することが分かる。

III. 永遠の少年・ピーター・パンの誕生

「ピーター・パンとウェンディ」では、ピーター・パンは、生まれた日に両親が、彼が大きくなったら何になるか話しているのを聞いてケンジントン公園に逃げ出し、妖精たちと暮らすようになった。そして、何か月も家を離れて暮らして、ある日飛んで帰ってみると、なんと窓は閉まっている。そしてお母さんの横には、別の小さい男の子が眠っており、ショックを受けたピーターは、それからネバーランドで暮らすようになったとされている。

本作では、成長の拒否、母親からの逃走、そして母親からの追放。この3つが永遠の少年・ピーター・パンを生んだといえるだろう。つまり「ピーター・パン」は、単に成長拒否の少年をテーマとした作品ではないことが分かる。

ちなみに、「ケンジントン公園のピーター・パン」では、ピーター・パンはロンドンのケンジントン公園で乳母車から落ちたところをベビーシッターに見つけられず迷子となったことから、年を取らなくなったとされている。

IV. 今なお愛され続けるピーター・パン

「大人になりたくない」という若者の精神状況を分析したユング派の書物や「ピーター・パン症候群」という言葉も有名なこの物語は、児童読み物としても普及しており、ディズニーのアニメーションでも有名である。また、イギリスやアメリカで成功したミュージカルもロングランを続けていて、そのミュージカルは日本でも20年にわたって上演され続けている。

これほどまでの人気をおしなべて保っているのは、誰もが一度は思ったことがあるだろう「大人になりたくない」という気持ちなど、やはり「ピーター・パン」という作品そのものにある力なのだろう。

(よねはら・まりこ：幼稚園教員養成課程)

マリー・ルイーズ・ド・ラ・ラメー『フランダースの犬』

:フランダースの犬の魅力

石川 都

ラメー『フランダースの犬』

舞台はベルギーの首府アントワープから一里半ばかり離れたフランダース地方。村はずれの小さな小屋におじいさんと少年ネルロと犬のパトラッシュの三人は暮らしていました。牛乳運びの仕事で生活をしのぎ、貧しいながらも平和に暮らしていました。そして、ネルロはいつかルーベンスのような偉大な画家になることを夢見ていました。

しかし、ある夜粉挽場が火事になり、ネルロは粉挽屋の主人に放火犯だと疑われてしまいました。それ以来牛乳運びの仕事も減り、ほんのわずかのお金しか入ってこなくなっていました。さらに、クリスマスを目の前に優しくおじいさんが亡くなってしまいました。そしてついに家賃が払えず小屋からも追い出されてしまったのです。

その日はネルロが出演したアントワープの絵画コンクールの結果発表の日でもありました。しかし結果は落選……。ネルロは落胆し、空腹と疲労から幾度も倒れそうになりながらも厳しい吹雪の中、村へとひきかえしたのです。帰り道にパトラッシュが誰かの財布を拾いました。その財布が粉挽屋のものだとわかると、二人は残りの力を振り絞って、粉挽屋のもとへと届けました。そして、ネルロはパトラッシュを残し、再び吹雪の中へと飛び出て行きました。財布の中身は粉挽屋の全財産でした。帰宅した主人はネルロにきつくあたっての悔やみ改心したのです。粉挽屋に残されたパトラッシュはおかみさんに御馳走を与えられても振り向きもせず、ドアのそばを離れず逃げ道はないかとうかがっているのです。ネルロがどんな思いでパトラッシュを残してただひとり、飢えと悲しみを覚悟して出て行ったのか——それはパトラッシュにしかわからないことでした。そして隙を見つけ、パトラッシュは飛び出しました。ネルロの匂いを嗅いで、足跡をたどり、吹雪の中走り続けました。パトラッシュはついにアントワープの町の大寺院のなかに愛するネルロの姿を見つけ、よろめくようにかけよってぴったりとネルロに寄り添いました。そして月の光に照らし出されたルーベンスの名画をみて「見た。ああ僕はとうとう見た。ああ神様、もうこの上はなんもありません。」そう言って二人はルーベンスの名画の下で息を引き取ったのです。翌朝、粉挽屋の主人が迎えに来、また有名な画家がやってきてこう言いました。「本当の値打ちから言うところの子が選ばれるべきであった。あの画には天才のひらめきがあった。わしが何とかして探し出してみっちり仕込んで、その天才を磨こうとおもっていたものを——」けれども偉大なルーベンスの画の方にむけたままの死に顔は、口許にかすかな笑みをうかべたまま、あたりの人に「もう遅い」と言っているかのようでした。

フランダースの犬の魅力

I. 作家と作品について

イギリス、サフォーク州生まれ。子どもの頃、自分の名前をうまく発音できず、ウィーダと言っていたところ、周りからもそう呼ばれるようになったため、これをそのまま筆名にした。1859年、20歳のときにロマンス小説でデビューし、次々と作品を書いて人気作家となり、社交界で活躍する。イタリアの動物愛護協会設立に尽力するほど犬が好きで、1872年、前年のアントワープ旅行を元にした「フランダースの犬」を出版する。晩年は人間不信となり経済的にも苦しくなるが、自分の飼う犬たちのために少ない年金を使い、最終的には馬車の中で生活するまでになる。見かねた人々が安アパートに入れてくれたが、寒さのため身体が弱っており、肺炎をこじらせて亡くなった。

II. 選んだ理由

「フランダースの犬」という作品は小さいころに読んだことがあり、ただ悲しい物語だというイメージを抱いていた。かわいそうな話だったので小さいころ読んだきり読まなかったけれども、もう一度どうい話か読んでみたいと思った。今読み返すとやはり悲しさもあったが、ネルロとパトラッシュが貧しいなかでもお互いを思いやり気遣う暖かさがあつた。結末も二人は死んでしまったけれど、最期までより添い続けた二人に深い絆を感じた。子ども向けの物語だが大人にもぜひもう一度読み返してほしい作品である。

(いしかわ・みやこ：幼稚園教員養成課程)

ヒュー・ロフティング「ドリトル先生」

:みんな大好きドリトル先生

平良紫野

ヒュー・ロフティング「ドリトル先生」

ドリトル先生は、イギリス北部の（架空の街）、沼のほとりのパドルビーに住み、町医者をしていた。だが、動物好きが高じて、近隣の人々が寄りつかなくなってしまった。長年飼っていたオウムのポリネシアが、ドリトル先生に獣医になることを勧める。しかも動物語の特訓をしてくれた。

たちまち動物たちと話せるようになったドリトル先生は、獣医として、大評判をとるが、ワニが迷い込んだりしてこれまた近隣の百姓たちは牛や馬を連れてこなくなってしまう。

お金が底をついてきたある年の冬、はるばる飛んできたツバメによって、アフリカの猿たちが大疫病によってどんどん死んでいるという知らせを受ける。ドリトル先生は早速借金をして船を仕立て、ポリネシア、猿のチーチー、イヌのジップ、アヒルのダブダブ、白ネズミ、フクロウのトートーを連れて出発する。

ツバメたちに案内されてアフリカに着いたが、嵐で船は粉みじんになり、猿の住む国に向かう途中、ジョリキンキ王国の白人を嫌う王様に捕まってしまう。だがポリネシアの名案によって迷信深い王様をうまく煙に巻いて、猿の国へ脱出する。

猿の国では大忙し。トラやライオンまで助手に来てもらい、先生は朝から晩まで働いた。おかげで疫病は収まり、猿たちは大感激して、先生に珍獣中の珍獣である、二つ頭のオシツオサレツをプレゼントする。

帰り道に再びジョリキンキ王国を通り、道に迷ったところで捕まってしまうが、今度は王子のバンポに、顔を白くすると約束して見事脱獄する。王子に船を用意してもらい、ようやく帰途につく。

ところが、途中その海域でおそれられている海賊に遭遇する。いったんはツバメに引っ張ってもらって逃れたものの、カナリアの住む島に隠れているときに、再び海賊に捕まりそうになる。

今までのぼろ船がもうすぐ沈むことをネズミたちから教えられた先生は、先生の船に乗り移って空っぽの海賊船にのって沈みゆく船に乗った海賊たちに、略奪をやめこの島で百姓をするように命じる。

海賊船を乗っ取ったドリトル先生一行は、その船の部屋の一つに少年が閉じこめられていることを、耳の鋭いトートーによって発見する。彼のおじさんが行方不明だという。海の真ん中で、あらゆる情報を動物たちから求めたが、どこにもおじさんは見つからなかった。

イヌのジップは自慢の鼻を使って搜索を始める。あらゆる方向からの風を嗅ぎ、もうだめかと思ったとき、おじさんのかぎたばこのにおいをキャッチ。岩だらけの小島の穴に入っていた小父さんを見事発見する。

二人の故郷の港町に送り届けると、その町の町長さんからジップはその功績をたたえて金の首輪をもらったのだった。こうしてようやく先生一行は懐かしのイギリスに戻ってきたのだった。

みんな大好きドリトル先生

I. 作者について

ヒュー・ジョン・ロフティング (Hugh John Lofting, 1886年1月14日 - 1947年9月26日) は、アイルランド系アメリカ人の児童文学作家。

イギリス・バークシャーのメイデンヘッド生まれ。若い頃 (1912年以降) アメリカ合衆国やカナダで土木技師をしていたが、1916年にイギリス軍人として第一次世界大戦に出征、負傷した。軍用馬の殺処分にも多数遭遇、そのことに心を痛め、息子に送る手紙に書いていた物語をアメリカ人としてアメリカ合衆国で発表した。これが彼の代表作「ドリトル先生」シリーズであり、第二次世界大戦期間を除き全10巻を執筆した。加えて、ロフティングの死後、夫人が遺稿を整理して刊行した3冊がある。日本では井伏鱒二による翻訳で知られる。

II. 作品について

ドリトル先生 (ドリトルせんせい、英: Dr. Dolittle) は、アメリカの小説家ヒュー・ロフティングが著した児童文学のシリーズ名。また、その主人公である博物学者・医学博士・ジェントリの通称でもある。フルネームはジョン・ドリトル (John Dolittle) 。このシリーズは全12冊と番外編1冊。挿絵も作者の自筆によるものが使われている。刊行年は全て原書のもの。

- ・ドリトル先生アフリカゆき (1920年刊)
- ・ドリトル先生航海記 (1922年刊)
- ・ドリトル先生の郵便局 (1923年刊)
- ・ドリトル先生のサーカス (1924年刊)
- ・ドリトル先生の動物園 (1925年刊)
- ・ドリトル先生のキャラバン (1926年刊)
- ・ドリトル先生と月からの使い (1927年刊)
- ・ドリトル先生月へゆく (1928年刊)
- ・ドリトル先生月から帰る (1933年刊)
- ・ドリトル先生と秘密の湖 (1948年刊)
- ・ドリトル先生と緑のカナリア (1950年刊) : 遺稿を夫人が整理し刊行
- ・ドリトル先生の楽しい家 (1953年刊) : 遺稿を夫人が整理し刊行
- ・ガブガブの本 - ドリトル先生番外篇 : 遺稿を夫人が整理し刊行

III. 物語の背景

イングランド東部・ノーフォークの湖沼地方をモデルにした、「沼のほとりのパドルビー」という架空の町にある、ドリトル先生の屋敷が物語の最初の舞台になっている。

その屋敷には、先祖が園遊会をしたという広い庭があり、たくさんの動物たちが住んでいた。先生は博物学者であり、人間の医者として妹のサラ (Sarah) と暮らしていた。

先生はある日、相棒のオウムのポリネシアから、動物語の存在を知らされ、ポリネシアの手ほどきで、動物たちと話すことができるようになり、その噂を聞きつけた近所の動物たちが、治療のために屋敷におしかけて来るようになる。それからというもの人間の患者は誰も来なくなり、収入も絶たれてしまう。サラは人間よりも動物相手になってしまった兄に愛想を尽かして出て行ってしまい、一人身となってしまふ。

先生がこうなってしまったのは自分達のせいであると気づいた動物たちは会議をひらき、能力を出し合って、先生を手伝い始める。家事や家の動物たちの世話はアヒルのダブダブ、会計はフクロウのトートーが担当することになった。夕食の後は暖炉にあつまり（寂しさをまぎらわすために）動物たちが身の上話をするようになった。

ドリトル先生の評判は動物たちによって世界中に広がり、ある夜、先生の元にアフリカで深刻な伝染病が発生し、動物達が先生の救援を必要としているというニュースが届く。これをきっかけに、ドリトル先生はアフリカから果ては月にまで診療に赴くこととなる。

IV. 映像化作品

映画化（『ドクター・ドリトル』 エディー・マーフィー主演など）、アニメ化、CMキャラクター化されており、親しみやすいドリトル先生は、みんなから愛されています。

参考文献：ドリトル先生 Wikipedia

(たいら・しの：スポーツ・健康科学・生活環境)

エリック・カール『はらぺこあおむし』

:みんなに愛されるわけ

乾 彩友美

エリック・カール『はらぺこあおむし』

「おや、はっぱの上にちっちゃなたまご」
お月さまが、空からみていました。
お日様がのぼって暖かい日曜日の朝です。
ぽん！とたまごから、ちっぽけなあおむしが生まれました。
あおむしはおなかがぺっこぺこ。あおむしは、食べるものを探し始めました。
そして月曜日、りんごを一つ見つけて、食べました。まだおなかはぺっこぺこ。
火曜日、梨をふたつたべました。やっぱりおなかはぺっこぺこ。
水曜日、すももを三つ食べました。それでもおなかはぺっこぺこ。
木曜日、いちごを四つ食べました。まだまだおなかはぺっこぺこ。
金曜日、オレンジを五つ食べました。

(まだたべものを探してます)

土曜日、あおむしの食べたものは なんでしょう。

チョコレートケーキと

アイスクリームとピクルスと

チーズとサラミと

ぺろぺろキャンディーと

さくらんぼパイとソーセージと

カップケーキと

それから

すいかですって！

その晩、あおむしはお腹が痛くて泣きました。

次の日はまた日曜日。

あおむしは緑の葉っぱを食べました。

とてもおいしい葉っぱでした。

お腹の具合もすっかりよくなりました。

もうあおむしは、はらぺこじゃなくなりました。

ちっぽけだったあおむしは、大きくて太っちょになったのです。

まもなくあおむしは、さなぎになって何日も眠りました。

それからさなぎの皮をぬいででてくるのです。

「あっ、ちょうちょ！」

あおむしが、きれいなちょうちょになりました。

みんなに愛されるわけ

I. 作者について

エリック・カール (Eric Carle, 1929年6月25日-) はアメリカの絵本作家。

ニスを下塗りした薄紙に指や筆で色をつけた色紙を切抜き、貼りつけていくコラージュの手法が特徴。鮮やかな色彩感覚によって「絵本の魔術師」といわれる。カールが発表した絵本は40作以上ののぼり、39カ国語に翻訳され、出版部数は2500万部を超えている。

II. 作品について

『はらぺこあおむし』 (原題: The Very Hungry Caterpillar) は

アメリカの絵本作家エリック・カールが1969年に出版した幼児向け絵本。

日本では森比左志訳で偕成社より発売されている。

ジョージ・W・ブッシュ米元大統領が、子供の頃に読んで印象に残った本として、この作品を挙げた。しかし、この作品が最初に出版されたのはブッシュ大統領が大学生の頃だった事から、彼が子供時代にこの本を読んでいなかった事が暴露されてしまった。という逸話がある。

III. 愛されるわけ(魅力)

私はこの「はらぺこあおむし」には、8つの魅力があると思います。

- 1、生まれたばかりのあおむしが、おなかが痛くなったり、さなぎになったりする変化に富んだ物語に、ハラハラドキドキ。最後に美しい蝶になることで子どもたちは、ほっと安心し、大きくなることを、希望と期待をもって受け入れるようになります。
- 2、あおむしといっしょに試練を乗り越えることで、耐えて待つことや、困難を克服することの大切さを学びます。食べ過ぎは体に良くないということも。
- 3、あおむしが食べるのは、りんごやなし、ケーキやキャンディなど、どれも子どもたちが大好きなものばかり。絵本の中で夢がかなえられ、いろいろな食べものの名前も覚えます。
- 4、1個のりんご、2個のなし、3個のプラム…。読みながら自然に数を覚えます。
- 5、緑色のグラデーション、カラフルな水玉。カールのコラージュが生み出す色彩が、心をイキイキさせます。
- 6、お腹が痛くて泣いている、小さなあおむし。まるまる太っちゃになったあおむし。最後には、羽を広げた見ごとな蝶！ダイナミックに変化する形に、子どもたちは大喜び。
- 7、青白い月が照らす土曜日の夜から始まった物語は、日曜日のすばらしい日の出を迎え、あおむしの元気な活動が始まります。1週間の曜日や1日の日のめぐりなど、社会のしくみを知ることができます。
- 8、ページにあいている小さな穴のしくみ。まだお話をよく理解できないごく幼い子どもたちも、この穴に指を入れて遊べます。
「さわれる本、読めるおもちゃ」を作りたいという、カールの願いから生まれたアイデアです。

これらが、多くの人々に愛される理由なのではないかと思います。

私も時々図書館などで読んでみます。とてもいい絵本だと思います。

参考文献：はらぺこあおむし Wikipedia
世界中の「はらぺこあおむし」

(いぬい・あゆみ：スポーツ・健康科学・生活環境)

サン=テグジュペリ『*Le Petit Prince*』

:星の王子さまの謎

笹尾 瞳

アントワーヌ・ド・サン=テグジュペリ「星の王子さま」

僕が6歳の時。色えんぴつではじめて描きあげたのは大蛇『ボア』の絵だった。その『ボア』はゾウをまる飲みして消化している大蛇の姿だ。この傑作を、僕はおとなたちに見せて、「この絵こわい？」と聞いてみた。すると答えはこうだ。「どうして帽子がこわいの？」おとなたちにはいつだって説明がある。絵は認められず、こうして僕は6歳にして画家というすばらしい職業をあきらめてパイロットになった。

今から6年前、僕はサハラ砂漠に飛行機が不時着した。エンジンが壊れて、生きるか死ぬかの問題だった。僕は最初の晩、人の住む地から千マイルもかなたの砂の上で眠りについた。だが夜明けに突然小さな変わった声で起こされた。

「おねがい……ヒツジの絵を描いて!」

飛び上がって起きるとそこにはとても不思議な雰囲気、輝くばかりの愛らしい姿をした小さな男の子がいた。ヒツジをほしがる小さな男の子に僕は例の『ボア』の絵をみせた。

「ちがうちがう!ボアに飲まれたゾウなんていないよ。」

絵がボアと見破ったこの子がどこから来て、どうしてここにいるのか理解するのに僕はとても時間がかかった。

男の子はよその星から地球にきた王子さまだった。王子さまの星はとても小さくて、バオバブの木が3本生えてしまったら破裂してしまうほどの小ささらしい。これは三日目に王子さまが教えてくれた。四日目の朝は、小さな星を何歩か移動して夕陽(ゆうひ)を何度もみたという話。なんと一日に四十四回も見たことがあるらしい。王子さまがぽつりとつぶやいた。

「ねえ……悲しくてたまらないときは、夕陽(ゆうひ)が見たくなるよね……」

王子さまは一日に四十四回も悲しくなったのだろうか。

五日目には王子さまの秘密がひとつ明らかになった。王子さまの星には一輪のバラがいた。バラはとても美しかったが見栄をはったり気まぐれな言葉を言っでは王子さまを困らせていた。そんなわがままなバラに嫌気がさして王子さまは小さな星を出て行ったのだ。そこから王子さまは6つの星を旅する。王さまの星。うぬぼれ男の星。呑み助の星。実業屋の星。点燈夫の星。地理学者の星。どれも王子さまが住める星ではなかった。そうして7つ目の星が地球だった。地球についた王子さまはヘビに出会う。

「もし故郷の星にどうしても帰りたくなったら、おれが力を貸そう。おれが……」

「おれにはすべてが解けるから。」

そうヘビに言われて王子さまは約束をした。その後たくさんのバラやキツネにも出会った。

そのキツネとは『絆』を結ぶ。そして大事なことを教えてくれた。

「きみのバラが、この世に一輪だけだってことがわかるから。」

「ものごとはね、心で見なくてはよく見えない。いちばんたいせつなことは、目に見えないんだ。」

王子さまはキツネの話に続き、鉄道員、物売りの話をしてくれたが、物売りの話を聞いた時には僕が砂漠に不時着してからちょうど一週間目の時だった。そして持っていた水の最後の一滴がなくなった。僕と王子さまは井戸を探しに砂漠を歩き続け、夜明けにようやく井戸を見つけた。井戸が見つかる前に王子さまは言った。

「星々が美しいのは、ここから見えない花が、どこかで一輪咲いているからだね…」

「砂漠が美しいのは……どこかに井戸を、ひとつかくしているからだね…」

水を飲んだ後、僕は飛行機の修理にもどり、明日の夕方にまた王子さまと再会することを約束した。なんだか僕は不安になっていた。

翌日の夕方もどつてくると王子さまがへびと話をしていた。へびがその場を去った後、王子さまにかけよると王子さまは雪のように蒼白になっていた。王子さまは飛行機が直ったことも知っていて、今夜自分も星に帰ると言い出した。たった一輪のバラを守る責任があるとも。

「夜になったら星を見てね。きみには、笑う星々をあげるんだ!」

王子さまは僕に苦しむ姿を見せたくないといってひとりでへびのもとへ行った。僕は動くことができなかった。二人で黙って泣いた。王子さまの足首あたりに、ぴかっと黄色い光が走った。たった一瞬で王子さまは動かなくなった。砂漠のせいで物音ひとつせず、王子さまは倒れた。

あくる朝王子さまはどこにもいなかった。僕は、王子さまがちゃんと星に帰ったのだとわかった。そうして僕は、夜、星々の笑い声に耳をすますのが、好きになった。

星の王子さまの謎

I. 作家について

1900年6月29日アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリはフランスのリヨンで生まれる。美術学校の建築科に入学。20歳の時2年間の兵役を経て飛行機操縦免許を取得し、郵便航空業に就く。かたわら作家としても名声を高める。第二次世界大戦中アメリカに亡命。『星の王子さま』はこの頃書かれた作品であり、1943年に出版された。その後空軍パイロットとして北アフリカ戦線に参加。1944年7月31日偵察飛行中行方不明に。

II. 『星の王子さま』というタイトル

『Le Petit Prince』は直訳すると『小さな王子様』になる。しかし、日本の多くの出版社が『星の王子さま』と邦訳しているのはなぜか。フランス語で『Le Petit Prince』。英語では『The Little Prince』、中国語では『小王子』。他の国ではそのままストレートに訳すケースが多い。日本語で「王子さま」というと、子どもをイメージするケースが多いので「小さな王子さま」だと、くどい感じがするからかもしれない。ただ「王子さま」だけでは味気なく、この王子さまは地球人ではない、よその星からやってきた、ちょっと不思議な王子さまなのだということがわかるように「星の」がつけられたようだ。

Ⅲ. 王子さまとパイロットの関係

王子さまも、パイロットも作者の<分身>とされている。パイロットは、童心を忘れ、少し頭が堅くなった大人。王子さまは、まだ純粋で何でも素直にもの言える子どもだ。初対面ですぐに仲良くなったのは王子さまがボアの絵を見破ったからなのだ。

Ⅳ. わがままなバラの花

バラの花は、『星の王子さま』のなかで重要な役割を果たしている。バラの花は<愛>の象徴なのだ。王子さまがアクションを起こし、自分の星を飛び出すきっかけがバラの花であり、もとの星へ帰るきっかけもバラの花だ。バラは、王子さまに愛の存在と責任を気付かせるために作者が用意したものだ。また、このバラは作者の妻であるコンスエロであるともされている。『星の王子さま』は、コンスエロの遺書でもあり、作者はありのままのコンスエロを丸ごと受け入れようとしたメッセージを『星の王子さま』に込めて、コンスエロにこっそり語りかけたのだ。

Ⅴ. キツネの使命

キツネは、ある<使命>をおびて王子さまと接触をした。キツネは王子さまに二つの大切なことを教える。ひとつは、「仲良くなったら（絆を結んだら）<責任>を持たなければならない」ということ。もうひとつは、「大切なことは目に見えない」ということだ。元から答えは王子さまの中にあり、それをキツネが言葉にしてくれたのだ。王子さまの答えが見つかった時が、パイロットの飛行機が直る時だ。逆に言うと、飛行機の修理が終わった時に答えが表われる。キツネは<老賢者>として登場し、王子様の旅の<終点>を誘導した。

Ⅵ. 王子さまは死んでしまったのか

この世のものでない王子さまは、時がくれば消える運命にあったのだ。再びヘビに出会い、もとの星へ帰る打ち合わせをヘビとする。王子さまの星は遠く、体は重すぎて持っていけないのだ。だから魂となり、王子さまは自分の星に帰るほか、方法はなかった。そこで強い毒をもつヘビに出会った意味がでてくる。しかし、作品の中で<死>という言葉は具体的にでてこない。これは、作者が読者に対して「きみたちはどう解釈するか、自分の目によくみてごらん」と訴えかけているからなのだ。王子さまが姿を消したあと、パイロットが砂漠をかけずりまわり、必死で王子さまを探すが、結局見つからない。しかし、王子さまはパイロット自身の中にいた。作者の分身である二人が融合されたのだ。

Ⅶ. 私が『星の王子さま』を選んだ理由

この本をまじめに読んだのは、高校生の時だった。新訳として出版された文庫本を買い、何度も何度も読んだ。最後まで読んだ後、とても純粋な気持ちになれる。様々なメッセージがこめられた『星の王子さま』は、一度読んだだけでは理解できなかった。それでも何度も読むうちに自分なりに解釈したり、友達と話し合ったり、読めば読むほど考えさせられた。上記に書いた以外にもたくさんの謎や秘密があり、刊行後60年以上たった今でも世界中で愛されている本だ。もっとたくさんの人に読んでほしいと思いこの本を選んだ。

(参考文献)

星の王子さま サン=テグジュペリ 河野万里子訳 2006 新潮社
『星の王子さま』の謎が解けた 吉田浩 2001 二見書房

(ささお・ひとみ：幼稚園教員養成課程)

『シャーロットのおくりもの』

：作品から学んだこと

坂口 渚

『シャーロットのおくりもの』

草花が咲き、小鳥がさえずる春の朝の中で、農場の1日が始まろうとしていた。少女ファーンの牧場で11匹の仔豚が誕生した。しかしファーンの父アラブルは仔豚の中に未熟児がいるのを見つけた。母豚のお乳は10個。父は未熟な仔豚を始末しようとしたが、そのことを知った娘のファーンが飛んで来て反対した。泣いて懇願する彼女に、その仔豚が預けられることになった。ファーンはウィルバーと名付けて、一生懸命に世話をした。ファーンの優しい努力で、ウィルバーはすくすく育った。だがそんな幸福はいつまでも続かなかった。成長したウィルバーをいつまでも手元においておくことはできず、手離さなければならなくなったのだ。ウィルバーがファーンの伯父ズッカーマンの農場に買われていく日、それはとても悲しい日だった。ズッカーマン農場にはガチョウのおばさんや羊、それにネズミのテンプレトンなど多くの仲間がいたが、ウィルバーはファーンと別れた淋しさでしょげかえっていた。そのうえ、自分がいつか肉にされてしまうのだということを知って、すっかり怖れおののいていた。

すると、どこからか女性の声がした。「私が友達になって命を救ってあげる！さあ胸を張って！」優しいクモのシャーロットがなぐさめてくれたのだ。ウィルバーはシャーロットと友達になり、明るさを取り戻したが、いつか殺されると思うと元気がでなかった。ウィルバーに、命を助けると約束したシャーロットは、小屋の入り口に自分の糸を織って「見事な豚」という文字を作った。これがたちまち評判となり、ウィルバーを1目見ようと見物人でいっぱいになった。それがあきられると「すばらしい」という文字を作り、さらに「新しく輝く効果」と織った。3度人々は集まり、ズッカーマンはとうとうウィルバーを品評会にだすことにした。会場にはシャーロットやテンプレトン、アラブルやファーンも同行することになった。

到着の夜、シャーロットは卵を生むために新しい巣を作り始めた。そして卵を生んだシャーロットはすっかり弱ってしまった。一方、品評会ではウィルバーは1等になれなかったが、シャーロットが心をこめて織ってくれた「つつましい」という文字があったために特別賞が与えられた。ズッカーマンはウィルバーを長生きさせることを宣言した。小屋に戻ったシャーロットは力尽きたように死んだ。

そして翌年の春。ウィルバーがしっかり守り続けた卵袋から、シャーロットの子供たちがぞろぞろでてきた。だが子供たちは口々にさようならといいながら風に乗って飛んでいってしまった。取り残されてガッカリするウィルバーに、「今日は」と呼びかける、3匹のクモがいた。飛べない小グモだった。ウィルバーはまた仲よく暮らしていく仲間ができたのだ。このシャーロットの子供をせいいっぱい可愛がってやろうと思う。そして、いつかこの子供たちに、あのシャーロットのような美しい文字で、“この入り口はかつてシャーロットの住居でした、彼女は多才で美しく誠実そのものでした、彼女の思い出は永遠に消えない”そう書いてもらおうと思っていた。

作品から学んだこと

私は、映画化され話題になったこの作品に前々から見たいと思っていた。主人公が豚で、多くの登場人物が動物ということで、どのような物語を繰り出すのか知りたかったからだ。"シャーロックからのおくりもの"を見てお母さんのおっぱいを吸うことができずにいるウィルバーは、「育たない仔豚」と判断され、殺されそうになる。それを救い、自分が守ると決めたファーンは、ウィルバーに対して子供ながらに一生懸命愛情を注いでいた。その姿は微笑ましく、また、大人になって忘れてしまった何かを思い出させてくれるものでもある。また、この映画で友達は、私たちにとって必要不可欠なものであることを再認識させてくれる。友達とはどういう相手なのか、「友情」とはどういうことなのか、そんな言葉で説明してもわかりにくいことを、この映画を観ることで知ることができる。

今回、作品を紹介することに挑戦してみて、自分が感じたことを他人に伝え自分の感動を理解してもらうことはいかに難しいかを改めて実感した。自分が「おもしろい」と感じてただ自分の感情だけをひたすら伝えるだけでは相手の心に響きにくい。そうではなく、簡潔にわかりやすく、そして自分が印象に残った場面の例をあげてどのようなおもしろみが作品の中にあるのかを説明に交えるべきなのだということを学んだ。

(さかぐち・なぎさ：幼稚園教員養成課程)

ルース・スタイルス・ガネット『エルマーのぼうけん』

:選んだ理由

早川 一穂

『エルマーのぼうけん』

ぼくのお父さんの名前は、エルマーといいます。ぼくのお父さんは子どものころ、ある雨の日に1匹の猫に出会いました。ぼくのお父さんは、その猫を見てひどく気持ちが悪そうだと思ったので、「うちにこないかい？」と猫にききました。猫は、薄汚い自分に親切にしてくれる人がいることに、心底驚きました。そして、猫とぼくのお父さんは出会ってすぐに仲良くなりました。しかし一緒に家に帰ると、ぼくのお父さんのお母さんはとても怒りました。「エルマー・エレベーター!!1度、宿無しののら猫に食べ物をやれば、町中ののら猫に食べ物をやることになるんだからね!!」と。だからエルマーは、お母さんに内緒で地下室で猫を養っていましたが、3週間後に見つかってしまいました。

仕方ないので、猫とエルマーは公園に散歩に出かけて、なにか楽しい話がないかなあと考えました。エルマーは、空が飛びたいと猫に話しました。すると猫は、かわいそうな話があるよ、とエルマーに猫が先日、旅行に行ったときの話をしてくれました。「みかん島からびよこびよこ岩をわたったところに、誰も近づこうとしないどう猛で怖い動物がたくさんいるどうぶつ島があるのさ。その島は、馬のひづめのように真ん中を大きな川が流れている。だから動物たちは長い間、反対側へ行くためにわざわざぐるっと川沿いを行っていたんだ。」エルマーは、空を飛ぶ話とどう関係しているのかと、はらはらして聞いていました。「しかし、4ヶ月前に、空に浮いていた雲から1匹の赤ちゃんのリュウが落ちてきた。動物たちは、『こりゃいいものが落ちてきた』と大喜び。それから、川の渡し役として赤ちゃんリュウを太いロープで首をしばって無理やり働かせているんだ。もし、そのリュウを助けたらお礼に世界中を背中に乗せて飛んでくれるかもしれないよ。」と猫は話しました。

その気になったエルマーはお母さんに内緒で1週間後、お父さんのカバンに冒険の準備をして、みかん島行きの船にかくれて乗り込みました。猫は、もう歳を取りすぎていて冒険は出来ないのではエルマーを見送りました。エルマーが持っていったものは、チューイングガム、キャンディー2ダース、輪ゴム1箱、歯ブラシと歯磨き粉、虫めがね6つ、くしとブラシ、七色のリボン、船に乗っている間の食料でした。エルマーが船に6日6晩かくれていると、船員の、次はみかん島だぞという声が聞こえました。見つかると家に返されてしまうので、こっそり船をおりたエルマーは、どうぶつ島に向かうために海岸を目指しました。海岸にたどりつくと、点々と海の上を岩が続いていてその先に小さく、緑のかたまりが見えました。そこから、7時間かけてエルマーは、ぴよんぴよん岩を飛び続けました。そして、一番しみの岩からどうぶつ島に、ぴよん、と飛び移ることが出来ました。

ひとまず、エルマーは島を2つにわけている川を探すことにしました。まず始めに、あわてん坊のネズミに出会いました。ネズミは、しんにゅうしゃだ~と言って、島のどこかへ消

消えていきました。エルマーは、ネズミが誰かに言いつけないか心配になりました。夜になって川を目指していると、どこかから声が聞こえました。「おや、サル君、何をせおっているんだい?」「病気のおばあさんじゃないかね?」と2つの声が聞こえます。エルマーはこわくなって「そうとも」と答えて駆け出しました。後になって、その2つの声は、2匹のカメだったことが分かりました。てくてく歩いていると、2つの大きな岩が話をしていました。

「誰かがこの島に忍び込んだらしいぞ。ネズミが言ってたからなあ」「気にしすぎだよ～あわてもののネズミの言うことだ。もうおやすみにしよう」と。それは岩ではなく、大きな2匹のいのししでした。言い終わると2匹は、ジャングルの中に消えていきました。

エルマーは夜中歩いて、やっと川にたどりつきました。川沿いに行こうとエルマーは思ったのですが、どうぶつ島は曲がっているのです。まっすぐに進んでいたエルマーは、川から離れてジャングルの中を進んでいました。すると、7匹のトラに出会いました。トラはとてもおなかが減っていました。そこでエルマーはチューインガムを放り投げ、トラが食べている最中に逃げ出しました。どんどん歩いていくと、大きな沼に入ってしまったのです。すると、下からぐわっと角でおしりを空中に持ち上げられてしまったのです。なんだ?とエルマーが思っていると、姿を現したのは、角がくすんできて泣いていたサイだったのです。そんなサイにおそわれないために、エルマーは持ってきていた歯ブラシと歯磨き粉をあげました。サイがそれで夢中になって角を磨いているので、エルマーはさよならと手を振りました。

それからエルマーは、もとの道に戻りました。そこからすこし先へ行くと1匹の動物が怒っている声が聞こえました。いってみると、1匹のライオンがタテガミをぐちゃぐちゃにして怒っていました。そしてエルマーを食べるといっているので、食べる前になぜそんなに怒っているのか、エルマーは聞きました。「お母さんライオンがもう少しで島に来るんだ。このタテガミをどうにかしないと」とライオンは言いました。そこでエルマーは、七色のリボンとブラシをあげました。ライオンは、上機嫌になりタテガミをセットし始めたので、エルマーはその間に逃げることにしました。

やっとリュウの渡し場についたのですが、リュウは川の反対側にいるのでいませんでした。これからどうしようかとエルマーが考えていると、ドスンと大きな音をたててゴリラが現れました。ゴリラは、ひどく苛立っていてエルマーに乱暴しようとしたのですが、いきなり、「かゆい!!」と言いサルを6匹呼びつけてノミ退治をさせ始めました。しかし、ノミは小さくてなかなか見つかりません。そこでエルマーは、虫めがねを6つサルに渡して、その場から逃げました。ゴリラは、サルに囲まれて前が見えなくなっていたので、簡単に逃げられました。

エルマーは、どうやってリュウがいる反対岸まで行って、リュウを助けようか考えました。そうすると、ますますリュウがかわいそうになってきました。リュウは、ゴリラに羽をねじられて無理やり反対岸に渡らされて、ロープを引っ張られると、首が痛いので帰ってこなければならぬのです。

考えていると、川でバシャンと音がしました。下を見るとワニがいました。ワニはエルマーを食べたくて川に入ってくるように誘います。そこでエルマーは逃げ口上でとっさに、「キャンディーなら持っていますよ」といいました。すると、川からぞろぞろと17匹もワニが現れました。そこで、エルマーはいい考えを思いつきました。「さあ、1本は岸にさしますよ。キャンディーは水にぬらさない方がいいですから。」という、1匹のワニが岸へあがってきました。そのワニのしっぽに、2つ目のキャンディーをくくりつけます。そのようにして、しっぽにどんどんキャンディーをくっつけていくと、長いワニの橋ができあがりました。ひよいひよいとワニを渡って行くと、反対側の岸につくことができました。

反対側の岸には、騒ぎに気づいたリュウが出てきていました。動物たちが、エルマーは侵入者だと気づき始めたので、急いでロープを切りました。そしてエルマーとリュウは、広い空へと飛び立ちました。リュウは本当にエルマーに感謝しました。そして、2人は、2度とこんな島にくるものか、と思いました。

選んだ理由

I. リトードルをやり終えて

久しぶりにこの本を読み直したのですが、会話の表現や動物の描写がおもしろく、この年齢でも楽しんで読むことができました。しかし、自分が読んだ話をリトードルするというのは、とても難しいと感じました。そのお話のおもしろさを失わずに、伝えなければいけませんから。けれど、やっていくうちに、ああこの作者はここを楽しんで書いたのか、というところが少しはわかって、おもしろかったです。

II. なぜこの本を選んだのか

この本が、僕が初めて読んだ長編児童書だからです。そして、子どもだけでなく、中高生や僕たちの年代の人に、もう一度、児童書に興味を持ってほしかったからです。児童書は、子どもの時に読んでおもしろいのですが、歳をとってから見ると意外な背景や設定に気づけたりしておもしろいと思います。その楽しみを、多くの人に知ってもらいたいですね。

第二部

わたしの選ぶ一冊

:再話して欲しい物語り

まだ幼かったあの頃

久留島 歌穂

わたしの選ぶ一冊

『小公女』 フランシス・ホジソン・バーネット (1849-1924) 【アメリカ】

大学生活にも慣れて夏休みに実家に帰ると、昔よく読んだ童話や絵本が段ボールの中に収納されていました。今となってはもう読む人がいないからなのでしょう。懐かしいと感じながら昔のように何冊か手にとって読み始めました。そのとき読んだ中の一冊が、今回取り上げた『小公女』の本でした。

私は幼い頃、よく本を読む習慣がありました。幼稚園ではもちろんのこと、家でも就寝時間を過ぎてから親の目を盗んでは本を読んでいた。家にたくさんある本の中で一番好きだった本がこの『小公女』でした。絵本だったのでイメージも湧きやすかったのか、「お金持ち」や「宝石」といった自分とはかけ離れたものに憧れを抱いていました。またセーラの人格もとても気に入っていて、「セーラみたいに優しい女の子になりたい！」とよく思っていました。今思えば、セーラの裕福で幸せな生活の部分にだけ焦点を当て、貧しい生活を送っていた頃のセーラを、自分の中で自然と物語の中から排除していたのかもしれませんが。もしくは、『小公女』の伝えるメッセージを理解するには幼すぎたのでしょうか。

裕福だけれど母のいない家庭、突然の父の死による孤児への転落、学院長や友人からのいじめなど、『小公女』という一つの物語には様々な背景が織り込まれています。小学校・中学校・高等学校と学校生活を送ってきた今なら、『小公女』の裏に隠された背景を意識して物語を読めるのではないかと思います。

貧しくても常に優しい心を持っていたり、いじめられても明るく優しい心を忘れなかったり、自分が辛いときでも相手を思いやる気持ちを忘れなかったり…セーラは物語の主人公だから理想的な人格であると言ってしまうまでも、現実世界とはかけ離れているかもしれないけど、『小公女』のセーラの生き様は逆境に生きる子供たちに、勇気と励ましを与えてくれるのではないかと思います。

大部分の物語はハッピーエンドが約束され、『小公女』もそのうちの一つですが、ハッピーエンドに辿りつくまでが本当は大事なのではと思いました。『小公女』だけでなく、数多くの物語には何かメッセージがあると思います。幼少の頃は単純に「楽しい」「羨ましい」といった感想しか持てないかもしれませんが、大人になって再度物語を読むとき、幼少の頃にはわからなかった、物語が伝えるメッセージを理解した上で物語を楽しめるのではないかなと思いました。

今回のレポートで児童文学の深さを実感できました。昔読んだ童話や絵本をもう一度読んでみたいのです。

オバマ政権になった今、もう一度、読み返してみたい 『アンクル＝トムの小屋』

加賀谷茉莉子

わたしの選ぶ一冊

『アンクル＝トムの小屋』 ハリエット・ピーチャー・ストウ 【アメリカ】

幼い頃、私は、「本」と名の付く物ならどんなジャンルでも大好きだった。可愛らしい童とともに歩いた『エルマーの冒険』、『長靴下のピッピ』で裸馬に跨った船長のお転婆娘になり、『小さなスプーンおばさん』で小さな森の世界に飛び込んだ。小さな星の不思議な世界『星の王子様』、『赤毛のアン』でアンとギルバートの意地っ張りな恋の行方に胸躍らせ、マシュウの死に涙した。『アルプスの少女ハイジ』で、アルプスの雄大な自然や暖炉の前で焼く蕩けるチーズに憧れ、『トムソーヤの冒険』でペンキ塗りに挑戦したくなった。母の50冊にもおよぶ世界文学全集は、私の夢の世界への始まりだったのかもしれない。

その中で、アメリカ文学シリーズは、『あしながおじさん』『小公子』『小公女』など本も読み、テレビでマンガも見てはまり込んだ作品が多い中、『若草物語』では、戦争に、体の強くない父親が従軍牧師としてでもアメリカ南北戦争に行く中での話であること、特に『アンクル＝トムの小屋』は、奴隷制度その物について書かれている悲しい話であることから、歴史や政治の要素があまりにも強く素直にのめり込めなかった記憶が残っている。

『アンクル＝トムの小屋』とは、どのような物語かというと、

「正直で真面目のクリスチャンである奴隷のトムが、ご主人の借金の為、家族や友だちから離されて、遠くの農場で酷い目に遭いながら独りぼっちで死んでいく。その死に際に、昔の坊っちゃんがトムを買い戻しにやって来るが時すでに遅く、全身を痛めつけられたトムは、その痛めつけた相手を「お気の毒な旦那様。わし、心から、貴方を許しますだよ。」と言いながら、どんな時も運命を恨むことなく死んでいった。トムを弔ったジョージは、やがて自分の奴隷達を一人一人自由な身の上にしてあげ、二度と奴隷を持つまいと誓った話しをし、トムに感謝をしつつ、奴隷だった人々にも正直なクリスチャンになるように話した。」という内容であったと記憶している。

小学生だった私は、「奴隷」って何？召使いがいることなのかなあ。いい暮らしをしていたら、お金を持っていたら、何でも思い通りに出来る生活って、ちょっとうらやましいかも…。今の日本には、白とか黒とか皮膚の色で人を差別したりはしない。しかも、同じ民族が相手を虐げたり、差別をしたり、物同様、売り買いをすることができるなんて、何て酷い国なんだろう。同じ人間を区別するなんて、恐ろしいことは嫌だ。私は、召使いと呼ばれる人がいるようなすごく裕福な暮らしではないけれど、そんな世の中に生まれなくて良かったと思った。

でも、知らず知らずの間に、無知から人を私自身も区別していたのだろう。ペンなどたくさん持っていない友だちに「買ってもらえばいいのに」。様々な体験や学習ができにくい知り合いに「どうして～できないの。」悪気はなかったのだが、自分にとって当たり前のことが必ずしも世間の価値観で無い事が解らず、人知れず人を傷つけた。自分の筆箱を盗まれた

ときにも、もしかしたら、自分の態度が原因だったのかもしれないと、今は思える。

辛い生活の中で「感謝」の心、「慈悲」の心を忘れないトム。祖母のまつられているお仏壇に毎日、ご飯や頂き物をお供えする時に手を合わせるくらいの宗教観しか無い私には、キリスト教の心、神を信じ続け、誰をも分け隔て無く愛する心を持つトムの生き方は、胸が熱くなるというより、とても不思議な感じだったのだ。

ただ、こんな辛く悲しい物語の中で、私の心に残ったのは、そのことに反対した人がいた。黒人が立ち上がったのではなく、16代アメリカ大統領リンカーンを筆頭に白人と言われる人たちの中にいたことだ！

アメリカは、「民主主義の国」と国民自らが叫び、世界の平和は、アメリカが守っているかの如き昨今の政治状況であるが、それは、きっと、この『アンクル＝トムの小屋』の時代から培われた精神なんだろうとも思えてならなかった。

今、アメリカは、オバマ氏が黒人初の大統領となり、政権交代が行われた。白人だから、黒人だからと言うことは、人としては全く関係のない事ではある。しかし、今も世界中、あちらこちらで、姉が旅行するときでさえ、「白豪主義」を感じることもあるらしい。黄色人種であるアジア人の中の日本人である私達。その中で、純然と未だ残る、白人社会と黒人社会の貧富の差。スパニッシュ、ジャップ、アラブ系など民族意識は、私たちの世界が異民族国家の集合体で有り続ける限り消えることはないのである。

この夏休みにまた、アメリカは9.11のテロの日を迎えた。イラク紛争は、終結を迎えそうにもなく、民主党に政権交代した日本は、自衛隊による海上での給油作業を止めようとしている。北朝鮮は、自国の利益のため、核開発を武器にし、世界に驚異を振りまいている。8月、韓国を旅したとき、たまたま、金大中元大統領が崩御された。広場では、その死を悲しむ若者が、インタビューに答え、若い徴兵で警察官になっている若者が、警備にあたっている姿を目にした。一国の元大統領の死に、多くの国から、使者が送られ、平和外交がなされていた。その中に、そのことを痛む？もしくは、利用する北朝鮮代表の姿もあった。

私は、今、姉と共にリュックを背にドイツを旅している。その時、財布から何気なく取り出す「ユーロ」という紙幣ができた経過を思い出すにつけ、今一度、世界はこの「ユーロ」の誕生のように、経済的にも、人道的にも結びつくことは出来ないのだろうか。もちろん自国の利益は、大切である。人は、生きていかねばならないのだから。できれば、困らないように、裕福に生きたいのは当たり前のことであろう。しかし、それでは、世界はきっと、私たちが年取ったときには、壊れ去ってしまう。今、何を求めようとしているのか、考え直さなければいけないのではと考える。

政治に疎く、このように課題を与えられなければ、日々、世間のことに関心を持とうとしない私であるが、この世界を見るにつけ、考える心を持たねばならないと感じている。幼い頃に読み、人の差別意識の恐ろしさ、戦争の悲惨さ、富を持つことの傲慢さから、ずっと心に馴染まなかった作品『アンクル＝トムの小屋』を今一度、読み直してみたい。今なら、昔より何か感じ取れる物があるかもしれない。感じ取らなければならないと思っている。

『モモ』が教えてくれた時間と意識と心

島田 愛

わたしの選ぶ一冊

『モモ—時間どろぼうとぬすまれた時間を人間にとりかえしてくれた女の子のふしぎな物語』
ミヒヤエル・エンデ 【ドイツ】

あらすじ

ある街の円形劇場の廃墟に年齢も素性もわからない一人の女の子がやってきた。彼女の名前はモモ。彼女はみすばらしい格好をしていたが人の話を聞く能力にたけていた。彼女に話を聞いてもらおうと、心が穏やかになるのだ。彼女はたちまち街の人々にとってなくてはならない存在になった。

しかし、ある日街に灰色の男たちがやってきた。彼らは人の心を巧みにあやつって、ゆとりや暇は時間の無駄使いであることを街の人々に教え込む。人々は灰色の男たちの組織、時間貯蓄銀行に口座を開いて自分たちのゆとりの時間をどんどん貯蓄してゆく。それにつれて余裕のある生活ができなくなり、心も貧しくなってしまうのだ。

モモは灰色の男たちの存在と陰謀を知り、周りの人々を助けるため時間を取り戻す旅に出かけた。

この物語は、私が初めて読んだ長編小説です。もともと本を読むのが好きだった私に、母が薦めてくれたのがきっかけでした。

『モモ』は児童書でありながら大人にも人気がある本で、日本も含め、全世界で翻訳されて読まれているベストセラーです。1987年に映画化もされているので、本が苦手人はそれを見てもいいかと思います。

当時小学生だった私には時間とは何かなどわかりませんでした。内容を完全に理解でいたわけではありませんでした。ただ漠然と、時間は大切にしないといけないんだなあ幼心に感じたことを覚えています。

今回この本を選んだのは、当時わからなかった時間についてもう一度考えてみようと思ったからです。

まず、本を読みなおしてみても、これは子どものための童話であるけど、子供のころのような時間の感覚を忘れつつある大人のための童話であるということに気がつきました。何のために時間があるのか、時間を節約することでいったい何をgetするのか、これは私たちの感性が毎日の忙しさに鈍ってしまったせい であらなくなくなっているものです。実際、物語の中でも街の異変に気付いたのは子供達で、大人は灰色の男たちの思うまま、時間の節約に追われています。

1976年に発表された作品にも関わらずまさに現代社会が悩むべき病気をテーマにした作品で、小学生の時には見えなかった、現代社会の在り方への痛烈な風刺が、畳み掛けるような文、こまやかで美しい独特の世界観、無色でさびしい町の描写のなかに見てとれます。

時間の国に住み、時間をつかさどるマイスター・ホラがモモにこう語りました。

「人間はじぶんの時間をどうするかは、じぶんできめなくてはならないからだよ。・・・時計というのはね、人間ひとりひとりの胸のなかにあるものを、きわめて不完全ながらもまねて象ったものなのだ。・・・人間には時間を感じとるために心というものがある。そして、もしその心が時間を感じ取らないようなときには、その時間はないもおなじだ。」

これは秒、分、時で区切られていても、それはあくまで物理的なものであり、時間というものの本質は人の意識、心にあるということではないでしょうか。

ミヒヤエル・エンデはここで、時間は意識であるということを読者に伝えているように思えます。

例えば、食事にかかる時間を30分から15分にしたとします。これは一見すると時間を節約したように思えるかもしれませんが、しかし、その15分が意識、心に残らなければ無意味なものです。栄養を取るという点では意味があるけれど、意識の点では存在しないものと同じです。こういう風に時をすごせば、物理的時間は節約できたことになるのかもしれませんが、意識という時間のレベルで言うと何も残っていません。

たとえ食事に30分かけたとしても心に残る食事が出来たとしたら、それは意識を大事にしたということになり、つまりは時間を大事にしたということになります。

時間＝意識＝心なのです。

周りを見まわしてみてください。時間を奪われた人達がたくさんいるのが見えます。自分もその一人かもしれません。私はこの本を、今を忙しく生きている人に読んでほしいと思います。たくさん情報や物に流されて生きているなかで、時間がなく、あってもやることばかりで、時間があつという間に過ぎていくと感じる人々に。時間がたりないといつも感じていて、何もしないと取り残されていくような、そして忙しく動いても、やりがいがなく、退屈だと感じる人々に。

そして、子供のころのような縛られない時間をもう一度思い出してほしいと感じました。

いつからか本を読まなくなった自分

山内 映里

わたしの選ぶ一冊

『ハリー・ポッターと賢者の石』 J・K・ローリング (1965-) 【イギリス】

私は小学生の頃は本が大好きで、昼休みになると必ず図書室へ行って本を借りていた。読書感想文に応募して表彰されたこともあった。しかし、今は全くと言っていいほど本を読んでいない。なぜこんなにも本を読まなくなってしまったのか。

中学生の頃、朝の時間に読書時間が設けられていたので家にある本を持って行って読んでいた。好んで読んでいた本は、『“It”と呼ばれた子』のようなノンフィクションの作品だった。3日で読み終えた本もあった。テレビドラマ化された本も楽しんで読んでいた。家では小学生の頃からはまっていた『ハリー・ポッター』シリーズを毎日楽しんで読んでいた。魔法使いという現実離れた設定がとても興味を引くものだった。

しかし、受験間近になると、塾が忙しくなり、読む本も参考書ぐらいになった。それからあまり本を読まなくなり、国語の先生から読んだ方が良いと言われるほどになっていた。高校生になると、更に本を読まなくなった。高校3年間で読んだ本は数えるくらいしかないだろうと思う。クラブ活動が忙しいという理由はあったが、一番の原因は本のおもしろさを忘れてしまい、読むこと自体が億劫になってしまったからだ。

しかし、今年になって『ハリーポッター』シリーズの最終巻が出て、家でも取り合いになっていた。私はこのシリーズだけは読んでいたのだが、昔ほど楽しんで読んでいたわけではなかったのもう一度始めから読み返そうと思い、『ハリー・ポッターと賢者の石』を読み出した。一週間ほどで読み終え、今はこのシリーズは7巻全て読破してしまった。夏休みには2回目に突入した。同じ本を2回読みたいと思ったのは初めてだった。

本ってこんなに面白かったのだなと思ひ返させてくれたのがこの一冊だった。最近は文学作品は読んでいないが、東野圭吾のミステリーにはまっている。ファンタジーとは違ったドキドキ感やヒヤッとしたところがとても面白い。今考えると、『ハリー・ポッター』に出会っていなかったら、面白さを忘れたままで、今は本などというものは読んでいなかったらと思う。

私にとっての本

石田麻純

わたしの選ぶ一冊

『星の王子さま』 サン＝テグジュペリ (1900-1944) 【フランス】

私はよく「星の王子さま」という題名を聞いた。昔に一度読んだことがあったけど、内容が全然つかめませんでした。何か独特の世界のなかのお話のようでした。

だから、また機会があれば読んでみたいと思いました。

私が小学3年生の時に先生がよく絵本を読んでくれました。その読んでくれた絵本の中で、記憶に残っている絵本は「ずーっとずっとだいすきだよ」や「あらしのよるに」です。

「ずーっとずっとだいすきだよ」は特に好きでした。

男の子と犬のエルフィーは仲良しで、一緒に大きくなりました。男の子の背が伸びるにつれて、犬のエルフィーは太って動きも鈍くなりました。犬は人間よりも歳をとるのがはやいから。ある朝、男の子が目を覚ますとエルフィーが死んでいた。男の子は悲しかったけれどもみんなよりは気持ちが楽でした。なぜならそれは、男の子は毎晩寝る前、エルフィーに、「ずーっとだいすきだよ」といってあげていたからでした。家族のみんなもエルフィーが大好きでしたが、好きとやってやらなかった。いわなくてもわかっているとおもっていたからでした。

私はこの物語を読んでもらって、すごく悲しかったのを覚えています。

愛するものが死んでしまうのは、とても悲しいなと思いました。

もし毎晩大好きだよと言ってあげてなかったなら、悲しさも倍増するだろうと思う。死んでしまってから言ってあげなかったことを後悔するのは、余計に悲しいだろうと思う。

口にだして伝えることも必要なんだなと思います。

この絵本は悲しいけど、なんだかあったかいなと思いました。

私は本を読むのがあまり好きではないです。分厚い本や、小さい文字を見ただけで読みたくなくなります。でもおもしろそうだな、いいなとおもった本は自然に読めます。

読んだ本がよかったら「おもしろいなあ、本っていいな。」とも思います。

小学3年生のときに読んでもらった絵本を、今でも覚えているということは、その絵本が私にとって大きなものだったのかもしれない。

そんな物語と出会えてよかったなと思います。

本は読む人に新しい考えやいろいろな知識を与えてくれると思います。

だから本はすばらしいものだと思います。

今になって改めて読んでみると・・・

杉本結衣

わたしの選ぶ一冊

『エルマーのぼうけん』 ルース・スタイルス・ガネット (1923-) 【アメリカ】

私が小学校2年生のとき、母が『エルマーのぼうけん』という童話の本を買ってきてくれました。私は小学校低学年の頃から活字を読むのが嫌いで、もちろん、本を読むのも大嫌いでした。特にファンタジーや冒険物が好きではなかったのですが、母に「面白いから読んでみ。」と言われ、いやいやながら読んでいたのを覚えています。予想通り、あまり文章の意味が理解できなかつたし、まったく興味もわかず、面白みも感じられませんでした。

一方、2歳下の弟は、とても面白かったみたいで、何度も何度も繰り返し読んでいました。私にはそれが理解できませんでした。

しかし、大学受験が終わってからすぐ、何気なく本棚にある『エルマーのぼうけん』を手にとって読んでみました。すると、なんと面白いこと！！どンドン物語の中に引き込まれていったのです！！夢中すぎて20分程で読み終わってしまいました。

いじめられているりゅうを助けるために、誰も生きて帰ってることが出来た人はいないという“どうぶつ島”へ、命を賭けて行ったエルマーの勇敢さに、とても心を打たれました。そして、旅の途中でいろいろな動物たちと遭遇し、数々の試練を乗り越えていく様子もすごくかっこよかったです。私もその冒険心と度胸を見習いたいと純粋に思いました。将来、子供ができた時に、是非読ませたい一冊です。本当にこの『エルマーのぼうけん』の面白さに気づくことが出来て良かったです。

このちょっとした体験から感じたことがあります。18歳で小学生向けの童話やファンタジーを読んでも十分楽しむことができます。むしろ、大きくなってからもう一度読めば視点も変わると思うので、その10年前には分からなかった面白さなどを深く味わうことができるかもしれないし、気づくことができなかった登場人物の心情なども、より深く理解することができるようになっていないか、と実感しています。幸い私の家には弟が2人いるため、本もたくさんあるので、時間があるときには新鮮な気持ちで、子供向けの本も読んでみたいです。最近の恋愛小説や推理小説や漫画ばかり読むのではなく、こういうのもいいなと感じることができた素晴らしい日でした。

『先生は魔法使い？』との出会い

桑野愛美

わたしの選ぶ一冊

『先生は魔法使い？』 オトフリート・プロイスラー 【ドイツ】

私は小さい頃から本が大好きで、何時間もひたすら本を読んだり、図書館でたくさんの本を借りたりなど、その頃の遊びといえばもっぱら読書であり、そんな私にとっては本屋が一番の遊び場だった。到着するや否や児童書のコーナーへ一目散に駆けていき、「帰るよ」と言われるまでひたすら気に入った本を立ち読みしているような子どもだった。

この本と出会った時のこともよく覚えている。それは、私が祖父母と本屋に出かけた時のことだった。祖父と本屋に行くと必ず本を何冊か買ってもらえたのだ。私はいつものごとく本屋中を歩き回り、自分の欲しい本を物色した。しかしその日はなかなか気に入った本が見つからず、私はとても焦っていた。そしてついに、祖父から「帰るよ」という言葉が発せられてしまい、思わず私はすぐそばにあった一冊の本を掴んで「これを買って欲しい」と頼んだ。その本こそが、この『先生は魔法使い？』だったのだ。

帰りの車中で私は激しく後悔していた。何も考えず手にした本は、これまで私が好んで読んでいた本と文字の大きさや挿絵のタッチなど、どこことなく雰囲気異なっていたからである。そもそも題名の最後にある「？」って何だ、とも思っていた。けれどもせっかく買ってもらった新しい本だ。私は恐る恐るその本のページを開いたのだった。

この本を読み終えた私は、あの時これを選んで良かったと思った。とても面白かった。その年の夏休みの宿題にはこの本の読書感想文を提出した。それほどまでにこの本は面白かったのだ。

残念ながら、今この本は手元にない。この機会に読みなおそうと探してみたのだが、見当たらなかったのだ。そのため断片的にしか覚えていないけれど、主人公の先生は指をパチンと鳴らすと、小さくとも抜群に効き目のある魔法を使うことが出来た。当時の私は自分も魔法が使えないか、と指を鳴らす練習をしたものである。

前述のとおり本が手元にないため、物語の結末がどうだったかは定かではない。しかし幼い私が満足できる結末であったことは確かである。今度は結末を知るために本腰を入れて本棚からこの本を探してみようと思う。

不滅の探偵シャーロック・ホームズにあこがれて

高瀬千鈴

わたしの選ぶ一冊

『緋色の研究』 アーサー・コナン・ドイル (1859-1930) 【イギリス】

アーサー・コナン・ドイルの名をはじめて知ったのは日本でもおなじみの少年漫画「名探偵コナン」より、シャーロックホームズという名の探偵を主人公とした推理小説を書いた著者であると知った時だ。シャーロックホームズという名の探偵が推理小説の中にいることは知っていたがアーサー・コナン・ドイル自体の小説を読んだことは今まで一度もなかった。そこで今回のこのような機会を利用してホームズシリーズを読んでみることにした。

アーサー・コナン・ドイルのシャーロックホームズシリーズはどれも名作といえる作品であると思うが、今回私が紹介するのは彼の最初のホームズシリーズである「緋色の研究 (*A Study in Scarlet*)」だ。

舞台は19世紀のロンドン。シリーズの中で語り手となっているワトソン医師はアフガニスタンの戦線で負傷し、ロンドンへ戻ってきたのだが下宿先を探している途中知り合いから同居人を紹介される。その同居人こそがシャーロックホームズであり、そこから二人の名コンビが誕生する。ホームズは初対面でワトソンがアフガンから帰国したということ当ててしまう。一体このシャーロックホームズとは何者なのだ？ワトソンは疑念を抱きながら最初の一週間をホームズと一緒に過ごす。そしてその正体が明らかになった。彼は私立探偵だったのだ。そんなある日ベーカー街の刑事レストレイドの要請を受けて乗り出したのは空き家で殺されていたアメリカ人の謎であった。この男は一体誰か？犯人は誰か？現場に落ちていた結婚指輪の意味は何なのか？今、名探偵シャーロックホームズの推理が展開されていく！

著者、アーサー・コナン・ドイルは当時眼科を開業していたのだが思うような評判を得ず、持て余した時間でさまざまな短編小説を書き始めていた。そんな中書かれた長編小説こそがこの作品「緋色の研究 (*A Study in Scarlet*)」であった。ドイルはこの作品に大なる自信を持っていたが当初は意外にもどこの出版社も原稿を受け入れてくれなかった。というのもエドガー・アラン・ポー以降、ミステリー小説界にまったく進展がなかったため、ミステリー小説は受け入れられにくい現状であった。しかしその後、スコットランド誌から短篇小説が発表されるようになると、ホームズの人気は一気に上昇し、高い人気を獲得するようになった。

アーサー・コナン・ドイルが医師だったこともあり、ワトソン医師というホームズの助手的な役割が生まれたのであろう。もし、私が実際にホームズの世界に飛び込むことが出来るのであれば私はワトソン医師になりたい。確かに実際自分の手で事件を解決したり謎を解いたりするのは快感であり達成感のあふれる思いを得るかもしれない。しかし私はそんな天才的な名探偵をそばで見たいと思うのだ。自分には天才的な洞察力や観察力はないが常にそばで見ていることによって、自らの推理力を向上させ、また時としてはホームズに事件の解決の鍵となるものを助言する。そんな役割を果たす位置につきたいと思うのだ。

そうは言っても題名にもあるように私は本当にシャーロックホームズに憧れている。初見で相手の職業や健康状態などを見抜けるのは実に素晴らしいし、かっこいいと思う。私も彼のようにはなれなくてもそれに近い、例えば洞察や観察を意識し、常に好奇心を持ち何かに没頭できるようになりたい。そうすることによって人生の楽しみ方が増え、自分の向かうべき場所の選択が広がるように思うのだ。

「考えることを怠るな。」これはシャーロックホームズシリーズを読んできて私が彼に教えてもらったことだ。

『it』が自分だったなら…

米澤友里佳

わたしの選ぶ一冊
『itと呼ばれた子』 ディヴ・ペルサー

わたしは幼いころからあまり本を読むことが好きではなく、好んで読まなかった。この本に出会ったのは、中学生のころだった。朝の読書の時間に何人もの友達が読んでいたことで影響を受けたからだ。

内容は、子どもが虐待され、その虐待が除所にエスカレートしていくというものだ。最初は「That Boy (あのこ)」と呼ばれていたがそのうち「it(それ)」と呼ばれるようになる。食べ物も与えてもらえず、奴隷のように働かされる毎日をすごしているのだ。決しておもしろい内容ではないが作者の実体験ということで読んでいて先が気になってしまう本で2日ぐらいで読み終えた。涙もでるくらいひどく残酷な内容だった。

今何気なく毎日、親に名前を呼ばれているが、それが急に「it(それ)」と呼ばれるようになったらどうなるのだろう…なんて考えると、今がどれだけ幸せなのかとか改めて感じることができた。あたりまえのことなのに、そのあたりまえがないこの作者の気持ちを考えるだけで今でも涙がでそうだ。この本は幼児期の話で実際少年期やその他2冊発表されている。私はどうもこの続きは読みたいとは思わず今も読まないままである。きっと、さらに酷い虐待をされるのだから読む気にもならない。

3冊読む必要はないと思う。しかし、読んだことがない人は一度幼児期の話だけでも読んでみてほしい。また、ただ読むだけでなく、いろんなことを考えて今を生きていることの幸せにもっと気づいてほしい。

このように本から気づかされることはたくさんあるのでこれからはもっとたくさん本を読もうと思う。

ただ悪党と思っていたシャイロック

原田 悠来

わたしの選ぶ一冊

『ヴェニスの商人』 ウィリアム・シェイクスピア (1564-1616) 【イギリス】

私がこの名作に出会ったのは小学6年生の時だ。年に一度の舞台発表会で私たちのクラスは担任の提案でこの『ヴェニスの商人』を劇にし、披露することとなった。ここで話を進めるにあたって登場人物と物語を簡単に紹介したい。

ヴェニスの商人には主に、正義感が強く情に厚い商人であるアントーニオ、アントーニオの友人である高等遊民のバサーニオ、バサーニオと後に結婚し莫大な財産を相続した貴婦人のポーシャ、強欲なユダヤ人金貸しであるシャイロックが登場する。舞台はイタリアのヴェニス。バサーニオは富豪の娘ポーシャと結婚するために資金が必要である。そこで、彼は友人のアントーニオにお金を借りようとする。しかし、アントーニオの財産は航海中の船に積まれており貸すことができない。友人想いのアントーニオは悪名高いユダヤ人の金貸しシャイロックに頼む。貸すにあたっての条件は「期限までにお金を返せなかった場合は、アントーニオの肉1ポンドをシャイロックにわたす」というものだった。簡単に返せると確信があったアントーニオは契約書にサインした。だが、不運なことに航海中の船にあるアントーニオの全財産は難破により失われた。

その間に、バサーニオは晴れてポーシャと結婚することができ幸せの絶頂だったが、アントーニオが返済できなくなったと知らせが届く。バサーニオはポーシャからお金を受け取りアントーニオのもとへ、ポーシャも密かに動き始めた。バサーニオはシャイロックへお金を返済しようとするが、シャイロックは受け取りを拒否しアントーニオの肉1ポンドを要求した裁判を引き起こす。この裁判は一人の法学者によって裁かれることになっていて、実はこの法学者が変装したポーシャであったのだ。アントーニオの肉1ポンドにこだわるシャイロックについてポーシャは肉を切り取ってもいいと判決を下す。悦んで切ろうとするシャイロックにポーシャは「肉は切り取っていいが、契約書に記載されていない血一滴でも流せば契約違反で全財産没収。」だと。諦めたシャイロックはバサーニオが持ってきた金を要求するが認められない。またアントーニオの命を奪おうとした事による財産没収は慈悲によって免除され死刑も免除となるかわりにキリスト教に改宗された。最終的にアントーニオの財産を乗せた船は無事だったことがわかり、和やかに終わる。

最初に劇の台本と実際の本を読んだとき私はとにかく、アントーニオが無事でよかった、ポーシャのあの明言はすごい、全てがシャイロックの思い通りにならなかったことが意外であったし、うれしかったのを覚えている。極悪であったシャイロックが最後少し不幸になってもよかった程、ただ悪者と認識していた。実際、劇でも私は裁判官のポーシャを演じてあの明言を言うときに「この悪党が」と気持ちが自然に入った。

しかし、今回本を読んだりネットで調べたり数年ぶりにヴェニスの商人に触れてみると、驚いたことにシャイロックを悲劇的人物ととらえる意見が多い。なぜなら、シャイロックはユダヤ人であるからだ。差別され、そのことによってアントーニオに自分の商売の邪魔をされて恨みを募らせていたのだ。差別されていたなら恨みがあるのは当たり前だ。おまけに貸したお金は戻ってこないし、結果的には免除になったが死刑や財産没収の件もあった。私はシャイロックについて知って彼の視点から考えると、だんだんこの本を読んだ当初とは違う気持ちになった。シャイロックをただの悪党とは思えなくなった。確かに、アントーニオの肉1ポンドなんて常識的に考えたなら条件にしないだろう。だが、歴史的背景など考慮するとシャイロックの気持ちもわからなくはないと気持ちに変化がでてきた。

私はこのヴェニスの商人という一冊の本から、今と昔では考え方の違いが生じ知識を得るとストーリーや登場人物のとらえ方が変わるおもしろさを教えてもらったのでこの本を選んだ。

『秘密の花園』バーネット

矢下 紗織

わたしの選ぶ一冊

『秘密の花園』 バーネット

インドで生活していたイギリス人の役人の娘メアリーは、両親をコレラで亡くし、イギリスのヨークシャーにすむ伯父のクレブン氏に引き取られることになった。

始めはわがままで嫌な子どもだったメアリーだが、女中のマーサやその弟ディコンとの交流によって子どもらしさを取り戻していく。

領主であるクレブン氏の屋敷には、数多くの庭があったが、奥様の庭だけは、閉ざされていた。クレブンは妻を愛していたが、その最愛の妻が庭の木から転落して亡くなったからだ。

メアリーは、クレブンが捨てた庭の門の鍵を探し出し、庭を探そうとする。そんなある日、ついにその庭園の入り口の鍵を見つけた。そしてとうとう庭の入り口を見つけ、その庭に入る。庭園は荒れていたが、メアリーはそこがまだ生きていることを感じた。

メアリーは誰にも知られずにディコンと二人だけでこの秘密の庭園を以前のような花園へ蘇らせることに喜びを見出す。またそれと同じ頃に、メアリーは、彼女に秘密にされていた伯父の息子コリンと出会う。彼は生まれたときから病弱で、ベッドからほとんど出たことがなく、メアリーと同様に両親から愛された記憶のない少年だった。

三人は秘密の花園の中で交流を深めていき、コリンはすっかり元気な男の子になる。

そんなある日、コリンは父と再会し、明るく笑いにあふれる日々を取り戻し、メアリーとディコンも、ますます仲良く幸せに暮らしたのであった。

『若草物語』のジョーと私

宮崎 菜津子

わたしの選ぶ一冊

『ハムレット』 ウィリアム・シェイクスピア (1564年～1616年) 【イギリス】

私は本をよく読む子どもではありませんでした。読書に興味を持ち出したのもここ数年のことですが、その中でもはじめの頃に読んだ本が『若草物語』でした。若草物語では、母親や父親を子ども達がみんな心のそこから尊敬しているところや、家族が仲良くそして一生懸命生きているところ、さらには家族の死など胸をうたれるシーンがほんとうにたくさんあります。さらに楽しく愉快的なシーンもあり、家族愛や、一人一人の女性の素敵さがえがかれているので、『若草物語』を好んで読んでいました。そしてその中でも印象に強く残っているのがジョーという少女です。私は、物語を読むときに登場人物の誰かに自分を重ねたり、感情移入して読んでしまうタイプで、それがこの本ではジョーでした。ジョーは、男まさりではあるが、女性としての芯の強さがある素敵な女性で、物語の中では、唯一女らしいといわれていた自慢の長い髪を家族のためにあっさり切ってしまう。そんな私には絶対にできないようなまねをすんなりとやってしまったり、いつも明るく元気なジョーに憧れていたのを覚えています。今考えても私の憧れる女性像はあまり変わっていないなあと感じることができるので、昔の私のことも思い出せます。また、この本は、悲しい現実直面する部分もありますが、幸せな希望に満ちた家族が描かれてる部分が多かったと、ほんとうはどうだったかはわかりませんが、そんな記憶があります。私自身そのような作品を好んで読みます。何年も前に呼んだ若草物語を、最近読み返してみたいと思っています。また、『続若草物語』なども読んで今の自分がどう感じるかなども知れたらおもしろいなあと思います。

そして私が、最近読みたいと思っているのがシェイクスピアの『ハムレット』です。幸せや希望とはうってかわって悲劇や復讐、悲しみが主な内容のハムレットをなぜ読みたいかというと、まず単純にシェイクスピアの作品を以前から読んでみたいと思っていたことが理由の一つです。世の中ですごく評価されている文学作品を読まないのはもったいないと思ったからです。また、悲劇の中に生きる力や希望などもあったりして、自分自身の考え方などに影響を与えてくれる作品なのではないかと思ったからです。また、昔は内容だけを把握したり、感情移入してしまっていたのですが、今では、読書をするたびに自分の考え方に影響があったり、客観的に物語をよんで、いろいろと考えさせられたりできるようになりました。読書というのは、自分自身が実体験ではできないことを知ることができたり、多くの人間の考え方などにふれたりできるため、生きるためにかかせないものだと思います。自分自身ももっと素敵な人間になれるような文学作品にもっと出会っていきたいと思います。

初めて出会った推理小説

杉田晴加

わたしの選ぶ一冊
『幽霊列車』 赤川次郎 (1948-)【日本】

わたしは小学生の頃、本を読むという習慣なんてまったくなく、家でテレビばかり見ている子だった。頭もどちらかという賢くなく読書には縁遠い暮らしをしていた。そんなわたしが中学校に上がる時、わたしの家で大掃除をしたことがあった。すると、押し入れから母が若い頃読んでいた本がたくさん出てきた。わたしにくれるというので、最初は暇つぶしに読もうかなという感じだった。そこで手に取ったのが、赤川次郎の『幽霊列車』だった。しかし、予想以上に黙々と読んでいる自分自身に気がついた。母もやけに静かなわたしに驚いていたほどだった。中学生のわたしが推理小説のおもしろさを理解していたのかどうかは分からないがその本に夢中になっていたのは確かだった。

以前から探偵物のドラマやアニメには興味があったのだが、文学を通して触れることはこれが初めてだった。本をあまり読んだことがなかったわたしにとって、文章を読み進めていくだけでストーリーが頭の中に浮かぶ現象に感動した。しかも、推理小説ということで先が見えそうで見えない何とも言えないもどかしさがわたしを夢中にさせたのだと思う。

中学校3年間のうちで、母がくれた赤川次郎の推理小説約10冊も読み終わり、それから受験のために本を読む機会がなくなった時期があった。そして、高校に入り自分で本を買うようになった。しかし一冊買うのにお金が結構かかり、2ヶ月に1冊という程度でしか買えなかった。

そんな時母はわたしに、違う作家の本も読んだ方がいいと言った。ちょうど読書感想文を書かなければならない時だったので、それをきっかけに違う作家の本を読み始めるようになった。そこではまってしまったのが伊坂幸太郎の本である。この本は、兄に貸してもらった。兄も伊坂幸太郎の本を何冊か持っており、いくつか貸してもらっては黙々と読んだ。どの本も物語に吸い込まれるようで飽きがこなかった。本を読んだ後は余韻に浸ってしまうのが常である。すぐには現実には戻れないからである。

本というのは自分の考え方が変わるきっかけになるすばらしいものだと思う。今でもあの『幽霊列車』を読んだ時の感動は忘れられない。本当に母があれらのたくさん本を捨てていなくて良かったという気持ちでいっぱいである。また、他の国の推理小説も読んでみたいと思う。新たな感動に出会えるかもしれないから、推理小説だけでなく色々なジャンルの文学に触れてみたいと思う。

『チャーリーとチョコレート工場』 :それは読み聞かせから始まった

田村 絵果

わたしの選ぶ一冊

『チャーリーとチョコレート工場』 ロアルド・ダール 【アメリカ】

私が小さい頃は、本や絵本は好きでしたが、自分で読むことは嫌いでした。なので、母が読み聞かせをしてくれる幼稚園の頃はたくさんの物語に触れていましたが、小学生になるとめっきり減ってしまいました。読むことが嫌いというよりは、自分で読む本がおもしろいと感じられなかったのです。しかし、小学校4年生のとき、急に自分からハリー・ポッターを読みたいと思いました。これが凄くおもしろかったのをきっかけに、私はどんどん小説にはまっていきました。

中学生になり、図書室の物語を読みあさっているうちに、表紙の作絵が同じ雰囲気のもの共通しておもしろいことに気付きました。この頃わたしは作者の欄を全く見ていませんでした。5冊ぐらい読んだところで、作者が共通していることに気がつきました。その作者がロアルド・ダールでした。

ロアルド・ダールの物語にでてくる主人公はいつだって素直でいい子です。それに対照して、敵だったり他の登場人物にはひねくっていたり、悪い考えを持つ奴がいます。その表現の仕方は、とてもブラックが効いていて、子供向けの物語の表現ではない気がします。しかし、子供には新鮮で、それが面白くてたまりませんでした。とくにチャーリーとチョコレート工場にでてくる、5人の子供のうち、4人はとてもしつけのなっていないような子供たちです。45年もの前に書かれた物語であるのに、わがままで自分の思いどおりにいかないのが済まない子、ゲームの世界には入りすぎて現実が見えない子など、現在でも問題となっていることを、おもしろおかしくかいている所が凄いと思います。

ロアルド・ダールの作品の中でもやはり、チャーリーとチョコレート工場が一番好きでした。チョコレートや飴玉、チューイングガムなどのお菓子を作る機械は想像するだけで、目がキラキラ輝くような構造でした。ウンパルンパの踊りや歌の歌詞に魅了され、こんな工場が本当にあればいいのにと思いました。

そんなことを思っているひとが、ハリウッドにもいました。ティム・バートン監督です。彼はジョニー・デップと共に、チョコレート工場を映像化してくれました。この予告を聞いたとき、私は興奮して友達と喜びを分かち合いました。映画は、ロアルドのブラックを残し、かつユーモアたっぷり。映像はとてもカラフルな色彩で、私が想像するよりも華やかな世界でした。ウンパルンパの踊りと歌は、作った人を天才だと思いました。DVDを買っておまけにダンス講座があったので友達と覚えたぐらい好きになりました。

本でも、映画でも大好きな物語『チャーリーとチョコレート工場』は、私の大好きな世界です。いつか本当に板チョコから金色のチケットが出てきてくれることを信じて待っていようと思います。

私を“本好き”にした思い出の一冊

田村 絵果

わたしの選ぶ一冊

『ドリトル先生航海記』 ヒュー・ロフティング (1886-1947) 【アメリカ】

私がこの本と出会ったのは、小学一年生のときでした。この頃の私は、分厚い本を読むことにあこがれのようなものを抱いており、何か読み応えのある本を探していました。そんな時に母が薦めてくれたのがこの本です。もともと私は生き物が好きだったので、さまざまな動物の言葉がわかり、会話ができるドリトル先生がすぐに好きになりました。また、訳を書いた人が井伏鱒二で文章が簡単で分かりやすく、当時6歳の私でも簡単に物語の内容が理解できたのも、私が読書好きになった理由の一つだと思っています。

この本に出会ってから私は小学校の図書館に通い、『ドリトル先生』シリーズの続編をはじめ、『ファーブル昆虫記』や『日本昔話』などのページ数の多い本をどんどん読み、読書に親しむようになりました。そのおかげで文章を読むことに慣れ、知識をたくさん増やすことができました。もしこの本を読んでいなければ、まともな文章があまり読めない、本嫌いな人になっていたように思います。本当に出会えてよかったと思っています。

『フランダースの犬』を読んで気づいたこと

大西麻子

わたしの選ぶ一冊

『フランダースの犬』 ウィーダ【イギリス】

私がこの作品と初めて出会ったのは小学校4年生のときである。この作品を読むまで本を読むこと自体まったく興味がなく、テレビばかり見ていた。この作品は当時担任だった先生が薦めていたものだ。最初はなんとなく読んでいたが読みすすむうちにどんどんこの作品に引き込まれていく気持ちになったのを覚えている。物語の舞台はフランダース地方の小さな農村となっていて、主人公とそのおじいさんと飼い犬の3人の物語である。貧しい家で暮らし、仕事がなくなり事件の濡れ衣を着せられ最後にはみんな死んでしまうというとても悲しいお話である。私が本を読んで泣いてしまったのはこれが初めてだった。貧しく生きながらもいつも希望を持ちつづけ夢にむかってつきすすむ主人公の姿にとても感動した。主人公は画家になることを夢見ていた。私も昔から絵を描くことが好きだったので共感できる部分も多かった。この作品を読んだとき自分がいかに幸せで何不自由ない生活を送っているのかということを実感した。本当に贅沢な生活をしていたのだと気付いたのだ。この物語は実話ではないが、この作品が書かれた当時はこのように貧しい子どもがなくなることは珍しくなかったのだ。今となってはこのようなことはほとんどない。ほとんどないが、世界中を探せばまだまだ貧しい人や苦しんでいる人はたくさんいる。幸せな時代になったからこそ自分の人生をありがたく思って生きるべきだと思う。

この写真は実際に舞台となったアントワープにある主人公のネロと飼い犬のパトラッシュの像である。

この物語を読んだ後、友達から日本で描かれたアニメもあると聞きアニメも全部見てしまった。話の内容は知っていてもやはり感動してしまった。そしてそれからは本を読むことに興味を持つようになった。『フランダースの犬』は私が本を好きになったきっかけになったのだ。

今、私は小学校の教員を目指している。最近の子どもはますます本を読まなくなっている傾向にあるそうなので私が教員になった際にはあの時先生が私に薦めてくれたように私もぜひ生徒にこの『フランダースの犬』を薦めてあげたいと思う。

『老人と海』

—サンチャゴに教えられたこと—

寺田 藍

わたしの選ぶ一冊

『老人と海』 アーネスト・ヘミングウェイ 【アメリカ】

話は、キューバの老漁夫サンチャゴと少年マノーリンとのやり取りに始まる。サンチャゴは、長い不漁にもめげず、小舟に乗り、たった一人で出漁する。残りわずかな餌に想像を絶する巨大なカジキマグロがかかった。四日にわたる死闘の末に老人は勝ったが、帰途サメに襲われ、船にくくりつけてあった獲物はみるみる食いちぎられていく。人間の勇気と自然の厳粛さを謳った話である。

私はこの本を読んでいて、老人の自然と戦おうとする姿に何度も感動させられた。四日間集中を切らさず網を操作し、釣り上げた後も襲ってくるサメに勇敢に立ち向かう。きっと同じ状況に置かれても、私は老人のように忍耐し、勇気を奮うことはできないと思う。何日も巨大な魚に引っ張られ、遠いところへ連れて行かれるだけでも私は恐怖を感じるだろう。そして四日も耐えることなく網を切っしまい、何も釣れずに帰る八十五日目になっていたように思う。仮に魚を釣りあげたとしても、サメなんかに襲われてしまうと、老人のように戦い抜くことができるかどうか怪しい。きっと私のことだから、パニックに陥って逃げてしまっているかもしれない。海を愛し、敬意を払っている彼だからこそ、海と戦い抜き港に戻ることができたのだと思ったのだ。

老人は海の上で何度も大きな声で、独り言を言っていた。港に帰り、少年と言葉を交わした時彼は幸せを感じていた。会話ができる幸せというのは、今の私の生活で感じられることはない。それは普段の生活の中では当たり前のことなのだから。だが、老人は教えてくれた。普段当たり前だと思っていることも、本当はすごく幸せなことだということ。人は、何かを失った時、ようやくその大切さに気付くという。まさにそうだと思った。今この社会には、あって当たり前だと思われていることが大量にある。そのすべてに通じることだと私は思う。今こうやって紙があり鉛筆で字を書くことができることも。電気があり、水があり、ガスがあり。私たちは、そんな当たり前で囲まれているからこそ、生きていくことができているのだ。老人の経験や、ちょっとした一言から考えさせられ、少なくともこの本を読んだ甲斐があったなあと思う。

『赤毛のアン』を読んで

田村香里

わたしの選ぶ一冊

『赤毛のアン』 L・M・モンゴメリー 【カナダ】

舞台は東海岸のプリンス・エドワード島州で、その島に60代のマシュー・カスバートと、50代のマリラ・カスバートという独身の兄と妹が暮らしていました。

子どものいない2人は、将来に備えて、男の子を引きとろうと考えたが手違いで、赤毛で、やせっぽちの11歳の女の子「アン」が来ます。女の子は農作業の役に立たないからと、追い返そうと考えますが、アンの明るい性格に2人はすっかり魅せられ、結局、引きとって育てることになります。

こうしてアンは、島の美しい自然の中で2人の愛情に恵まれ、すこやかに、育ち、優しくて魅力的な16歳の娘になります。

と同時に、2人もアンを育てることによって、生まれて初めて子どもを愛する喜びを知って温かな魅力をたたえた人物へと、変わっていきます。

<感想>

この小説は、アンの成長をすこやかに描くだけでなく、マシューとマリラのように人生の半ばをすぎた大人が、勇気を持って新しい生き方を始めることで人間として成長し、新たな幸福を手にしていく姿を描いていると思います。

子どもの成長と大人の成熟、生きる喜び、苦難も悲しいこともある人生を力強く生き抜いていくすがすがしい感じが感動的に描かれているからこそ、『アン』は、約100年にわたって、世界の人々に愛され、読みつがれているのだと私は思います。

私は、この作品を読んでマシューとマリラと同じく「アン」の人柄に惚れこんでしまいました。「アン」は小さいころ、明るくて、かわいくて、生き生きとした気立てのいい女の子でした。そして、成長していく中で、優しく賢く魅力的な娘になっていきました。私は、こんな「アン」みたいな人付き合いが上手い人になりたいと思いました。私は人見知り激しく、大学に入ってもいろいろと苦労することが多く、大変なことがたくさんありました。しかしこの本を読んで、人と接することの楽しさや、嬉しさを学びました。部活ではバスケットボールをしているのですが、その中でも積極的にプレーすることや、チーム内でのコミュニケーションにも生かすことが出来ました。また下宿生活で自立する大切さを学び、この作品を読んだことによりそのことを再確認することができました。これからの大学生活で大変なことや、問題もいろいろ出てくると思いますが、アンのようにこれからも明るく頑張りたいと思います！！

シェイクスピアの世界

井 芹 威 晴

わたしの選ぶ一冊

『ハムレット』 ウィリアム・シェイクスピア (1564-1616) 【イギリス】

私が始めてこの作品を知ったのは、中学生のときです。初めは「おいしそうな題名だな」としか思いませんでした。その後高校生のとき、もう一度聞き興味を持ちました。

〈百千の心を持ったシェイクスピア〉と呼ばれるほどシェイクスピアは、多種多様な人物を描き出す作家・劇作家です。そのシェイクスピアの作品の中でも『ハムレット』は最も有名で、最も大規模な戯曲であり、シェイクスピア四大悲劇の一つに数えられています。

私はこの作品を読み、多くの命が奪われ、さらに自らの命をも犠牲にしてまで父の仇である国王を討つハムレットの姿に心を打たれました。今の世の中では、殺人はもちろん許される行為ではありませんが、自分が決めたことを何が何でも達成する精神は必要だと思います。

私は今後この『ハムレット』だけでなく、シェイクスピアの作品を読み、また劇や映画もみて、シェイクスピアの世界を楽しみたいです。

『ダレン・シャン』を読んで

神足直人

わたしの選ぶ一冊

『ダレン・シャン』 ダレン・シャン 【イギリス】

<あらすじ>

主人公はダレン・シャン。サッカーが得意な普通の男の子だ。ある日ダレンは、ひょんなことからクレプスリーというバンパイアに血を流し込まれ、半バンパイアになってしまう。ダレンは家族や友人、故郷を捨て、クレプスリーについていくことを決意。しかし、故郷との別れ際、隠していたダレンの正体を知った友人スティーブから絶対にダレンとクレプスリーを倒すと言われる。その後試練をくぐりぬけ、バンパイアの敵であるバンパニーズと対決し、バンパイア元帥となったダレンは、スティーブがバンパイア大王になっていたことを知る。川岸で1対1の対決をするダレンとスティーブの元にミスター・タイニーという運命を操る男が現れ、2人に全ての事実を話す。

「私の息子たちよ。」と。

<感想>

いったいどんなストーリーに展開するのだろうと思った。スティーブがクレプスリーを見て驚いた時には、クレプスリーの正体がドルトン先生なのかなと思ったので、バンパイアが出てきて、そんなアホな、と思った。ところが、ダレンシャンが蜘蛛を盗みにはいったところでは、もう物語の世界にどっぷりと浸かってしまっていて、いつダレンのもとにクレプスリーがやってくるかどきどきした。スティーブとダレンの友だち関係の微妙なすれ違いもよく描かれている。だからこそ、スティーブが蜘蛛に刺されたときのダレンのキモチがよくわかる。ああいう後悔のキモチは子どもならではのものだと思った。

ダレンや妹のアニーの子どもたちの非力さ、大人にちゃんと話さなくては、という気持ちの揺れが痛いほどよくわかった。大人の小説にはこういう子どもの、最終的には大人の力を借りないとどうしようもないという非力さと、そこまで追い込まれた時に問題を打破する力強さはないと思う。それが本当によく描かれている。だから、ダレンがスティーブを助けるために、バンパイアになるという筋は、スティーブを助けたいという純粋な友情だけではなくて、ダレンの責任のとり方だったり、親から幻滅されたくないとか、親に迷惑をかけたくないという子どもの世界の仁義をきったんだと思った。ただ、バンパイアとなってクレプスリーと旅をはじめるとは、ちゃんと人間として一度死ぬという芝居もよくできた話だなあと思った。最後に出てくるスティーブとの関係が今後の話の軸になりそうでこれもまた楽しみ。お葬式のシーンは思わず泣いてしまった。すごくおもしろい小説だった。

『デセプション・ポイント』の魅力

平 拓也

わたしの選ぶ一冊

『デセプション・ポイント』 ダン・ブラウン (1964-)

この本を読む前に、同著『天使と悪魔』『ダ・ヴィンチ・コード』を読んでいた私は、著者ダン・ブラウンのイメージを「ヨーロッパのキリスト教史がらみのミステリー作家」と勝手にイメージ付けていたし、実際同じようなイメージを持っている人が大多数を占めるだろう。しかし、この本はそれとは全く異なり、現代の米国の大統領選とNASAというものを題材にしている。

あらすじは、NRO(国家偵察局)職員のレイチェル・セクストンは、ある朝父親であるセジウィックと朝食を共にする。セジウィックは現在行なわれている大統領選挙の候補であり、近頃経費の増加が激しいNASAを批判し、教育優先を掲げる政策を提唱して日の出の勢いを得ている人物だった。いまや大統領選の争点が、これまでさんざん失敗をくりかえし何十億ドルもの資金をムダ遣いしてきたNASAの処遇に絞られ、宇宙開発の民営化が抜本的に検討されるようになるのも、時間の問題なのである。そんな父親は彼女に自分の下で働けという。父を好かず、現在の仕事に誇りをもっている彼女はこれを断るが、その日彼女は父親の敵対候補でもある、現職のザック・ハーニー大統領からの極秘任務を言い渡される。対立候補の娘である自分に何の用事があるのか皆目見当もつかないレイチェル。NASAがとある重大発見をしたのでこれを確認してほしいと言うのだ。彼女はこれを確かめるべく北極へ出発する。

その発見とは、北氷洋の下にあった隕石であった。しかもただの隕石ではなく、その隕石には、なんと生物の痕跡が残されていたのだ。つまり「地球外生命体」の存在を裏付けるものが史上初めて発見されたということだ。これが発表されれば、NASAへの国民の期待は、あのアポロ計画の時のように盛り上がるにちがいない。それは、来る大統領選挙でも大きな意味を持つはず。世界を揺るがすその発見を公表するにあたって、大統領に集められたのは、テレビで有名な海洋学者のマイケル・トーランド、宇宙物理学者のコーキー・マーリントン、そして情報分析の専門家であるレイチェルだった。

レイチェル達が事件の核心へ迫れば迫るほど、命を狙う魔の手が忍び寄る。しかも、父であるセクストン上院議員ときたら、娘の命と引き換えにしても、大統領の椅子を狙ってやまない。はたして欺瞞という欺瞞が次々と暴かれ、大統領選は思いもよらぬ展開を見せる…。

『天使と悪魔』や『ダ・ヴィンチ・コード』におけるキリスト教のように、大統領選やNASAに関するタブーを破っていくといった内容とそれに絡む人々の思惑が巧みに文章化されている。物語の展開は早いのだが、その展開の途中にもしっかりと伏線を張っていたり、著者の得意な、多数の異なる視点で話を進めていき最後に一つに繋がるといった手法が見事に決まっていて、上下巻、800ページに及ぶ長編が長いと感じられなかった。加えて、こちらはデルタ・フォース(妨害工作をする者達)の登場シーンや氷上での格闘シーン等、上記二冊よりも映像にすると映えそうな場面が多く、強く映画化を希望する小説である。

『窓際のトットちゃん』を読んで

酒井 悠花

わたしの選ぶ一冊

『窓際のトットちゃん』 黒柳徹子 【日本】

女優、司会者であり、ユニセフの親善大使も務める黒柳徹子さんが、1981年に書いた自伝エッセイです。黒柳徹子さんは、小さい頃は少し変わった女の子だったそうです。大人から見ると不思議な行動をしては困らせたり、戸惑わせていました。ある日ついに重なる奇行から小学校を退学させられて、自由が丘にあった「トモエ学園」に転校します。学園での生活を描いたノンフィクションの感動小説です。

<あらすじ>

「トットちゃん」とは黒柳徹子のあだ名。彼女は最初に入学した小学校で問題児扱いされていた。教室の机のふたが珍しくて授業中何度もパタパタ開け閉めしたり、パタパタやらないと思ったら窓ぎわでチンドン屋さんを待っていたり、日本の国旗を画用紙に描く授業では軍艦旗(旭日旗。朝日新聞のマークに似ている)に黄色い房をクレヨンで描いて机に跡が残ってしまったたり、本人は好奇心旺盛なのだが先生からは迷惑がられてしまい、とうとう小学1年にして退学させられてしまう。しかし、ユニークな教育方針の「トモエ学園」に転校し、のびのびと小学生生活を送るようになった。特に、校長先生の「君は、本当は、いい子なんだよ」という言葉は、これまで薄々と疎外感を感じていた彼女をいつも元気づけてくれる言葉であった。

ところが、そのユニークな校風のトモエ学園にも、戦争という暗い陰が迫ってきていた。親切だった小使いさんを含め、トットちゃんの周りの大人たちがどんどん戦地に行ってしまうたり、傷病兵の慰問、疎開、最後にはトモエの校舎もB29の空襲で焼けてしまう。

この本が出た時、ちょうど日本では校内暴力の嵐であり、ある学校では卒業式で警官が警備したという。いわゆる「タレント本」は一時の流行りですぐ売れなくなるというのが普通だが、この本に限っては、そのような時勢にあって教育問題を考えさせるような本だったためか、ベストセラーとなり、小学校の教科書にも採用され、今でも老若男女に愛読されている本である。

<感想>

同級生のエピソードと、校長先生の教育哲学、トットちゃんのご家庭の話、涙と笑いに彩られた素晴らしい学園生活に胸を打たれました。その中でもやはりとても印象に残ったのは、トモエ学園の校長先生がトットちゃんに「きみは、ほんとうは、いい子なんだよ！」と言うセリフです。教育とは何か、教育者はどうあるべきか、子供はどう育つと素晴らしい人生が送れるか、色々と考えさせられる小説でした。私も将来、教師を目指していますが、子供達が自分を形成していくにあたって重要な時期に関わる仕事だという事を再認識することができました。また、子供と関わるにあたって子供の個性というものを教師側がしっかりと理解することができれば、それを学校という場で、十二分に伸ばすことができるのではないかと考えました。私自身、学生生活を過ごす時やバレーボールをする中で、友達の個性を見つけるとは、互いに認め合い、高め合ったり、お互いぶつかったりしたりしてきました。そういう事を学生の間に経験しておくことは、これからの将来に向けてとても大切で貴重な事ではないかと思えます。これからの大学生活では、そういった経験ができるように日々頑張っているかと思いました。

読書を通して

山口真那

わたしの選ぶ一冊
『アムリタ』 吉本ばなな 【日本】

私は読書が苦手であり本を読まないし、読んでもすぐに途中で断念してしまうことが多いです。高校生のときも毎年担任の先生に読書を勧められていましたが、ほとんど読書しないまま大学生になってしまいました。でも今年の夏休みこそは読書しようと思って本屋で適当に『アムリタ』を選んで買いました。この本を読み始めると、上下2冊をすぐに読み終え、珍しく読書に集中することができました。『アムリタ』は主人公が気ままに送る生活を表現したゆったりした感じの物語で読書が苦手な私でも物語に溶け込むことができ、みなさんにも是非読んでほしいと思ったのでこの本を選びました。

あらすじは、事故で記憶が曖昧になり自分でない自分と戦い続けている主人公の朔美が父や妹の死、弟の旅立ちという孤独の中でいろいろな人との出会いを通して新しい自分を確認しながら自分の居場所を探していくというものです。私はこの本を読みながら、さまざまなことを思い巡らせました。一つ目は、もし自分の記憶がなくなったらどうなるだろうということです。朔美は、自分の意思をしっかりと持った芯の強い人なので、周りの人に支えながらも自分自身の力で壁を乗り越えようとしていました。でも、きっと私だったら怖くて逃げ出すか、周りの人に依存して自分を見失ってしまうだろうと思います。改めて、自分の意思の弱さを痛感しました。二つ目は、この本を読むまで、出会いは入学式や結婚式などのような喜びに溢れた暖かくて良いもの、逆に別れは卒業式やお葬式のような冷たくて悲しいものというイメージを持っていました。しかし、この物語の別れは違いました。どこか暖かく綺麗なものでした。別れにも意味があることがすごくよくわかりました。別れがあるからこそその人のことを懐かしみ、その人の存在のありがたみを実感することができるのだなと思いました。

このように、私は読書を通してたくさんの発見をし、考え、学びました。読書はいろんな意味で人を豊かにしてくれるものだと思います。これをきっかけに、読書する習慣をつけたいです。

『あらしのよるに』友情を知ったわたし

北 浦 優 衣

わたしの選ぶ一冊

『あらしのよるに』 木村裕一 【日本】

この作品は、私の小学校4年生のときの教科書に掲載されていて、オオカミとヤギという喰う喰われる関係の2匹が偶然、あらしのよるに山小屋で一夜を共に過ごし、その中で徐々に友情が芽生えていくという物語です。住んでいる環境も立場も全く違う2匹が、たった一晩でこんなにも打ち解けて仲良くなっていくその様子は、現代の携帯電話などの電子機器によって、実際会話をしないで簡単に連絡を取り合っている子どもたちに見せてあげたい作品です。

「本当の友情とは何なのか？」をととても考えさせられました。友情というのは、見た目やその人の出身、年齢、性別といったこと抜きに生まれるもので、その結びつきはとても深いということを教えてくださいました。また、この物語はオオカミとヤギという全くの正反対の関係を描いているのですが、この関係は様々な場合に置き換えて考えることもできます。たとえば、男女の関係や、紛争を続ける民族同士の関係など、このようにいろんな見方ができることも魅力の一つだと思います。

また、私の小学校ではこの作品を使って、いくつかのグループに分かれ、それぞれの場面ごと互いに劇にして発表するということをしました。その中で、紙芝居をするグループや人形劇にして発表するグループが多かったのですが、私のグループは実際、自分たちがオオカミとヤギの役になって演じる方法で発表しました。実際に自分たちが演じるという方法で発表したグループは私たちだけでクラスみんなに大きな印象を与えることができました。

そういうこともあり、私の中でとても思い出深い作品になっています。

『ふたり』を読んで姉妹の絆を知った私

山下 紗代

わたしの選ぶ一冊

『ふたり』 赤川次郎 (1948-) 【日本】

わたしには姉がひとりいる。この物語を読んだのは中学生のころだった。この物語のお話は、一組の姉妹を軸に展開している。

ある日突然、姉が事故で亡くなった。その日を境に家族の絆が徐々に崩壊していく。そして妹がある男に襲われかかった時、頭の中でいないはずの姉の声が聞こえた。その声のおかげで一命を取り留めた妹の頭の中には、それ以来姉が住み続けた。色々な局面で姉の声に助けられつつ、数年が経った。しかし、妹が姉の年齢を越してしまったある日、妹の頭の中から姉は去って行った。

家族、友人、恋人、関係は違ってもそれぞれ皆が私を支えてくれている、そう思える物語だった。このお話を読んだ時、現実味は無いがどこの家庭でも起こることではないかと思った。物語のなかの妹と年齢が近かったこともあり、突然姉がいなくなったら私はどうなるのだろうか変なことを考えたものだ。家の事情も知っていて常に支えてくれていた友人、姉の死をきっかけに心配性になった母、浮気をする父。今になって考えられることだが、人間との付き合いは難しいが一度強い絆ができたならそれは切っても切れないものになるのではないかと思う。無論、家族というものは生まれた瞬間からのつながりであるわけで、それは一番の味方であると思う。また、親子よりも姉妹、兄弟のほうがより一層強いなにかで結ばれているような気がする。しかし小中学生のころは、ひとりっ子に憧れたものだ。自分のひとり部屋が欲しかったり、お下がりを使うのが嫌だった。大学生になったいまでは、服を共有することができることや、一緒に買い物に行ったり遊びに行けること、また一緒に登校出来ることを嬉しく思う。

姉がいて良かったと心から思える。きょうだいの存在を改めて実感できる、そんな小説である。

『明日の記憶』の記憶

西川理紗

わたしの選ぶ一冊

『明日の記憶』 萩原 浩 【日本】

皆さんには、忘れたくない思い出がいくつありますか？

幼い頃の可愛い思い出、家族との楽しい思い出、学生時代の青春の思い出…

いくつあるかと聞かれても数えきれない程、たくさんの思い出が誰にでもあるはずです。昔を思い出す度に、それが良い思い出であっても悲しい思い出であっても、「あのことがあったから今の自分がある」と、自分自身の成長を感じる事が出来るでしょう。

もしも、今までの大切な記憶や思い出がだんだん失われていく、そんなことが起こったら、どうしますか？

この本では、若年性の認知症にかかった男性が、ゆっくりと確実に記憶を失っていく様子が描かれています。職も失い、周囲からの目も変わり、苦しく悲しい現実があることが痛いほど感じとれます。

それまでの人生や今の自分を築き上げてきた出来事が、自分の中から消えていく、という恐さの中で、男性の妻の想いを通して、何が信じられるのか・人生とは何なのか、など多くのことを考えさせられました。

この「明日の記憶」は、次の日からの自分の生き方を変えようと思わせてくれる、お勧めしたい素敵な一冊です。ぜひ皆さんも読んでみてください。

お気に入りの『バッテリー』

松永夏実

わたしの選ぶ一冊

『バッテリー』 あさのあつこ 児童文学小説 【日本】

○あらすじ○

巧の中学入学を前に、祖父のいる岡山県新田市に引っ越してきた原田一家。巧はランニング中に道に迷いかけて豪と出会い、後日バッテリーを組むことになる。ピッチャーとして絶対の自信を持ち、誰に対しても強烈な我を通そうとする巧と、その才能に戸惑いながら強く惹かれていく豪。運命に導かれたかのように、最高のバッテリーとしての2人の人生が始まっていく…。新田東中学校に入った巧らだったが、そこに待ち受けていたのは、巧の圧倒的才能とその実力を認めるが、巧と衝突する戸村監督。それをつまらなく思う展西先輩に巧は陰湿なイジメを受け、その事件の関係で部活動も停止になってしまい…。

部活動停止になったままで引退を迎える三年生のために、戸村監督が強豪・横手と練習試合をしたいと希望する。新田東中の校長は、とても相手にならないと却下したが、どうしても試合をしたいキャプテン海音寺が、横手の天才スラッガー・門脇と知り合いなのをツテに、巧の球で門脇を圧倒すれば、試合が出来るはずだと提案する。見事、門脇を唸らせた巧だったが、豪は、その巧の球を捕球しきれない。強豪校・横手二中との練習試合で打ちのめされた巧たち新田東中は敗れた。豪もキャッチャーとして球を捕り切れなかったと責任を感じて、部活でも巧を避け続けてしまう。一方、海音寺は横手二中の五番打者で門脇と幼馴染みの瑞垣俊二と没収試合となってしまった練習試合をもう一度やり直す計画を立てる。そして監督の戸村は、巧のキャッチャーを吉貞にさせると言い出す…。

○感想○

今までたくさんのに出会ってきた。面白いものもそうでないものも、ドキドキするものも泣けるものも、とにかくいろいろなものがあつた。そんな中で時々「これは？」という特別なDVDに出会うことがある。

それがこの「バッテリー」である。それまでもテレビなどで取り上げられているのを見ていたが、見たことのない作家だったため、あまり関心はなかった。お勧めされたので、じゃあ見てみようとして最初は気軽な気持ちだったと思う。まず最初を見て、それから続きを無我夢中で見た。夢中になった。「こんな面白いをDVD今まで見てなかったなんて!？」と猛烈に反省した。角川文庫版の解説者北上次郎先生と全く同じことを思ったのである。

『バッテリー』には魅力的な登場人物がたくさん登場する。どの少年も、「何が好きで何が嫌いで勉強は数学が得意なんだろうな、学校では意外にモテるんだろうな、家に帰ったらこんな風に過ごしているんだろうな」と、そんな風にいろいろと想像力を働かせることができるくらい、生き生きと血が通った人物として描かれている。

そんな少年たちの中心にいるのは、間違いなく「原田巧」である。天才ピッチャーで自分に絶対の自信があつて、プライドがとても高く、他人のことなんかちっとも気にしない。正直言ってこんな人が自分の周りに居たら閉口するし、あまり仲良くできないかもしれない。自分が中学生だったらどうだろう…きっと怖くて近寄れない。だから巧が好きかと問われ

ば「う～ん、あまり好きになれないかも」と答えるだろう。

それにも関わらず私は巧が気になって仕方がないのである。他人をあれほど巻きこめるパワーを持った彼に惹きつけられている。巧に出会わなければ、多分豪はあれほど悩むことなくもっと穏やかな中学生を送れただろうし、瑞垣も門脇に対するコンプレックスを隠したままさらけ出すこともなかっただろうし、展西や縁川もあんな終わり方はしなかっただろう。

勿論それが悪いと言っているわけではなく、たった一人の人間があれほどの人々を変化させていることが私にとって驚きであり魅力なのである。

本を読み進めるにつれ、そんな巧にも多少の変化が表わされている。他人に対する関心があれほど薄かったが、バッテリーの片割れ永倉豪に対して、「何を考えている、豪？」と、豪のことが分からない、知りたいと思うのだった。

豪の存在に対して必要だと言っていると私は思ったのだが、しかし言葉が出ない。豪からは、「キャッチャーなんかだと？ふざけんな、絶対誰にもお前の球は渡せねえ」と返される始末だった。ああ、巧、なんて不器用なんだろう。最初では、もっといわゆる理想的なバッテリーとしての関係を思い描いていただけにこういう風な展開になるとは全く思っていなかった。特に豪がここまで思い悩むとは…もっと屈託のない素直で誠実な性格だと思っていたので意外だった。

『バッテリー』を読んで

中西由実子

わたしの選ぶ一冊

『バッテリー』 あさのあつこ 【日本】

原田巧は、中学入学を控えた春休み、岡山県に家族で引っ越してくる。巧は、ピッチャーとしての才能に絶大な自信を持ち、同時に他人を寄せ付けぬ孤独な面を持っている。家族には病弱な弟・青波、青波をいたわるあまり巧に冷たくあたってしまう母・真紀子。野球にあまり関心のない父・広、そして甲子園出場校の有名監督だった祖父・洋三。温かい家族でさえ、巧の孤独な面に対する接し方に迷う時があった。

巧はそこで、同級生・永倉豪と出会う。その投球に惚れた豪は、バッテリーを組むことを熱望。二人は、新田東中学野球部に入部する。しかし、待ち受けていたのは、監督の支配下のもと“徹底した管理野球”だった。自分を貫くため、監督に歯向かい衝突していく巧。そんな巧のまっすぐさに同級生・矢島繭は惹かれていく。

順調に見えた巧と豪。しかし、やがて二人の技術の格差が表面化、バッテリー解消を口にする豪。それを受け入れた巧に弟・青波は納得しなかった。必死に仲を取り持つ青波。

「投げろや！」再びバッテリーとなった二人だったが、折りしもその時、青波が病気で倒れる。弟を巻き込んだことが原因だと母・真紀子は、巧を突き出す。が、父・広は、体の弱い弟を思い、親にかまわれない寂しさを紛らわすためにも、野球を必死に続けてきたのでは？と語る。青波は命の危機にさらされながら、行われる強豪中学との試合直前、巧にお願いする。

「勝ってな…お兄ちゃん」

青波の言葉を胸に、巧はグラウンドへと向かった…。

初めは、巧はすごく素直じゃなくて、印象が悪かった。でも、野球に対する姿勢はすごいなと思いました。巧のお母さんは、もっと巧を応援してあげたらいいのにとあって、弟・青波はすごくかわいいなと思いました。巧は、弟や、友達想いで、すごくいい人だと思ったけど、不器用で、自分の気持ちを素直に伝えられないところが、すごく読んでいて、モヤモヤしました。強豪校との試合のときに、バッテリーが解散になって、どうなるのかなと思ったけど、また、一緒にバッテリーを組んで、試合をしたのは、すごく感動しました。最後は巧がすごくかっこよかったと思いました。

『バッテリー』を読んで

西保直紀

わたしの選ぶ一冊

『バッテリー』 あさのあつこ 【日本】

「あらすじ」

自分を信じて直球を投げ続ける少年巧が、自分を受け止めるパートナーのキャッチャーである豪を得て、少しずつ仲間を信頼し変化していく様子を細やかに描いている。

「感想」

心も体も子供から大人に変化する不安定な時期。誰もが一度は経験するような苦しみ。思わず巧に自分を重ねてしまいました。孤独と付き合い、力強く生きようとする巧のリアルな姿に惹かれました。「ただキャッチボールをするだけで心が通じ合える」そんな野球の魅力が十二分に伝わってきました。それと同時に巧や豪などのように大好きなことに必死で打ち込めるということが素晴らしいと思いました。今しかできないことは今やっておく大切さも知ることができました。仲間と正面から向き合い、次第に心を開いていく巧の姿を観ながら、人と関わること、心を開くことの大切さを改めて感じました。野球一筋の二人だけ対照的な巧と豪。最高のバッテリーだけ衝突もする。本気で向き合える人がいるってことはすごいことだと思います。私もスポーツも友達にも全力投球で頑張りたいと思いました。私もこんな気が合う無敵そのものの巧や豪に負けにくいぐらいのバッテリーをつくりあげていきたいと目標を持つことができました。野球、いやスポーツにしても勉強にしてもさせてもらうんじゃなくて自らするものだと思います。「野球とは気持ちを伝えるスポーツ」という言葉が印象に残っています。巧の友人の「お前、なんのためにやっとなんじゃ。お前にとっての野球って、何なんじゃ」というセリフがものすごく心に響きました。巧の孤独の野球、弟のやりたくてもできない野球。野球って何なんだろう。改めて考えさせられました。野球が大好きな人も野球をあまり知らない人も、これを観ると、自分の心の中に必ず何かが生まれると思います。私は高校時代を思い出しました。友達、家族、学校、自分自身の在り方。私にとってそんな想いが詰まった物語でした。いくつになっても、ひた向きに頑張れる何かを見つけられればと思います。「人とのつながり」の大切さやキャッチャーの重要性を再確認しました。それはキャッチャーに限らず人を受け止めることの大変さと大切さを感じたからです。私も自分を信じて、自分の意志を貫き通せる何かをこれから見つけていきたいと思いました。

有名文学を通して学べること

戒丸屋勇揮

わたしの選ぶ一冊

『吾輩は猫である』 夏目漱石 (1867-1916) 【日本】

私は小さいころからこの夏目漱石の『吾輩は猫である』を読んでみたかった。それは、文学史などはあまり興味がなかったが、この本だけはよく耳にしていた。テレビのクイズ番組や学校の教科書などいろんなところで聞いていた。だから相当有名なものでほとんどの人が知っていた。だから、こんなに知られているなら自分も内容がわかる年になったら読んで知らなければならぬと思っていた。千円札の肖像になってる人が書いてるところも惹かれた理由の一つだ。

この物語の大きな特徴は、「吾輩は猫である、名前はまだ無い。」というフレーズだ。これだけ聞くと意味はあまりわからないが、イメージはわいた。おそらく、主人公と猫を中心に繰り広げられるストーリーで、主人公が猫の何かに惹かれて、猫に生き方を学び、私は猫のように生きていこうと主人公がそう感じさせられるストーリーなのかなと思っている。まあ読めばわかるので時間を見つけて早く読んでみたいと思う。昔猫を飼っていたので、そういったものに興味があったのかもしれない。

あとこれを通していろいろな文学史を読んでいき知っていけたらいいと思う。

本屋で見つけた漫画の『人間失格』から

上田井英和

わたしの選ぶ一冊

『人間失格』 太宰 治 (1909—1948) 【日本】

小学生の頃、中学生の頃、私は国語の便覧を見るのが好きで、よく国語の授業中に便覧を見ていた。日本書紀などの神話系が載っているページや百人一首のページなど、そして文学作品と作者についてのページをその中でもよく見ていた。そこに載っていた「人間失格」。太宰治の作品は「走れメロス」を授業で習っていたので、この時はこの作品も太宰治の作品なのだけだと思っただけだった。

現在、私は『人間失格』を読まないまま大学生になった。そんななか便覧のことなどすっかり忘れた私はこの間、古本屋に行った時に「人間失格」という題名の漫画を見つけた。どこかで聞いたことあるなと思い、手にとってみたら原作者の所に太宰治と書かれていた。その時、自分は昔、便覧を見るのが好きでよく見ていたなと思いだし、「人間失格」の事も思い出した。ちょうどその日は予定も特に入ってなかったので、ちょっと読んでみようと思い立ち読みしたのだが普通におもしろかった。原作を知らないので少し現代風に脚色していたのかもしれないが逆に現実味があって読みやすかった。その店には一巻しかなかったので全部は読めなかったのだが続きを読みたくなり、また原作も読みたくなった。今度時間がある時にでも本屋で探してみようと思う。

もともと本を読むのは好きなのでこれを機に文学作品を読んでみるのも良いかなと思った。

ふゆのよるのおくりもの

坂部 涼

わたしの選ぶ一冊

- 1.『夜は短し歩けよ乙女』 森見登美彦 【日本】
- 2.『ふゆのよるのおくりもの』 芭蕉みどり 【日本】

1. この作品を選んだ理由は、この作品を読んだ友達から薦められたからである。
2. この作品は、私が幼稚園ぐらいの頃に、祖母が買ってくれた絵本である。
ねずみの家族が、クリスマス前にもみの木に飾りつけをし、クッキーやケーキなどのおかしを作る。翌日、家族はおばあちゃんとおじいちゃんの家に行くことに。しかし、双子のティモシーとサラは、家に誰もいないとサンタさんが来てくれない事を心配する、という話である。
この絵本は、挿絵が細かく、カラフルに描かれていた。挿絵の一つ一つを見入ってしまうほど工夫されていて、私は、この挿絵が大好きであった。
内容も、クリスマス前のわくわくする気持ちなどが表れている。
小さい頃に持っていた絵本やおもちゃなど現在はほとんど残っていないのだが、この絵本だけは、10年以上たった今も持っている。それぐらい、私にとって大切に、お気に入りの絵本である。

源氏物語へのあこがれ

岩 寄 未 紗

わたしの選ぶ一冊

『源氏物語』 紫式部 【日本】

舞台は平安時代、桐壺更衣と桐壺帝から生まれた光源氏が主人公の物語です。彼は正式に後継者として迎えられてはいませんが、帝の寵愛を受け、また桐壺更衣も帝から一番愛されていたという、出生から心ときめく内容です。

私が源氏物語に出会ったのは高校での授業です。私のみならず、みなさんが高校生で出会ったものと思われます。古典として取り扱われるのですが、私はこの作品を通して文法的な勉強意欲をそそられるようになりました。あんなにも現代語訳をしたくなかったことが今までなかったからです。そのうちに古典としてではなく、現代語された物語を読み切りたいたというのが私の夢になっていました。

彼の生涯は何不自由ないものはずなのに、愛という形の知れないものに翻弄され、波乱に満ちていた。情に深く、女を悲しませないように、皆のことを心の底から愛していました。女がそれで悲しまないわけはありませんが、彼なりの誠実を読みとれ、物語の中の彼にあこがれを感じてしまいます。父の影響があるのか、愛することに限度を作らなかった所がすごく素敵だと思います。

作者は紫式部だと言われていますが、女が一人で書ける内容ではないという視点から多様な考えがあります。でも私、女から見るとこの話は女の人が書いたとしか思えません。手助けを受けながら、彼女は理想の物語を長い間書き続けたのだらうと思います。

物語ではなく、日記ではないかと思いたくなるような作品です。私が勝手に平安時代の理想化をしているだけでしょうか、こんな生き方をした人が本当にいただろうなあと思うのです。文字を読んでいるときに、目の前で世界が広がります。頭の中で、なんてものではありません。目を閉じれば、自分ができる想像、創造のなかで、一番綺麗なものが見えるのです。無意識のうちになのです。非現実的な世界だから余計に想像力が広がります。

誰かを愛することに臆病にならずに、自分の想いをつらぬくことを教えてもらえた気がします。通学の電車で読み切ることを目標に、大事な気持ちを学んでいきたいと思います。

『夜のピクニック』

松本 蘭

わたしの選ぶ一冊

『夜のピクニック』 恩田 陸 (1964-) 【日本】

夜行登山が私の高校では毎年恒例の冬の行事だ。希望する2年生が主体となって行われる。この行事は私が楽しみにしていた行事の1つであった。1年のときは部活で参加できなかったこともあり、2年時の期待度は半端なく高かった。今でも夜通し歩きながらもテンションが高かったことやみんなの死にかけた様子を鮮明に覚えている。大学に入り、行き帰りの電車で暇だったので、姉の持っていた『夜のピクニック』をなんとなく読み始めた。この本のテーマはズバリ高校の夜行登山であり、内容を把握せず読み始めたため、思いがけないところで夜行登山を思い出すこととなった。

天気は晴天。同じだ。ただ季節は秋だった。ヒロインの貴子は3年間誰にも言えなかった秘密を精算するため、この行事で密かに胸の中で賭けをしていた。私の場合本みたいに何かあるわけでもなかったが、夜通しみんなで歩く楽しさをひたすら嘯みしめていた。歩き始めてすぐは、みんないつもと同じような会話だった。しかし、日も落ち始め歩き進めていくにつれ、なぜか不思議と今まで友達に聞いたかったことや普段より一歩踏み込んだ話になっていく。夜更かししながら一緒に歩き続けるという雰囲気がそうさせるのかわからないが、腹を割って話せるような気になってくる。貴子の秘密も友達と語り合いながら明らかになっていく展開に、雰囲気がそうさせているのかなと自分の経験を重ねながら読んでいた。そろそろみんなの顔に疲れが見え始めたところに小学校での休憩。エネルギーを取り入れるために持ってきたお菓子を口々に入れ、チョコレートの旨さを改めて実感した。食べているのが夜ってことは気にしない。また歩き始めて次の休憩場所の小学校へ向かう。だんだん次の休憩を求めるようになってくる。次は写真を撮って、豚汁の配給があったのだが、これも同じだ。たぶん私が経験していなかったら特に気にも留めず流しているだろうこの豚汁は、普通の豚汁の何十倍もおいしかった。こうして苦勞して着いた頂上にいる時間は短くあつけなかったのを覚えている。帰りの一行の様子とはにかく顔が死んでいた。私はというと2年間ずっと楽しみにしていたことが原因であまり疲れることはなく、同じく元気に隣を歩いていた友達と興奮していた。そのため、この夜行登山の名物の睡眠歩行をすることができなかったことが唯一の心残りだ。そんなこんなで夜行登山は長いようで短かった。

内容についてはあまりふれていないが、先が気になって次々読めてしまうような展開で、もちろんおもしろかった。それ以上に『夜のピクニック』は自分ももう一度夜行登山をしているような気分が味わえる本だった。この本は私の大切な思い出の記録となった。

『坊っちゃん』を読もうとした小学生のわたし

國府志麻

わたしの選ぶ一冊

『こゝろ』 夏目漱石 (1867-1916) 【日本】

わたしが初めて夏目漱石の作品を読んだのは、おそらく小学五年生頃のことだ。小学生時代のわたしは活発で、休み時間になるたびにグラウンドに出てドッジボールやサッカーや鬼ごっこばかりをしていた。しかし小学校高学年になり、本を読むことも必要だと思った。マンガのような本ではなく、ちゃんとした文学作品を読まなければならないと思った。そこで選んだのが夏目漱石の『坊っちゃん』だった。いくら本に疎くても夏目漱石ぐらいは知っていたし、夏目漱石の作品を読んでいることがかっこよく思えた。

しかしそれを読むことは、当時のわたしにとっては難しいものだった。言葉づかいが古く、読むのにもものすごく時間がかかった覚えがある。内容がきちんと理解できず、途中で飽きてきて適当に読んだので、今でもどんな話だったのかほとんど知らない。覚えているのは登場人物の名前がユニークだったことと、生徒のいたずらで、主人公の布団の中にバツタだったかイナゴだったかが入れられていたことぐらいだ。

次にわたしが夏目漱石の作品に興味を示したのは高校三年生になってからだった。国語の授業で『こゝろ』を扱ったのだ。その授業では、話の後半のKが自殺する場面あたりを取り上げた。班に分かれて登場人物の先生やKの心情がどういうものだったかを議論したり、もし自分が先生やKの立場だったら・・・など議論し合った。そうするうちにこの作品の深さを感じ取るようになった。先生はとても綺麗な人間であるとは言い難く、しかしそこがとても人間らしいと思った。

残念ながらわたしはこの作品の全部を読んだわけではなく、教科書に取り上げられていた一部分しか読んだことはない。結末も知らない。一度は全部を読みたいと思いつつ、結局読まず仕舞いになってしまった。

大学生になった今ならもっと楽に『坊っちゃん』を読めるとははずだ。『坊っちゃん』や『こゝろ』を、今読んでみてどのように感じるのだろうか。前と違う感想を持ったら、それは自分の成長なのだと思う。

『こころ』 :友情と愛に生き、死んだ男の物語

塩谷有規

わたしの選ぶ一冊
『こころ』 夏目漱石 (1867-1916) 【日本】

私が以前に読んでみて、印象に残っている文学作品は、夏目漱石の「こころ」である。この作品を読むきっかけとなったのは、参考書に載っていた現代文のところで、問題文となっていたためである。もちろん、問題文として載っていたため、全文は載っておらず、いまだに全てを読むことはできていない。以前読んで感動したというよりは、改めてもう一度読んでみたい作品というのが正しいのかもしれない。

物語のおおまかな内容は、先生と呼ばれる男が下宿している。その下宿先には、お嬢さんと呼ばれている娘さんがおり、先生は彼女に恋心を抱く。その後、先生の友人であるKという男も同居し始める。難しい性格であったKだったが、お嬢さんや、その母親との交流の中で次第に丸くなっていき、お嬢さんとも親密になっていく。それを見て、危機感を覚えた先生は、母親に相談し、お嬢さんとの婚約を認めてもらう。しかしその一週間後、Kは自殺してしまい、この世を去る。罪悪感に襲われた先生もまた、自ら命を絶つというものである。

私がこの作品を選んだ理由は、省略されてしまった部分が気になったというのもあるが、一番の理由は先生の生きざまである。友人に好きな人をとられるのではという焦りから、少し後味の悪い方法でお嬢さんとの婚約にいたるが、最後は大切な友人を失ってしまい、命を絶つということで、せつなく勝ち取った愛よりも友情を取ったという生きざまが、非常に印象に残っている。

もう一度読んでみたいが、ドラマや映画などで、現代風にアレンジされた「こころ」を見てみたいものである。

『こころ』を読んで

四斗辺幸大

わたしの選ぶ一冊

『こころ』 夏目漱石 (1867-1916) 【日本】

<あらすじ>

「私」が「先生」に出会ったのは大学生の時だった。その超然とした様にひかれ、「私」は「先生」宅へ足繁く通うようになる。世間の目をのがれるようにひっそりと学問をして美しい妻と暮らす「先生」には、人には言えない暗い過去があった。「先生」はその過去については妻にも隠していたのだが、「私」との交際が深まるにつれ、その過去をうちあけられる相手であると認められるようになった。父親が死期を迎えたために「私」が故郷に帰省している間、「先生」から分厚い封書がとどく。秘密にしてきた過去がしるされてあった。「先生」がまだ学生だった頃、Kという親しい友人がいた。そのKの恋する相手が、自分が思いの寄せる下宿先のお嬢さんであるということを知り「先生」は動揺する。「先生」は自分の気持ちをKには伝えず、彼を出し抜くような形で、お嬢さんの親に結婚をしたい旨を申し出る。結婚は許可され、Kはその事後報告だけが伝えられる。激しい後悔にさいなまれた「先生」はKに詫びをしようとするが、Kは自殺をする。そして「私」にこのことを告白した「先生」も自らその命を絶ってしまう。

<感想>

伏線がたくさん張ってあって、すごく面白いなと感じました。正直、奥が深すぎる作品だと思います。それと先生の生真面目で不器用な感じが好きです。ただたまに真面目すぎていらっときますけど。また、1つだけこの小説の中に「向上心のないやつは馬鹿だ。」と数回出てきます。本当にその通りだと思います。僕も大学生活の中で授業や、部活において、向上心をもって臨みたいです。

題名に惹かれた『機関車先生』

山 神 玄

わたしの選ぶ一冊

『機関車先生』 伊集院静 【日本】

あらすじ

瀬戸内海に浮かぶ小島、葉名島に向かって一隻の連絡船が進んでいく。船には島を見つめている一人の青年、吉岡誠吾が乗っていた。一方、島で唯一の小学校、水見色小学校では校長の佐古周一郎が吉岡の到着を待ちわびていた。周一郎には、どうしても吉岡に来てもらいたい理由があったのだ。臨時教師がやって来る、そんな噂を耳にしていた子供たちの胸も期待と不安で大きく膨らんでいた。やがて周一郎と共に姿を現したのは大きな体に、優しい眼差しの先生だった。その口から最初の言葉を固唾を呑んで待つ子供たちに、吉岡は深々と頭を下げ、おもむろに黒板にむかって文字を書き出した。"ぼくは話すことができません。でも、みなさんと一緒にしっかり勉強します。どうぞよろしく"。あまりの驚きにあ然とする子供たち。しかしすぐに生徒の1人が「口をきかんの？でも先生は大きくて強そうだから、機関車先生や!」と教室の後ろにある機関車の写真を指す。途端に残りの生徒たちも大喜びして、一齐に先生に拍手を送る。こうして機関車先生と子供たちとの島での生活がはじまった。先生のオルガンに合わせて「月光仮面」を歌ったり、浜辺にスケッチに出かけたり、子供たちの楽しい日々は永遠に続くかに思えた。先生と子供たちは日を重ねるごとに深く、強い絆を結んでいった。しかし暗い雲から滝のような豪雨が降ったある日、大波と共に悲しい事件が突如として島を襲う。子供たちのリーダー格だった修平の父親の漁船が悪天候で難破し、不慮の死を遂げてしまったのだ。しめやかに行われた葬儀の最中、「父ちゃんは、死んだらん。葬式なんかするな!」と家を飛び出す修平。すっかり穏やかな海に向かって何度も父の名を呼ぶ修平を、先生はそっと抱きしめる。悲しみも冷めないある日、修平は島民にケンカを売られて無抵抗に殴られる先生の姿を目撃してしまう。憎しみは憎しみしか生まない、それを伝えたい先生の想いとは裏腹に、修平は強いと思っていた先生への信頼をすっかり失ってしまう。同じ頃、新任の先生が決まったという噂が島に流れる。

感想

「機関車先生」は、全編を通して、青年の心はほとんど描写されない作品でした。なぜ、島を出て生まれ育った場所に帰るのか、その理由も説明されていません。しかし、青年のうしろ姿は、鮮やかな余韻を残しました。自分に打ち勝つために教育者となった青年は、戦争で死んだ父と、島には帰ろうとしない母を思いながら、自分のルーツを求めて島にやってきました。そして、自分にはやらなければならないことがあると気が付いたときに島を去っていきました。「機関車先生」をとおして作家が描きたかったのは、青年の心の旅ではないかと思いました。

『赤毛のアン』でチャレンジ

有田 優花

わたしの選ぶ一冊

『赤毛のアン』 ルーシー・モード・モンゴメリ (1874-1942) 【カナダ】

わたしはこの課題をするにあたり、どのような本を読もうか迷っていました。ある日、いここに相談してみると、『赤毛のアン』を英語で書いてあり、簡単に翻訳できる本を持っていると教えてくれたので、その本にすることに決めました。わたしはもともと本は好きでしたが、赤毛のアンなどの本は読んだことがなく、一度読んでみたいと思っていた作品です。また、英語で書かれているところにも惹かれました。せっかくの英語の授業なので、自分で訳して読むことにチャレンジしてみようと思いました。

まず、わたしが手をつけたのは題名です。『Anne of Green Gables』と記されており、直訳すれば『グリーン・ゲートルズのアン』となりますが全く意味がわかりませんでした。インターネットで調べてみると、グリーン・ゲートルズとは「アンが住むことになるカスパード家の屋号」ということであることがわかりました。

そしていよいよ本文に突入したものの、辞書がてばなせませんでした。いくら簡単と言われても、英語の単語をほとんど調べないといけないわたしにとっては、大変なものでした。単語を調べたとしても、言葉にならなったり、意味のわからない言葉になったり……。その辺りは自分で臨機応変で乗り切っていました。作業が進まなく途中でしんどくなり、しばらく手をつけないでいた時期もありましたが、なんとか最後まで読みたかったので、続けることにしました。

この話を讀んだ中でわたしが一番印象に残っている場面は、アンがアラン夫人のためにケーキを焼きますが、そのケーキには、バニラの瓶に入っていたのを塗り薬と気づかず香料として混ぜてしまっていました。アンは鼻かぜをひいていたので気がつかなかったのです。それに気づいたアンは傷つき、部屋に閉じこもって泣いていましたが、アラン夫人は怒るのではなく、やさしくなぐさめるところに人間の温かさを感じ感動しました。

わたしは、いまだにこの本を最後まで読み切れていません。いつ読み終わるかわかりませんが、根気よく続けていきたいと思います。この本を読み終わったら、また違う本にも挑戦してみようと思っています。

あ　と　が　き

あと何年続けられるだろうかと思いながら始めた今年度の論集作成も、いよいよ完成の運びとなりました。年度が始まる前から考え抜いて計画を立て、新学期になって学生たちに順次指示を出し、夏休みに書き上げてもらい、秋に原稿を集め、そのあとみんなで必死に編集作業をしました。今年度はパソコン編集が巧みな学生の協力があまり仰げなかったため自分でやることも多く、時間ばかりが費やされました。今は時の早さに改めて驚かされます。

しかし大学から10万円の補助をいただけたことは、苦しい状況のなかありがたい励みにもなりました。おかげで個人研究費にも少し余裕ができ、念願のパソコンが更新でき、編集作業もいくぶん効率化できました。

この論集もまた例年と同じく、日本のみならず世界に配布し、本学図書館のリポジトリ・サービスを通じてインターネットで全文を公開する予定です。大阪教育大学を志す世界の人々に教育と研究の現場の情報を提供し、大学受験や留学の参考にしてもらえればと思います。また世界の研究者との国際交流にもささやかな貢献ができればと願っています。アメリカの大学などから献本を依頼されることもままあり、知らないところで役に立っていることが驚きです。

今年はアジア方面に力をいれ、留学生の協力を仰ぎ、中国語で米文学研究室の活動紹介を作成しました。国際貢献のささやかな一助となることを願っています。

このインターネットで流される情報は、図書館が本を廃棄してしまうデジタルな時代になっても、生き続けます。万一送信母体が発信を停止しても、学生たちが思いを込めて書いた論文は、誰かのパソコンに保存されたデータとしてまた別のパソコンへと流れ、ちりぢりになりながらもネットの海を、いわば「千の風になって」吹き渡っていくことでしょう。

橋 本 賢 二

平成22年2月発行 (February, 2010)

物語の魔力 ——欧米文学を再話して——

Enchanting Retold Stories

発行者 大阪教育大学 米文学研究室
〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘4-698-1

OSAKA KYOIKU UNIVERSITY
(Faculty of American Literature)
4-698-1 Asahigaoka, Kashiwara,
Osaka, 582-8582 JAPAN.

編著 橋本賢二
Editor & Author : Kenji Hashimoto

印刷所 株式会社アイジイ
〒531-0072 大阪市北区豊崎7-7-7
06-6371-0321

